
カンピオーネ!
XVII
Campione
英雄の名
丈月 城
Illustration
シコルスキー
スーパーダッシュ

スーパーダッシュ文庫
SUPER DASH

集英社

カンピオーネ！

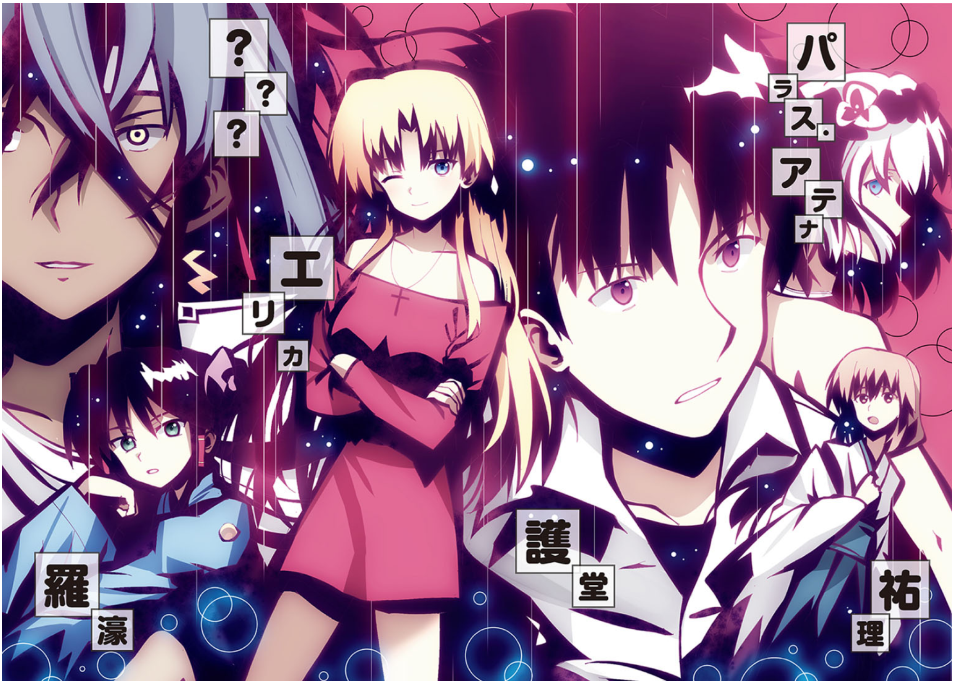
XVII 英雄の名

丈月　城

この本は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になる機種により、表示の差が認められることがあります。


丈月 城
Illustration
シコルスキー
カンピオーネ!
英雄の名
Campione
XVII



パラス・アテナ
護堂
祐理
エリカ
???
羅濠


「あ――っ。王様、
ち、ちゃんと伝わった？」
「わ、私の方も
大丈夫です。きっとお役に
立ってみせますから
――んんっ！」


「救世の神刀よ。
今こそ真の姿を世界に示せ」
背負った鞘より愛刀を引き抜いて、
『最後の王』は目の前の地面に突き刺した。
すると、彼の頭上に巨大な正方形の魔方陣が顕現した。
辺の長さは一〇メートル前後。
魔方陣の正方形は格子模様で細かく仕切られており、
そのひとつひとつのなかに武具が描かれていた。

主要登場人物

草くさ薙なぎ護ご堂どう

高校１年生。軍神ウルスラグナの権能を有するカンピオーネ。

エリカ・ブランデッリ

《赤銅黒十字》の魔術師。自称、護堂の「愛人」。

万ま里り谷や祐ゆ理り

霊視の力を持つ媛巫女。護堂の「正妻」と称される。

リリアナ・クラニチャール

《青銅黒十字》の魔術師。護堂の「騎士」を自任する。

清せい秋しゅう院いん恵え那な

当代随一とされる「太刀の媛巫女」。護堂の「剣」として侍る。

甘粕冬馬

正史編纂委員会のエージェント。

沙那宮馨

正史編纂委員会東京分室室長。

羅濠

《五嶽聖教》教主。

Contents

イラスト / シコルスキー


丈月 城
Illustration
シコルスキー
カンピオーネ!
英雄の名
Campione XVII

第１章　英雄の予兆

1

　冬の雨であった。

「ふむ……」

　にわかに降り出した驟しゆう雨うのもと、羅ら翠すい蓮れんは曇どん天てんを見あげた。

　彼女が庵いおりを結ぶ地は中国江こう西せい省しようの廬ろ山ざんである。ふと思い立って、その奥深い山中を散策していた折だった。

　すくなからぬ雪が山中を白く染めあげていた。

　葉を残した木々もそうでない木々も、積もった雪の重みと冷気を堪たえ忍んでいる。

　溶けて下方にしたたり落ちた雪はふたたび氷結し、あちこちで透明な氷柱つららとなり、あるいは宙を漂う氷片や霧きりとなって、白い銀世界に幻想的なきらめきを加えていた。

　この仙境というべき雪山にたたずむ絶世の佳か人じん・羅翠蓮。

　身にまとうのは絹きぬの漢かん服ぷくである。前まえ衽あわせの衣ころもを帯で結ぶ形には、和服に似た趣おもむきと格調高さがある。上衣の袖そではゆったりとふくらみ、裳スカートの裾すそは地面を擦するほどに長い。しかも雨中、雪まで積もっている。

　だというのに、羅翠蓮の衣はまったく濡れていない。

　方ほう術じゆつを極めた彼女にとって、水避けの術など児じ戯ぎにも等しい業わざだった。また、雪上には沓くつの足跡も漢服の裾を引きずった跡もない。

　白銀の雪上を崩した足跡は兎うさぎのそれだけであった。

　自らと衣の重みが無であるかのごとく歩み、跳び、疾駆し、武を演ずる。

　その程度も無意識にできずして、どうして『我、武の至し極ごくなり』と名乗れよう？

……だから、羅翠蓮の月のごとく冴さえ冴ざえと輝く美貌を怪け訝げんそうに曇くもらせたのは、冬の廬山の何物でもなかった。

「まさか今日、雨が降るとは」

天に祈き禱とうして雲を呼ぶことさえ、羅翠蓮の方術は可能である。

当日・翌日の天気など、ただ空を見あげ、風を浴びれば即座に読めてしまう。山の天候の読みづらさなど、彼女には全く無縁の話であった。

だが、このにわか雨の到来を今日はまったく感じていなかった。

「天と地の間に何か大きな変異が生じている……その兆きざしということですか」

ひとりごちたあと、降り出したときと同じ唐突さで雨はやんだ。

みごとなほどの速さで灰色の雲は晴れていき、冬の太陽がふたたび天に現れる。

その直後、羅翠蓮は幻視した。

空にかかる白い虹にじが太陽を貫つらぬくという——不吉な情景を。彼女は巫ふ覡げきとしても卓抜した感性を持つ。その力が霊視の託たく宣せんを呼びこんだのである。

「白はつ虹こう貫かん日じつ……」

つぶやいて、羅翠蓮はきびすを返した。

今、武林の至尊にして史上最高の『王』である彼女に成すべきことができたのだ。

二月のなかば、ついに草くさ薙なぎ護ご堂どうは帰国を果たした。

遠くイタリアから成田空港へ。そこからは直通の特急列車で東京へ。

ちょうど三学期の試験休みが終わる当日に、日本へもどってくる形となった。

カレンダーの上ではわずか数日の旅行だが、護堂と仲間たちにとっては過去と現代を行き来する数か月もの大遠征であった。

「さすがに感かん慨がい深いものがありますね……」

文ぶん京きよう区くの街並みを目にして、リリアナ・クラニチャールがしみじみとつぶやく。

護堂も「たしかにな」と苦笑をこぼした。冬のトスカーナ、古代ガリアとゲルマニア、さらにはサルデーニャ島までも踏とう破はしたあとで、東京下町の根ね津づ三丁目に帰還。なんとも脈絡のない旅たび路じではないか。

ここまで車で送ってくれたのは、正せい史し編へん纂さん委い員いん会かいの甘あま粕かす冬とう馬まだ。

先に虎とらノ門もんの万ま里り谷や家け近くへ立ち寄り、万里谷祐ゆ理りとひかりの姉妹、清せい秋しゆう院いん恵え那なを送りとどけたあと。今は護堂とリリアナ、そしてエリカ・ブランデッリを本ほん郷ごう通りで降ろしたところだった。

「では、みなさん。今日のところはひとまずお休みください。何か緊急事態が起きたときはすぐに連絡させていただきますよ」

「甘粕さんはこのあと、馨かおるさんのところへ？」

車内の運転席にすわったままの甘粕へ、エリカが路上から訊たずねた。

陽ひがだいぶ傾いている。もうまもなく冬の夕暮れがはじまる頃合いだった。

「もしそうなら、わたしも連れていってもらおうかしら？　相談したいこともあるし」

「残念ながら、野や暮ぼ用ようがあるので図書館へ行くつもりなんです。うちの委員会が青あお葉ば台だいでやっている。調べたいことがありまして」

「それ、やっぱり『最後の王』がらみのこと？」

「ええ、まあ。復活したアテナ襲来の報しらせを聞いたとき、祐理さんに降りてきた啓けい示じがちょっと引っかかったもので、そのことを」

「あれのことか」

　リリアナがうなずいて、口をはさむ。

「海に邪じや竜りゆうあり。竜は即すなわち風雲を興おこして以もつて天てん日じつを擁ようし、電でん耀ようは海に光れり。王は乃すなわち箭やを放ち、まさに竜の胸を破る——だったな」

「はい。その文句、昔どこかで聞いたような気もするんですよねえ」

　甘粕の思いがけない告白。護堂は驚いた。

「万里谷が言ってくれた詩みたいなやつを、ですか？」

「だとしたら、『最後の王』の謎を解く大きなヒントになるぞ」

「どこかの英雄にまつわる伝説の一節……そんな印象の文句よね、これ」

　リリアナが身を乗り出し、エリカも興味深げだ。

　……昔、海に邪悪な竜がいた。竜は風と雲を起こして太陽を隠し、稲妻が海上で荒れ狂っていた。そこで王は矢を撃ち、竜の胸を貫いた——。

　そのような内容だという。英雄が竜を退治する物語なのだ。

　しかし、正史編纂委員会のエージェントは苦笑して、肩をすくめた。

「具体的なことは何も思い出せないんです。気のせいという可能性も否定できません。だからまあ、ちょっと調べてみようかなくらいの話ですよ。何かがわかったら、そちらもすぐにご連絡します」

「わたしたちも例の件、情報が入り次第そちらに伝えよう」

　と言ってから、リリアナは憂ゆう慮りよのため息を吐き出した。

「まあ、わたしたちもふくめて油断した関係者一同が悪いんだが……あのおふたりにみごと逃げられてしまうとは」

　イタリアはトスカーナ州の寒かん村そんに滞在中だった、たおやかなる貴婦人。

　サルデーニャ島を出る直前まで、護堂といっしょにいた軽薄なイタリア人青年。

　破格の力と傍はた迷めい惑わくさを併あわせ持つカンピオーネ両名は、どちらも半日ほど前に監視の目をあざやかに振り払い、忽こつ然ぜんと消息不明になったのである。

「ドニのアホはともかく、アイーシャさんにまでやられるとはなあ」

　護堂はしみじみとつぶやいた。

「早まった真ま似ねをしないでほしいよ、本当に」

「それをアイーシャ夫人に期待するだけ無駄というものよ、護堂。この失踪はあとで起きる破格の大騒動の引き金になる……そんな気がするわ。賭けてもいいくらい」

「言っとくけど俺も同じ意見だから、賭けは成立しないぞ」

「サルバトーレ卿きようの失踪にも同じことが言えるでしょうね、まちがいなく」

　エリカの意見に護堂はかぶりを振り、リリアナもつぶやく。

　恐るべき魔王ふたりに対する、身もフタもないコメントの数々であった。

「でも、真に警戒すべき行方不明者はあのおふたりじゃないわよ。パラス・アテナ……神しん祖そとして復活したアテナの転生体と、そしてもちろん——」

　あえてエリカはその名を口にしない。だが、護堂にもわかっていた。

　この世の最後に顕あらわれる王。魔王殲せん滅めつの英雄。『最後の王』。古代ガリアの戦いで相あいまみえた蒼あおき髪の貴公子。神祖たちが千年かけて探し求めてきた究極の戦士。

　沈黙する護堂へ、リリアナも言う。

「アレク王子が推測したように、『最後の王』は東京湾、もしくは

その周辺のどこかで休眠しているのでしょう。パラス・アテナといえども、すぐに見つけ出せるとは思えません。……が、実は胸騒ぎがします」

「なんだって？」

「非常に大きな災さい厄やくが予想以上の速さで、わたしたちの頭上に迫りつつあるように——感じているのです。すこし前、東京に帰ってきた直後から」

「…………」

　護堂はため息をついた。リリアナは霊感の強い魔女だ。しかも古代ガリアを旅して以来、その霊視力はずいぶんと研ぎすまされている。

　あの貴公子がふたたび護堂の前に現れる日は、やはり近いのかもしれない。

「まあ、アテナもそれ以外の連中もどうせ最終目的地はここ、日本の東京あたりだ」

　護堂はあえて深刻ぶらず、軽めの口調で言った。

　目に見えない段階で危険を警戒しすぎてもいいことはないのだ。

「俺たちは誰が来ようと迎え撃つ準備をして、待機していればいいよ。できれば事を荒立てたくないけど、そうも言ってられない連中ばかりだからな。情報もいろいろ集めながら、力をたくわえておく感じでいこう」

　となれば、我が家でくつろぐのがいちばん——。

　国産乗用車で走り去る甘粕を見送り、エリカ・リリアナとも本郷通りで別れて、護堂は根津三丁目の商店街へと歩きはじめた。

　その一角にある閉店した古書店が草薙護堂の自宅なのだ。

　東京下町の風ふ情ぜいを残す商店街は、今もそこそこに繁はん盛じようしている。ここには家族もいれば、幼なじみもいる。長いつきあいのご近所さんも多い。

体感時間で数か月ぶりに帰ってきた地元で、護堂は大きく深呼吸した。

いずれ来きたる戦いの日——否。近々はじまるはずの決戦にそなえて、心と体を十分に休めておかなくては。

それこそが今、草薙護堂のいちばんに為なすべきことであった。

2

オーストリア西部のチロル州はアルペンスキー発はつ祥しようの地である。

当然、冬ともなればアルプスの山々は豪雪に見舞われ、プロ・アマ問わずスキーヤーがひっきりなしに訪れる聖地と化す。なにしろ夏場でさえ、山中の氷河に設けられたスキー場で雪と戯たわむれることができる土地柄なのだ。

この日、彼女が訪ねたのはチロル州のエッツタール渓けい谷こくであった。

アルプス山脈にかこまれた豪雪地帯である。集落は自然と渓谷のような低地帯に集まっていく。だが、彼女の目的地はそうした村や街ではなかった。

エッツタール渓谷内の小さな街ウムハウゼンから、四輪駆動車で出発。

一時間かけて登った雪深い山中で、ひとり降ろしてもらう。ここからは持参したスキー板を両足に装着し、徒歩での移動に切りかえる。

「ここまで送ってくださって、ありがとうございます♪　街のみなさんによろしくお伝えくださいねっ」

「……こんなところに置いていって、本当にいいのか？」

朗ほがらかに感謝する彼女へ、林業を営んでいるという中年男性

は困こん惑わく気味に言った。

　ウムハウゼンの街の小さなカフェにたむろしていた常連客のひとりだ。たしか六、七人ほどいたのだが、その全員と彼女は仲よくなった。

　いつものとおり笑顔で話しかけたら、五分後にはそうなっていたのである。

　適当なところで『この辺まで送っていただけませんか？』と頼み、クロスカントリーの競技者と地元住民しか立ち入らない山中に連れてきてもらった。

　心配する中年男性と別れて、彼女はひとり目的地をめざす。

　本当は最後まで送ってもらう方が楽なのだが、あそこの主人は気むずかしい。

　彼が気を許す唯ゆい一いつの例外——つまり、彼女ひとりで行くべきだった。彼女以外の人間に対して、とにかく横暴で冷酷な問題人物なのだ。

　かくして、道なき雪のなかを突き進むこと数十分。

　たおやかな見た目に反して、体力も運動神経も抜群の彼女。苦しいはずの道みち程のりを難なく乗り切り、ついに目当ての山荘へたどり着いた。

　白い建材をふんだんに使った、瀟しよう洒しやなデザインであった。

　冬の別荘という風ふ情ぜいのこぢんまりとした建物だが、そこが逆に上品でもある。

「ごめんくださ～い。どなたか、いらっしゃいますかー？」

　玄関まで行き、ドアのノッカーを叩たたいてから、可か憐れんな声で呼びかける。

　五分後。ぎぃっと重厚な音を立てて、木製のドアが開いた。出てきたのは山荘で働く使用人とおぼしき老人である。

「お兄さまにお伝えください。ちょっと思い立って、会いに来ちゃいましたと」

「……かしこまりました、アイーシャさま」

　老人は名乗らずとも彼女の素性を承知していた。

　おそらく、前にこの山荘を訪ねたときも居合わせた人物なのだろう。

　アイーシャの方は彼の顔を覚えていない。だが、あれはたしか西暦でいえば一九八〇年代だったはず。おそらく風貌が大きく変わってしまったのだ。

　そして、アイーシャは暖炉のある広間へ通された。

　ぱちぱちと音を立てて燃える火のそばに『お兄さま』はいた。名工の手による逸いつ品ぴんとおぼしき木製の椅子に腰かけ、横おう柄へいに足を組んでいる。

　また、白はく皙せきの顔には仏ぶつ頂ちよう面づらとしか言いようがない表情を貼り付けていた。

「……以前も言ったはずだな。私の仮住まいに気安くやってくるなと」

「そんなことをおっしゃっていたら、誰も遊びに来てくれませんよ。お兄さまは只ただでさえお友達がすくないんですから」

「……そして、こうも言った。図々しく私の友人面づらをするなとも」

「友人面だなんて、とんでもない。お兄さまにとって、わたくしはいわば『心の妹』じゃありませんか。家族みたいなものです♪」

　つれないことばかりを言う仏頂面の老魔王へ、アイーシャは訴えた。

　春風のごとき笑顔を絶やさない。常に孤高の影をまとう彼に配下と崇すう拝はい者しやはいても、友と家族はいない。心の底ではアイーシャとの再会をよろこんでいるはずだ。たぶん。

　彼――デヤンスタール・ヴォバンは悩ましげに頭を振った。

「…………。よく私の居場所がわかったものだな」

「お兄さまに仕つかえる方々を何人か訪ねて、訊きいてまわったんです。三人目の方が快こころよく教えてくださいました」

「魅み了りようの呪じゆ縛ばくを使っておいて、快くも何もない」

　侯こう爵しやくとも呼ばれる『お兄さま』は吐き捨てるようにつぶやいた。

　知的な老紳士という風貌だが、ときどき口が悪くなる癖くせは昔と変わらない。

　アイーシャにとって、最古参のカンピオーネであるヴォバン侯爵は古くから――そう、二〇世紀よりも前からの盟友なのだ。

　彼はここ数十年の間、ヨーロッパ各地のホテルや隠れ家を転々としている。

　幼い頃から流る浪ろうを重ねてきたヴォバン侯爵。アイーシャと同じで、決まった住居に腰を落ちつける習慣と縁がうすいのだ。

　この山荘は侯爵の仮住まいとして、配下が管理している物件のひとつだった。

「……これも前に言ったはずだが、君と長話をしても得るものはない。早々に用件を済ますとしよう。今日は何の用があって、ここへ来た？」

「あ、はい。お兄さまに聞いていただきたい話がありまして」

　前置きしてから、アイーシャはすかさず言う。

「ものすごい大事件がもうすぐ起きそうなんです。その話も長くなりますし、ほかにも積もる四よ方も山やま話ばなしがありますから……しばらく泊めてくださいね、お兄さま♪」

「私は今、早々に用を済ませると伝えたはずだぞ」

　不機嫌そうに告げるお兄さま。しかし、アイーシャはにっこりと

笑った。

「冷たいことをおっしゃらないでください。実は今、〝この世の最後に顕あらわれる王〟を復活させるために鋼はがねの英雄がなんと三み柱はしらも活動中なんです」

「ほう」

　はたして、最凶の神殺しである老ろう兄けいは一瞬だけ眼光を鋭くした。

「無論、君を妹だ友だなどと呼ぶ気は毛もう頭とうありはしないが――」

　そして、わずかに身を乗り出す。椅子に深く腰かけていた姿勢がほんのすこし前へ、アイーシャの方へ動く。

　それは伏せていた狼おおかみがゆっくり身を起こすときにも似た、精せい悍かんな動作であった。

「聞かせてもらおうか、アイーシャよ」

「もちろんです。……あ、すいませ～ん。体が冷えてしまったので、あたたかい飲み物を何か持ってきていただけますかあ？」

　広間の隅でひっそりとひかえていた使用人の老人へ、アイーシャは声をかけた。

「あと、わたくしのお部屋、がんがん暖房きかせちゃってくださいね～」

「…………言うとおりにしてやれ」

　苦々しげにヴォバン侯爵がつぶやくと、老人は丁てい寧ねいに頭を下げて退室していく。

　これで今夜の宿とお兄さまの興味を確保できた。思う存分おしゃべりできるとうれしく思い、満面の笑顔となるアイーシャだった。



「聞いたか、アイスマン？」

　アレクサンドル・ガスコインは腹心の騎士へ言った。

「昨日あたりからグリニッジが妙に騒がしくなっているらしい。賢人議会の下したっ端ぱ連中がアジア方面のデータを大おお慌あわてでかき集め、ディオゲネス・クラブの年寄りどもは老体に鞭むち打うって徹夜の会議を開催中とのことだ」

「ほう」

　黒王子アレクに仕える第一の騎士、サー・アイスマンはつぶやいた。

　英国最南端に位置する田舎いなか町まち、コーンウォールの郊外に建つ私立美術館。そのエントランスホールでのやりとりだった。

　通りがかったアイスマンへ、外出からもどってきた若き魔王が声をかけたのである。

　ちなみに、この美術館こそ彼らがひきいる結社《王立工こう廠しょう》の本部であった。

「六年前を思い出しますね。あの『まつろわぬアーサー』が顕けん現げんし、あなたにプリンセスとの呉ご越えつ同どう舟しゆうを決断させた例の事件を――」

「ああ。そして、これはいつもどおりだが……例によって、あの女も不在だ」

　それぞれの言いまわしでプリンセス・アリスについて言及する主従。

　アレクはフンと鼻を鳴らして、旧きゆう敵てきである美女のことを語った。

「グリニッジの屋敷に体を残したまま、霊体はふわふわと徘はい徊かい行為を続けているらしい。ひとまずあの女の足取りを追いかけて、この件に関する情報を集めてみようと思う」

「私の記憶がたしかなら」

　結社の長として決定事項を告げた総そう帥すいへ、アイスマンは皮肉っぽく言った。

「アレク。あなたは行き先すら告げずに一か月も出張を続けたあげく、三日前に帰ってきたばかりだ。だというのに、またしてもご自身で遠征されると？」

「そう言うな。この事件、かなりの大おお事ごとにふくれあがりそうな気もする」

　腹心の批判的意見をさらりと受けながして、アレクは宣言した。

「念のために今から動いておいても、べつに損はしないだろう。留守番続きで申し訳ないが、あとのことをよろしく頼む」

　その日、護ご堂どうの携帯電話に思いがけない報しらせが入った。

　番号非通知の電話に出てみると、なつかしい旧知の声が聞こえてきたのである。

『過去への旅ではずいぶんと派手に暴れたそうだな、草くさ薙なぎ護堂』

「あんたか！」

　数か月ぶりに聞く、ジョン・プルートー・スミスの声であった。

　自己演出が多すぎるロサンゼルスのカンピオーネ。電話越しなので仮面を直じかに見ることはかなわないが、やわらかなテノールは以前と変わりない。

「そうだ。借りていたものはアニーさんに渡しておいたぞ」

『問題ない。すでに受領済みだ。あの銃は現在、たしかに私の手元にある』

「あんたにはいろいろ世話になった。ありがとうな」

『気にしないでくれ。いずれ利子も込みで借りを返してもらうだけだ』

　教えてないのにどうして俺の番号を知っているんだとは、あえて訊かない。それは野や暮ぼというものだ。代わりに魔ま銃じゆうの件で礼を言い、向こうも鷹おう揚ように受け入れる。

　日につ光こうで別れて以来、数か月ぶりの会話である。

　しかし、スミスとの言葉の応酬は打てば響くようにスムーズだった。

　問題人物だらけのカンピオーネのなかで、この男とは良好な関係が築けている。

　しかし、それはジョン・プルートー・スミスが真人間だからでは断じてない。何しろ夜な夜なコスプレしてヒーロー活動に精を出す、正しよう真しん正しよう銘めいの変人なのである。

　そのことに気づいて、護堂は苦笑した。

『それはそうと、いろいろ耳にしているぞ。最後の王のこと、アテナのこと、例のご婦人とイタリアの伊だ達て男おとこ殿が行方不明になったこと——』

「話の出所はアニーさんとアリスさんあたりか……」

　スミスの協力者である米国人女性と、プラチナブロンドの公こう爵しやく家け令嬢。古代ガリアの一件ではこのふたりにもいろいろと世話になった。

『そのうえで私の方針を表明しておこう。……今のところ、わざわざ日本まで出向いて手出しをするつもりはまったくない。以上だ』

「そりゃあ助かるな」

『そうだろう。君なら、そう言うと思っていた』

　スミスの言いぐさに護堂は笑った。

　仮面の怪人物は不ふ干かん渉しようによって、草薙護堂をアシストするつもりなのだ。

日光での戦いのとき、斉せい天てん大たい聖せい・孫そん悟ご空くうはふたり以上のカンピオーネと対たい峙じするだけで力を増した。『最後の王』も同じ能力を持つ。あれと同じことをまたやられたら――。

となれば、カンピオーネの誰にも不用意に日本へ来てほしくない。

それが護堂の正直な思いであった。スミスも同じことに思い至ったのだろう。

『まあ、われわれの同族二名が失踪中だそうだから、私の不干渉主義も無駄に終わるかもしれないがね』

「まったくだな。あの連中もすこしは空気読んでくれることを祈ってるよ、俺は」

『そうし給たまえ。幸いの運の加護が君と共にあらんことを』

ロサンゼルスの守護聖人との電話はこれで終わった。

あいかわらず気き障ざだなと苦笑して、護堂は携帯電話をオフにする。

「王様。今のもしかして、アメリカの方から？」

「ああ、スミスのやつからだ」

居合わせた恵え那なに訊かれたので、護堂はかいつまんで電話の内容を語った。

ここは千ち代よ田だ区く三番町にある沙さ耶やの宮みや邸ていの書斎。正せい史し編へん纂さん委い員いん会かいの幹部である沙耶宮馨かおると媛ひめ巫み女こ筆ひつ頭とうのふたり――つまり清せい秋しゅう院いん恵那と万ま里り谷や祐ゆ理りもいっしょにいた。

「まあ。スミスさまがそのような申し出を……」

「正直、助かりますね」

祐理が感謝の面おも持もちでささやけば、馨もうれしそうにうなずく。

「パラス・アテナと三柱の英雄だけでも最高に厄やつ介かいなのに、そこへ魔王のみなさんが続々と来日なんて事態になったら、まちがいなく日本列島の沈没がはじまりますよ」

「…………」

　馨の軽口に冗談で応じたい護堂だったが、上う手まい返しを思いつけなかった。本当にそうなりかねないなと頭の片隅で考えたからである。

「でもさ」

　一方、太た刀ちの媛巫女がいつもの気楽さでふたたび口を開いた。

「考えてみたら、サルバトーレの王様もアイーシャさんも例のあれ――魔王殲滅の権けん能のうのことを知っているわけだし。そこは警戒して行動するんじゃないかな？」

　斉天大聖も模も倣ほうした、神力増大の権能。

　神々に仇あだ為なす大敵を全て殺さつ戮りくし、地上から一掃するための権能だという。あの蒼あおき髪の貴公子にだけ授けられた、選ばれし勇者の能力なのだ。

「たしかに、それだけが唯一の明るい材料なんだよなあ」

　護堂はうなずいた。

「ドニのバカもあれで戦いの駆け引きだけは抜け目ないし、アイーシャさんも生存本能みたいなやつがずば抜けている。ガスコインとヴォバンのじいさんもその辺はほとんど問題ないだろうし。だから、むしろ本当にやばいのは……」

　ある誇り高き人物のことを思い浮かべて、護堂はつぶやいた。

　斉天大聖との決戦にも参加し、魔王殲滅の力も身をもって経験した人物。

　そのうえ智勇兼備と謳うたわれる聡そう明めいさ。にもかかわらず、彼女があのデタラメなパワーアップを警戒して戦う姿はひどく想像しづらい。

「姐ねえさんなのかもな、やっぱり」

「羅ら濠ごう教きよう主しゆ……。あの、護堂さん。実はですね」

　一瞬、言いにくそうに口ごもってから、祐理が発言した。

「これが教主のことかはまったくわからないのですが、最近なんとなく感じるんです。南西の方位から日本に向けて着々と近づいてくる——禍まが々まがしい気配を」

　世界最さい高こう峰ほうの霊れい視し力りよくを持つ媛巫女の託宣であった。

　護堂は天を仰あおいだ。義あ姉ね・羅ら翠すい蓮れんが住まいとする土地は中国江こう西せい省しようの廬ろ山ざん。大おお雑ざつ把ぱに言えば、東京から見て『南西の方位』に当たる。

　これを偶然と片づけて、よいものだろうか？　一方、馨がつぶやいた。

「実は念のため、陸りくくんに要請してあるんです」

「鷹よう化かのやつに何を？」

「今回の件——パラス・アテナと三英雄、それと『最後の王』にまつわる情報の一切が教主の耳に入らないよう、あちらの関係者に手をまわしてくれないかと」

　あちら。羅翠蓮を聖教主と崇あがめる五ご嶽がく聖せい教きようと、彼女を史上最高の武術家として忠誠を捧ささげる中ちゆう華か武ぶ林りんの面々だろう。護堂はハッとした。

「世捨て人として仙境のような山奥で暮らしておられる方ですからね。接触できる人間は陸くんをはじめ、ほんの数名だけです。上手くすれば、この手で教主のご介入を避けられるのではと思うのですが、どうなることか……」

　智ち慧え者しやの沙耶宮馨らしい配慮であった。祐理と恵那もパッと表情を明るくする。

　だが、このとき護堂の携帯が着信音を鳴らした。メールが届いたのだ。なんとなくイヤな予感を覚えて、ついチェックしてしまう。陸鷹化からだった。

「姐さんが行方不明……？　廬山のどこにもいない？」

　いきなりの不吉な報せであった。

3

「廬ろ山ざんの庵いおりをのぞいてきたのは、僕じゃないんですがね」

羅ら翠すい蓮れんが唯ゆい一いつの直じき弟で子しとした少年、陸りく鷹よう化か。

由ゆい緒しょ正しき無法者一族・香ホン港コン陸家の若わか頭がしらでもあるヤクザな美少年は護ご堂どうの部屋に上がりこんでいた。といっても玄関から来たのではない。

護堂の部屋は二階にある。その窓から、ふらりと入ってきた。

リリアナや恵え那なもかなわないほど鷹化は身が軽い。『軽けい功こう卓たく越えつ』と称されるほどだ。

ちなみに、外を見れば夕焼け空が広がっている。根ね津づ三丁目の商店街が夕食前の買い物をする近隣住民でにぎわう刻限だった。

「聖教の光こう明みよう左さ使しが半年に一度のご機嫌うかがいに行ったら、もぬけの空になった庵に気づいたそうです。で、捜しまわっても廬山のどこにもいない——」

奇妙な役職名と事のいきさつを聞いて、護堂は頭をかいた。

鷹化が例のメールを送ってきたのは昨日である。詳細を報告するため、わざわざ草くさ薙なぎ家けまで来てくれたのだ。

「とりあえず廬山にいないってだけで、あの山系のどこか奥地で山ごもりしている可能性もあります。すくなくとも、まだ人里には出てきてないと思うんですけどね」

「どうしてだ？」

「東アジアのどこかで都市がひとつ崩壊した、みたいな話をまるで聞きませんし」

尚なお、このとき陸鷹化はひどくまじめな顔をしていた。

冗談のつもりは一切ないのだろう。さすが魔教教主・羅翠

蓮の破は天てん荒こうさを最もよく知る人間であった。

「師し父ふの失踪が『最後の王』と関係あるかは、まだ保留でいいんじゃないですかね」

「たしかにな。まあ、そんなことを言ってると、いつのまにか最悪の予想を超えるトンデモない真ま似ねをしでかしてそうだけど」

「それがカンピオーネの魔王方ってもんですよ。叔お父じ上うえもふくめて」

「…………」

　悟りにも似た諦てい念ねんの込もるコメントに、反論できない護堂であった。

「ひとまず、今回の件では僕もできる限りのことをさせて——」

　途中まで言いかけたところで、鷹化が消えた。

　正確には常人の動体視力では『さっと影が動いた』程度にしか見えないスピードで跳びすさり、閉めていた窓を音もなく『シュッ』と開け、外へと出ていったのである。

　まさに電でん光こう石せっ火か。いと速きこと風のごとし。

　鷹化の早はや業わざに慣れている護堂だからこそ、認識できたことだ。

　何事かと首をかしげた直後、木造の階段を『とんとん』とのぼる足音が聞こえてきた。

「お兄ちゃん、誰かといっしょにいるの？」

　部屋の外から声をかけられた。妹の静しず花かがやってきたの

だ。

「……いいや。今は俺ひとりだぞ」

「ふうん。ちょっと開けるね」

　ややあって、ふすまの戸がさっと開いた。静花が入ってくる。不思議そうな顔つきで護堂を見つめ、それから真冬だというのに開けっ放しの窓を怪け訝げんそうに眺めた。

「気のせい……か」

「一体どうしたんだ、おまえ？」

「二階から男の子の話し声が聞こえたような——そんな気がしたの。もしかしてあいつ、陸って子が来てるのかと思って」

「……もしそうなら、どうするつもりだったんだ？」

「すこしおしゃべりして、電話番号とメルアド聞き出して、気が向いたら待ち合わせできるようにしておくのもいいかなって。あの子のこと、なんか気になるのよね」

　これが少年少女の淡い恋のはじまりであれば、応援すべきかもしれないが。

　草薙静花は母に似て、天性の女王様気質。今の『待ち合わせ』というフレーズも『呼びつける』と互換可能なのだろう。おそらく。

　女嫌いの鷹化に要いらぬ気苦労をさせないため、あえて護堂はとぼけた。

「そうか。じゃあ今度会ったとき、あいつによろしく言っとくよ」

「べつにいいわよ。お兄ちゃんの世話にならなくても、友達くらい作れるから」

　あっさりと静花が言うので、護堂は鷹おう揚ようにうなずいた。

　頭のなかで『友達』を『舎しや弟てい』に置き換えたのは秘密である。

「あ、そうだ。さっき明あ日す香かちゃんから誘われたの。今日の

夕ご飯、いっしょにお好み焼きにでも行かないかって。お兄ちゃんもどう？」

「いいな。今日はじいちゃんも帰りが遅いはずだし」

「オッケー。じゃあ、七時くらいに明日香ちゃんちへ行くから、そのつもりでね」

　草薙兄妹きょうだいの幼なじみ・徳とく永なが明日香の家は近所の寿司屋である。

　そのまま静花は部屋を出ていった。階段を降りる軽快な足音が聞こえてくる。そして、窓から鷹化が軽やかにもどってきた。

「……やっぱり音で気づいたのか？」

「ええ。下から面倒そうな足音が来るなと思ったもので」

　鉄筋コンクリートの建物内ですら下の階から近づく足音を聞き取り、しかも誰が来るのかを正確に言い当てる——。

　羅翠蓮の弟子は厳しい修行の果てに、そういう非常識な聴力を得ているのだ。

　これで弱じやつ冠かん一四歳。まさに麒き麟りん児じと呼ぶべき、武術の申し子だった。

　……ただし、天才的な素質以外に『幼少の頃から過酷すぎる修練を強要してきた師父』『三歳児の頃から八年以上も山ごもり生活』『数々のトラウマが培つちかった女性への潜在的な敵意』など、負の財産も数多い——。

「叔父上の前で失礼をいたしました」

「いや、まあ、只ただでさえ心配事の多いときだしな。たしかにめんどくさいことにならなくてよかったと思うぞ、俺も」

　共に女関係では苦労の多い境遇である。

　多くを語り合わずとも通じ合えることは多い。エリカをはじめとする護堂と近しい女子たちとはまた異なる意味で、陸鷹化もまた信頼できる仲間であった。

　このようにして、帰国後の草薙護堂は予測される非常事態にそなえていた。

　しかし、平日はきちんと高校にも通っていたし、祖父・母・妹とも家族としてふつうに接していた。近所づきあいもすれば、幼なじみの明日香ともたまにおしゃべりした。

　そうして心身を休めつつも——不思議な感覚があった。

　一日、一日と過ぎるごとに体のキレがすこしずつ増していく。まるで世界大会に向けて入念な調整を重ねるアスリートのように。

　休養させている心と体の奥深い部分はおそらく承知しているのだ。

　対決の時はもうまもなくだと。

　神殺しの戦士であるカンピオーネの心身は無意識のうちに、因いん縁ねんの敵たちとの決戦にそなえて草薙護堂の状態をベストに向かわせつつあるのだ。

　だからだろうか。

　甘あま粕かすからの緊急連絡にも、護堂はまったくの平常心で応じることができた。

『草薙さん。南西からの脅きよう威いの正体、わかりましたよ』

　帰国から数日後、ちょうど学校からの帰り道で電話を受けた。

『アテナ——いえ、パラス・アテナはまっすぐ日本へ来ないで、ここ何日か南シナ海にいたらしいんです。台たい湾わんとフィリピンの中間くらいのどこかの小島に』

　南シナ海。たしかに東京から見て、南西の方角だ。

『そこでどんな召しよう喚かん儀式をしたかは不明ですがね。蛇へび型がたの神しん獣じゆうを複数体お供にして、南シナ海から太平洋に入って、順調に北上中です。黒くろ潮しおに乗っかって、いい感じのスピードですよ。年末年始に現れた女神さま、キルケーと同じ手口です』

「……というより、キルケーがあの辺――アジトの近くに遺のこしていた力とかに気づいて、再利用したんじゃないですか？」

　当てずっぽうの適当な推測。しかし、的まと外はずれではないだろう。

　パラス・アテナはアテナにあらず。女神であった頃のように神獣の群れを使し役えきできるはずもない。それくらいのカラクリはあるはずだ。

　すると、電話の向こうで甘粕が苦笑をもらした。

『草薙さんも察しがよくなりましたね。同じ推測をうちのスタッフもしてましたよ。ただ、あのとき女神は犬いぬ吠ぼう埼ざきに降こう臨りんしましたが、今回はたぶん――』

　東京湾。『最後の王』が眠るはずの海へ到来するのではないか。

　そう告げる正せい史し編へん纂さん委い員いん会かいのエージェントへ、護堂はごく冷静に言った。

「じゃあ、すいません。学校の方まで俺たちを迎えに来てもらえますか？　あと、清せい秋しゆう院いんもいっしょに連れてきてもらえると助かります」

『了解いたしました。全て王のおおせのままに』

　甘粕の笑えない冗談が緊急連絡の締めくくりであった。

　携帯電話をしまい、護堂はすぐそばにいる仲間の美貌を見つめた。

　たまたまいっしょに下校中だったのだ。エリカ・ブランデッリは例によって赤みがかった金髪を王冠のごとくかかげて、制服姿でく

すっと微ほほ笑えんでいた。

　今のやりとりがおかしかったようだ。

「護堂。あなたも本当に頼もしくなったわね。まだカンピオーネになって一年も経たってないというのに」

「今は二月後半だから、あと一か月ちょっとで一周年か」

　数えてみて、護堂はぼやいた。

「こんなにめでたくない一周年、ほかにあまりないな」

「エリカ・ブランデッリにとっては、よろこばしい出来事の方が多い一年だったわよ。わたし、本当にとてつもない人をこの世界に招待してしまったみたい」

「べつにエリカに引っぱり込まれたわけじゃない」

　全てのはじまりから二人三脚でやってきた相棒へ、護堂は肩をすくめた。

「身から出た錆さびとその場の勢いで、ここまで来ちまっただけだよ」

「もちろん、わたしはこのまま最後まであなたと添そい遂とげるつもりよ。このわたしこそが草薙護堂の最初の騎士であり、そして最愛の愛人なのだから。わかってるでしょうけど」

　当然だった。だから『俺たち』を迎えに来てくれと言ったのだ。

　言葉には出さず、護堂はただうなずく仕草で答える。それだけでエリカは満足そうに笑い、なんとも優雅に頭を下げてみせた。騎士の礼である。

「祐ゆ理りとリリィはまだ学校の近くにいるはずよね。電話で呼び出しましょう」

「清秋院のことは甘粕さんに頼んである。毎度のことで悪いけど、今回もまあ、いつものように頼む。上う手まいことやってくれ」

　我ながら、大おお雑ざっ把ぱすぎるオーダーだとあきれてしま

う。

　しかし、仕方がないのだ。何が起こるか見当もつかない決戦の開始前。草薙護堂にはいつもどおり『出たとこ勝負で臨機応変』以外の行動指針はない。

　誰よりも才気煥かん発ぱつな女騎士は軽やかに笑った。

「護堂の雑さを穴埋めできる才覚が自分にあることを、わたし、本当に幸運だと思うわ。あなたにも十分、感謝してほしいわね」

「当たり前だろ。俺はいつだってありがたいと思ってるぞ」

　うそ偽いつわりのない、素直な思いであった。

　かくして、『最後の王』を巡る冒険が本格的にはじまった。

　カンピオーネとなってから数々の激闘を経へてきた草薙護堂だが、この戦いこそが最も困難な試練となることはまったく疑いようのない事実であった。

第２章　神々、再臨す

1

　もともとパラス・アテナはまっすぐ『東の果て』へ向かうつもりであった。

　大陸の東端。この地には細長い島々が竜りゅう蛇だのごとくならび、人間どもは日本列島と呼んでいるらしい。大陸より渡来する文化と人種の吹きだまりであった。

　だが、上陸前に今すこし戦力をととのえたい——。

　その気持ちもあった。『風の王』も三英雄も頼もしい闘士ではある。

　しかし、肝心の局面で頼ることはむずかしい〝獅子身中の虫〟でもあった。

　そこで神しん祖その霊感を研ぎすましてみれば、幸いにも南方の海をただよう神しん力りよくの残ざん滓しに気づくことができた。

　神しん名めいはキルケー。わずか数か月前、この地で斃たおれた魔女神である。

　そこまで霊れい視しして、パラス・アテナは雄お々おしく微ほほ笑えんだ。

　広大な南海の片隅に浮かぶ神秘の島で、神しん獣じゆうたちと共に隠れ住んでいた女神。その聖なる神力の名残なごりをかき集める

ことができれば――。

　かくして、パラス・アテナは南シナ海の小さな孤島に上陸したのである。

　幾日・幾晩もかけて神祖の魔術で儀式を行い、海水から塩を抽ちゆう出しゆつするように神力の残滓を呼び集め、これにかりそめの形と命を吹きこんだ……。

　そして、満月の晩に儀式は完了した。

　誕生した神獣は七体。全て巨大な海うみ蛇へびの形状であった。

「長くは保もつまいが……まあ、かまうまい」

　パラス・アテナは女神にあらず。かつての神力も権けん能のうも失っている。

　魔導の聖せい杯はいと一心同体である彼女は歴代のどんな神祖よりも強大だったが、それでも神々の域には遠くおよばない。

　神獣を生み出したといっても、せいぜい二、三日しか維持できまい。

　だが、これで十分。パラス・アテナの用には事足りる。

　満足した彼女はフクロウの姿に化け身しんして、日本列島めざして南海より旅立った。朝の太陽が青い海原を照らしている。

　今の姿形は言うまでもなく夜行性の猛もう禽きん。海鳥ですらない。

　しかし、神祖の秘術によって化身した魔鳥である。大海原のまっただなかに浮かぶ小島より数万里を隔へだてた日本列島へも、ほんの数刻ほどで飛んでいける。

　南風と同じ速さで、海面すれすれの低空をパラス・アテナは天あま翔かけていく。

　その眼下の海面を同じ速さで七体の大だい蛇じやたちが泳ぎ、付き従う。目指すは北東の方位。『最後の王』が眠る約束の地――。

　これで全ての準備はととのった。

　満足するパラス・アテナは、不意に『風の王』の気配を感じ取った。

　風神でありながら鋼はがねの剣神でもある混こん交こう神しん。全身に巻きつけた布と仮面でかたくなに素性を隠す軍神は、見れば風そのものに化身して隣を飛ひ翔しようしていた。

　フクロウの姿でアテナは獰どう猛もうに笑った。

「安心せよ。神祖として果たすべき使命、忘れてはおらぬ。この世の最後に顕あらわれる王——必ずや再さい臨りんさせてみせようぞ！」

　そして、同時に強く誓う。

　パラス・アテナの悲願を成じよう就じゆさせるため、為なさねばならぬことを為すと。

　パラス・アテナ襲来の報に合わせて、護ご堂どうと仲間たちはすみやかに集合した。

　草くさ薙なぎ護堂。エリカ。祐ゆ理り。リリアナ。恵え那な。そして甘あま粕かす。

　ちなみに恵那はいつもどおり制服姿だが、ほかの女子たちはここへ来るまでの間に着替えを済ませている。祐理は巫み女こ装しよう束ぞくへ。エリカはスポーティーな黒のブルゾンと同色のパンツ。リリアナは黒のブラウスにスキニーのデニムパンツ。

　ただし、騎士ふたりは愛用のケープも忘れていない。

　それぞれの所属結社を象徴する『紅と黒ロツソネロ』『青と黒ネラツズーロ』の縦たて縞じま入りだ。

　もはやおなじみとなったメンバーの顔ぶれである。気心も知れているし、チームワークも役割分担もまったく問題ない。

　いつものように車でやってきた甘粕は、護堂たちを意外な場所に

連れていった。

　城じよう楠なん学がく院いん近くの大学病院——。

　屋上まで案内されたとき、その意味がようやくわかった。

「最短時間で移動していただこうと思いまして。こいつを手配しました！」

　ローターの回転音に負けないよう、甘粕が大声で叫ぶ。

　病院の屋上ヘリポートでは、陸上自衛隊所属の物資搬送用ヘリコプターが待機していたのである。機内に乗りこむなり、エリカがつぶやく。

「とりあえず、東京湾方面へ飛んでもらう感じでいいのかしら？」

「いや……」

　かぶりを振ったのはリリアナだった。望ぼう洋ようとした目つきで宙を見つめている。

「パラス・アテナがどこに来るのか、わかる気がする……。甘粕冬とう馬ま、わたしの指示する方角へ飛んでもらうことはできるか？」

「そりゃあもちろん。霊視のお告げが降りてきたんですか？」

　銀髪の女騎士はこくりとうなずいた。

　やはり、以前よりも霊視力が研ぎすまされているのだろう。それに考えてみれば、なつかしいナポリの事件のときもリリアナはアテナと間近に接している。あのときの経験も影響しているのかもしれない。

　そのままヘリは東京の空を飛んでいく。陽ひが暮れはじめていた。

「そうだ祐理さん」

　唐突に甘粕が媛ひめ巫み女こへ声をかけた。

「霊視のお告げといえば、祐理さんの御力で昔の私が読んだかもし

れない文ぶん献けんをびびっと視みていただくこと、できませんかね？」

「甘粕さんが読んだかもしれない文献……？」

　適当すぎるお願いに祐理はきょとんとして、すぐにハッとした。

「もしかして、前に私が視た詩しい句くに関する文献ですか？」

「そうそう。それのことです。いや、帰国してから図書館や自宅で読んだことのある古こ文もん書じよや研究書をあれこれ読み返したんですけどね。どれもヒットせずで」

　昔、海に邪じや竜りゆうあり――。あの一節の出所、結局わからなかったようだ。

　祐理はあきれ顔になり、それからさとすように答えた。

「そんなに都合のよいことが視えるはずありません。私たちの霊視の力がどれだけ不安定なものか、甘粕さんもよくご存じのはずでしょう？」

「いやいや、ダメもとってやつですよ」

「まあ、でも」

　愛想笑いする忍者の末まつ裔えいに代わって、もうひとりの巫女がにやっと笑った。

　太た刀ちの媛巫女とも異名を取る祐理の幼なじみ、恵那である。

「甘粕さんの気持ちもわかるけどね。いつも『できない』って言いながら、祐理は結構いろいろ視てくれるときが多いから。ダメ元で頼んでみたくなるというか」

「恵那さんまでそんなことを……」

　ヘリの簡易シートにすわりながら、祐理が恥ずかしげに身をすくめる。

　一方、恵那はそんな友人を微ほほ笑えましげに見つめ、それから冗談っぽくつぶやいた。

「ところでさ。リリアナさんがどこに連れていってくれるのか、恵那にもなんとなくわかってきたよ。べつにお告げがあったわけじゃないけど」

「えっ、本当か？」

　護堂は驚いた。まさか霊視の力を持たない恵那がこんな宣言をしようとは。ところが、その能力に同じく無縁のエリカまでうなずいたのである。

「わたしにもおおよその察しがついたわね。護堂はまだわからない？」

　言われて、護堂はヘリの機外を見やった。

　——東京都と房ぼう総そう半島をつなぐ海上道路アクアラインをなぞるようにして、ヘリは東京湾を縦じゆう断だんしてきた。前方には夕焼けでオレンジ色に染まった砂浜が見える。

　アクアラインの房総半島側インターといえば、たしか木き更さら津づだ。

「なるほど、ここか」

　遅ればせながら、護堂にもようやく呑のみこめてきた。

　木更津に到着後、リリアナの指示でヘリは砂浜に着陸した。

　護堂はあえて、ひとりで降りた。

　他のメンバーを乗せて、ヘリはふたたび飛び立つ。彼女たちには十分に距離を置いた場所で待機し、護堂のバックアップを適てき宜ぎ行ってもらう予定であった。

　あのときのように救きゆう世せいの雷いかずちでも落とされたら、また浜辺に焼け野原が生まれる。

　当然の用心であった。護堂はあらためて木更津の浜辺を見わたした。

　数か月前、女神アテナの最さい期ごを見届けた戦場だった。あのときランスロットが救世の神刀で崩壊させせた浜辺は数キロ先である。

　そして、到着から数十分後。

　夕暮れが暗くら闇やみへと入れ替わる寸前の薄闇のなか、ついに護堂は見た。

　太平洋の彼方かなたより海鳥のごとく飛来したフクロウがパラス・アテナ――銀髪の少女に化身しながら、浜辺に降り立つさまを。

　パラス・アテナは護堂のすぐ目の前に着地を決めた。

　さらに海からは巨大な蛇――全長二〇メートル近い大蛇が七匹も這はい出てきて、護堂とパラス・アテナの周囲をぐるりと取り囲んだ。

　シャアアアアアアアァァァァァァァァァアアアアアアアアッ！

　七匹の大蛇は甲かん高だかく咆ほう哮こうし、一斉に鎌かま首くびをもたげた。

　ただし、この剣けん呑のんな包囲網は決して護堂とパラス・アテナの至近ではない。中心にいるふたりからは五〇メートルほど距離を置いている。

「漠ばくたる予感が妾わらわに告げていた」

　パラス・アテナが不敵に――アテナと瓜うり二ふたつの不敵さで笑う。

「我が逆ぎやく縁えんの敵手、草薙護堂よ。ここに来れば、あなたと再会がかなうと」

「期待に添えて何よりだよ。まあ、ここは一応、因いん縁ねんの場所ってやつだしな」

　記憶を失っても、魂たましいの奥底に刻み込まれた何かが彼女に教えたのか。

　それ以上の詮せん索さくはやめて、護堂はパラス・アテナを見据えた。ここでこうして相あいまみえた以上、そんなことはどうでもいい些さ事じだ。

「生まれ変わる前のあんたには借りがある。でも、実を言うと今すぐリターンマッチしたいわけでもないんだ。ただ——」

　護堂はつぶやいた。短い銀髪の魔女王を鋭く見つめながら。

「あんたが『最後の王』なんて物騒なやつを甦よみがえらせるつもりなら、そうも言ってられない。俺も平和主義をすこし棚上げして、力ずくであんたを止めないといけない」

「ならば、答えはすでに出た」

　パラス・アテナも傲ごう然ぜんと護堂を見つめながら、ささやく。

　背せ丈たけは低いくせに、まるで天上から見おろすような気け高だかさであった。

「かの勇者殿を再臨させることは、妾の神祖としての使命。草薙護堂よ、神殺しの権能を以もつて妾を弑しい逆ぎやくしてみせよ。そして」

　忽こつ然ぜんとパラス・アテナの右手にメダルが顕れた。

　鉄と黄金の合金より成る神具——《鏃やじりの円盤》！　護堂は身がまえた。いよいよ三英雄を呼んで、総力戦とする気かと。しかし。

「『風の王』よ。そなたはこれをたずさえ、手はずどおりにせよ」

　パラス・アテナは己の背後へ、メダルを放り投げた。

　これを受け止めるのは一陣の旋つむじ風かぜと共に顕けん現げんした『風の王』である。例によって全身を布でぐるぐる巻きにして、仮面で顔を隠したままだ。

　そのまま『風の王』はメダルを手に、飛翔していく。

　あっという間に急上昇して、黄昏たそがれ時どきの空に浮かぶ雲

よりもさらに高みをめざして、あざやかに飛び去っていった。

　一体、あの謎めいた神に何をさせるつもりなのか？

　いぶかしみつつも護堂は訊たずねる。

「いいのか？　あのメダルとあいつがいなかったら——言っちゃ悪いけど、あんたひとりじゃ俺にかなわないだろう？」

　神祖は女神にあらず。パラス・アテナはアテナにあらず。

　いかに神獣の群れをひきつれようとも、神殺しである護堂の敵にはなり得ない。だが、その指摘にパラス・アテナは——フッと笑った。

「それはあなたの心得ちがいだ。われら神祖にはこのような手がある……」

　直後、護堂は愕がく然ぜんとした。完全に意表を突かれたからだ。

　パラス・アテナがふたたび変化していく。フクロウに、ではない。成熟した肉体へ。今まで一二、三歳ほどであった外見が一〇代後半の乙女へと変わる。

　月光のごとき輝きを宿す銀髪ものび、腰まで届く長さとなる。

　そして、この銀髪が『蛇』になった。パラス・アテナは髪の毛の代わりに頭から無数の蛇を生やした女め妖よう——メドゥサに化身してみせたのだ。

　さらにパラス・アテナの下半身は、太い蛇の胴体となって砂浜の上でうねる。

　身の丈まで三倍になり、気構えだけでなく物理的にも護堂を見おろすようになった。

　巨大な蛇の怪物と化した神祖からは聖なる力の波動までがほとばしり出す。その荘そう厳ごんさはまちがいなく女神のオーラであった。

　カンピオーネの直感が告げていた。今、目の前に神がいると。

　護堂の心と体に力がみなぎる。『まつろわぬ神』と戦うための力であった。

「竜蛇の封印を解くってやつか……！」

　かつて魔女王グィネヴィアが、また日につ光こうに現れたアーシェラが行使した切り札。

　不老不死の命を捨てる代わりに、神祖たちは前世の——女神であった頃の神性をつかのま取りもどすことができるのだ。しかし、使えば必ず死ぬ。

　最大の切り札をパラス・アテナはこの局面で躊ちゆう躇ちよなく使ってみせた。

　予想外すぎる行動に、護堂は激しい戦せん慄りつを覚えた。

　そしてパラス・アテナの真意はどうであれ、絶体絶命のピンチでもあった。今の自分は蛇妖と化した女神だけでなく、その指揮下にある大蛇型の神獣七匹にも包囲されている。

　護堂の唇くちびるには、獣けものめいた獰どう猛もうな微笑が自然と浮かんでいた。

2

　女神となったパラス・アテナは蛇じや妖ようメドゥサに化け身しんした。

　たおやかな乙女の姿をしていたときよりも、三倍ほど大きくなっている。

　身長でいえば五メートル前後の巨体。しかし、下半身が長々とした蛇へびのそれに変化したため、全長はおそらく一二、三メートルほどだろう。

　神しん獣じゆうさながらの巨大さ。しかも、その右手に長なが柄えの鎌かまが顕あらわれた。

死と大地の神が命を刈り取るための鎌。アテナであった頃から愛用する武具だった。

「女神の輝ける瞳ひとみにひれ伏すがいい、草くさ薙なぎ護ご堂どうよ。神殺しの命をここで散さん華げさせるのだ！」

うそぶきつつも、パラス・アテナが後退していく。



だが、代わりに護堂を包囲していた七匹もの大蛇が前進をはじめた。

包囲の円が当然小さくなっていく。このまま集団で護堂に襲いかかり、なぶり殺しにするつもりなのだろう。しかも、パラス・アテナの言こと霊だまが配下の蛇たちに大量の神力を分けあたえていた。まさに必殺の態勢だ。

そして、やにわに七匹の大蛇たちが急加速。

全長二〇メートルの巨大さが嘘うそのような、稲妻のごとき速さと俊しゅん敏びんさであった。

もちろん、並の方法でしのげる攻撃ではない。にもかかわらず、護堂は包囲網のどまんなかで微び動どうだにせず、襲われるにまかせて——

「やれ！　吹き飛ばせ！」

簡かん潔けつに命じた。その瞬間だった。

護堂の立っていた足下から突風がわき起こる。

この風は衝撃波をともなう超常の暴風であり、わずか身長一八〇センチの護堂を押しつぶすべく殺到した大蛇たちをあざやかに跳ね返してみせた。

総重量、おそらく数百トンもの蛇たちをいともたやすく——。

護堂がカウンターで喰くらわせた衝撃波の威力はすさまじく、大蛇型の神獣たちの全身のみならず体内の奥底にまで浸しん透とうし、骨という骨を粉々に砕いてしまった。

そして、地下より轟ごう音おんがとどろく。

オオオオオオオオオオォォォォオオオオォォォォォォォオオオオオオンッ！

猛獣の咆ほう哮こうであった。巨大な——全長二〇メートルものイノシシが護堂の背後にせり上がってきた。蛇たちに襲われる直前、召しよう喚かんしたのである。

そう。ウルスラグナ第五の化身『猪いのしし』を。

「……怪獣同士でバトルロイヤルするプロレス会場に長居したくないからな。全部まとめてやらせてもらったぞ」

向こうにひかえるパラス・アテナの巨体へ、護堂はうそぶいた。

すぐに実体化させず、先に得意の衝撃波だけを撃たせてから地上に呼びこむ。一〇の化身を操るウルスラグナの権けん能のうも掌しよう握あくが進み、ここまで応用できるようになったのである。

一方、解き放たれた『猪』は今度こそのびのびと吠ほえる。

オオオオオオオオオォォォォォンンンンンッ！

そのままメドゥサとして巨大化したパラス・アテナへ激走をはじめる。

「ふん。我が下しも僕べたちよ、新たな命を得よ」

対する蛇女神は落ち着いて言霊を誦ようした。

「神の楯アイギスとなり、生まれ変われ！」

砂浜で無惨に横たわり、死を待つだけだった大蛇型の神獣七匹。

この連中がやにわに光の粒子のかたまりと化した。一応、蛇のフォルムをかたどっていたのは最初だけ。七匹分の粒子はパラス・アテナの前へ飛んでいき、結集して、新たな姿——青銅製の巨大な楯たてとなった。形は長方形だ。

支えもないのに宙に浮いている。メドゥサの巨体をすっぽり隠せるほどのサイズだ。

そこに突っ込んでいく『猪』。大蛇より生まれた楯は即席の城壁となり、ウルスラグナのしもべの突進を受け止めた。

ゴォォォォォォオオオンンンンッ！

激突音。『猪』は青銅の楯に大きく跳ね返された。

が、四つの足でみごと着地を決めて、バランスも失わない。すぐに二回目の体当たりを敢かん行こうすべく、ざっざっと後ろ足で砂

浜をかく。

「魔ま性しようの蛇なる女よ、その瞳を解き放て」

　パラス・アテナの指示を聞いて、護堂はハッとした。

　長方形の楯。表面には蛇妖メドゥサの姿が描かれており——その両目が光った！

「おまえを石に変えるつもりだぞ！　堪こらえろ！」

　漆しつ黒こくの巨体へ、とっさに護堂は呪じゆ力りよくを注ぎこんだ。

　オオオオオオオオオォォォォォンンンンンッ！　『猪』は呪力を最大限に高めて、メドゥサの楯が放った妖よう力りよくに抗あらがおうとする。

　——視みるものすべてを石化させるという魔性の瞳どう力りよく。

　完全には防げなかった。『猪』の右前肢あしと左後ろ肢が石となった。

　だが、残った体はまだ動かせる。当然のように『猪』はパラス・アテナへと二度目の体当たり。鋭い牙きばを突き刺し、吹っ飛ばそうとする。

　受け止めるのは当然、女神の前に浮かぶメドゥサの楯。

　またも激突音。しかし今回、パラス・アテナは守られるだけではなかった。さっと楯の陰より進み出て、手にした鎌で『猪』に斬きりつける！

　オオオオオォォォォオオオオォォォォォォォンンンンンッ!?

　苦痛のうめきが『猪』の口から洩もれた。

　が、めげずにウルスラグナ第五の化身は衝撃波の咆哮を放ち、突進と体当たりを繰りかえして、獲え物ものを叩たたきつぶそうとする。これをパラス・アテナとメドゥサの楯は二対一でしのぎ、すきあらば鎌と石化の魔力で『猪』を誅ちゆう伐ばつしようとする。

……その攻防を横目に、護堂は天叢雲劍あまのむらくものつるぎを右手に呼んだ。

予感があったからだ。敵がアテナであれば、このまま俺を放置するわけがないという——逆ぎやく縁えんを共有する宿敵同士だからこその予感が。

はたして正解だった。

いつのまにか陽ひは完全に沈み、夜となっていた。

その暗くら闇やみにまぎれて、敵は来た。比ひ喩ゆではない。闇やみ女め神がみの神格を持つパラス・アテナにとって、闇そのものと同化することなど呼吸と同じほどにたやすい行為だろう。

一いつ箇この影として護堂の背後に忍び寄り、死神の鎌を振りおろす。

それをわずかな空気の乱れと命の危機に鋭敏なカンピオーネの直感にまかせて感じ取り、護堂は振り返りざまに天叢雲劍を両手でスイングする。

闇のなかより繰り出された鎌と、古代日本の神刀がついに激突——。

「やっぱり来たか！」

「ふふふふ！　前世よりの仇きゆう敵てきに直接の挨あい拶さつもなしでは、いくさの女神として沽こ券けんに関かかわる。待たせたな、草薙護堂！」

聖なる鎌と神刀で鍔つば迫ぜり合いしながら、ふたりはささやきを交わす。

背後に現れたのは童女の姿を取ったパラス・アテナだった。かつてのアテナと瓜うり二ふたつの顔と体で、己おのれの背丈よりも長い鎌を両手で振るってきたのだ。

サルデーニャ島での再会以来、最も間近で彼女と対たい峙じしている。

ふたたび女神と化した神しん祖その美貌をにらみ、護堂は言う。

「いきなり捨て身の切り札を使うなんて、どういうつもりだ？　何を考えている？」

「単純な話だ。これ以外の策では無理だったのだ」

　話しながらも鍔迫り合いは尚なおも続行中だった。

　つぶやくパラス・アテナの鎌を支える両手に力が加わる。

「あなたをこの手で倒し、さらに『最後の王』を弑しい逆ぎやくするためには」

「『最後の王』を——なんだって？」

　敵の思いがけない言いぐさに、護堂は眉まゆをひそめた。

　華きや奢しやな幼女の細い腕では決して出せるはずのない剛ごう力りき——自動車すら片手で放り投げてしまいそうなパワーで、神祖は冥めい府ふ神しんの鎌を振りおろそうとしている。護堂の顔めがけて。

　この膂りよ力りよく、神の権能によって引き出したのだろう。

　しかし、護堂は鎌を平然と押し返していた。

　ウルスラグナ第二の化身『雄お牛うし』を使ったのだ。人間離れした剛力の所有者にのみ行使しうる怪力。『猪』を維持しながらなので、化身ふたつを併用する形となった。

　その負担が頭に激しい痛みをもたらす。

　パラス・アテナと鍔迫り合いしながら、護堂はひそかに歯を食いしばった。

「あんたは『最後の王』とも戦うつもりだって言うのかよ⁉」

「たしかに妾わらわはあの男に仕つかえる運命の者。……しかし考えてもみよ。この間、あなたにも言ったな。神祖とは救きゆう世せいの神刀に命を吸われた女神より生まれると」

　アテナそっくりの少女は瞳のなかに静かな怒りの焔ほのおをともして、つぶやいた。

「ならば――あの男は妾の仇かたきであるとも言えまいか？」

「！」

「使命は使命として、命の借りは命であがなわせるべきであろう」

　そこまで聞けば、もう察しは付く。護堂は叫んだ。

「あんたは俺と『最後の王』をまとめて倒すつもりだったのかよ！」

「察しがよいな、草薙護堂よ。竜蛇と化せば妾は女神の力を取りもどせる。そのうえ、あの男――竜殺しの宿しゆく業ごうをも持つ『最後の王』の魂たましいも揺さぶることができる。一石二鳥なのだ。あやつめの眠りも浅くなろうというものだ」

　かつてアテナは草薙護堂の好敵手であり、誰よりも気け高だかい戦士であった。

　それを知る護堂はひそかにこう思ってもいた。神祖になったからといって、自分の仇も同然の『最後の王』に仕える……すこし〝らしくないな〟と。

　そんな思いちがいをするなんて、俺は本当にバカだったと――護堂は笑った。

　命を軽々と捨て、武器にする。全ては己の気高さを貫つらぬくために。いかにもアテナらしい振る舞いを目まの当たりにして、痛快でさえあった。

「じゃあ、さっき風の神様を行かせたのは――」

「無論、『最後の王』を再さい臨りんさせるため。刮かつ目もくせよ、草薙護堂。妾わらわはあなたを降くだし、さらには選ばれし勇者までをも討ち取ってみせる！」

「冗談じゃない！　その前にここであんたを止めてやるよ！」

　鍔迫り合いと力比べをさらに続けても意味はない。ふたりは同時に跳びすさった。

　十数メートル先の砂浜では、メドゥサ化したパラス・アテナとそ

の楯を相手に『猪』が奮戦していた。勝負はまだまだこれから——。

　幼女姿のパラス・アテナを前にして、護堂はあらためて天叢雲劍あまのむらくものつるぎを握りなおした。

「どこへ向かっているんだ、『風の王』は？」

　リリアナはつぶっていた両目を開きざま、つぶやいた。

　パラス・アテナと草薙護堂が戦う砂浜からも程近い埠ふ頭とうである。

　彼女だけでなく、エリカと祐ゆ理りと甘あま粕かすもいる。神と魔王の決戦をすこし離れた場所から見守っていたのだ。不意に登場した『風の王』が空へ駆けあがるのを見て、リリアナはすかさず得意の『魔女の目』を使った。

　視覚を遠隔地に飛ばす魔女術で、天あま翔かける軍神の行方を追いかけたのだが——

「とてつもない高さにまで上昇していったぞ。『魔女の目』でも追い切れないほどの速さと高度だった……」

「まさかとは思うけど、宇宙にでも飛び出すつもりなのかしらね？」

　エリカが首をかしげた瞬間だった。いきなり祐理が愕がく然ぜんとした。

「あ——。浮島……聖なる太た刀ちが眠る場所……ああ！」

　天を見あげて、『風の王』の行方を目で追いかけていた媛ひめ巫み女こ。

　彼女は今、うわごとめいた言葉を動揺もあらわにつぶやいていた。霊れい視しの啓けい示じを受け取り、その意外さに心の底から驚いたらしい。

「まさか、あんなところに浮島があったなんて……」

「浮島？　もしかして祐理、あの伝承のことを言ってるの？」

　もうひとりの媛巫女、天叢雲劍あまのむらくものつるぎの担にない手・恵え那なが訊たずねた。

「救世の神刀と『最後の王』が眠る場所の言い伝え。たしか『后きさき弟おと橘たちばな比ひ売め、太刀を抱きて海に入り給たまふ。其その太刀の流れし先は陸おかにあらず、海にもあらざる処ところにて、浮島といふなり』ってやつ」

「は、はい……」

　祐理が震える指で空を指さす。

　よく晴れた夜空にはすこしだけ雲が浮かんでいる。半分の月が中天へといたる道をゆっくりと登りつつあった。冬の星々も明るくまたたいていた。

　そして、恵那は「ん……？」と考えこみ、それからハッとした。

「浮島——浮いている島。陸でも海でもないってことは、じゃあ!?」

「空。空のどこかに浮いている島。そういうことになるのかしらね、やっぱり」

　エリカも同じ想像に思い至ったらしく、ため息をこぼした。

「グィネヴィアさまやランスロット卿きようが海と地上をどれだけ探しまわっても、見つからなかったはずだわ。まるで見当ちがいだったのね」

「天空の島……いやはや。名作アニメかガリバー旅行記のノリでしたか」

　甘粕も悩ましげにつぶやいて、かぶりを振る。

　一方、仲間たちに重要情報を伝えた祐理は動揺から立ち直り、気ぜわしく言った。

「わ、私、浮島で何が起きているかをたしかめて参ります。みなさんは護堂さんの方をよろしくお願いしますね！」

巫み女こ装しよう束ぞくをまとった祐理の体から、白いオーラの光が立ちのぼり出す。

それは天性の霊視力に次いで彼女が手に入れた霊力——精神感応を発動させたときの輝きであった。

3

雲よりも高い場所。大気圏よりもさらに上。

そこは、人間たちが衛星軌き道どうと呼ぶ超高高度の空であった。大気圏を越えて、宇宙の領域にまで達している。

眼下には、日本列島の中心部がさながら地図のごとく広がっている。

ここまでの高みへ来ることは、天空の申し子である『風の王』もめったにない。

太陽光の照射次第で極寒にもなれば灼しやく熱ねつの巷ちまたにも化す。過酷な世界である。しかし、神の権けん能のうを以もつて我が身を守護し、飄ひよう々ひようと飛ぶ。

その視線の先には小さな陸地が浮いていた。

太平洋に浮かぶ小島をそのまま持ってきたという風ふ情ぜいで、丘もあれば平地もある。が、緑の木々をはじめとする命の類たぐいは何もない。土と岩のみで構成される島だった。

そして、その中心地には鉄剣が突き刺さっている。

刃渡り一〇〇センチ近い剛剣。両刃で、ぶあつい刀身は鉈なたに似た造り。しかし、ボロボロに朽くち果て、錆さびついていた。

救きゆう世せいの神刀。魔王殲せん滅めつの英雄が佩はい刀とうとする、最強の鋼はがねであった。

そして、『風の王』は手に持つメダリオンへ神しん力りよくを注

ぎこむ。剣にまつわる三み柱はしらの英雄を使し役えきするための神具、《鏃やじりの円盤》である。

　直後、きらりと円盤が光った。

　まず白く燃える焔ほのおがめらめらと顕あらわれて、男らしい美貌のペルセウスとなった。

　しかも有翼のペガサスにまたがり、まぶしいほどの美男ぶりである。

　次いで噴きあがったのは紅ぐ蓮れんの火柱。これは斉せい天てん大たい聖せい・孫そん悟ご空くうとなる。天下無む双そうの猿えん王おうは小さな黄金の雲に乗っていた。

　最後は電光がはじけ、ランスロット・デュ・ラックの姿に変化する。

　アマゾネスの女王でもある女騎士は天あま翔かける白馬にまたがり、槍やりをたずさえていた。

　そこに『風の王』も加わるのである。ついに浮島と救世の神刀を前にして、剣の属性を持つ神々が四柱も集結したのだ。

「のう、各おの々おの方がた」

　開口一番、斉天大聖が言った。

「我らの使命に取りかかる前に、ひとつ提案がある。威風堂々たる英雄が四人も集まったのは縁えん起ぎのよい話じゃ。が、このままではちと船頭が多すぎるかもしれん。船を山に登らせないためにも……」

　衛星軌道上の超高高度で茶飲み話のように切り出す。

　さすが飛ひ翔しよう自在の猴こう王おうである。だが、話す内容はきわめて遣い憾かんだった。

「ここはひとつ、この孫大聖こそを大将軍・大だい元げん帥すいと崇あがめ奉たてまつり、この面子メンツの長兄として陰に日向ひなたに支えていくべきではなかろうか。のう？」

「長を決めるのはまったくかまわないのだが」

　ペガサスの鞍あん上じようでペルセウスが眉まゆをひそめる。

「その地位に君を当てる必要は特にないと思われるな。むしろ王者としての実績と輝かしい神話の数々を所有する者、たとえばペルセウスなりミトラスなりがふさわしいだろう。まあ、どちらも私のことだが……」

「王様自慢なら、花か果か山ざん水すい簾れん洞どうの美び猴こう王おうを忘れてほしくないのう。しかも」

　ふふんと自慢そうに鼻息荒く、斉天大聖は言う。

「我ときたら『天に斉ひとしき聖なる者』とまで謳うたわれる始末。徳だの実績だので決めるのであれば、やはり天下の孫さまこそがふさわしかろうな……」

「仄そく聞ぶんしたところでは、美猴王も斉天とやらも君の自称だという話だが」

「うむ、自称である。じゃが、今では世界中の民たみがあまねくそれを認めておる」

「眉まゆ唾つばだな。すくなくとも、私の知る古き希臘国ギリシア・羅ロ馬ー国マの世でそのような風説を聞いた覚えはまったくない」

「いやいやいやいや。そこまで言われては我の名誉のためにも反論せねばなるまいて」

「斉天殿、ペルセウス殿」

　声をかけたのは、美貌を憂うれいで曇くもらせたランスロットであった。

「そのように不ふ毛もうな議論、ただ時を無駄にするだけだ。ここは余を——アマゾネスの女王にして紅こう一いつ点てんであるランスロット・デュ・ラックに長の座をまかせ、そこもとたちは女王にかしずく騎士として労を惜しまぬべきであろう。それでよろしいか？」

「よろしくない……というか、可か愛わいい顔の割に図々しい女によ人にんじゃのう」

「そういうじゃじゃ馬は嫌いではないが、やはり王は私であるべきだと思うぞ？」

　崇すう高こうであるべき偉大な英雄たちの不毛な押し問答。

　そのさなかに『キン』と甲かん高だかい金属音が響いた。三英雄がそちらへ目を向けると、『風の王』が手に持つメダリオンを指ではじいたところだった。

「…………」

　素性を隠した軍神が仮面越しの視線で遺憾の意を伝えようとする。

　それを受けて、斉天大聖・孫悟空は肩をすくめた。

「声まで隠す必要はないぞ。我にはおぬしの素性、すでに読めておる」

「ほう」

　ペルセウスがにやりと笑い、素直に感心してみせた。

「だとしたら猿殿。このペルセウス、君という男を見誤っていたようだ。そこの風神殿の素性、私はいまだ読み取れていない。すばらしい慧けい眼がんだな」

「匂においじゃよ、匂い。こやつの匂いをひと嗅かぎしたら、すぐにピンときた」

　斉天大聖はサルの鼻をひくつかせた。

　口論の最さ中なかだがペルセウスに賞賛されて、まんざらでもなさそうだ。

　そして、三英雄は『風の王』へと視線を集中し、発言を待つ。しかし、謎めいた鉄てつ風ぷうの軍神はただ人差し指を浮島と、その中心に突き立つ神刀へ向けるのみだった。

「ええい、ケチくさいやつじゃのう」

愚ぐ痴ちりながらも斉天大聖は浮島へと雲を向かわせる。

ペルセウスは肩をすくめて、ランスロットは平然たる表情で猿王に続く。『風の王』も悠ゆう々ゆうと飛んで最後尾に付く。

浮島にはわずかな緑すら生えていない。岩と土くればかりで禿はげ山同然だった。

野球場ほどの面積しかない地表に到着すると、『風の王』以外は愛馬や雲から降りて徒歩になる。かくして、四英雄は錆びついた神刀の前に馳はせ参じたのである。

「さて……はじめるとするかね」

斉天大聖がつぶやいた。

日本国へ到着する直前、パラス・アテナは三英雄を呼び出して、いくつかの指示をあたえたうえで告げた。その時が来たらはじめよと。

今ここに集つどう者は剣の神々——『竜りゅう蛇だ殺し』の特性を持つ戦士ばかり。

だから、全員が察知していた。ここより遥はるか数百キロも下方の地上では、パラス・アテナが竜蛇の封印を解き、猛たけり狂っていると。

かつて神々の女王であった大だい地ち母ぼ神しんたちの魔物としての相、それが竜と蛇へびだった。

鋼の英雄にとっては神話時代からの征服対象である。その気配を感じ取って、四英雄の心身に戦うための力がみなぎっていく。

「のう、救世の神刀とやらよ」

錆びつき、かつての輝きを失った剣へ斉天大聖は語りかける。

サルであり英雄でもあり、そのうえ神じん通つう広大な仙術使い——魔術の神でもある。ゆえに〝復活の儀式〟を取り仕切るのは彼の仕事であった。

　残る武ぶ辺へん者ものの英雄たちはうしろに下がり、猴王の背中を見守っている。

「我らの旧きゆう敵てきたる蛇の匂い、おぬしとものぐさ太郎殿も感じておるはずじゃな？　その魂たましいの奥底に刻まれた英雄の運命さだめがおぬしらの体を熱くさせているはずじゃな？」

　旧友と語らうように斉天大聖は言葉をかけていく。

　答えはない。しかし、代わりに錆びた神刀の刃やいばが『ぶぅん』と震えた。

　遥かな下界ではにわかに雷雲が立ちこめ、雷鳴の轟とどろきを放ちはじめているだろう。この衛星軌道から見れば、雲うん海かいすらも遥かな下界でしかないのだ。

「しかもじゃ。今の世には忌いまわしき神殺しどもが幾人も生まれておる始末。飢うえた狼おおかみ同然の老いぼれ魔王がいる。天下無む双そうを僭せん称しようする身の程知らずの女王がいる。世に災いを振りまく以外に能のない魔女もいる。さらに若い連中がもう四人——合わせて七人もの神殺しどもが我が世の春を謳おう歌かしているのじゃ……」

　ささやく斉天大聖の頭上に光の玉が顕れた。

　にぎった拳こぶしと同程度の大きさだ。かなりの速さで上昇していき、大聖たちの頭上で小型の太陽さながらに輝きはじめた。

「あの者どもが集いし地上はまさに末まつ世せ、この世の終わりであると言えよう」

　急上昇した光の玉がやにわにふくれあがった。

　あっという間に直径一〇〇メートル以上——千年以上も神刀を隠しつづけてきた浮島と同じほどのサイズになってしまった。しかも、この巨大な光の玉はにわかに帯電し、いたるところから電光の火花を発するようになる。

「我は末世の闇を切り裂き、神殺しの魔王どもを鏖おう殺さつするため、劒つるぎの新生を願う。ああ、最も尊き剣のなかの剣よ、刃のなかの刃よ。汝なんじは魔王殲滅の刃。汝は白き救世の光。汝は全ての羅ら刹せつを殺さつ戮りくするため生まれるものなり！」

　斉天大聖は毛むくじゃらの人差し指で、まず天を指さした。

　そして、その指をおもむろに振りおろし、救世の神刀をまっすぐに指し示す。直後、頭上で放電する光の玉より稲妻が矢や継つぎ早ばやに放たれた。

　ゴォォォォォォォォォオオオンンゴォォォォオオオオオオッ！

　ゴォォォォォォォォォオオオンンゴォォォォオオオオオオッ！

　ゴォォォォォォォォォオオオンンゴォォォォオオオオオオッ！

　落雷と雷鳴は一〇〇回以上も繰りかえされただろう。その閃ひらめきとエネルギーを救世の神刀はひたすら吸収しつづける。

　衝撃で吹き飛ばされるどころか、微動だにしない。

　小こ癪しゃくなほどに悠々とかまえる神刀へ、斉天大聖は最後の呼びかけを行った。

「この世の最後に顕れる聖王よ、今こそ来きたれ！」

　それは祈りであり、願いであり、力を宿す言こと霊だまであった。

　そして、ついに落雷と雷鳴も終わりを迎え——救世の神刀は輝きを取りもどした。

　千年以上もの間、錆び付き、朽ち果てていた刃渡り一〇〇センチの刀身はまばゆい白金プラチナ色の光を宿し、神こう々ごうしく燦さん然ぜんと輝いている。

　その光を目にして、ついに斉天大聖ではない者が口を開く。

「王よ——『最後の王』よ。まさかとは思うが」

　ランスロットだった。蜂蜜色の髪を風にそよがせ、アマゾネスの神は言う。

「余の顔を見忘れたか？」

「いいや……」

　神刀のすぐそばに忽こつ然ぜんと顕けん現げんする勇者の立ち姿。

　その髪はやや長めで、蒼あお白じろい。甘やかな顔立ちの美男子である。

　しかし、端正な美貌を錆さびのごとくいろどるのは歴戦の精せい悍かんさと癒いえない疲れ。身にまとうのは青い貫かん頭とう衣いと細袴ズボン、そして純白のマント。

　彼はゆっくりと——いやな物にさわるようにして、神刀の柄つかに手をかけた。



「もちろん覚えている、槍ランシアの騎士よ。ふたたび君と会う日が来るとは……運命とはまったくわからないものだ」

「なつかしい呼び名だ。今はランスロット・デュ・ラックと名乗っている」

「そうか。君もついに新たな名を得たのだな」

　貴公子はやや疲れの見える美貌で、涼やかに微笑んだ。

　一瞬、錆びめいた陰影がなりをひそめた。代わりに生まれついての貴き種しゅしか持ちえない気品と優美さが表に出る。彼なりにランスロットとの奇縁をよろこんでいるのだ。

　しかし、その一瞬はすぐに終わり、『最後の王』は微笑を消した。

「のう、救世の英雄殿」

　にやりと笑って、斉天大聖が発言する。

「宴うたげに遅れて来た者が三杯の酒を飲み干すのは人の世の慣らいと聞く。おぬしもまずは雷のごとく地上に降こう臨りんし、この国の神殺しに挨あい拶さつしてきてはいかがか？」

「…………」

　あまり感かん銘めいを受けた様子のない貴公子へ、感情ゆたかな猴王はさらに言う。

「無論、一番槍を譲るのは武人として、いささか口くち惜おしい。が、おぬしには甦らせてもらった恩もあるからのう。この孫さまも大人になり、ぐっと堪こらえて進ぜよう——」

「いいや」

　死して甦りし英雄の長ちよう広こう舌ぜつへ、短い返答。『最後の王』はかぶりを振った。

「今の世に再臨したばかりでその振る舞いは、いささか思し慮りよがないように僕は考える」

「ははあ」

「斉天大聖殿の進言には黄金と同じ価値がある。が……今はやめておこう」

「左様で」

　否定的即答に斉天大聖は毒気を抜かれたらしく、いいかげんに相づちを打ってから、傍かたわらにいたペルセウスへつぶやいた。

「……意外と血の気のすくないやつじゃな」

「……全ての神殺しを抹まつ殺さつする男というふれこみの割にな」

　フッと微笑んで、ギリシア・ローマの英雄は『最後の王』を興味深げに眺めた。

「まあ、脇わき目めも振らずに戦い急ぐのも無ぶ粋すいと言えば無粋。救世主殿の気持ちはわからないでもない。ならば、我らはひとまず休養ということでよろしいか？」

「ああ。それでお願いしたい」

　ペルセウスの問いにうなずいて、『最後の王』は最も後方にひかえる者を見る。

　布と仮面で素性を隠した『風の王』である。古代ガリア以前より魔王殲滅の勇者に仕つかえる軍神は無言で進み出て、鏃のメダリオンを差し出した。

　主人は無言でかぶりを振り、目配せする。

　まるで『そのまま持っていてくれ』と言わんばかりに。仮面の従者はこくりとうなずいて、ふたたび引き下がった。

　言葉など要いらぬほど強い絆きずなで結ばれた主従ならではのやりとりだった。

　その後、斉天大聖とペルセウスは光の粒子となってメダリオンのなかへ吸いこまれた。

彼らの復活は『最後の王』の権能が起こしたもの。定期的に《鏃の円盤》と同化して休養しなければ、顕現を維持できなくなるのだ。

また『風の王』もいきなりジャンプして、とんぼを切った。

そのまま一陣の風となって、主あるじの前から去っていく。残ったのはひとりランスロット・デュ・ラックのみ――。

「やはり、戦いには倦うんでおられるか」

女騎士のつぶやきは物悲しく、瞳には憐あわれみが宿っている。

黙然と聞く『最後の王』はやや疲れた微笑を見せて、一五〇〇年ぶりに再会した盟友へうなずきかけた。

そのあとすぐにランスロットも光となり、《鏃の円盤》に吸いこまれる。

ひとりとなった『最後の王』は救世の神刀をあらためて取りあげた。刃渡り一〇〇センチの剛刀を持ち運ぶための鞘さやが背中にはある。

ここに刀を収めて、魔王殲滅の勇者がため息をそっとこぼしたときだった。

「なに？」

やにわに浮島の地面が大きく揺れた。

震動は一回だけではなく、そのままぐらぐらと揺れ続けている。衛星軌道に浮かぶ小島で地震が起きるはずもない。すぐに『最後の王』は気づいた。

「落ちている……？」

何者かが浮島を地上へ呼び――落下させている。それゆえ島全体が揺れているのだ。

天の異常に気づいて、護ご堂どうは眉をひそめた。

「…………？」

　今まさに天叢雲剣あまのむらくものつるぎでパラス・アテナの振るう長なが柄えの鎌かまと向き合い、『猪いのしし』にも呪力を送っていたところだった。

　いつのまにか冬の夜空に雷雲がたちこめ、ひっきりなしに雷鳴がとどろいている。

　ときどき白い——否いな、白金プラチナ色の電光が閃いて、闇を切り裂いていた。

「ついに再臨が成ったか」

　つぶやいたのはパラス・アテナである。

「あいつが、『最後の王』が甦ったって意味か、それは⁉」

　感かん慨がい深げな幼い神しん祖そへ、叩たたきつけるように護堂は言った。

　返答はなく、代わりにパラス・アテナの両目が妖あやしく、禍まが々まがしく光る。彼女の瞳は紅あかく輝いていた。護堂は全身がこわばっていくのを感じた。メドゥサの目だ！

「く……っ！」

　石化の邪じや視しを防ぐべく、護堂は全身に満ちる呪力をさらに高めた。

　天叢雲剣だけでなく、『猪』と『雄お牛うし』の化け身しんふたつを併用しつつも懸命に呪力をふりしぼり、かろうじて間に合わせた。

　ほんの一瞬だけ下半身がまるごと石化しかけたが、すぐ生身にもどる。

「さすがは斉天大聖……思いのほか早く復活を成じよう就じゆさせてくれた。となれば、あなたとの立ち合いも一時棚上げだな。妾わらわは次の仕事に取りかからねばならぬ」

　ほくそ笑みつつ、幼いパラス・アテナがうそぶく。

　その一方で『猪』と接近戦を繰りひろげていた巨大メドゥサのパラス・アテナは――背中から黒い翼を生やした。両翼を大きく羽ばたかせて、空へ浮かびあがる。

　オオオオォォォンンンッ!?

　翼を持たない『猪』はいきなり飛翔した敵を前に、不満そうにうなる。しかし、右前肢あしと左後ろ肢が石化しているため、ジャンプして追いかけることもままならない。

　鎌を持つ小さな蛇へび女神も背より翼を生やし、空へ上がる。

　大小二体のパラス・アテナはついに空中で並び立った。

「「父ゼウスをはじめとする天空の諸神よ。地じ母ぼ神しんの権威を以もつて、妾はあの者らを母なる大地へ引きもどす。我が意思をどうか妨さまたげ給たまうな！」」

　大小のパラス・アテナがそろって言霊を唱えた。

　この直後――。雷雲で閉ざされた暗天より流れ星が落ちてきた。

　いや、流星ではない。東京湾の上空から、この木き更さら津づもふくむ南みなみ房ぼう総そうのどこかに〝小島〟が落ちてくるところなのだ。

　わずかな緑すら生えていない、岩と土くればかりで禿はげ山のような島だった。

「あれが浮島なのか……？」

　護堂は気づいた。パラス・アテナの権能があの島を地上に呼びよせているのだ！

「例のやつ、撃てるか!?」

　オオオオオォォォォオオオオォォォォォォォオオンンンンンッ！

　とっさの指示に『猪』はよく応こたえ、超音波の咆ほう哮こうを最大威力で解き放つ。

　だが届かなかった。上空で並び立つ大小のパラス・アテナを粉砕すべく超音波と衝撃波が駆け抜けたのだが、二体の蛇女神を〝楯たて〟が守った。

　神しん獣じゆうの体を素材とするメドゥサの顔を刻んだ楯――神の楯・アイギス。

　常に大パラス・アテナのそばを浮遊し、守護していた防具である。今回もふたりの女神をかばう障しよう壁へきとなり、主あるじの代わりとして粉々に砕け散った。

「「いざ往ゆかん、『最後の王』のもとへ！」」

　大小のパラス・アテナが同時に叫び、どちらも忽こつ然ぜんと消え去ってしまう。

　房総半島のどこかへ落下していく浮島と『最後の王』を追いかけていったのだろう。このまま放置するわけにもいかない。しかし、どうやって追いかける⁉

「草くさ薙なぎ護堂！」

　リリアナの声だった。見れば、銀髪の騎士と仲間たち――エリカと恵え那な、祐ゆ理りが駆けよってきたところだった。

「わたしにおまかせください。パラス・アテナのもとへあなたを送りとどけてみせます」

「空を飛ぶやつか。でも、あれは目的地がわかってないとダメだろう？」

　口早に請うけ合うリリアナへ、護堂は訊たずねた。

　魔女だけが使える飛翔術はきわめて便利な反面、制約もあるのだ。しかし。

「だ、大丈夫です」

　息を切らせながら、やや遅れて駆けつけた祐理が言う。

　ほかの面々は抑おさえ気味に走っていたのか、まったく平然としている。が、体力のない媛ひめ巫み女こにはかなり激しい運動だっ

たようだ。

「浮島の落ちた場所は、私が精神感応の霊力で捉とらえてあります。そのイメージをリリアナさんに伝えれば、大丈夫なはずです……」

　まだ息は落ち着いてないものの、祐理も請け合ってくれた。

　さすがにみんな頼もしい。うなずいてから護堂は『猪』へ念を送った。とりあえず、ここはもういいぞと。

　石化した前肢と後ろ肢を引きずりつつ、砂浜の上で虚こ空くうをにらんでいた『猪』。

　標的を撃破しそこねて、憤ふん懣まんやるかたないという雰囲気だった。が、指示した獲え物ものが消え失せたおかげか、素直に消え去ってくれる。

　護堂は天叢雲劍あまのむらくものつるぎも右腕の中に引っ込めた。『雄牛』の怪力もすでに消えている。

　化身の同時使用による負担もようやくなくなり、体が楽になった。そんな護堂のそばへ恵那とエリカがやってきた。

「ねえ王様。ガリアで『最後の王』が復活したときのこと、覚えてる？」

　いきなり恵那が言った。

「あのときは女神のアルティオが自分の命を差し出して、『最後の王』に力を分けあたえたでしょう？　でさ。今、エリカさんとも話していたんだけど――」

「もしかしたら、パラス・アテナも同じことをするつもりなのかもしれないわ」

「でもあいつ、『最後の王』を倒すつもりだって宣言してたぞ？」

　首をかしげる護堂。しかし、エリカはさらなる仮説を口にした。

「ええ。だから、そう見せかけて『最後の王』に近づいて、いきなり不意打ち――」

「……なるほど」

闘争の女神アテナの生まれ変わりならば、たしかにそれくらいはやりそうだ。

そして、護堂はもうひとりの知ち己きの顔を思い浮かべた。

一五〇〇年前の古代ガリアで邂かい逅こうを果たした貴公子。決して闘争心旺おう盛せいとはいえず、無駄な戦いを好まない彼がはたしてパラス・アテナの挑戦を受けるだろうか？

魔王退治の勇者と神殺しの魔王。

あの英雄と自分はいずれ雌し雄ゆうを決する同士だともいうが。

不思議と『最後の王』を好ましく思う自分に護堂は気づいていた。しかし、今はひとまず追跡に取りかかるべきだった。

4

流星のごとく地上に落ちたとはいえ、もちろん浮島は隕いん石せきの類たぐいではない。

また、今回の墜つい落らくをうながしたのは大だい地ち母ぼ神しんとしての神性を取りもどしたパラス・アテナの権けん能のうだった。彼女は万物を大地へと引きつける力——重力を操って、『最後の王』ごと浮島を房ぼう総そう半島まで招き寄せたのである。

南房総のとある山中。

木々がまばらにしか生えてない尾根に浮島は激突した。

正しよう真しん正しよう銘めいの隕石が墜落したときのようには衝撃も爆発も起こらない。地を慈いつくしむ女神の権能が山々を守護したのだ。

しかし、その庇ひ護ごは浮島にはあたえられなかった。

墜落時の衝撃でばらばらになり、砕けた岩の破片と土砂がぶちま

けられる。

　が、『最後の王』は浮島と運命を共にしなかった。地表まであと二、三〇〇メートルというあたりで島の端より軽やかに身を躍おどらせ、空中に飛び出したのである。

　翼も飛ひ翔しようの権能も持たない『最後の王』。

　しかし、あらゆる窮きゆう地ちを切り抜けるべく学んだ護身の法が数あま多たある。

「天と地をたゆたう者たちよ。僕に力を貸してくれ」

　言こと霊だまを唱え、精霊たちへ加護を祈き念ねんする。

　右手の人差し指と中指をそろえて、すばやく宙に聖せい印いんを描くのも忘れない。結果、この土地の山さん川せん草そう木もくに宿る精霊たちが力を貸してくれた。

　皆、まつろわぬ神々と比べれば貧相な霊力しか持たない、地上の雑ざつ霊りようである。

　個性といえるほどの人格や知性をそなえているわけでもない。

　しかし、そのような者たちの意思と霊力でも数百、数千と集まれば、それなりの奇跡を起こす原動力となる。精霊たちの加護は空中に飛び出した『最後の王』を支えて、地上への落下速度をゆるやかにしてくれた。

　おかげで、数百メートルの高みから着地を決めてもかすり傷ひとつない。

「ありがとう。みんなのおかげで命を拾った」

　地に足を付けるなり、『最後の王』は真しん摯しに礼を言った。

　そして、周囲を見まわす。木々がまばらな山の尾根である。おかげで見晴らしがよく、殺気と共に近づいてくる蛇じや妖ようの姿にすぐ気づけた。

「僕を再さい臨りんさせたのは君だな？　名は？」

「パラス・アテナという。感かん慨がい深いものだな。歴代の神しん祖そ、魔女王たちが千年かけても見み出いだせなかった英雄殿と対面かなうとは……」

「その姿、竜りゅう蛇だの封印を解いたのか」

　ふたつの体に分身したパラス・アテナはふたたびひとつになっていた。

　巨大な女メドゥサの姿である。背中から黒い魔鳥の翼を生やして、尾根に沿うようにして低空を飛び、ここまでやってきたのだ。

「あなたを——この世の最後に顕あらわれる王を斃すためには、こうする以外に術すべはない。妾わらわにはかつての力と権威が必要だったのだ」

「僕を斃たおす……そうか」

　殺気を隠しもしないパラス・アテナの言葉に、『最後の王』はうなずいた。

　何な故ぜとは問わない。ただ一瞬、目を伏せただけ。

　神祖たちを隷れい属ぞくさせる立場の彼だからこそ、誰よりも承知していることだ。

　もし女神としての気け高だかい魂たましいを色濃く残した神祖がいて、彼女が非常に闘争心旺おう盛せいな気き性しようであれば——それくらい考えてもまったく不思議ではない、と。

　貴公子は毅き然ぜんと顔を上げ、凜り々りしい瞳ひとみでパラス・アテナと向き合った。

「僕を仇かたきと見なす君の思いはよくわかった。立ち合いがご所望か？」

「いかにも」

「であれば、受けないという返答はないな」

　自らの罪と正面から向き合う者の生き真ま面じ目めさで即答してから。

　おもむろに『最後の王』は背中から神刀を引き抜き——はしなかった。救きゅう世せいの神刀を鞘さやごと外して、天に向かって差しあげた。

「当地の精霊たちの誰かよ。しばらくの間、あずかってはくれまいか？」

　この要請に応こたえる者がいた。神刀と鞘は宙に浮かびあがり、地上より数十メートルの高みまで上昇して、ぴたりと静止してしまう。

　武器を手放した『最後の王』へ、パラス・アテナは憤ふん怒ぬのまなざしを向けた。

「妾との立ち合いに、あえて神刀を手放すか？」

「ああ。あれが僕の手にある限り、正々堂々たる立ち合いには決してならない」

　英雄の瞳に驕おごりはない。憐あわれみもない。

　魂と尊厳をかけて挑いどもうとする相手に、ただ真しん摯しに応えようとする清せい澄ちょうさのみがそこには宿っていた。

「誇り高きパラス・アテナよ。君は聖せい杯はい——僕のために女神グウェンフィファルが創造した器うつわより生まれた神祖と見た」

　女神の目をまっすぐ見返して、魔王殲せん滅めつの勇者は言う。

　グウェンフィファル。軍神ランスロットと共に『最後の王』に仕つかえ、のちに神祖グィネヴィアに転生した大地母神である。

「そうであるなら、僕は救世の刃やいばを抜くだけで君に勝ててしまう」

「……ほう」

　焰ほのおのごとき憤怒を込めて、パラス・アテナは仇きゅう敵てきの美貌を見据えていた。

　だが、英雄の訴えを聞くうちに変化が起きた。わずかに微ほほ笑

えんだのである。彼の言葉に宿る高潔さを認めて。

　また、その言が真実であると悟ったのかもしれない。智ち慧えの女神の霊感によって。

「生と死と名誉を懸かけた立ち合いに、一点の穢けがれも許すまじ。神刀を捨てたのは僕の誇りゆえであり、決して君の力量を低く見たわけではない」

「あなたの心は承知した。しかし、いいのか？」

　パラス・アテナは微笑と共に『最後の王』を妖あやしく見おろした。

　巨大なメドゥサと化した女神の瞳が紅あかく輝いている。石化をもたらす邪じや視しだった。これを浴びて、『最後の王』の腰から下と左腕の全てが石に変わってしまう。

「救世の英雄殿の力となるのは大地の精。だが、あなたはまだわずかな精気も吸い取っていないはず。その体ていたらくで、妾の相手がつとまるとでも？」

「もとより覚悟の上。いざ尋じん常じように勝負を願いたい。よろしいか？」

　半身が石となりながらも、『最後の王』は毅き然ぜんと言い放つ。

　すこし前、草くさ薙なぎ護ご堂どうはとっさに呪力を高めて、パラス・アテナの邪視をしのいだ。それと同じこともできないほど、蒼あおき髪の貴公子は本調子ではないのだ。

　しかも、切り札である救世の神刀は自ら封じた――。

　にもかかわらず、『最後の王』はまっすぐにパラス・アテナと向き合おうとする。

　パラス・アテナも手心など加えない。メドゥサの唇くちびるから青い焔を吐き出して、なかば石化した英雄へ吹きかける。

「く――あああああっ！」

竜蛇化したパラス・アテナの火には、竜の吐く焔と同等の火力がある。

劫ごう火かに灼やかれて、苦く悶もんの叫びをあげる『最後の王』。しかし、その体のまわりに白い光の玉が数十個も忽こつ然ぜんと顕れて、焔の熱を懸けん命めいに下げてくれる。自由落下から彼を守ったのと同じ力、精霊たちの加護である。

そして、この奇妙な死闘のさなか、パラス・アテナは雄お々おしく笑う。

対する『最後の王』も焔の猛威を堪こらえながら微苦笑する。それでふたりが戦いをやめるわけではないが、ある種の心のつながりがめばえかけた——その瞬間だった。

（……あ……兄上——）

やにわにささやき声が降ってきた。

数十メートル上空に浮かぶ神刀のそばにいきなり不定形の影が顕れ、渦うずを巻きはじめ、そのうえ『最後の王』へ呼びかけたのである。

（兄上。御おん身みはこの世の最後に顕れる救世の王者。王のなかの王。最も高貴なる運命を持つ大英雄。人中の虎。燦さん然ぜんたる徳の輝きが尽きることのない御方。至高の勇者。あらゆる神々より最上の祝福を授けられし御み子こ！）

異様なほどの美び辞じ麗れい句くで賞賛されて、『最後の王』は愕がく然ぜんとした。

青い焔のなかでハッと顔を上げ、上空に浮かぶ救世の神刀を鋭くにらむ。一方、彼を『兄』と呼ぶ空中の影は徐々に姿を変えていった。

下半身はうずまく影のまま、上半身だけ蒼あお白じろき髪の貴公子に——。

その顔かたちは『最後の王』と瓜うり二ふたつ。ただし白はく皙せきの兄とはちがい、褐かつ色しよくに日焼けした肌が印象的だった。

　影となかば同化した褐色半身の貴公子はうそぶく。

（地の女神ごときに高貴なる兄上を陵りよう辱じよくさせるわけにはいきませぬ。ここは僭せん越えつながら、わたくしめが助すけ太だ刀ちをいたしましょう！）

「よせ！　おまえの兄として許さぬ。助太刀無用！」

　青き焔に灼かれながらも『最後の王』が叱しつ咤たしたにもかかわらず。

　空中に浮かぶ〝弟〟は救世の神刀へ右手をのばす。その柄つかをつかもうとする。これを妨ぼう害がいしたのはパラス・アテナだった。

　口から焔を吐き出しながら、瞳を紅く光らせる。

　その眼光に射いすくめられた途端、『最後の王の弟』も兄と同じく焔に呑み込まれた。

「従属神風ふ情ぜいがわれらの戦いに水を差すか。痴しれ者め！」

（ぐああああああああああああっ!?）

　青き神罰の焔に灼かれて、〝弟〟が絶叫した。

　その苦悶を一いち瞥べつし、パラス・アテナはつまらなそうにつぶやく。

「ふん。『風の王』かと思えば、比較にならないほどの小者であったか。智慧の女神でもある妾にはわかるぞ」

　人界の巫み女こでいえば霊れい視し力りよくに当たる力をパラス・アテナは行使していた。

「そなた、救世の勇者殿を陰ながら護衛する従属神――そして分身であろう。その役割に忠実たらんとする心ばえはよいが……無ぶ粋すいに過ぎる。分ぶんをわきまえよ」

　憤ふん怒ぬの劫火が〝弟〟を一瞬にして燃やし尽くした。

　宙に浮かぶ神刀のそばには骨すら残らず、燃えかすと灰が飛び散

る。しかし——この灰が尚なおも動く。

　パラス・アテナは「なに？」と眉をひそめた。

（くくく……地じ母ぼ神しんごときがさかしらに指図をする……）

　憤怒の劫火によって生まれた灰が〝弟〟の声でほくそ笑む。

（我は兄上の——最強の鋼はがねの影として生まれた。わずかとはいえ、我にもまた不死の強きよう靭じんさはそなわっているのだ。刮かつ目もくせよ！）

　と、うそぶいてから灰は『人間の腕』の形に変じた。

　そのまま神刀の柄に手をかけ、一気に引き抜く。直後、白金プラチナ色の光がはじけて、周囲一帯を輝かしく染めていった。

「何だ、あの光は？」

　白金色の光が誕生するのを見て、護堂はいぶかしんだ。

　青い光につつまれて、空を飛翔している。パラス・アテナを追うため、リリアナに飛翔術を使ってもらったのだ。そして、飛行中に異変が起きた。

　とある山中の尾根より唐突に光の柱が屹きつ立りつし、白金色の輝きを放ったのである。

　その柱は上空の雷雲に届くほどに高く、しばらくの間、夜だというのに近辺の山々を明るく照らしていた。

　が、ほんの数十秒で光の柱は消滅してしまう。

「草薙護堂。わたしたちの目的地はちょうど柱が出たあたりです」

「じゃあ、近くにおろしてくれ。俺はひとりで行くから、リリアナはエリカたちのところに合流して、あいつらといっしょに待機で頼む」

　共に天あま翔かける銀髪の女騎士へ、護堂は指示した。

　パラス・アテナと『最後の王』が決戦中かもしれないのだ。仲間たちをいたずらに危地へ近づけないため、リリアナとふたりだけで飛んできたのである。

　三分ほどのち、ついに尾根の一角へ着陸。

　リリアナは護堂にうなずきかけ、騎士の生真面目さで言った。

「ご武運を祈ります。あと――」

　ないしょ話という体ていで声を低めるリリアナ。

　聞き逃すまいと彼女の方へ身を乗り出す。すると、リリアナはさりげなく顔を寄せて、ちゅっと護堂の唇にキスをしてくれた。

「!?」

「こ、幸運の願掛けです。もしあなたが無事にご帰還なされたら……い、いつものようにいたしましょう」

「いつもみたいに!?」

「わ、わたしたち、いつもはもっと熱烈に口づけを交わしているじゃありませんか」

　反論できない騎士の言い分に護堂は目を白黒させた。

　そんな主あるじをリリアナは愛いとおしげに見つめてから、ふたたび飛翔の術を使う。青い光につつまれて飛び立っていく。

　ひとりになった護堂は気を取りなおして、山の斜面を駆け下った。

　この尾根には木がまばらにしか生えていない。見晴らしがいいので、めざすべき場所はすぐにわかったのだ。

　二分ほど駆けると、目当ての場所にたどり着いた。

　メドゥサに変へん化げしたあげく巨大化までしたパラス・アテナが倒れ伏している。

　彼女のすぐそばの地面に救世の神刀が突き立っていた。その輝かしい姿は古代への旅で見て以来だが、あいかわらず神こう々ごうし

いほどのまぶしさだ。

　パラス・アテナは出血がひどかった。

　メドゥサと化した五体のあちこち——数百箇所以上に裂れつ傷しようが刻まれていた。

　傷口はどれも赤黒い。どくどくと出血を続けている。彼女の倒れた場所は禍まが々まがしい真しん紅く色いろに染まっていた。

　そして、『最後の王』がぽつんと孤独に立ち尽くしている。

　倒れたパラス・アテナを痛ましげな瞳で見つめ、それから悩ましげに頭を振った。

　対して女神の方は微動だにしない。多量の血を流しながら、倒れ伏している。一体、ここで何が起きたのか？

　護堂がいぶかしんだとき、『最後の王』が振り返った。

　いぶかしげな視線を草薙護堂に向ける。だが、すぐに彼はハッとした。

「君とはたしか——以前に出会ったな。そう。あれはたしか一五〇〇年以上も前の話だ。あのあとの戦いでは君と再会できず、奇妙に思ったのだった」

　草薙護堂のことを『最後の王』はしっかりと記憶していた。

　その事実に奇妙な感かん慨がいを覚えながら、ついに魔王殲滅の勇者と正面から向き合う。

　一五〇〇年の時を隔へだてて、神と魔王が対たい峙じした瞬間であった。

第３章　覚醒

１

「あのとき、君以外にもふたりの神殺しがいた。当時の戦いは結局、彼らとも会わずじまいで終わってしまったはずだ……」

　不思議そうにつぶやき、『最後の王』は首をかしげた。

　それから、すぐに「なるほど」とうなずく。

「君たちは時の旅たび路じを歩んでいたのだな。旅の神か、どこかの妖精にいたずらでもされて、この時代から遥はるかな過去へと飛ばされて――」

「大体は当たりだよ。察しがよくて助かるな。余計な説明をしなくて済む」

　答えながら、護ご堂どうは思う。

　まさか一五〇〇年ぶりの会話がこれほどスムーズにはじまるとは。まあ、こちらの感覚でいえば、あの事件はわずか数か月前の出来事なのだが。

　しかし、この調子でのんびり話を続けるわけにもいかない。

　護堂は地に倒れ伏すパラス・アテナを見た。満まん身しん創そう痍いの蛇じや妖ようメドゥサの巨体が縮小し、幼い童女の肉体へともどっていくところだった。

命を捨ててまで封印を解いたというのに、竜りゅう蛇だの肉体を維持できなくなったのだ。

少女の姿となったパラス・アテナ。メドゥサの巨体に刻まれた裂れつ傷しようの数々と出血は消えていたのだが、代わりに――胸に大穴が開いていた。

穴はちょうど心臓の位置だった。まちがいなく致ち命めい傷しようであろう。

もう血は流れ出ていない。代わりに滾こん々こんとあふれ出てきたのは呪じゆ力りよくだった。水源から泉の水が湧き出るように、大量の呪力がパラス・アテナの全身から流出をはじめていた。

通常、呪力に特定の色はない。無色である。

しかし今回、パラス・アテナから吹き出る呪力は黄金に輝いていた。

この黄金の力は空へ立ちのぼると、護堂たちの頭上でガスのように広がっていき、南みなみ房ぼう総そうの夜空を金色に塗りかえた。

黄金のオーロラで彩いろどられた空のもと、護堂は倒れた神しん祖そへと歩みよる。

「……派手にやられたもんだな」

「……口くち惜おしいことにな。聖杯の発動によって、女神としての力を命ごと吸い出されてしまった。かなり苦しい戦況であるとはたしかに言えよう」

弱々しい声ながらもパラス・アテナがささやきを返す。

この期ごにおよんで、まだ敗北を認めていない。それどころか幼い少女の手足を必死に動かそうとして、すこしずつ、すこしずつ立ちあがろうとあがいている。

さすがアテナの生まれ変わりというべき闘志であり、気け高だかさだった。

護堂はその事実を目まの当たりにして、一瞬だけ微ほほ笑えん

だ。が、すぐ真顔にもどる。

「聖せい杯はいの発動だって？」

「一五〇〇年前、女神グウェンフィファルが生み出した聖杯とは我ら大だい地ち母ぼ神しんの精気を呪力としてためこむ『器うつわ』であった。そして、先代の魔女王グィネヴィアは死ぬ間ま際ぎわに聖杯へ祈き念ねんし、新たな魔女王の誕生を願った」

　そういえばそうだった。護堂は思い出した。

　まさに『聖杯によって生命力を吸い尽くされたこと』こそが大地の女神アテナを死に至らしめた原因であった。

「結果、聖杯は神祖の姿に化け身しんして、妾わらわとなったのだ……」

「そうか。聖杯にためこまれていた力のほとんどがアテナから吸い取ったものだから、あんたはその姿になったんだな」

　気づいてみれば、単純なカラクリである。感じ入る護堂の前でパラス・アテナはどうにか上体を起こし、雄お々おしく微笑む。

　致命傷を負いながらも尚なお、この痩やせ我慢。すさまじい気力だった。

「どうやら、かの英雄殿が救きゆう世せいの神刀を抜いたとき、聖杯——すなわち妾の全精力はことごとく英雄殿に捧ささげられる手て筈はずとなっていたようだ。グィネヴィアはこのことをあえて妾に伝えなかったのだろうな……」

「それでこのありさまか」

　死を迎えようとしているパラス・アテナの姿に、護堂は納得した。

　一方、『最後の王』はやや離れた位置で黙然と立っている。地面に突き立てた救世の神刀がすぐ前にあった。聖なる刃やいばの燦さん然ぜんたる輝きを浴びながら、彼は毅き然ぜんたる面おも持もちで護堂たちを見つめている。

　しかし、英雄のまなざしにはわずかな疲れと悔かい恨こんの色が

あった。

　護堂は違和感を覚えた。勝利を勝ち誇る勇者の姿にはとても見えない。むしろ、意に沿わぬ勝利の積みかさねが虚きよ無む感かんとなって彼を苛さいなんでいるようにも――。

「まあ、しかし……」

　いぶかしむ護堂に気づいたのか、パラス・アテナは微苦笑した。

「英雄殿の振る舞いは、あのような立場にある者としてはあたうかぎり堂々たるものであったとは言えよう……。かの者の戦いぶりに文句は付けまい。それよりも」

　パラス・アテナは右足を必死に動かして、膝ひざを立てた。

　立ちあがるつもりなのだ。しかし、その力はすでに残されていないらしく、ぶるぶると全身が震えるのみ。

　にもかかわらず、アテナの魂を継ぐ少女はうそぶく。

「深傷ふかでを負ったとはいえ、まだ勝敗は決しておらぬ。そこをどけ、草くさ薙なぎ護堂。妾と『最後の王』の決闘に水を差すな――くっ！」

　パラス・アテナは言葉と共に血まで吐き出す。

　膝も折れ、ふたたび倒れてしまう。だが、銀髪の神祖は闘志で瞳ひとみをぎらつかせ、鮮血で朱あけに染まった唇くちびるより勇ましい言葉を紡つむぎ出す。

「ふふふふ。それとも、英雄殿と共に妾を迎え撃つつもりか？」

「……いいや」

　瀕ひん死しの神祖と蒼き髪の貴公子の間に、護堂は割り込んだ。

　そして、パラス・アテナを背にかばい、『最後の王』と正面から向き合う。

「どう考えても、この場でいちばん強いのはあいつだからな。ここはあんたに協力して、あの男と勝負するのがいちばんだ」

「…………」

　アテナの記憶を持たないはずのパラス・アテナ。

　彼女の誇り高さを思えば、こんな申し出をたやすく認めてくれない気もしたのだが——しかし、死に至りつつある神祖はフッと鷹おう揚ように微笑んだ。

「そういう理由であれば、敵を同じくするのも悪くはないな。利害が一致する間は……」

　血まみれの唇でささやく。

　記憶はなくとも、いつかの呉ご越えつ同どう舟しゆうは魂に刻み込まれていたのか。

　ともあれ、草薙護堂とパラス・アテナは前にランスロットを迎え撃ったときと同様、肩をならべて『最後の王』へと向きなおった。

　もちろん、瀕ひん死しの元女神を戦力として数えることはできない。

　しかし、神殺しとその仇きゆう敵てきは最強の勇者を前にして、ついに数か月前の別れの時へと立ちもどったのである。

　一方、護堂たちの逆ぎやく縁えんと奇き縁えんを目の当たりにして——

「弱きを助け、強きをくじく……。義ぎ侠きよう心しんだな、草薙護堂」

　蒼き髪の貴公子は一五〇〇年ぶりに護堂の名をささやいた。

　そして、ほんのかすかに微笑む。それは道みち端ばたに咲く花の小ささと可か憐れんさに気づき、つかのま足を止める旅人の顔に似合いそうな微笑であった。

　あるいは、ひとときだけ流る浪ろうの疲れを忘れた男の顔というべきか。

「相手が神であっても義気と侠気を示せる男が神殺しのなかにもいることを、僕はとてもうれしく思う。だが、すまない」

護堂は身がまえた。こいつは前もそうだった。

強大な力の一いつ端たんをかいま見せるとき、『最後の王』はいつも謝罪してみせるのだ！

「僕はいにしえの世で二度、君に敗れている。だが、聖杯を介して地じ母ぼ神しんの命を得た僕は……君の知る僕ではない」

「安心してくれ。そんなことはとっくに承知しているよ」

護堂はちらりと上空を見た。

漆しつ黒こくであるべき夜空が黄金に光り輝いている。

パラス・アテナ＝聖杯より湧き出た金色の呪力が塗りかえたせいだ。そして、空に満ちる光輝は『最後の王』へと降りそそぎ、彼の体内を満たしつつあった。

結果——すさまじい量の呪力が今、『最後の王』の全身にみなぎっていた。

古代ガリアの時は復活したばかりで、見るからに本調子ではなかった。

だが今回、聖杯すなわちパラス・アテナの精気を吸い取って、英雄はついにベストコンディションを取りもどしたのだろう。

護堂は唇を舐なめてから、『最後の王』を鋭くにらんだ。

「まあ、それでもガリアで盟めい約やくの大だい法ほうってのを使われたときよりはずいぶんとマシだよ。なんとか立ち向かってやるさ」

己おのれを鼓こ舞ぶする意味もふくめて、護堂は語気を強めて答えた。

複数のカンピオーネと対たい峙じしたとき、呪力を爆発的に高める。その全員をまとめて相手取ることができるほどに——。

それが盟約の大法だったはず。かつて斉せい天てん大たい聖せいも行使した魔王殺しの呪じゅ法ほうだ。

　しかし今、ここには護堂ひとりしかいない。

　あの理り不ふ尽じんな強化は再現できないはずだった。だというのに。

「すまないが、聖杯の精気を捧ささげられたおかげで、僕は力を完全に取りもどしている。だから、盟約の大法もこのように自然と動き出してしまう……」

　なに!?　予想外の告白に愕がく然ぜんとした瞬間。

　護堂は見た。空を満たしていた金色の輝きがいきなり消えて、代わりに『最後の王』の全身が黄金の光を放ちはじめる。

　同時に、彼の持つ呪力が――増えた。

　一瞬にして、かつて草薙護堂、羅ら濠ごう教きよう主しゅ、ジョン・プルートー・スミスの三名と対決したときの斉天大聖と同じほどの呪力を得てしまった。

　ここには今、護堂ひとりしかカンピオーネがいないというのに。

　しかも、呪力の増加はまだ止まらない。標準的な『まつろわぬ神』が持つ呪力を一〇だとすれば、盟約の大法を使った斉天大聖は三、四〇に相当する呪力を宿していた。だが、『最後の王』は七〇、八〇、九〇、ついには一〇〇をも超えて――

　護堂は啞あ然ぜんとして、つぶやいた。

「ウソだろう……」

　今まで対決した神々のなかに、弱敵など一ひと柱はしらもいなかった。

　だというのに、『最後の王』は彼ら全ての力を合わせたよりも膨ぼう大だいな量の呪力をその身に宿し、絢けん爛らんたる黄金の輝きにつつまれている。

「救世の神刀よ。今こそ真の姿を世界に示せ」

　目の前の大地に突き立てられた愛刀へ、『最後の王』はささやきかけた。

　すると、彼の頭上に巨大な正方形の魔ま方ほう陣じんが顕けん現げんする。

　一辺の長さは一〇メートル前後。魔方陣の正方形は格こう子し模様で細かく仕切られており、そのひとつひとつのなかに武具が描かれていた。

　数えあげれば、数百個もの武器・兵装を確認できるだろう。

　最も多いのは〝矢〟だ。そのほか剣・刀・弓・槍やり・斧おの・楯たて・棒・薙刀なぎなた・矛ほこ・砲丸・リング状の物体・レンガらしきブロックなど、武具とは言いがたいものまである。

　護堂は『曼まん荼だ羅ら』を思い出した。

　幾き何か学がく模様のなかに幾十、幾百もの神仏を描いた東洋の魔方陣。これは神仏の代わりにおびただしい数の武具をモチーフとした曼荼羅なのだ。

「ついに成じよう就じゆしたか、盟約の大法。全ての魔王を殲せん滅めつする究極の神剣……」

　パラス・アテナがひっそりとつぶやいた。

　ハッとして護堂が視線を向けると、血まみれの神祖はおごそかに言う。

「草薙護堂よ。斉天大聖ごときの模も倣ほうと本家をいっしょにするな。真の魔王殺しは――目の前にいる敵の数に応じて、強くなるのではない……」

　やはりそうか。護堂はうなずいた。すでにうすうす察していたのだ。

「今このとき、地上にはびこる魔王の人数に応じて、力を強めるのだ。当代の神殺しどもは七名……その人数に応じて、『最後の王』も成長を遂とげる……」

「いかにも、そのとおりだ」

　神祖の言葉に、英雄自身がうなずいた。

　自らの力を誇るでもなく淡々と、むしろ事務的でさえある口調だった。

「かつて僕が地上へ降こう臨りんした際、魔王討とう伐ばつの使命を果たす助けにせよと、天界の武具を数え切れないほど贈ってもらった。救世の神刀はそれら全てをひとつに統合した姿なのだ。ゆえに、これこそが真の形だとも言える」

「過か剰じよう武装もいいところじゃないか……」

　護堂はあきれた。勇者のために伝説の聖剣を贈るどころの話ではない。

　救世の神刀が降らせる雷の正体が膨大な量の武器らしいという事実には、古代ガリアで気づいていた。しかし、それら全てが神々か天上界からの寄贈品だったとは。

　あきれた話だった。そして何より恐ろしい。

　かつて『草薙護堂はあの男に絶対勝てない』と喝かつ破ぱされた理由を目の当たりにして、護堂は戦せん慄りつした。そして、敵の強大さにわずかに呑のまれかけた――その瞬間。

　天上の雅が楽がくにも似た美しい響きの声を聞いた。

「弟よ。何を畏おそれる必要があるのですか？」

　ハッとして、護堂は声の主ぬしへと顔を向けた。

　ゆっくりとこちらに近づいてくる女性がいる。その歩みは急がず、あわてず、雄ゆう渾こんな長ちよう江こうの流れを思わせる悠ゆう々ゆうたる風ふ情ぜいであった。

　風貌もまた美声にふさわしく、月の天宮に住まう美び姫きもかくやという麗うるわしさ。

　満身創痍のパラス・アテナと『最後の王』も絶世の佳か人じんに注目する。

「たとえ盟約の大法が敵を加護していようとも、おまえには唯ゆい一いつ無む二にたる至高の姉がついているのです。我ら無む双そう無む対ついの義ぎ姉弟きようだいにかなう英雄など、いるはずがあ

りません」

　月げつ琴きんの響きを思わせる、のびやかな響き。

　それはもちろん、草薙護堂の義あ姉ねである羅ら翠すい蓮れんの美声であった。

2

「姐ねえさん！」

「一別以来ですね、弟よ」

　去年の一二月に会って以来だから、約二か月ぶりの再会となる。

　今こ宵よい、羅ら翠すい蓮れんは裾すその長い漢かん服ぷくをまとい、月下をさまよう仙女の風ふ情ぜいであった。しかし、その美貌に見とれるよりも先に確認すべきことがある。

　護堂は最大の疑問をぶつけた。

「一体、どうしてここに？」

「半月ほど前、姉は廬ろ山ざんで『白はつ虹こう貫かん日じつ』の

予兆を幻視したのです」

「はっこう——なんだって？」

　神ならぬ身でありながら、神々と互するほどに神こう々ごうしい羅翠蓮。

　護堂のそばまで来た彼女は傷ついたパラス・アテナと『最後の王』、そして上空に広がる《神刀の曼まん荼だ羅ら》を尊大に見まわしてみせた。

　まさに玉ぎよく座ざより下しも々じもを見おろす帝王の目、至尊のまなざしである。

「白虹、日を貫つらぬく。すなわち、〝王の象徴である太陽〟を〝白はく刃じんの象徴である白い虹〟が刺し貫くという不ふ祥しようの卦けです。並々ならぬ大乱・戦せん禍かが迫りつつある証あかし」

　羅翠蓮はじろりと空の曼荼羅をにらんだ。

「これが人の世の興亡であれば、わたくしが介入すべき理由はひとつもないでしょう。が、まつろわぬ神々と天地四海にかかわる大事であれば、話はちがいます。『白虹貫日』の幻視はその予兆ではないかと疑い、姉は真実を見きわめるため旅を続けておりました」

「旅って、中国から日本へ？」

「いえ。大たい鵬ほうと化して天を翔かけ、蛟こう竜りゆうと化し

て海をさまよい、各地の模様を見聞して参りました。その道中、東海に只ただならぬ神気が満ちるのを感じ取り、たどってみれば、この土地へたどり着いたのです」

　仙境に遊ぶ世捨て人、方ほう術じゆつ自じ在ざいの魔教教主らしい言いぐさだった。

　護堂は苦笑いした。まだ人里に出てきていないのでは——彼女の直じき弟で子しの予想はあながち外れてはいなかったのだ。



「それで姐さん、こいつらのことなんだけど」

「語る必要はありません。この山に住まう魑ち魅み魍もう魎りようどもより、大体の事情を聞き出しております。魔王殲せん滅めつの大英雄……うわさだけは幾度か耳にしておりましたが」

　ついに羅翠蓮は真っ向から『最後の王』を見据えた。

「まさか、義弟おとうとと共に対決する日が来るとは思いもしませんでした」

「……なるほど。貴女あなたは草薙護堂の姉君に当たるのか」

　蒼あおき髪の英雄は麗うるわしき魔王の視線を堂々と受け止めて、静かにつぶやいた。

　対する羅翠蓮の方はゆたかな胸を尊大にそびやかし、力強く告げる。

「只ただの姉ではありません。最上にして至尊の姉だと言っておきましょう」

「たしかに。貴女の並外れた偉大さ、はじめての対面であっても容易に理解できる。よければ、尊そん名めいを聞かせていただけまいか？」

「ならば、五ご嶽がく聖せい教きようの教主・羅ら濠ごうの名を心

に刻みつけなさい」

「了解した、羅濠殿。ただ、残念ながら僕の名は——」

「名乗らずともかまいません。この世の最後に顕れる王の真ま名なが千年来の謎であるという話は知る人ぞ知る奇き譚たん。その名をあえて問うのも無ぶ粋すいといえましょう」

「かたじけない。貴女のご配慮に心から感謝させていただく」

　護堂はひそかに感心した。同じ人間同士であってもつきあいづらい羅翠蓮を相手に、あっさりと自然体のまま会話を成立させるとは。

　意外と『最後の王』はコミュニケーション力が高いらしい。

　一方、ふたりの浮き世離れした会話は打てば響くように進んでいく。

「羅濠殿ほどの方であれば、おそらくご存じであろうが——僕は魔王殲滅の運命を託たくされた戦士だ。そこの草薙護堂とも、貴女とも、雌し雄ゆうを決しなければいけない」

「もちろん承知しております。受けて立ちましょう」

「であれば、いつ？」

「愚ぐ問もんですね。今以外の時を選ぶほど、わたくしは怯きよう懦だではありません」

あくまで上から目線の羅翠蓮へ、大英雄は「かたじけない」と律りち儀ぎに頭を下げる。

そのまま両者は戦闘態勢に入った。魔教教主は両手の掌てのひらを開き、最も得意とする掌しよう法ほうの武芸をいつでも駆使できるようにする。

対して、『最後の王』は目の前の神刀に手をのばさない。

愛刀を大地に突き立てたまま、護堂たちへ凜り々りしく宣戦布告する。

「草薙護堂よ。姉君と共にふたたび僕との勝負に付き合ってほしい。今の僕なら、かつて対決したときよりも君を満足させられるはずだ」

「べつにあのときだって、不満はひとつもなかったぞ！」

相手の要いらぬ気き遣づかいに文句を吐いてから、護堂は神しん祖そをちらりと見た。

英雄と魔教教主の奇妙な会話の間、彼女がずっと沈黙していたのには理由がある。

いよいよ限界が近づきつつあるのだ。パラス・アテナは苦しそうにぜえぜえと息を荒くしながら、かろうじて意識を保っているだけ。

このまま戦いがはじまれば、すぐに救世の雷いかずちで打ちのめされる——。

（王よ、その者をこちらに呼びこめ。そやつの力があれば、すこしばかり面白いことができるはずだ）

右腕に宿る相棒がとっさにアドバイスをくれた。

　護堂はすぐにうなずき、天叢雲剣あまのむらくものつるぎを呼びながらパラス・アテナへ告げる。

「アテナ——俺の剣のなかに来い！　こいつはあんたが力を授けてくれた武器だ！」

　言いまちがいではない。あえて護堂はかつての名前で呼んだ。

　すると一瞬、神祖の目に力がもどった。そのまま少女の姿を捨て、体長五〇センチほどの銀色の蛇へびに化け身しんして、すばやく飛び込んできた。

　護堂の右手が持つ、天叢雲剣の黒い刀身めがけて。

　古代日本の神スサノオが八岐やまたの大蛇おろちの尾から見み出いだした鉄てつ劍けんである。出自からして、蛇との縁がきわめて深い武器なのだ。しかも数か月前、天叢雲劍は女神アテナから《黒の劒つるぎの大だい法ほう》を直じかに伝授されている——。

　それらの縁が功を奏そうして、天叢雲劍は銀ぎん蛇じやとなった神祖を内部に吸収してみせた。

　護堂はうなずいた。あとのことは派手好きの相棒にまかせることにして、ひとまず天叢雲劍を右腕のなかに収める。

「姐さん。あいつのいちばんの武器は稲妻だ。まずはそいつに気をつけろ」

「弟の分ぶんを守りなさい、護堂。姉の心配をするなど一〇〇年早いと言えましょう！」

「それもそうか。じゃあ前言撤回だ。頼りにさせてもらうぞ、姐さん！」

　姉弟の上空で《神刀の曼荼羅》が高度を上げはじめた。

　ぐんぐん急上昇し、夜空に浮かぶ切れ切れの雲たちと同じほどの高みにまで到達する。しかも、同時に《神刀の曼荼羅》は拡大していく。

　正方形の魔方陣は一辺の長さ六、七キロにまで拡大を遂げた。

　そして、天高く陣取った《神刀の曼荼羅》はついに放電をはじめたのである。

　天より数え切れないほどの稲妻が豪雨のごとく降ってくる。護堂たちがいた辺りだけでなく、周辺の山々全てに雷電は等しく降りそそぐ形となった。

　護堂はとっさに『鳳おおとり』を使った。

　神しん速そくを授けてくれるウルスラグナ第七の化身。制限時間、使用後の金かな縛しばりなど不都合も多い力だが、最も効果的に救世の雷をしのげる手段だ。

　白金プラチナ色の電光が豪雨のごとく大地を抉えぐるなか、護堂は神速で駆けた。

　間断なく降ってくる雷を右に左にかわしながら、『最後の王』のもとをめざす。このピンチを乗り切るため、まず元凶をつぶす——。

　かつて、古代ガリアでも使った戦法である。

　あのときのように神速で『最後の王』へ迫る護堂。あと十数メートルというところで立ちふさがるのは、前回と同じ人影だった。

　全身に布を巻きつけた仮面の軍神、神速の使い手でもある『風の王』！

（やっぱり来たか！）

　護堂は叫んだ。しかし、常人には聞こえまい。

　神速で移動中に声を発しても、通常の速さの世界にいる者には聞き取れないのだ。だというのに、護堂の言葉に応じる声があった。

（姉の金こん剛ごう力りきをよく見とどけなさい、弟よ！）

羅翠蓮の美声は——なんと地に落ちる護堂の影から聞こえてきた。

護堂が神速で走り出すと見抜いて、とっさに方術を使い、こちらの影に乗った——そういうカラクリなのだろう。しかも、当然のように神速で推すい移いする事象を認識し、会話まで難なく成立させる。護堂は苦笑した。

なんというデタラメさ。たしかに、義姉の心配をするのは一〇〇年早かった。

そんな護堂へ、『風の王』が片刃の大刀を手に斬きりかかってくる！

（伏ふつ虎こ羅ら漢かんの拳よ！）

羅翠蓮の言こと霊だまと共に、護堂の足下からパンチが飛び出てきた。

それは赤しやく銅どう色いろの逞たくましい腕が繰り出す、拳法の直じき突づきだった。身長一八〇センチの護堂と比べても二倍以上は大きそうな腕——その肘ひじから拳までが『ぬっ』と地面から出てきて、風の軍神にアッパーカットを喰くらわせたのだ。

義姉の権能・大だい力りき金こん剛ごう神しん功こうが生み出した剛腕であった。

しかも、神速で立ちはだかった『風の王』へカウンターを打ち込む武芸の冴さえ。あのサルバトーレ・ドニさえ超える武術家ならで

はの拳技である。

　軍神の体は夜空の星々に向けて、打ち上げ花火のように飛んでいった。

　あるいは、あのまま宇宙へ飛び出ていくのではないか？　それほどの速さと勢いで『風の王』は上昇していく。羅翠蓮の金剛力があればこその離れ業わざだった。

　しかし、それでも鋼の軍神は致命傷を負っていなかった。

　天高くへ飛ばされながらも、『風の王』は何かを地上へ投げる。それは鉄と黄金の合金製メダリオン——《鏃やじりの円盤》だった。

（ひさしぶりじゃのう、同郷の神殺し殿！）

　なんと円盤が斉せい天てん大たい聖せいの姿に変化し、神速で護堂たちの頭上に降ってきた。

　しかも落下の勢いを乗せて、如によ意い金きん箍こ棒ぼうを振りおろしてくる。これを護堂は右方向に跳んで、ぎりぎり回避した。

（斉天大聖ではありませんか。死を得たはずのあなたが何なに故ゆえここに？）

（英雄招来の力ってやつらしい。さっきの円盤が死んだ神様たちを甦よみがえらせたんだ。斉天大聖のほかにも、俺のなじみがふたり復活している！）

　驚く教主へ、短く報告する護堂。

　その間も稲妻は途切れることなく、豪雨のようにバシャバシャと降ってくる。

　避ける。避ける。避ける。避ける。避ける。避ける。

　神速で跳び、疾走して、六つめの雷を避けた直後、ふたたび斉天大聖が来た。

　いつのまにか護堂の左側面にまわり込み、横から如意金箍棒を叩きつけてきた。これを振り払ったのは足下の影から出てきた赤銅色の巨腕だった。

（落ち着きのないことですね、大聖！）

（すまない姐さん、助かった！）

（ふはははははっ。あいかわらずしぶとい連中だのう！）

　呵か々か大たい笑しようする斉天大聖。どうにかピンチをしのげた護堂。どちらも一瞬たりとも足を止めない。何しろ救世の電光がひっきりなしに落ちてくるのである。わずかな間でも神速の疾走をやめれば、雷の餌え食じきになってしまう。

　それでも『最後の王』に近づくべく、護堂は走りながら機をうかがう。

　斉天大聖はその走りにつきまとい、接近を許すまいとする。

（今度は三人いっしょじゃないんだな！　ランスロットたちはどうした!?）

（なに。ここは我ひとりで十分ということよ。千両役者がひとりおれば、客は端は役やくの三下に目を向けたりもせぬしのう！）

（おそらく英雄招来の神力を一ひと柱はしらに集めて、その神格をより強固にしたのです）

　足下の影から、羅翠蓮の声が告げた。

（一度は死した神を地上に甦らせる——。天地冥めい界かいの理ことわりに反する大奇跡です。生前と同じ強さでの復活がかなうとは

思えません。その力の源泉である先ほどの神具を依より代しろにして、大聖の力をかつての高みにもどしているのでしょう！）

（ええい。千せん里り眼がんの道どう姑こ殿がおると、ハッタリもかましにくくてかなわん！）

　ぼやく間も斉天大聖は落雷を避け、護堂につきまとい続ける。

　隙すきあらば金箍棒を打ち込むつもりなのだ。しかも、影にひそむ羅翠蓮のことも警戒し、護堂の足下への目配りを怠おこたらない。さっきのような奇襲は通用しないだろう。

　護堂は眉をひそめつつ、ちらりと『最後の王』を見た。

　走りまわりながらも、あの男から三、四〇メートル以内の距離を保とうとしてきた。

　幸いにも義姉が『風の王』を成層圏あたりに吹っ飛ばしてくれたおかげで、今のところは上う手まくいっていたのだが——

　神刀使いの英雄は不穏な言霊をささやいた。

「尊貴なる雷電の王に、あらゆる武具の用法を心得たる戦士が願い奉たてまつる。かつてあなたが授けてくれた至上の強ごう弓きゅう……今こそ、この手に甦らせ給たまえ」

　護堂たちを悩ませていた稲妻の連射がいきなりおさまった。

　上空に浮かぶ《神刀の曼荼羅》が地上への無差別攻撃をぴたりとやめたのだ。

　しかし、代わりに——『ゴォォォォォオオオオオオオオオオオオンンッ！』『ゴォォォォォオオオオオオオオオオオオンンッ！』と極大の轟ごう音おんを立てて、ふたつだけ稲妻を落とす。

　この二発の標的はなんと『最後の王』だった。

　だが、蒼き髪の貴公子はその灼しやく熱ねつと衝撃をあっさり吸収する。

　しかも、その直後。彼の左腕に鋼鉄製の大弓が顕れた。そして、足下には何十本もの矢をぎっしりと収めた矢や筒づつまでが。

　おそらく、稲妻のエネルギーがこの大弓と矢筒に変換されたのだ！

「盟めい約やくの大だい法ほうにより十分に力を高めた今の僕なら──」

　貴公子が涼やかな声で朗々と言った。

　神速を発動させた護堂の耳にも、不思議なほど心地よく聞こえる。聴衆の耳と心に染しみいる晴朗な語り声。これも彼の権能なのかもしれない。

「最強の武具である〝弓と矢筒〟の封印を解くことができる。草薙護堂。羅濠殿。貴公らにはまず、この矢を以もつて立ち向かいたいと思う」

　あくまで謙虚な口ぶりで告げ、『最後の王』は鋼鉄の大弓をかまえた。

　護堂は戦せん慄りつした。そういえば前にも聞いたではないか。『最後の王』は流る浪ろうを重ねる英雄で、弓と深い縁を持つと。

　しかも、その記憶を裏づけるように大地が揺れはじめた。

　ただ弓を手に持っただけで地震。震度は三か四といったところか。そのあげくに『最後の王』はなんと両目を閉ざしてしまった。

　神速で走る護堂たちを射いぬくため、心眼を行使したのだ！

「東国にかつて九つの太陽を射ぬいた英えい傑けつがいたと聞く。彼が放った矢は墜おちた太陽と共に失われたが、その偉業を再現すべく天界の名工が一本の矢を造った」

　魔王殲滅の英雄は左ゆん手でに鉄てつ弓きゅうをかまえていた。

　さらに右め手てで足下の矢筒から漆黒の矢を一本、引き抜く。

　これを見た途端、斉天大聖が「ひゃっ」と首をすくめて、とんぼを切った。そのまま消え失せてしまう。巻き添えを恐れて退散したのだ。

　空中に浮かぶ《神刀の曼荼羅》は、電光の乱射をまだ再開しない。

　弓を射んとする大将軍の集中を妨さまたげないよう、沈黙する兵士たちのようであった。

「あくまで贋がん作さく、太陽を堕おとすほどの一いつ矢しではない。が、地上でいたずらに強大すぎる力を振るうのもためらわれる……。まずはこのあたりが適切かと思う」

　ついに『最後の王』は黒い矢を弓につがえた。

　その瞬間だった。護堂は背筋に悪お寒かんを感じて、全力疾走をはじめた。英雄と黒き矢に背を向けて、すこしでも距離を取るため神速でひた走る。

　いつものカンピオーネの直感だった。このままだと——必ず死ぬという。

　そもそも同じ神速の使い手で、空まで飛べる斉天大聖だって逃げ出したではないか！

（姐さんにも手伝いを頼んでいいか⁉）

（仕方ありませんね。ならば、そのまま上をめざしなさい！）

　今まで山の尾根を駆けまわっていた護堂たち。

　ひとまず神速——雷と同等のスピードで全力疾走し、緑のすくない山の斜面をほぼ一息に駆けあがり、岩ばかりのゴツゴツした山頂まで来たところで、

（跳びなさい、護堂！）

　足下からの叱しつ咤たにしたがい、護堂はできるかぎり高く跳躍した。

『鳳』の化身を使用中、両足に翼が生えたかのような身軽さでアク

ロバットできる。そのジャンプ力にまかせて、山頂より空に飛び出した。

　南みなみ房ぼう総そうに広がる山々は総じて低い。おおむね標高三、四〇〇メートル程度である。

　この山頂もそうだった。が、それでも下界と比べれば十分すぎるほどの高み。夜の空中に飛び出した護堂は夜目が利きく。標高の低い山々の間に小さな集落が点在し、それらの明かりが闇やみ夜よに浮かびあがる様子を見て取った。

　尚なお、義姉の宿る影は護堂の両足に貼りついたまま、くっついてくる。

　さすがと感心しながら空中でようやく後方をふり返り——目撃した。空中の護堂めがけて、漆黒の矢がまっすぐ飛来する光景を。

　矢は、救世の雷よりも明らかに速かった。

　護堂がどれだけ全速力で逃げても、きっと射ぬかれていたことだろう。このときは空中の的まととして撃ち抜かれる寸前で、義姉の助けが間に合った。

（北ほく風ふう、地を捲まき万里を翔かけよ！）

　飛ひ翔しようの言霊だった。

　直後、影より抜け出てきた羅翠蓮が空中で護堂を抱きかかえる。

　ふたりはそのまま黄色い光につつまれて、急上昇。リリアナが使う飛翔術と同系統の方術であったらしい。

　一方、護堂たちを追いかけてきた漆黒の矢は——やにわに爆発。

　白金プラチナ色の光がふたりの眼下で炸さく裂れつし、直径数キ

ロにもおよぶであろう大規模な爆発となって、南房総の山々を豪快かつ無惨に吹き飛ばしていった。

3

「強大すぎる力を使いたくないとか言っていたくせに、とんでもない威力だぞ……」

　義あ姉ねの力添えで空を飛びながら、護ご堂どうは神しん速そくを一度オフにした。

　眼下に広がる大爆発の情景。まるで隕いん石せきが墜つい落らくしたあとだ。一方、方ほう術じゆつ自じ在ざいの義姉はこの大爆発を見おろしながら、護堂をかかえて天あま翔かける。

「やはり『最後の王』はすさまじいほどの雄ゆう敵てきですね……。護堂。おまえの切り札の方はまだ準備がととのいませんか？」

「なんだ姐ねえさん、気づいていたのか」

　いきなり問われて、護堂は驚いた。

「なるべくこっそりやれって、指示しておいたのにな」

「姉を見くびってはなりません。わたくしは立ち合いのはじめから、ずっとおまえのそばにいたのですよ？　暫しばらく会わぬ間に義弟おとうとがどれほどの力を得たのか――それを見定める意図があればこそ、今まで影にこもっていたのです」

　フッと微ほほ笑えむ羅ら翠すい蓮れんの横顔を見て、護堂は「なるほど」とうなずいた。

　剛ごう腕わん無む双そうの義姉にしては少々おとなしい戦いぶりだと、実は首をかしげていたのである。やはり、そういう思おも惑わくがあったのだ。

「それで護堂、首尾の方は？」

「そろそろ大丈夫だ。でも、実は同じ方法で『最後の王』を攻撃したことがあるんだ。そのときは結構上う手まくいったけど……あいつは今よりも不完全な状態だった」

　護堂は古代ガリアでの戦いを思い出して、つぶやいた。

「正直、完全状態だっていう今のあいつに通じる自信がない」

「だとしても……それに勝る切り札を持たないのであれば、躊ちゅう躇ちょするのは愚ぐ策さくでしかないでしょう。最大の絶ぜつ技ぎをぶつけたとき、敵がどれだけの力で押し返してくるか——。その結果を物差しとして、力の差を見きわめるべき時もあるのです」

「力の差か……」

「この姉にとっても、あれほどの軍神との対決は初めての経験です。あの者がどこまで強壮であるか、実はわたくしもはかりかねています」

「姐さんにもわからないのか⁉」

　実力・見識のどちらも最さい高こう峰ほうである羅ら濠ごう教きょう主しゅにここまで言わせるとは。

　護堂は肚はらを据すえた。どのみち小手先の攻撃が有効打となるはずはなかった。あえなく返り討ちに遭あう恐れは十分以上にあるが、たしかにリスクを冒おかすべき時だ。

「わかった。まずは俺がいけるところまでやってみるから、限界が来たら姐さんにあとはまかせる。それでいいか？」

「もちろんです。わたくしを信じて、死力を尽くしなさい」

羅翠蓮は力強く言った。

「仮におまえが命を落とそうとも、わたくしは義ぎ姉弟きようだいの絆きずなにかけて必ず仇かたきを討つか、おまえと枕をならべて討ち死にしてみせましょう！」

　義姉の言いぐさに護堂は吹き出しそうになった。

　少年向けのバトル漫画なら『おまえは必ず自分が守る』くらいの無責任な宣言が出てきそうな場面だが、そんな発想が羅翠蓮の頭のなかにあるはずはなかった。

　心の底から納得しつつ、護堂は下界を見おろした。

　漆しつ黒こくの矢が起こした大爆発は収束し、南みなみ房ぼう総そうの山やま間あいに直径数キロものクレーターが脈絡なく誕生していた。なんとも非現実的な光景だ。

　今、義姉と共に飛んでいるあたりは高度四、五〇〇メートル程度だろう。

　骨まで凍こごえるような寒風にさらされながらも、カンピオーネの体はむしろ熱い。闘争本能で全身の血がたぎっているせいだ。

「姐さん、頼む！」

　要請に応じて、急降下がはじまった。

　また、飛翔の術を維持しながらも義姉が姿を消した。ふたたび影

となって、今度は護堂の背中に貼りついたのだ。

　巨大なクレーターの上空を飛び、高速飛行で地上に迫る。

　護堂を運ぶのは羅翠蓮が生み出した黄色い光。しかし、この天降る光がいきなり左に軌き道どうを変えた。地上から放たれた矢をかわすためだった。

　――見れば、『最後の王』は山の尾根に陣取っていた。

　木々がまばらなため、見晴らしがいい。彼は鉄てつ弓きゅうに矢をつがえていた。

　急降下する護堂たちめがけて、射いる。射る。射る。射る。あの漆黒の矢ではなく、鉄の鏃やじりと木と矢羽根から成る矢を四連射してきた。

　見た目こそ平凡だが、これらもすさまじい威力を秘めた矢なのだろう。

　羅翠蓮が操る飛翔の光は四本の矢をことごとく回避しつつ、地上をめざす。

　すると『最後の王』は鉄弓を捨てた。ずっと大地に突き刺していた救きゅう世せいの神刀を引き抜き、輝く切っ先を上空の護堂へ向ける。接近戦になると読んだのだ。

　護堂も派手好きの相棒・天叢雲劍あまのむらくものつるぎに呼びかける。

いつもは右腕のなかを定位置とする相棒は今、よそに遠征中だった。

「天叢雲！　それにアテナ！　例のやつをやってくれ！」

この指示によって、眼下のクレーターに変化が起きた。

山中に穿うがたれた直径数キロの大穴。その中心に亀き裂れつがいくつも走り、大きく揺れはじめたのである。クレーターの底でだけ地震が起きているのだ。

そして、揺れる大地より土砂をかき分けながら、巨大な球体がせり出てくる。

闇やみそのものが凝ぎよう縮しゆくしたかのような球体である。

直径は四、五〇メートルというところ。これこそ局地的な地震を起こした元凶――草くさ薙なぎ護堂が秘法《黒の剱つるぎ》で生み出した、重力嵐を呼ぶ暗黒星であった。

女神アテナが天叢雲劍あまのむらくものつるぎに授けてくれた《黒の剱の大だい法ほう》。

とてつもない威力を生み出す秘術だが、発動から最大パワー到達まで時間がかかるという例の欠点はいかんともしがたい。

しかし、今回は大だい地ち母ぼ神しんの神性を取りもどしたパラス・アテナとの共闘だった。

地上だけでなく、地の底の冥めい界かいまでも支配するのが大地母神。蛇へびを象徴とする女神は地上と地底の両界を統すべる存在なのだ。

だからこそ、天叢雲劍はパラス・アテナを呼べと進言したのだ。

地じ母ぼ神しんの力を借りて地底に転移し、そこで《黒の剱》を準備。臨りん界かいまで高まったところで地上へ引きあげるために――。

最大の不安は、瀕ひん死しの神しん祖そにそれを成し遂とげる余

力があるかという一点だった。

　が、パラス・アテナも天叢雲剣もみごと仕込みを完かん遂すいしてくれた。地中より浮上してきた暗黒星はさらに上空をめざし、天あま翔かける護堂を取り込んで、ついに合流を果たした。

　闇色の球体——その中心に護堂は浮いている形となった。

　右腕に天叢雲剣が顕あらわれる。日本刀のそれに似た刀身にはパラス・アテナの化け身しんである蛇が巻きついていた。

　かくして、護堂は《黒の剣》の暗黒星と共に地上めざして急降下したのである。

　その先には『最後の王』が待ちかまえている。救世の神刀をかまえる彼は、きらめく刃やいばの切っ先を空中の護堂に向けていた。

　次いで、白金プラチナ色の電光が球状になって『最後の王』を取りまく。

　暗黒星をまとう護堂に対抗して、救世の電光を我が身のまわりに展開させたのだ。

　そのまま球きゆう雷らいをまとう英雄は暗黒星と共に空から降ってきた護堂と——激突。かつて木き更さら津づで、古代ローマのライン河か畔はんで、幾度か行われた対決がまたも再現された。

　黒き魔王の星と白き救世主の星。

　対照的な両者がぶつかり合う、陰いん陽よう相そう克こくの対決が——。

「く……おおおおおおおおっ！」

　天叢雲剣あまのむらくものつるぎに呪じゆ力りよくを注ぎこみながら、護堂は吠ほえた。

　黒こく白びやくの二星が激突した瞬間、すぐにわかった。敵のパワーが今までと桁けたちがいだ。このまま力比べを続けたら、二分と経たないうちに暗黒星は消し飛んでしまう。

「がんばって準備したってのに、これだけ差があるのかよ！」

　文句を吐き出す唇くちびるは獰どう猛もうな形に歪ゆがんでいた。微笑である。

　ここまで差があると、いっそすがすがしい気持ちになるから不思議だ。たぶん開き直るしかないからだろう。もう捨て身になる以外の道はないと。

「天叢雲あまのむらくも。残り時間はどうせほとんどないんだ。その間、死ぬ気であいつの稲妻を吸いこみまくって――道を作れ。アテナも手伝ってやってくれ！」

　全呪力を相棒に注ぎこみながら命じる。無理を承知の最優先指令だ。

　が、闘争こそが生き甲が斐いである劍つるぎは『応おう！』と短く受じゆ諾だく。その刀身に巻きつく蛇も『言われるまでもない、バカ者め』とばかりに、じろりと護堂を冷たく見つめてみせた。

　その間も黒き星と白き星の衝突は続く。

　今、ふたつの星は直径十数メートルほどにサイズを縮小――否いな、凝縮させていた。

　力の密度を上げて、全力で相手に立ち向かうためだ。おかげで『最後の王』との距離が近くなり、英雄の美貌をしっかり見ることができた。

　凜り々りしく、雄お々おしく、しかし、歴戦の疲れが錆さびのようにまといつく貌かお――。

　彼に対する恨うらみを護堂は持たない。怒りもない。だが、闘争心はある。絶対にして究極の力を持つ存在になんとしても抗あらがってやるという反はん骨こつ心しんもある。

　護堂はふたたび獰猛に笑い、臍せい下か丹たん田でんの奥底より呪力をさらに引きずり出した。

　これを注ぎこまれた天叢雲劍あまのむらくものつるぎがささやかな奇跡を起こす。ブラックホールのごとく全てを吸引することこそが《黒の劍》の要よう訣けつ。その理ことわりを刀身に宿す霊れい劍けんは護堂と『最後の王』の間に満ちる雷電のエネルギーを吸引し、吸引し、吸引し続けて。

ついに一筋の道を作ってみせた。

救世の雷いかずちに灼やかれることなく英雄のもとへ到達できる、一筋の道を。

「むっ⁉」

「今だ姐さん！」

蒼あおき髪の英雄が驚きよう嘆たんし、護堂が叫ぶ。

直後、義弟のすぐ後方より羅翠蓮の麗うるわしき立ち姿が飛び出し、切り拓ひらかれた道を軽やかに駆けた。体重がないかのごとき、軽けい功こう卓たく越えつの歩ほ法ほうである。

「さすが神殺し。力によって無法を天に通す豪ごう傑けつたちよ！」

「その賛さん辞じ、われら姉弟の底力を見てから繰りかえしなさい——哈ハ！」

賞賛の嘆たん声せいと共に『最後の王』が上段にかまえた神刀。

だが、この輝く刃を吹き飛ばし、さらに英雄の雄お々おしい体を激しく打ち据えたのは羅翠蓮の竜りゆう吟ぎん虎こ嘯しよう大だい法ほうだった。

魔王・羅ら濠ごう教きよう主しゆが発する嘯しよう声せいは衝撃

の魔風と化して、全てを撃破するのだ。

　そうして敵の迎撃を封じつつ、みごと英雄との距離を詰める。

　武ぶ林りんの至尊は最も得意とする武器を静かに打ち込んだ。利きき腕である右手の掌てのひらをすっとのばして、『最後の王』の胸にさわったのである。

　その掌はちょうど心臓——中国武術でいう檀だん中ちゆう穴けつの急所を抉えぐっていた。

　神刀の英雄が身につけた剣技の冴さえを護堂は知っている。そんな彼が凡ぼん庸ようにすら見える掌しよう打だに反応できなかった。そのことが逆に、今の軽い打撃こそが羅翠蓮の放つ至高の一いつ掌しようであった事実をはっきり教えてくれた。

　ただ手を突き出すだけの動きで、最高の達人を打つ。

　まさに武の秘ひ奥おうの極きよく致ちだろう。そして、羅翠蓮は義弟と同じく全呪力を注ぎこんで、大だい力りき金こん剛ごう神しん功こうの勁けい力りきを右掌に宿らせていた。

　この剛力で手刀を繰り出せば、山も海も虚むなしく裂けるのみであろう。

　この剛力で拳を放てば必ず天は震え、地震が生じ、泰たい山ざんすらも鳴めい動どうするであろう。

　それほどの勁力を急所に注ぎこまれて、『最後の王』は絶叫した。

「おおっ！」

　直後、凜り々りしき英雄の全身から白金プラチナ色の光が燦さん然ぜんと放たれた。

4

　辺り一面、みごとなほどの焦しよう土どであった。

　ふたりの神殺しと『最後の王』が対決した地は焼け野原と化していた。

　もとは山地の一角だった。しかし、戦場となった山のすくなからぬ部分が吹き飛び、木々は薙なぎ払われ、冬山に住まう命の多くが消滅を遂とげた。

　凄せい惨さんな情景を見て、『最後の王』は黙然と頭を振った。全て己おのれが為なしたことだ。

　彼の命は救きゆう世せいの神刀と深く結びついている。

　あの刃やいばが健在であるかぎり、彼は死んだとしても幾度でも甦よみがえる。

　羅ら濠ごう教きよう主しゆの激烈というべき一いつ掌しようを受けて、彼の肉体は〝救世の神刀との絆きずな〟を最大限に高めることで衝撃に抗あらがおうとした。結果、〝生ける神刀〟と化した彼の肉体はあの痛つう打だにもしっかりと持ち堪こたえたのだ。

　全身から救世の雷いかずちを放ち、周囲一帯を薙ぎ払うという一幕付きで。

　まわりには何もない。全てが雷で灼やき尽くされ、地形が変わる

ほど盛大に吹き飛び、一面の焦土となってしまった。草くさ薙なぎ護ご堂どうもその義あ姉ねも消えた。

　先刻の戦いの名残なごりといえば、胸に残った鈍にぶい疼とう痛つうだけである。

　己が刻んだ破壊の爪つめ痕あとを『最後の王』は暗あん鬱うつたる思いで見つめていた。

　ここで消滅したもののなかには、先ほど彼を助けた精霊たちもいたはずだが——

「救世主殿」

　呼びかけられた。英雄ペルセウスの男らしい美声だ。

　そばに来ていたのだ。斉せい天てん大たい聖せいとランスロット・デュ・ラックもいる。天空の彼方かなたより帰還した『風の王』もいっしょだった。

「よければ、われらの手で追撃を仕掛けてみるがどうだ？」

「いいや」

　不死性が高まった代わりに、今の状態では権能の制御が甘くなってしまう。

　いつもより隙も多くなる。『最後の王』はかぶりを振った。

「ひさしぶりに全力で戦って、僕はすこし疲れている。休息が必要だ。貴方あなたがた三英雄も僕と離れていては何かと不都合があるだろう。今はやめておこう」

「それについては」

　ペルセウスはにやりと笑い、『風の王』を一瞬だけ見た。

「われらの後こう見けん役やくをかの御ご仁じんに託たくし、面倒を見てもらうという手もあるが」

　その発言を聞いて、正体不明の風神はさっと姿を消した。

　ちょうど吹きつけてきた夜風に乗って、一同の前を辞じしたので

ある。すると、山やま吹ぶき色いろの髪を持つ古代ローマの英雄は大きくうなずいた。

「風の某なにがし殿どのはあまり派手に暴れたくないようだな、やはり」

「許してやってほしい。あの者もまた貴公らと同じく、揺るぎない英名を誇る勇者。せわしなく動いて、真ま名なが露ろ見けんするのを恐れているのだろう」

　主あるじとして『最後の王』が謝罪すると、斉天大聖がしみじみと言った。

「御主君の意向にそこまでつきあうとは、殊しゅ勝しようなやつじゃのう。うちの義弟おとうとどもに爪つめの垢あかを煎せんじて飲ませたいものだ」

「猿殿。それはおそらく長兄である君に似たのではないか？」

「ここにもひとり、生意気な心根をあらためさせたい輩やからがおるわい……。まあ、そういう次第であれば、しばらく休ませてもらうとしよう。この孫そんさま、自慢ではないが仕事を怠なまけることにかけては天界随ずい一いちの名人でもある」

　この言いぐさを最後に斉天大聖が消える。

　ペルセウスも鷹おう揚ような笑みを残して、天界の元厩うまや番ばんの振る舞いに倣ならう。残ったのは『最後の王』とランスロット・デュ・ラックだけだった。

「……王よ。すこし眠ってみたらどうだ？」

　白き女騎士は進言する。

「あれだけの権けん能のうを振るったのだ。体の熱も上がっているはずだ」

「そう、だな」

　うなずいて、『最後の王』は己の右手を見つめる。

　いつもと変わらない、白く形のよい掌てのひらと五ご指し。だ

が、この手をふくめた彼の全身からは激しい高熱が放散されていた。そばにいるのが只ただ人びとであれば、溶鉱炉の前と同様の熱さを味わう羽目になるだろう。

　川にでも飛び込めば即座に水が蒸発し、もうもうと水蒸気がたちこめるはずだ。

「ランスロット。いにしえの世で君と女神グウェンフィファルに会う前から、僕はずっと戦い続けてきた。魔王殲せん滅めつの使命を成じよう就じゆさせるたび眠りにつき、目覚めたら新たな魔王との戦いにこの身を投じる。それをずっと繰りかえしてきた」

　ふと『最後の王』は昔語りを口にした。

「昔の僕はいつも力をほとんど失った状態で目覚めていた。だから戦いをはじめるたび、大地の精気を集める必要があった。そのために地上を長く放浪したものだ」

「そうであったな」

　ランスロットは相づちを打った。

「それを見かねて、我が同どう朋ほうグウェンフィファルが聖せい杯はいを創造したのだ。死にかけた己の体をも材料にして。御おん身みが苦しい流る浪ろうの旅を経へなくとも力を得られるよう、前もって地じ母ぼ神しんの精気をたくわえておくために。そして、その甲か斐いはあったようだ」

　騎馬民族に崇あがめられた騎士の神は焼け野原をちらりと見やった。

「此こ度たびの御身は復活直後から、すさまじい戦いぶりだ」

「ああ。聖杯の造り手たる彼女には……感謝すべきなのだろうな。やはり」

　微笑というにはやや苦みの強い笑みを『最後の王』は唇くちびるに浮かべた。そんな彼に無骨な礼を捧ささげて、女神ランスロットも消えていった。

「まあ……毎度毎度こう言うのもどうかと思うけど」

　南みなみ房ぼう総そうの地形まで変えてしまった激闘の終了から、数十分が経たっていた。

　冬の夜空と月明かりのもと、由ゆい緒しよありそうな古こ刹さつの境けい内だいにいる。護堂は戦場となった山地を離れて、すでに人里へと下りてきていた。

　さっきまでの大騒動がうそのように静かな夜だった。

「今度こそ死ぬかと覚悟したよ。姐ねえさんのおかげで助かった。ありがとう」

「礼にはおよびません。この姉もおまえの才覚のおかげで九死に一生を得たのですから」

　月下で向き合う絶世の佳か人じんは、もちろん羅ら翠すい蓮れんそのひとだった。

　しかし、白面の美貌はいつもよりもさらに白い。蒼そう白はくである。精も根こんも尽き果てているのだ。もしかしたら貧血を起こしかけているのかもしれない。

　……すこし前、『最後の王』に最強の一掌を打ち込んだ直後。

　蒼あおき髪の英雄は苦痛を堪こらえるためか獣けもののように咆ほう哮こうし、さらに全身から救世の雷を極大威力で放出させた。

　それをしのぐため、羅翠蓮はとっさに分身を呼んだ。

　かつて彼女は阿あ吽うん一いつ対ついの金こん剛ごう力りき士しを倒して、権能・大だい力りき金こん剛ごう神しん功こうを獲得した。これはただ怪力を振るうだけの能力ではない。

　羅翠蓮の分身として二体の金剛力士を呼び出し、怪力を振るわせることができるのだ。

　力士たちは護堂の三倍近い大きさで、逞たくましい肉体は金色に輝いていた。二体はその筋きん骨こつ隆りゆう々りゆうたる全身を楯たてにして、麗うるわしき女主人をかばった。また羅翠蓮本人も残っていた呪じゆ力りよくのおそらくほとんどを力士二体に注ぎこみ、分身たちをさらに強化——。

　黄金の巨人ふたりが『筋肉の壁』となってくれたおかげで、猶ゆう予よができた。

雷を放つ英雄の眼前にいた羅翠蓮が即死をまぬがれ、草薙護堂が神しん速そくをオンにして義あ姉ねを抱えあげ、全力疾走で逃走をはじめる。そのための猶予が。

あのときの護堂は『鳳おおとり』の化け身しんをまだ使用中だったのだ。

そして、義姉を両腕で抱きかかえたまま山をいくつか越え、里に下り、目についた古寺へ飛び込んだところで神速をオフにしたのである。

護堂はそっと安あん堵どの息を吐き出した。

使いづらかった『鳳』も使用時間がのびたり、途中のキャンセルが可能になったりと地味に成長を繰りかえしてきた。今回はそれが命綱になってくれた……。

「結局、あいつら追ってこなかったな。俺たちが逃げたことに気づいていただろうに」

「追う気がなかったのかもしれません。ただ……追えなかった理由もあると、わたくしは感じています。確たる根拠はありませんが」

義姉は万ま里り谷や祐ゆ理りと同じく、霊れい視し力りよくまでそなえているという。

当然、その『なんとなく』は尊重して然しかるべきだった。「なるほどなあ」とうなずく護堂の前で、智勇兼備にして万能の姉は力強く言う。

「来きたる再戦の折に真しん偽ぎをたしかめることにいたしましょう。おまえもそのつもりでいるのですよ、護堂」

さすがの宣言だった。派手に敗走したというのに、まったく打ちひしがれていない。悪びれてもいない。平然と第二戦のことを考え

ている。

　あきれるほどの速さで頭を切りかえたのだ。

　天上界よりも高いプライドを持つ羅濠教主。そうである以上、敗戦のショックでぽきりと心が折れても不思議ではないのに――。

　不屈の精神というより、『喉のど元もと過ぎれば熱さを忘れる』類たぐいの精神構造。

　この義姉もやはりカンピオーネ。サルバトーレ・ドニやアイーシャ夫人と似たような一面をしっかり持ち合わせる人種であるようだ。

　そこをおかしく感じて、護堂がひそかに笑いを堪えたとき。

「草薙護堂よ……」

　パラス・アテナの声で呼びかけられた。近くの地面に突き刺しておいた天叢雲劍あまのむらくものつるぎ。その漆しつ黒こくの刀身に絡からみつく銀色の蛇へびが発したものだ。

「気づいているだろうが、もう妾わらわは長くない……」

「ああ。そうなんだろうとは思っていたよ」

　奇き縁えんと逆ぎやく縁えんで結ばれた旧きゆう敵てきからの告白。

　神刀に巻きついたまま、銀ぎん蛇じやの体はぴくりとも動いていない。鱗うろこの輝きも鈍い。あたかも冬眠寸前であるかのように見える。

　そもそも、パラス・アテナは死とひきかえに竜りゆう蛇だの封印を解いたのだ。

　そうだろうとは予感していた。護堂は言った。

「最さい期ごに俺ともう一勝負、していくか？」

　好戦的な言葉を贈ろうとしたのに、不思議とやさしい口調になった。

　神祖の化け身しんである蛇もまた、あの闘志あふれる尊大さではなく、生死と恩おん讐しゆうを超越した女神の口ぶりで言う。

「それも悪くはない終幕だ。しかし、少々ものたりぬ。やはり、最さい期ごの獲え物ものは今ここにいる最強の戦士を選びたいもの……」

「ってことは、あいつとやる気なのかよ」

　この期ごにおよんで『最後の王』を選ぶとは、いかにも戦いくさ女め神がみらしい。護堂は笑った。

「今、あやつの力の源みなもととなっている精気は大半が妾から——アテナであった頃の妾より吸いあげたもの。それはまちがいなく勝敗の行方を定める綾あやとなる」

　天叢雲劍あまのむらくものつるぎに巻きつく蛇はじろりと護堂を見た。

「だが、やんぬるかな。そこを突くだけの時がもう残されておらぬ」

「具体的にはどれくらい保もちそうなんだ？」

「あなたの胸が鼓動を百ほど刻む程度かもしれぬし、三百ほどで息絶えるやもしれぬ。まあ、いずれにしても長くは保つまい」

　腕時計とは縁のなさそうな女神らしい、アナログな表現だった。

　残された命はおそらく一〇分もないのだろう。無常感を嚙かみしめる護堂へ、銀色の蛇はおごそかに言った。

「さて……あなたには貸しがひとつあるな、草薙護堂」

「貸し？」

「うむ。かつての約やく定じようを果たさなかったことだ。前に申したはず。妾が輪りん廻ねの果てに再さい臨りんした暁あかつきには、そちらから雪せつ辱じよくを晴らしに来るがよいと。にもかかわらず、此こ度たび、あなたを探し当てたのは妾の方であった——」

「ちょっと待った。あんた、もしかして記憶がもどったのか？」

　そのやりとりは死にゆく〝まつろわぬアテナ〟と交わした会話だ。

　また、護堂は気づいた。銀色の蛇はさっき『自分がアテナであった頃』と言った。ということは、まちがいない。

　確信を込めて見つめると、蛇はシューッと舌を出しただけだった。

　冷然たる物腰。多くを語らず、感傷的なことも口にしない。しかし、それも超然たる蛇女神アテナらしい反応に見えてくるから不思議だ。

　天叢雲劍あまのむらくものつるぎに吸収されて、彼女の遺作というべき《黒の剱つるぎ》と接触したことが原因か。

　あるいは、草薙護堂との再対決が女神の魂たましいに何かしらの変化をもたらしたのか。

　護堂はフッと笑った。どうでもいいことだろう。肝心なのは、目の前にいる爬は虫ちゆう類るいがかつての旧敵そのものであるという事実だった。

「たしかに、あんたには借りがあるのかもな。じゃあ、埋め合わせに何をすればいい？」

「決まっている。残された須しゆ臾ゆの命を以もつて、あの男に一いつ矢し報むくいるため」

　天叢雲劍に巻きついているアテナの化身。

　その長々とした蛇の体が霊れい劍けんのなかに吸いこまれていった。

「然しかるべき場と時をあなたが用意せよ。頼んだぞ、我が宿敵よ」

　それが要請の全てだった。もうアテナの声はしない。

　蛇が冬眠するように天叢雲劍のなかで休眠し、生命活動を停止さ

せたのだろう。残された寿じゆ命みようを全て『最後の王』との決戦で使い切るために。

「さすがは大女神の生まれ変わり。女王たる者、死に際ぎわはかくありたいものです」

　一部始終を見守っていた義姉が珍しく賞賛する。

　勁けい烈れつな気性と誇り高さを併あわせ持つ女王同士、通じるものがあったようだ。

「姐さん。俺といっしょに東京へ来てくれないか？　俺の仲間や鷹よう化かもいるし、ひとまず向こうで態勢を立て直すんだ」

「かまいません。わたくしもその必要があると思っていたところです」

　文明社会を嫌悪する世捨て人でも、戦闘に関しては抜け目ないはずのカンピオーネ。

　最強の魔王殺しが登場した緊急事態だけあって、いつもなら即座に拒否しそうな要請にもあっさり応じてくれた。

　助かるなと護堂はうなずき、さらに言う。

「よかったら、鷹化の住んでる辺りにでも姐さんの力で連れていってくれよ。ほら、方ほう術じゆつってやつでいつもピューッと瞬間移動したりするじゃないか」

「…………」

「さっきみたいに空を飛ぶのでもいいけど」

「…………」

「姐さん？」

「義弟よ。おまえにひとつ伝えておきましょう」

羅翠蓮は厳げん粛しゅくな面おも持もちで前置きしてから、護堂を見つめた。

「先ほど『最後の王』の雷らい霆ていをしのぐために姉は阿吽一対の金剛力士を顕けん現げんさせて、どうにか事なきを得ました」

「うん。あれは本当に助かった」

「あのとき、姉はこの体に蓄たくわえていた気のほぼ全てを使い切りました」

　気とはすなわち呪力を意味する。護堂は「えっ？」と驚いた。

「かの大英雄が放つ究極の電光を防ぐためには、そこまでする必要があったのです。結果、わたくしは今、手て妻づままがいのささいな術さえも使えません。方術で鷹よう児じの住まいを訪ねることもできない状態です」

　不機嫌そうに義姉・羅濠教主は告白する。

　世界最高峰の武芸者にして方術使いという破格の傑けつ物ぶつである。さらに美貌であり、さまざな芸事にも通じている。実は料理の腕まで達人級だ。

　だからこそ、何かを『できない』と言うことが気に入らないのだろう。

「そうだったのか……」

　護堂は感じ入った。以前、ルクレチア・ゾラが同じ状態になっていた。

　あのときサルデーニャ島の魔女は疲労困こん憊ぱいし、ベッドで何日も寝こんでしまった。義姉がこうして元気そうなのは、おそらく修行の差なのだろう。

そして、護堂はいきなり不安を感じた。

だとしたら今の状況、もしかしたら相当に危険ではないだろうかと。

「俺たちが今いるのは南房総市か……」

携帯電話の地図アプリで、すでに確認済みだった。

護堂たちが『最後の王』と戦った山地は南房総の名山・伊い予よヶが岳たけの付近だったらしい。あちらから神速で駆けて山をいくつか越え、ふもとの山里までやってきた。

家々が密集しているわけでもない、山やま間あいの小さな集落だ。

とはいえ、近くの駅まで歩けば鉄道はまだ使える時間である。しかし。

「姐さんさ。電車に乗ったこと、ある？」

「うわさに聞く陸おか蒸じよう気きですね。無論、あるはずないでしょう」

いきなり問題発言だった。今のご時世、蒸気機関車はとっくに引退して、骨こつ董とう品ひんと化している。また、鉄道旅行未経験をふつう『無論』とは表現しない。

不特定多数の一般人も同乗する車両で東京へ——。

かつて羅翠蓮は豪語したことがある。

『わたくしのような身分の者が、民たみと直接交わるなどあってはならないこと』

『我が身を直視した者は己の両目を抉えぐり、我が声を耳にした者

は己の耳を削そぎ、償つぐないとせねばなりません』などと。

　また、人類社会の堕だ落らくは蒸気機関の発明からはじまったという持論の持ち主。

　極端すぎる自然生活主義者だからこそ、電気もない山奥に隠いん棲せいしているのである。

　ゆったりとしたローカル線の道中。義姉がその掌しよう打だで内うち房ぼう線せんの電車をバラバラに粉砕……十分にありうる話だ。方術など使えなくても、我が身ひとつでビルのひとつやふたつ完全破壊しかねない女じよ傑けつなのだ。

　まあ、すでに夜も遅い。東京まで行ける電車があるかもあやしいところ。

　素直にべつの移動手段を検討しようと、護堂は考え直した。

「そうなると自動車だよな」

　この寺に駆け込んだ直後、エリカたちに電話で生存報告をしている。

　自動車で迎えに来てもらうことは問題ないはず。しかし、念のため護堂は訊たずねた。

「さすがに、車に乗ったことなら——」

「もちろんあります。かつて武ぶ林りんの侠きよう客かくたちをひきいて、いくさにみごと勝利したあとの話です。都に凱がい旋せんすると民はこぞって歓喜し、わたくしの武徳を讃たたえて三日三晩も祭りに打ち興じました。あの折は牛ぎつ車しやに乗ってあちこちを練り歩き、歓かん呼こに応こたえたものです」

「なるほど、そう来たか」

　常に予想のななめ上を行く義姉の昔語りに、護堂はつぶやいた。

『車＝都の大通りを凱旋パレードするときの御ご料りよう車しや、しかも動力は牛馬』

　そういう固定観念を持つ羅濠教主。はたして、房総半島の山道・

アクアライン・首都高と乗り継いでいくドライブをどこまで許容してくれるものか？

　多くを期待できないと思うのは、決して護堂が悲観的だからではないはずだ。

　また、ここではたと気づいた。

　万難を排して、東京二三区へ来てもらったとする。

　しかし、義姉の宿泊先をどうすべきか。候補を考えてみた。文ぶん京きよう区くの草薙家、エリカのマンション、沙さ耶やの宮みや家け別邸、香ホン港コン陸りく家けのアジト、秋あき葉は原ばらのあやしいメイドビル。どこを選んでも天てん上じよう天てん下げ唯ゆい我が独どく尊そんの羅翠蓮を満足させられるとは思えない……。

「これ、もしかして『詰んでる』ってやつか？」

　実はチェックメイト寸前である事実を悟って、愕がく然ぜんとしかけたとき。

　夜の山村には不似合いなローターの爆音が空から聞こえてきた。ヘリコプターが一機、ライトで地上を照らしながら接近してくるところだった。

「師し父ふの御威徳は天に輝く太陽の光と等しく、あまねく民草に降りそそぐもの」

　航空自衛隊所属だという大型ヘリの機内。

　五ご嶽がく聖せい教きようの教主であり、武芸の師し匠しようで

もある羅翠蓮にすらすらと美び辞じ麗れい句くを言い立てていくのは、もちろん陸鷹化である。

「中天におわすべき羅濠聖教主が地上の道を往ゆくなどあってはならぬと愚ぐ考こうし、弟子の一存にて、これなる乗騎を用意させていただきました」

「そうでしたか。おまえにしては気が利きいておりますね、鷹児」

「恐縮でございます。が、これも全て師父の御ご薫くん陶とうがあればこそ。弟子・陸鷹化、一分一秒たりとも師父の教えを忘れたことはなく、その全てを戒いましめとして折にふれて己へ言い聞かせ、日々精進を重ねている次第——あ痛ッ!?」

「度のすぎた追つい従しようは醜しゆう悪あくでしかありません」

　気を使い果たしたとはいえ、天下無双の羅翠蓮。フッと軽く吐き出した吐息を衝撃波に変え、拳げん骨こつ程度の威力とする。みごとな離れ業わざを易やす々やすとこなしてみせた。

　その一撃で直じき弟で子しのおでこをはたき、平然とうそぶく。

「おまえも年少とはいえ武林の侠客。誰もが認める快男児たることをめざしなさい」

「ご……ご教示、ありがとうございます……」

　そんなやりとりをよそにヘリは海岸線を飛び、アクアラインに

沿って夜の東京湾を越え、ついに東京都へ帰還を果たしつつある。

　同乗している甘あま粕かすへ、護堂はひそひそ声でささやきかけた。

（鷹化を連れてきたのはさすがですね）

（教主さまの取り扱いマニュアルを熟知しているって点では、まちがいなく世界ナンバーワンの逸いつ材ざいですからね）

（でも、ヘリコプターって夜はほとんど飛ばさないって聞きましたけど）

（その辺も苦労しました。空くう自じの知り合いを拝み倒して、暗視装置を搭載した機体と山岳救助に慣れたベテランパイロットを貸してもらったんです。そこまでしないと、日本じゃヘリの夜間飛行はむずかしいですからね）

　共に限界まで声を低くして、語り合う。

　弟子と同様、羅濠教主はとんでもない聴力を持つ。耳をそばだてれば、今の会話も全て聞き取ってしまうだろう。しかし、彼女がわずかでも甘粕に関心を持つとは思えない。問題ないはずだった。

（ところで、姐さんの泊まる場所ってどうするつもりですか？）

（いろいろ悩みましたが、幸いにもあそこが確保できました。ほら、見えてきましたよ）

（……え？）

　ちょうど東京都墨すみ田だ区くの上空を飛んでいたヘリ。

　その進行方向にはおなじみのランドマークが高々と屹きつ立りつしていた。

「もしかして、あれですか？」

　その高さ、実に六三四メートル。『最後の王』との戦闘で駆けまわっていた山々よりも実は天上界に近い高層建築だ。二一世紀に新造されたばかりの電波塔である。

ヘリの行く手には、東京スカイツリーが待ちかまえていた。

第４章　流浪する剣神

1

「残念だわ。結局、肝心なところに間に合わなくて……」

　心からの感想をプリンセス・アリスはため息と共に吐き出した。

　今、彼女は日本の関東地方にいる。斉せい天てん大たい聖せい・孫そん悟ご空くうの一件以来となる、数か月ぶりの来日であった。あのときと同じく、霊体のみの訪問である。

　プリンセス・アリスは精神感応の霊れい力りよくに熟達している。

　ごく一部の巫み女こだけが会え得とくできる、きわめて希少で特別な力だった。この霊能によって、肉体から切り離した霊体を遠隔地に送りこむことも可能となる。

　もちろん食事はできないので、旅行の楽しみは半分以下になってしまう。

　だが、代わりの楽しみもあった。アリスが今やっているように、ふわふわ宙を移動できる霊体の利を活いかして、空の旅を満まん喫きつするのだ。

　千葉県・南みなみ房ぼう総そう市しの上空、標高の低い山々を見おろしながらの飛行だった。

　見わたすかぎり、山ばかりである。人の集落はまばらに点在する

だけ。このエリアの人口はそう多くないはずだ。

「せめて、うわさの勇者さまの居場所を特定したいところね」

　生身で上空五〇〇メートルからの景色を堪たん能のうできる者は数少ない。

　その特権を満喫するアリスは、朝焼けの空のもとにいた。

　ついに復活した『最後の王』と草くさ薙なぎ護ご堂どう・羅ら翠すい蓮れんの両カンピオーネが交戦してから、数時間後の早朝だった。

　昨日の夜まではパラス・アテナの消息を追って、フィリピン領内にいた。

　神しん祖そが日本へ上陸した旨むねと『最後の王』降こう臨りんの情報は、賢人議会の東京駐在員より報告されたものだった。

　すわ一大事と日本へ急いだものの、すでに戦闘は終わっていた。

　仕方なく、せめて偵てい察さつでもと空の旅を思い立ったのである。

「草薙さまと早くお話ししないとダメよね。完全に日が昇るのを待って、エリカに連絡を入れようかしら。羅ら濠ごう教きよう主しゆは……仕方ないから、当たって砕けろだわ」

　中国江こう南なんのカンピオーネと対面した経験は一度しかない。

　先方はおそらくアリスの顔を覚えていないだろう。賢人議会の議

長クラスでも天下の羅翠蓮にとってはその程度の存在なのだ。

　この機会にもうすこし親密にならなくちゃ——と、思った矢先だった。

　不意にアリスはゾクゾクと寒気を感じた。寒暖など関係ないはずの霊体であるのに、なぜかいきなりそうなった。

　ふらっと体が揺らいで、南房総の大地へと降下していく。

　意図して高度を落としたのではなく、急に安定飛行ができなくなったのである。

「力が——抜けていく……？」

　アリスは気づいた。己おのれの霊体から呪じゅ力りょくがどんどん抜けている。

　このままでは飛行どころか、幽体離脱の状態も維持できなくなるだろう。早く本体へ——グリニッジの館やかたで眠るアリス自身の肉体へもどらなくてはいけない！

「不吉を告げる……風？」

　霊感に刺激を受けて、欧おう州しゅう最高の巫み女こ姫ひめはささやいた。

　今朝はやけに風が強い。高度五〇〇メートルをびゅうびゅうと吹く強風のなか、アリスは空中散歩をふわふわと楽しんでいたのだ。

　しかし、意識がすこし朦もう朧ろうとしてきた。そろそろ限界か。

「ま、また必ずもどってこなくっちゃ。こんな面白——じゃなくて大変な事件、蚊か帳やの外でいるなんて絶対にごめんだもの……」

高貴な血筋につらなる姫君にして、ややミーハーすぎる野次馬根性の持ち主。

プリンセス・アリスは悲ひ愴そうな決意と共につぶやくと、霊体をイギリス本国に緊急帰還させるべく精神集中をはじめるのであった。

2

昨夜の『最後の王』復活は、いくつかのニュースを日本にもたらしていた。

まず、房ぼう総そう半島南部に墜つい落らくした隕石の件。謎の飛行物体が衛星軌き道どうより落ちてくる——その軌跡を目撃した人々が多数いたのである。

東京湾周辺の千葉・東京・神奈川エリアでは、ちょっとした騒ぎになったらしい。

南房総の山中に穿うがたれたクレーターなども直じきに発見・報道され、日本国民に大きな不安をあたえることだろう。

しかし、それはまだ序章に過ぎない。

浮島墜落のあと、『最後の王』覚醒前に夜空を彩いろどった黄金のオーロラ。

これが顕あらわれたのは護ご堂どうたちの頭上だけではなかった。なんと関東平野の上空をほとんど埋め尽くすほど大規模に広がっていたという。神奈川県・東京都・埼玉県・千葉県・茨城県のほぼ全域、さらには栃木県・群馬県の一部にまで——。

また、今日は朝から風がかなり強い。

特に都心部のビル風が強い辺りでは、気を抜くと体ごと持っていかれそうになる。

「さすがに、いつもみたいに情報操作ってやつも上う手まくできな

いか」

　護堂はしみじみとつぶやいた。

　数々の異常現象が発生した翌日だが、休校にはならなかった。朝から落ち着かない様子の同級生・教師らと共にひととおりの授業を終えたあとである。

　そばにいたリリアナもうなずく。

「かなりの広範囲で超自然現象が目撃されていますからね」

「昨日の夜のことは日本国外でも大きなニュースになっているわよ」

　エリカが教えてくれた。学校帰りなので、みんな制服を着ている。

　尚なお、ふたりといっしょにやってきた場所は墨すみ田だ区くの東京スカイツリー。高速エレベーターで天望デッキをめざしている途中だった。

「まあ、スカイツリーの完全閉へい鎖さが騒ぎにもならないのは、そのおかげだけどな……」

　言った直後にエレベーターは停止、扉が開く。

　ふたりの騎士と共に、護堂は天望デッキへ足を踏み入れた。

　高さは地上三五〇メートル。壁の代わりにガラス窓で周囲三六〇度をぐるりとかこみ、大都会・東京の摩ま天てん楼ろうを一望できる。護堂も前に来たことがあった。

　しかし、今日の天望デッキは以前とまったく異なる姿に変わりはてていた。

　床に敷かれた絨じゆう毯たんは紅あかく、ふかふかで、踏めば踵かかとまで埋まるほどだ。カウンター、公式ショップ、カフェ、レストラン等のテーブルをはじめとする調度類は撤去されるか、目立たないよう巧たくみにカモフラージュされている。

　代わりに瀟しよう洒しやなデザインの文ふ机づくえやソファな

ど、最小限の家具を搬入。

　上品で落ち着いた、隠れ家風ホテルのロビーとでもいうべき空間に仕上がっていた。やたらと眺望のいい高度三五〇メートルのロケーションをのぞけば、だが。

　そして、厚さ五メートルもある特殊ガラスの窓まど際ぎわで。

　魔教教主・羅ら翠すい蓮れんその人が結けつ跏か趺ふ坐ざしている。背景は東京の青空だった。

　現在、スカイツリーの天望デッキと、さらに上層にある天望回廊は彼女の宿泊施設として活用されているのだ。

　昨晩、正せい史し編へん纂さん委い員いん会かいが強制徴ちよう発はつし、突とつ貫かん工事で改装を施したという。

『ホテルのスイートや迎げい賓ひん館かんにおとなしく泊まってくださるはずはありませんし。国会議事堂や東京都庁をまるごと差し出しても、教主さまにご満足いただけるとは到底思えないですからねえ……』

　昨晩、甘あま粕かすが口にしたコメントである。

　尚、羅翠蓮はここへ通された直後、つまらなそうに眉まゆをひそめたのだが、〝日本で最も高い建築物からの眺望〟にそこそこ自尊心を満足させたらしく、拒絶の言葉を冷たく言い渡したりはしなかった。

現在、東京スカイツリーは完全閉鎖中。関係者のみが出入りできる。

「調子はどうだ、姐ねえさん？」

「よくはないですね。今朝も夜明けと共に内ない功こうの修練をはじめて、失った気の回復に努めていたのですが……進しん捗ちよく芳かんばしいとは言えません」

護堂の問いかけに、義あ姉ねは重々しく答えた。

座ざ禅ぜんめいた結跏趺坐の姿勢はどうやら内功のためらしい。

尚、羅翠蓮から離れた場所では十数名の男女が整列し、宮廷で働く従僕たちのように待機していた。

スーツの者もいれば、開かい襟きんシャツや作業着姿の者もいる。

正史編纂委員会のスタッフと、香港ホンコン陸りく家けの舎しや弟ていたちなのだろう。全員が『気をつけ』の姿勢で直立不動。がちがちに緊張しきっていた。教主の御前でわずかでもミスを犯おかせば、厳罰の対象になるとわかっているのだ。

しかし、この列に加わっていない者もいた。

清せい秋しゆう院いん恵え那なと万ま里り谷や祐ゆ理り、そして甘粕冬とう馬ま。羅ら濠ごう教きよう主しゆの知ち己きを得ている——と言えなくもない三名である。彼女たちは隣国からの客人を〝おもてなし〟するため、朝からスカイツリーに詰めていた。

尚、媛ひめ巫み女こふたりは正装ということか、巫み女こ装しよう束ぞくであった。

「姐さんのためにわざわざ学校を休んでもらって悪いな」

恵那の場合は『東京にいる＝学校をサボリ中』なのだが、それは

言うまい。

　しかし、声をかけてから護堂は気づいた。おおらかな恵那が珍しく怒ったような視線で、巫女仲間をにらんでいる。

　また祐理の方は驚くほど顔色が青く、居心地悪そうにしている。

「どうかしたのか、ふたりとも？」

「聞いて王様。祐理ったら、すごい熱があるのにずっと黙ってたんだよ。言ってくれたら、今日は休んでてもらったのにさ」

「す、すごいというほどでは……今もこうして動けていますし」

　友人のぷりぷりとした口ぶりに恐縮しながら、祐理が言う。

　たしかに、体がすこしふらついている。護堂は彼女のそばへ行き、手をのばした。

「本当だな。かなり熱が出ている感じだ」

「ご、護堂さん⁉」

　顔をのぞき込みながら額ひたいにさわると、祐理がびっくりした。

　もともと頑健とはいえない少女で、最近は体調を崩しがちだ。責任感の強い大和やまと撫子なでしこはこういうとき、必要以上に我慢してしまうのではないか？

　それをあやぶんだ護堂の手に、携帯用のカイロと同じほどの熱さが伝わってくる。

「姐さん。悪いけど、万里谷はすこし休ませてもらう。かまわないだろ？」

「おまえに仕つかえる巫女です。おまえの裁さい量りようで好きにあつかいなさい」

　断りをいれるというよりも有う無むを言わさぬつもりで護堂が問うと、義姉は鷹おう揚ようにうなずいてくれた。一方、祐理はといえば恥ずかしそうにうつむいている。

「あ、あの……そろそろ手を……。みなさんが見ていますし」

　おずおずと訴えられて、護堂は気づいた。媛巫女の額にさわったままだ。

　あわてて手を離す。いきなりの狼ろう藉ぜきで怒らせたのではと不安になったが、祐理は熱以外の理由で顔を真っ赤にしながらも、どこかうれしそうだった。

「変われば変わるものね、護堂。この間まではわたしに手をにぎられただけで、あなたの方があわてふためいていたというのに」

「結局、女性関係でも順調に開き直りと成長を重ねているということですね……」

「こう言うと不ふ謹きん慎しんだけど、ちょっと祐理がうらやましいよねー」

　エリカがやや不機嫌に言うと、リリアナと恵那までうなずいてみせる。

　仲間たちの反応にたじろぎつつも、護堂は恥ずかしげな祐理をソファまで連れていき、やや強引にすわらせた。

「……そういえば、鷹よう化かのやつはどこに？」

「斥せつ候こうに行かせています。『最後の王が何処いずこにひそんでいるか、その足と目で捜し出し、師に報告せよ』と命じて。鷹よう児じは『一命に換かえても』と飛び出していきました」

　話題をそらすために訊きけば、厳格すぎる女おんな師し匠しようが即答した。

　陸鷹化は今頃、広い房ぼう総そう半島を駆けずりまわっているのだろうか。あるいは要領のいい義お甥いのこと、どこかでちゃっかりサボっているのか。

　想像する護堂へ、弟子の苦労などまったく気にかけていない義姉が言う。

「ところで、おまえもなかなか気が利ききますね」

「俺が？　どういう意味だよ、姐さん？」

「その者、鷹児の代わりにわたくしに仕えさせるため、連れてきたのでしょう？」

　己が世界の中心にいると確信して疑わない、羅翠蓮の発言。

　万事を自分に都合よく解釈する彼女の視線を追う。魔教教主が言う『その者』とは——金髪のイタリア人少女、エリカ・ブランデッリだった。

「以前、おまえと立ち会う前にも思ったものです。倭わ国こくの王・草くさ薙なぎ護堂はよく気のつく家臣を召しかかえていると。その娘、わたくしが出会ったなかでも特に聡そう明めいな逸いつ材ざいであると言えましょう。この羅濠の侍じ従じゆうにふさわしい娘です」

「じ、侍従？」

「お誉ほめの御言葉、恐縮でございます。教主」

　思いがけない指名に仰ぎよう天てんする護堂をよそに、エリカがすばやく頭こうべを垂れた。

「非才なる我が身ではありますが、ご許可をいただけるのであれば御おん身みのおそばにひかえさせていただきたく存じます」

「許します。娘よ、名はたしかエリカと申しましたね」

「エリカ・ブランデッリの名をご記憶いただけていたとは光栄の極きわみ。いつぞやは数々の非礼を重ね、失礼いたしました」

「全ていくさ場での振る舞いです。気にしてはおりません」

　自覚のない暴君・羅濠教主にエリカは物もの怖おじもせず、うや

うやしくはあるものの、むしろ堂々と気品を持って対たい峙じしている。

目が合うだけで『無礼な！』と目を抉えぐられるかもしれない相手だというのに。

テンポのよい掛け合いを眺めながら、護堂は「なるほどなあ」と感心した。

いつか鷹化が言っていた。『師し父ふは僕らの言葉遣づかいを失礼に感じると、すぐお怒りになるんです。そのくせ、めいっぱい下した手てに出て丁重に接しても卑ひ屈くつすぎるって激怒して……。本当にめんどくさい人ですよ』と。

だが、その手のさじ加減はエリカの得意技のひとつ。

今もまったく問題なく中華思想を体現する貴人と接している。おそらく前に日につ光こうで出会ったとき、義姉はエリカの聡明さに目を留とめていたのだろう。

「リリィ。紅茶をいれてもらえるかしら？」

「わ、わたしが？」

「カンピオーネの魔王方のなかでも特に強大で、しかも草薙護堂の義姉に当たる御方よ。お茶の一杯であっても、最高のものを味わっていただくべきだわ」

「まあ、それはそうだが……」

宮廷の女主人よろしく優雅に要請するエリカ。

ぶつぶつ言いながら用意されていた茶器一式へと向かうリリアナ。

そして、デッキの一角に整列し、直立不動だったスタッフたちはあからさまにホッとした表情ばかりである。死を覚悟して魔教教主に奉仕せずともよいと安あん堵どしたのだ。

……尚、この天望デッキはもちろん宿泊施設として造られていない。

貴人を泊めるにあたっては、もろもろの不都合が生じてくる。そこを穴埋めするのが待機しているスタッフたちの尽力と必死の努力であった。

唯ゆい一いつの幸運は、羅翠蓮がもともと山奥の庵いおりで暮らす身であることだった。

居住性や快適さを宿泊場所に求めたりしない。代わりに『己の身分にふさわしい格式やロケーションであるか』にこだわり抜く。そんな彼女へのエクスキューズとして、日本で最も高い建造物というアドバンテージはほどほどに有効だったようだ。

そして、十数分後。

護堂たちは紅茶をお供に一服することになった。

上かみ座ざというべき位置のソファにひとりで悠ゆう々ゆうとすわるのは、やはり羅翠蓮である。

その右隣のソファに義弟おとうとである護堂と祐理、左隣のソファには教主より直じき々じきに名指しされたエリカが腰かける。

近くにはリリアナ、恵那、甘粕らも立ったままでひかえる。

地上三五〇メートルの天望デッキで、しかも今日はかなりの強風。床どころかスカイツリー全体がぎしぎしと揺れている。だが、誰も気にしない。

より危険な存在が今も日本のどこかをさすらっているはずなの

だ。

「実はさ。この間、ルクレチアさんが言ってたんだ。『最後の王』の正体を突き止めれば、俺の——ウルスラグナの剣はいつもより威力を増すだろうって」

　護堂はおもむろに語った。

　ルクレチア・ゾラが受けた啓けい示じ『むかしむかし、あるところに——』のことも。

「日本昔話における大定番の枕まくら詞ことばですか。とはいえ、昔話・民話の類たぐいはたくさんありますからねえ……。せめて、どのお話かがわかれば助かるんですけど」

　不確かすぎる情報を得て、甘粕がぼやいた。

「まあ、鋼はがねの英雄にかかわるエッセンスを持つ昔話だと、メジャーどころでは桃太郎・金太郎・酒しゆ呑てん童どう子じをはじめとする鬼退治ものあたりが当てはまりますかね。妖怪関係にまで目を向ければ、ひょっとこ・一つ目小僧・山姥やまんば・天てん狗ぐ……」

　それでも候補作をあげるところは、さすが博識のエージェントであった。

　鬼・山・火・一つ目・隻せつ脚きやくなどの要素を持つ昔話。そのルーツは里ではなく、山で生活する製鉄民および鉱脈にかかわる人々にあることが多いのだと彼は語る。

「鋼の英雄とは『鉄剣』を擬人化した存在です。その伝承はやっぱり、鉄に関する知識と技術を持つ集団から生まれるんですよ」

　そう語る甘粕の横で、リリアナも思案顔で言う。

「今まで明らかになった『最後の王』の特徴は——弓矢を使用し、流る浪ろうを重ねる生涯であったこと。同系統の神話がユーラシア大陸の東西に伝でん播ぱしているが、起源はヨーロッパよりもアジアにあるらしいこと。そして、日本の民話との関係……ますますわからなくなってきたな」

「あとは祐理の授かった啓示だよねえ」

　昔、海に邪じや竜りゅうあり。王は乃すなわち箭やを放ち、まさに竜の胸を破る――。

　恵那はその一節を口ずさんでから、ぼやき節ぶしのマスターニンジャをちらりと見た。

「ねえ甘粕さん。今のやつをどんな本で読んだのか、結局思い出せた？」

「いいえ、残念ながら。やっぱり勘かんちがいだったのかもしれません」

　そこで着信音を鳴らした携帯電話は――なんと恵那の持ち物だった。

　清秋院恵那はこの文明の利器にとにかく無む頓とん着ちやくで、バッテリーが切れていることも珍しくないというのに。

「あっ。鎌かま倉くらの志し保ほ子こからだ。やった、東京駅にもうすぐ着くってさ」

「相模さがみの媛巫女にわざわざ呼び出しをかけたんですか？　言っちゃアレですけど、今の状況であの方がいても、あまり足しにはならないような……」

　携帯電話でメールチェックをした恵那に、甘粕が意見する。しかし、太た刀ちの媛巫女はにんまりと笑った。

「大丈夫だよ。志保子には『名伏せ』の霊力を――甘粕さんに使ってもらう予定だから」

　いきなり名指しされて、甘粕が「!?」とのけぞる。

　いつも昼ひる行灯あんどんなエージェントらしくない反応に、護堂は首をかしげた。

「それってどういう力なんだ？」

「使える媛巫女は今、志保子しかいないんだけどね。人の記憶をいじって、書きかえることができる特別な霊力なんだ。で、書きかえる以外にも頭のなかを調べて、その人が忘れているような過去の記憶を探り当てたり――」

「ち、ちょっと待ってください！」

　珍しく声を荒らげて、甘粕が割り込んできた。

「名伏せによる記憶検索、そんなに成功しないって話ですよ！　しかも、頭のなかをしっちゃかめっちゃかにされた対象者が記憶障害を起こす可能性ありっていわく付きの！」

「くわしいね、甘粕さん。でも、記憶障害は二、三〇人にひとり出るかもってくらいの確率らしいし……大丈夫じゃないかなあ、たぶん」

「確率をともなう話で楽観論に期待しないでくださいよ！」

「でも、馨かおるさんの許可もちゃんと出ているし」

「まずは被験者の意思を最優先にするべきですっ。理り不ふ尽じんな業務命令には辞表の提出と無断欠勤で抵抗することが――」

「六ろく度ど集じつ経きよう」

　口論が白熱するなか、不意にエリカがつぶやいた。

「古い仏典……『六度集経』。そこに収録された物語のひとつ。昔、とある王国に邪竜が現れたとき、『王は乃ち箭を放ち、まさに竜の胸を破る』――。また、この王はすばらしい徳を持つ菩ぼ薩さつの化け身しんでもあった……」

　驚く一同の視線を浴びながら、金髪の美少女は淡々と語る。

　エリカ・ブランデッリは名門の魔術師として英才教育を受けた天才児。

　が、生まれも育ちもイタリアのミラノである。さすがに東洋の仏典をそらんじているはずはなかった。エリカが語りはじめる直前、隣のソファにすわる一いつ笑しよう千せん金きんの佳か人じんがさりげなく手招きし、ひそひそと耳打ちしたのだ。

　今のささやきは、智ち勇ゆう双そう全ぜんの羅濠教主が授けた知識にまちがいなかった。

　虚こ空くう蔵ぞう求ぐ聞もん持じ法ほう。

　羅ら翠すい蓮れんが会え得とくした秘法のひとつである。修得者は一読した仏典の内容を全て、一いち言ごん一いつ句くも欠けずに記憶できるようになるらしい。

　虚空蔵菩ぼ薩さつを一心不乱に念じることで、超人的な記憶力を得る術だという。

「その竜殺しの物語と同じ一文が記された書物……わたくしが知るかぎりでは『六ろく度ど集じつ経きよう』のみですね。まちがいありません」

「弘こう法ぼう大だい師しの空くう海かいさんも会得していたっていう術だよね。さすが教主さま……」

　羅翠蓮の断言を聞いて、恵え那なが舌を巻いている。

　もちろん護ご堂どうも同感だった。気を使いはたして万全とはいえない身でも、数々の異才を見せつける。さすがと賛さん嘆たんする以外にない。

　また、仏典――仏教の経典が出所と知って、護堂は意外にも感じた。

「そういう本って、仏様の教えとか仏教の説話ばかりが書かれていると思ってたよ。昔話とか神話みたいなのも載のってるんだなあ」

「文化の伝でん播ぱという観点から視みると、仏教はおそろしく影響力の強いツールですよ」

　ここぞとばかりにうんちくを語るのは、やはり甘あま粕かすだった。

「『昔、こんな話があった——』みたいな語り口で、アジア各地の神話をちゃっかり仏様がらみの説話に書きかえて収録する。実はこれ、いろんな仏典がやっています」

「そんなにですか」

「ええ。あと、忘れていけないのは古代世界における仏教の立ち位置が今こん日にちとはまったく異なるという点です。みんな、ものすごく熱心に勉強したんですよ」

　どこかうれしそうに知識を披ひ瀝れきする。いつもの甘粕節ぶしがはじまった。

「たとえば中国では、魏ぎ・呉ご・蜀しよくの三国時代と晋しんの治世のあと、五ご胡こ十じゆう六ろつ国こく——騎馬民族たちの国々が台頭しました。もう三国志なんて目じゃない戦乱の世だったんですけどね、代わりに心の平穏を求める風潮が生まれまして。当時、外来の宗教だった仏教を荒々しい軍事国家の王様たちが尊んで、各地への布教が一気に進むんです」

「じゃあ、日本だと？」

「日本のケースですと、仏教は大陸の先進技術とセットで渡来してくる先進的な宗教かつ思想であり、学問でした。その導入に腐ふ心しんする知識人と特権階級もすくなくなかった。漢訳されて中国に伝えられた仏典なら、漢文の素養がある日本人も読解できますしね」

　やや早口に語ってから、甘粕はさらに言葉を継ぐ。

「『最後の王』の起源がアジアのどこかにあるとしましょう。彼の神話はまず汎はんユーラシア的な英雄譚たんとして、民族移動や交易の流れに乗って、大陸の東西に形を変えながら伝播していったは

ずです。さらに仏教説話という形でアジア諸国の教養人が知るところとなり、彼の神話のエッセンスは微修正を施されつつもさらに流る布ふしていく。もしかしたら、私たちが想像していた以上に彼の物語はアジア各地に深く根付いているのかもしれません……」

　徐々に自分の世界に入っていく甘粕。しかし、誰も止めない。

　いつものように霊れい視し力りよくで真実を見抜くことができない以上、智力と知識によって正解を見み出いだすしかない案件なのだ。そして、もしかしたら。

　もしかしたら今、甘粕がその答えに最接近しているのかもしれない——。

「要素を整理してみましょう。彼は竜／魔王を討つ者です。この討とう伐ばつ対象は魔物とか鬼に互ご換かんしてもいい。そして流浪——旅する者でもある。安住の地を持たない……あるいは目的地に向けて、旅の途中である……」

　このひとり語りに聞き入りながら、護堂はふと気づいた。

　博識なエージェントのとぼけた顔を、いつのまにか羅翠蓮が見つめている。

「女神キルケーは彼がアルゴー号の系けい譜ふに連なると言った。金きん羊ようの毛皮を求めて航海した勇者たちの船。海を越えゆく冒険者です。海を旅する英雄。海に邪竜あり。仏典。漢かん書じよ。日本への伝播。鬼退治。鬼ヶ島。つまり、ということはアレがこうなって、ああなると……」

　やがて、数分間の沈ちん思し黙もつ考こうを経へたあと。

　ある名前を甘粕冬とう馬まはぼそりと小声でつぶやいた。

　護堂にとっては初めて聞く名前だ。エリカとリリアナ、それに祐

理と恵那もぴんとこない様子だった。あまり有名な人物ではないのかもしれない。

　しかし、大きくうなずいた者がいる。

「なるほど、たしかに。言われてみれば、得とく心しんのいく名前です」

　智と武の頂点を共にきわめた羅ら濠ごう教きよう主しゆの言葉だった。

「かの英雄の名に思い至らなかったのは、この羅濠にあるまじき失態であったとも言えましょう。しかし、その者がすばらしき慧けい眼がんであったこともまた事実。――エリカ」

「なんでございましょう、教主」

「その者にわたくしの名で報ほう償しようを授けなさい。それに値あたいする手て柄がらです」

「かしこまりました。仰おおせのままに」

　如じよオさいなく答えてから、エリカはくすっと微ほほ笑えんで甘粕へウインクした。

「甘粕さんに最大限の賛さん辞じを捧ささげるべき場面のようね。教主のお墨すみ付つきがこんなふうに出るだなんて、百年に一、二度あればいい快挙かもしれないわよ？」

「いや、まあ、それについては恐きよう悦えつ至し極ごくではありますが」

　誉ほめそやされて、逆に甘粕は渋しぶい表情になった。

「教主さまに認めていただいたうえに自分で言うのもなんですけど、結局のところ確証がないんですよねえ。祐理さんの霊視とかとちがって」

「たしかに。あと、名前の確証がないこと以外にも」

　今度はリリアナが憂うれい顔でつぶやいた。

「『最後の王』には不可解な点がかなり多い。盟めい約やくの大だい法ほうのすさまじすぎる威力。その時代のカンピオーネを殲せん滅めつさせる役割。どれもほかの神々にはない特徴です。ただ名前を解き明かすだけでは、彼の真実を知ることにはならないような……そんな気もします」

　おそらく、これは霊視の啓けい示じなのだろう。

　みんなの話をひととおり聞いて、だったらと護堂は決心した。

「結局、確かめにいくのがいちばんってことだな」

「って王様、一体どこへ？」

　きょとんとした顔で訊きく恵那へ、護堂は言った。

「忘れたのか。おまえのおじいちゃま——幽世かくりよのスサノオたちは『最後の王』の正体を知ってるはずだぞ、たぶん」

「あ、そうか。でも教えてくれないよ、絶対に」

　誰よりも神々と間近で接してきた媛巫女は即座に断言した。

「『最後の王』の真ま名なって、きっと人間には決して明かしてはならない神界の極秘事項なんだと思う。おじいちゃまもいいかげんに見えて、れっきとした神様だからね。そういうところはしっかり締めるはずだよ」

「だろうな。教えられることならアテナがとっくに言ってるだろうし」

　恵那の指摘を認めてから、護堂は「でも」と続けた。

「実は俺、スサノオのところで何度か神様以外の人にも会ってるんだ。あの人なら……教えてくれそうな気がする。まあ、それこそ確証はないけど」

　奇妙な縁で何度か顔を合わせた幽世の媛ひめ——。

　彼女の美貌といっしょに思い浮かぶのは、不思議なことに月下の草原だった。

　そこで玻は璃りの瞳ひとみの媛と出会い、異国情緒あふれる楽器の音ねを聞いた覚えがある。いつの出来事か、まったく思い出せないというのに。

　だが今、護堂は確信を抱いていた。

　媛はあのとき、『最後の王』の正体についてのヒントをくれていたのだ。

　そして当の英雄が甦よみがえり、この大事件と向き合う準備のできた今の自分があらためて訊たずねるのであれば、もしかすると——。

　護堂は目の前の仲間たちへ言った。

「あそこに行くにはみんなの力を借りなくちゃいけない。万里谷には特に面倒をかけることになると思うけど、頼まれてくれるか？」

「は、はいっ。もちろんです。私にできることでしたら何でもいたします！」

　今まで沈黙を保っていた万里谷祐理。

　ひかえめな性格と高熱の両方が理由だろう。しかし、みんなの話にはずっと熱心に聞き入っていた。護堂の要請もすぐに了解し、勢いこんで立ちあがる。

　が、その瞬間だった。

「あ……」

　と祐理はつぶやいて、立ちくらみを起こし、倒れこんでしまった。

4

　めざめると、目の前に黄色い花々が咲き乱れていた。

　季節は冬だというのに、この野山には一足先に春が来ている。そ

うと悟って、蒼あおき髪の貴公子――『最後の王』の名で呼ばれる彼は微ほほ笑えんだ。

　昨晩、草くさ薙なぎ護ご堂どうとその義あ姉ねを相手に戦い、盟めい約やくの大だい法ほうまで行使した。

　その後、破壊の爪つめ痕あとが生々しいクレーター付近を離れて、ここまで歩いてきたのだ。

　全身の熱が鎮しずまるのを待つため、適当な大樹によりかかり、救きゆう世せいの神刀を鞘さやごと抱いて眠りについた。

　彼の生涯は流る浪ろうの連続であり、人里にいなかった時期も長い。

　こうして野で眠ることに何の抵抗もなかった。そして今、めざめれば目の前に咲き乱れる可か憐れんな花々。豪ごう奢しやな宮殿のやわらかな寝台では味わえない野や趣しゆである。

　温暖な南みなみ房ぼう総そうの里山では、十二月後半には早咲きの菜の花を堪たん能のうできる――。

　そんなことを彼が知るはずもない。

　野山でひっそりと生まれた命の可憐さを、ただ愛めでるのみだった。

「……熱はもうだいぶ下がったか」

　昨晩から今まで眠りつづけたことで、ほどほどに鎮まっている。

　うなずいて『最後の王』は立ちあがり、黄色い花々の間に足を踏み入れる。もっと間近で小さな野花の可憐さを愛でようという思いであったが――。

「嗚あ呼あ」

　彼は嘆たん声せいを発した。

　黄色い菜の花たちが一瞬にして枯れ果てたからだ。

　時ならぬ烈はげしい熱波にさらされ、炙あぶり焼きにされて、命

と水分をことごとく奪われてしまったといわんばかりに。

　——これ以上は下がらないのだ。彼はかぶりを振って、歩きはじめた。

　地に生える草はその足に踏みしめられただけでしおれ、枯れていく。彼がそばを通っただけで木々は潤うるおいを失い、瘦やせ細った枯木と化していく。

「急がなければならないようだ……」

　今、『最後の王』の力と熱は臨りん界かいまで高まっている。

　このままではまずい。いにしえの世で幾度もそうなったように、災さい厄やくの数々が遠からぬうちに地上を脅おびやかすようになるだろう……。

　彼の呼び名、正確には『この世の最後に顕あらわれる王』という。

　神殺しの羅ら刹せつ王おうたちが幾人も覇はを競う末まつ世せに降こう臨りんし、世界を平定する者。

　そういう意味合いの呼称だが——彼は知っている。彼の存在こそが『この世の終わり』を導きかねない引き金でもあることを。

　それを防ぐための手段はひとつしかなかった。

　当代の神殺したちを訪ね歩き、生死をかけて決闘を繰りかえす。それだけであった。

「今日はずいぶんと暖かくなかったですか、護堂さん？」

「たしかに。まだ二月だってのに、もう春が来たみたいでしたね」

　東京スカイツリーの義姉を訪ねた日の夜。

　仲間たちと共に護堂は沙さ耶やの宮みや家け別邸に居場所を移していた。いつもの書斎ではなく客室に集まったのは、熱で倒れた祐ゆ理りを寝かせるためだ。

ベッドで眠る媛ひめ巫み女このそばにはリリアナと恵え那ながいる。

護堂とエリカはすこし離れた客室の中央で、沙耶宮馨かおると向き合っていた。

「実はですね。シベリアからの寒波の影響で、今日の関東地方はこの冬いちばんの冷え込みになっていたはずなんです。気圧の配置などからすると」

「…………」

「にもかかわらず、実際はこのとおりの陽気です。東京湾の水温も上昇しつつあるという報告が来ています。そして、同じ日に祐理が熱を出した」

「まあ、祐理はこのところ体調を崩しがちだったから」

馨に代わってエリカが口を開いた。

「偶然で片づけてもいい話だわ。でも一時間ほど前、グリニッジの賢人議会——プリンセス・アリスから連絡があったの」

「アリスさんから？」

「プリンセスは神しん祖そパラス・アテナの動きを追って、すこし前からヨーロッパからアジア方面へいらしていたそうなの。それで今夜、東京のわたしのところへお出いでいただく予定だったのだけど……中止になったわ」

エリカの表情は明らかに物もの憂うげだった。

「ねえ護堂、あの方の秘密を覚えている？」

「あれだろ。外出するとき、アリスさんはいつも幽体離脱しているっていう」

「ええ。今回のアジア遠征もそうしていたそうよ。肉体はグリニッジの屋敷で眠ったまま、霊体だけをこちらに飛ばして。でも、お体の方が急に高熱を出されて……」

「万ま里り谷やと同じか！」

「大事を取って、霊体を一度お体にもどして様子を見ることになったわ。ただ、プリンセスはあなた宛あてにメッセージを残してくれたの」

　驚く護堂へ、エリカが携帯電話の液晶を見せてくれた。

　メールが表示されている。日本語で書かれているのは護堂宛だからだろう。さすが語学堪たん能のうな公こう爵しやく家け令嬢だった。

『火と風は凶事の先駆け。海と大地の異変にご注意くださいませ』

「…………」

　予見の霊れい視し力りよくを持つ巫女姫からの警告。驚く護堂へ、馨が言う。

「甘あま粕かすさん流に言えば、風は火を起こし、火は鉄鉱石を溶かすものです。溶かした鉄は鋼はがねの鉄剣となり、海と大地を征服する——。突然の温暖化と強風、どうやら『最後の王』覚醒の副産物であるようですね」

　ベッドサイドではリリアナと恵那が熱に倒れた媛巫女を見守りつつも、この話にしっかり耳をかたむけていた。

　銀髪の騎士はおもむろに発言した。

「プリンセスと万里谷祐理はどちらも神祖の血筋につらなる巫女。しかも先祖返りというべき高水準の霊力をそなえています。ふたりとも体が弱いのはその影響でしょう。そして、神祖は大だい地ち母ぼ神しんの生まれ変わり。いわば〝大地の娘〟」

「ご先祖さまに近い分、大地の異変から影響を受けやすいんだね……」

　しんみりと恵那が言う。

　護堂もうなずいて、ベッドで眠る祐理を見つめた。

「今夜はもう無理に起こさないで、ここでこのまま寝ててもらうのがよさそうだな。あとでひかりに電話をかけておこう」

「了解しました。そちらはおまかせください。ところで護堂さん」

　不意に馨が話題を変えた。

「覚えておいでですか？　昨晩の戦いの途中で地震が起きたことを」

「はい。『最後の王』が弓を出したときですよね。すぐにおさまりましたけど」

　最強の武器を呼び出すだけで大地は揺れ、天も震える。

　やや大げさすぎるが、救世の英雄という大看板に恥じない演出でもある。

「昨夜、あのときの地震とほぼ同時刻に、気になる現象が確認されているんですよ。単なる偶然かもしれませんが、甘粕さんに調査へ行ってもらいました」

　そういえば、甘粕冬とう馬まはここに来ていない。

　沙耶宮家別邸には寄らずに、スカイツリーから現地へ向かったのだろう。

「それって、どこで何が起こったんですか？」

　そう訊たずねたとき、ベッドの祐理が「ん……」とうめき声をあげた。

　護堂と馨は話を中断して、媛巫女の方へ視線を向ける。ほかのみんなも同じだ。注目が集まるなか、祐理はがばりと身を起こした。

　はあはあと息を荒らげながら、彼女は呆ぼう然ぜんとまわりを見まわしている。

「い、今のは夢……？」

「もしかして、何か視みえたの？　夢見のお告げとか？」

　慣れた様子で、枕元から恵那が話しかける。

　護堂のそばに来た馨がそっと耳打ちしてくれる。「つまり夢のなかで霊視の啓けい示じを受けたのかと訊きいているんですよ、恵那

は」と。

一方、明らかに悪夢を見たらしい祐理はかぼそい声でつぶやいた。

「そ、そうだと思います。ただ、とにかく恐ろしい夢だったもので……」

あまり軽々しく口にしたくないらしい。

祐理はしばらく沈黙を続けて、呼吸を落ち着かせた。それから決然と顔を上げ、客室に集まった一同をあらためて見まわしてから、おもむろに告げる。

「ひとまず、私が視たものをみなさんにもご覧いただきたいと思います」

ベッドの上の媛巫女は胸元で腕を組み合わせ、両目をつぶった。

巫女装しよう束ぞくをまとった全身から白い光が放たれる。祐理がプリンセス・アリスから学んだ得意な霊力・精神感応が発動した証あかしだった。

「私の心にある夢の様子を、こちらに映し出してみます」

精神感応の白い光が客室全体を満たしていく。

次の瞬間、部屋のなかの光景が一変した。いつのまにか護堂たちは空の高みから、日本が誇る霊れい峰ほう・富士山の偉容を見おろしていた。

だが、日本人ならば誰もが見なれた日本一の名山は——噴火していた。

霊峰・富士の火口からは焔ほのおと噴煙と溶岩、火山弾がひっきりなしに飛び出し、地上へ降りそそいでいく。

流れる溶岩が山肌を灼やき、灼しやく熱ねつの大河と化して、ふもとへと向かっていく。

——ここで、映し出された光景が変わった。

特徴的な富士山とちがい、外観だけでは何ど処ことは特定しがたい山系。

ここも火山帯であるらしく、あちこちの山頂から火柱が噴きあがっていた。この山系全体が噴火をはじめているのだ。

――また光景が変わった。

今度は島だった。島の中央に座す火山が煙と溶岩を吐き出している。

――次は空の高みから見おろす東京の摩ま天てん楼ろうだった。昼間さんざん堪たん能のうした、スカイツリー天望デッキからの風景に似ている。しかし、あのときとちがい、降ってくる灰のせいでどんよりと曇くもっている。東京中に黒い灰が降りつもっていた。

――それからも次々と景色は変わっていった。

低地に流れ出てきた溶岩に灼かれた街。火か砕さい流りゅうに押しつぶされた街。豪雨の雨粒のように地上へ降りしきる火山弾の洗礼。黒と灰色で塗りつぶされた空。

――景色は最後に、超高高度から見おろす日本列島全体となった。

関東地方の上空全域に黒い暗雲がたちこめており、地上の様子をきちんと確認できない。おそらく火山灰が雲となったものだ。

しかも、この暗雲はやがて列島全体に広がっていった。

それから東アジア全域、中央アジア、中東、ヨーロッパ方面も黒く塗られていって――。

「…………」

絶句する一同の前で、ついに景色が沙耶宮家別邸の客室にもどる。

祐理が視たという悪夢は彼女の申告どおり、なんとも恐ろしい内容だった。

「そういえば、そうだった」

まずリリアナが悩ましげに口を開いた。

「鋼の英雄は火山の申し子。英雄ペルセウスもナポリのヴェスヴィオ火山に降こう臨りんしたし、斉せい天てん大たい聖せいも日につ光こうの男なん体たい山さんで魔術の儀式を行ったという。『最後の王』が火と風の霊気を高め、海と大地を熱していくのなら……その影響が火山帯におよんでもおかしくないぞ」

「護堂さん」

馨も言う。しかも、いつもより洒しや脱だつさが明らかにすくない。

「さっき言いかけた〝気になる現象〟、こちらも実は火山がらみです。伊い豆ず諸島のいくつかの火山で——噴煙が昇るのを確認したという。もともと火山活動が活発なあたりなので、単なる偶然かとも思ったのですが」

念のため甘粕を送りこんだのだと、馨は語った。

「とりあえず関東近辺の火山地帯に調査員を送ってみます。伊豆諸島、小お笠がさ原わら諸島、箱はこ根ねに富士山……なにげに長野、山梨、群馬、栃木、福島あたりの山系にはたいてい火山が交ざっているのですけどね……」

不吉な未来予知を目まの当たりにして、護堂はため息をついた。どうやら『最後の王』を巡る騒動、〝毎度おなじみ世界の危機〟へと発展しつつあるようだが。

「ただ、今回はいつも以上に敵がめちゃくちゃ強いんだよなあ」

ともあれ、魔王殲せん滅めつの勇者との決戦は佳か境きように向かいつつある。

護堂は仲間たちにうなずきかけた。いずれにしても、まずは幽世かくりよへ向かうのが先決。そのための準備をすべきだった。

そして数時間を経へて。

草薙護堂はひさしぶりに幽世／アストラル界へ足を踏み入れた。

毎回、不可思議な景色を見せてくれる妖異の領域だ。リリアナが以前のように魔女術で開いてくれた『門』を通ると、今回も地上世界ではありえない場所に出た。

大海原のまっただなかである。

ただし、海の色が赤い。まるで海全体に赤あか潮しおが発生しているようだった。

また陸地と言えば、護堂が踏みしめる小島だけ。俗っぽい地上的感性で表現すると、せいぜいコンビニ程度の面積しかなかった。

海面を眺めると、波に乗ってドロドロの流動体がときどき流れていた。

ふたりの同行者の片割れ、清せい秋しゅう院いん恵那がつぶやく。

「日本列島とか蛭ひる子こを生んだ、はじまりの海って感じだね」

「イザナギとイザナミが海をかき回して、島を造っちまう神話だっけか」

うろ覚えの記憶で護堂は相づちを打った。

まあ、ここがどこでも関係ない。幽世では行き先をきちんとイメージできれば、そこへ一瞬にして転移できるからだ。

ただし、護堂には肝心のイメージを思い描く素養がない。

そこで幽世に慣れている恵那と、もうひとりの熟練者を連れてきたのである。

「調子はどうだ、万里谷？」

「大丈夫です。それほどつらくはありません——いえ」

幽世／アストラル界では、肉体よりも精神と霊体の力が物を言う。

そうなると、霊視力と精神感応力にすぐれた祐理こそが最も頼もしい存在となる。高熱の体調不良に目をつぶってでも、やはり同行

してもらいたい人材だった。

　また未み曾ぞ有うの緊急事態を前にして、誰よりも祐理自身が強く志願したのである。

「幽世に来たことで、むしろ楽になっています。どうぞご心配なさらないでください」

　言われてみれば、たしかに顔色がよくなっていた。

　痩せ我慢という感じでもない。さすが肉体よりも霊と精神が重きをなす世界。体の不調を霊力の強さがあっさり補ったのだろう。

　ちなみに、ふたりの媛巫女は巫女装束だった。

　幽世へ遠征するにあたり、千ち早はやという羽織に似た上着を付け足している。冬場の外出ということで一枚多く着こんだのだ。

　祐理の方は問題なさそうなので、護堂は切り出した。

「じゃあ出発だな。とりあえずスサノオのところにでも行ってみるか」

「それなら恵那と天叢雲あまのむらくもが案内できるよ。……でも、その前にひとついいかな？」

　いきなり問われて、護堂はきょとんとした。

　恵那は珍しくおどおどした表情で、遠慮がちに護堂の顔色をうかがっている。明朗快活な太た刀ちの媛巫女らしくない——いや。

　苦手な〝男女間の問題〟を口にするとき、彼女はやけにしおらしくなるのだ。

「『最後の王』の正体を教えてくれそうな人って……やっぱり女の人？」

「!?」

「あ。やっぱりそうなんだ」

「お、俺は何も言ってないぞ！」

「言葉には出さなくても、顔にはっきり出てたよ。図星だって」

　どこか悲しそうに恵那はつぶやき、ひっそりとため息をこぼした。

「さすが王様だよね。何人もの女の子といつもいっしょのはずなのに、いつのまにか恵那たちも知らない相手と仲よくなっていて……」

　いきなりの追及にたじろぐ護堂を尻しり目めに、もうひとりの媛巫女もため息をつく。

　もちろん、ついさっきまで高熱にあえいでいた祐理である。

「恵那さんのおっしゃるとおりです。このまま女性のもとへうかがうのではないかと、実は私もひそかに疑っていました」

「ふ、ふたりともこのことを何で問題行為みたいに言うんだよ⁉」

　微妙に困ってしまったとき、琴ことの音ねが聞こえてきた。

　ゆったりしたテンポの曲だった。奏者は近くにいない。この音色、遥はるかな大海原の彼方かなたから響いてくる。

　これを耳にした瞬間、はっきりと護堂は思い出した。

　上じよう弦げんの月が昇る夜。玻は璃りの瞳ひとみの媛が前に同じ曲を演奏していたときのことを。

「万里谷！　この音が聞こえる方に飛んでいけるか？」

「は、はいっ」

　護堂の真剣さが伝わったのだろう。今までのやりとりを棚上げして、祐理は両目をつぶって精神集中してくれた。

　直後、媛巫女ふたりと護堂は何処いずことも知れぬ広野にいた。

　夜だった。上弦の月以外、目立つものは何もない。背の高いススキが茫ぼう々ぼうと生えている。

　そして、向こうから響いてくる琴の音と嫋じよう々じようたる女性の歌声。

昔、海に邪じや竜りゆうあり。王は乃すなわち箭やを放ち、まさに竜の胸を破る——。

護堂たちはうなずき合い、歌声の方へ向かった。

ススキをかき分けて二、三〇メートルほど進むと、空き地に出た。そこにいたのは倒木を腰掛け代わりにすわる十じゆう二に単ひとえの美しき媛である。

美しく長い髪は亜あ麻ま色いろで、冴さえわたる瞳は玻璃の色。

膝ひざの上に台形の琴を乗せていた。楽器も奏者も明らかに日本の生まれではない。

「ついに自らの御意志でここへいらっしゃいましたね、羅ら刹せつの君よ。そして、我が血の裔すえである日本ひのもとの巫女たちよ」

微笑みで迎えてくれた玻璃の媛へ、護堂は訊ねた。

「そういうふうに言うってことは、俺たちが来た理由——」

「おおよそのところは存じあげております」

さすが大霊界まがいの異空間に隠居する姫君。

だったら話は早いと、護堂はあの名前を口にした。甘粕が教えてくれたものだ。

「これが『最後の王』の本名じゃないかって、俺の仲間が考えてくれたんです。本当のところはどうなんでしょう？」

「…………」

玻璃の媛が琴を置き、すっと立ちあがった。

華美である分、重厚な十二単を身につけている。だが、たおやかな媛は衣装の重みなどないように護堂へ近づいてきた。

　これも精神の力が物理法則を超える、幽世ならではの神秘なのだろう。

　今、麗うるわしき玻璃の媛は護堂の目の前にいる。

「草薙さま。その問いに答える代わりに、ひとつ約束してくださいますか？」

「約束？」

「はい。太子さまの素性と運命を知っても尚なお、あの方と死力を尽くして戦い、滅ぼして、わたくしどもの祖である女神たちの仇かたきを必ず討ってくださると」

　要請の過激さに驚いた瞬間だった。不意に玻璃の媛は顔を寄せてきて、護堂の唇くちびるにキスをしてみせたのである。

「王様!?」「護堂さん!?」

　成り行きを静観していた恵那と祐理が愕がく然ぜんとしている。

　これはもちろん、魔王カンピオーネに術をかけるための口づけだった。護堂の意識は急速に薄れていった……。

5

　過去、何十人のカンピオーネが世界に生まれたのか。

　その答えを護ご堂どうは知らない。ひとりの神殺しもいない時代が二、三世紀ほど続いたかと思えば、いきなり五、六名がまとめて誕生する時期もあるという。

　そして今、玻は璃りの媛ひめが〝幻視の術〟で見せてくれている時代――。

　この頃もまた、幾人もの神殺しが世界を闊かつ歩ぽする『ろくでもない時代』らしかった。

　今、夢か歴史映画でも見るようにして、ひとりのカンピオーネの

生涯が護堂の意識のなかで進行しつつある。

　彼は『十個の命を持つ魔神』を倒し、その権けん能のうを奪った神殺しである。

　鉄製ないし青銅製の剣や甲かつ冑ちゆうを愛用するところから、どうやら古代世界の住人であるらしかった。ウルディンなどが生きた時代よりもさらに過去だろう。

　カンピオーネの例にもれず、『十の命を持つ神殺し』は強大な王者だった。

　まつろわぬ神々と戦うだけでなく、いくつもの都市国家を征服・統一し、大王として君くん臨りんする権力者なのだ。

　周辺諸国の民たみは彼を〝神すら殺あやめる魔王〟と畏い怖ふしていた。

　しかし、彼には宿敵がいた。敵国に顕あらわれた勇者である。『この世の全ての魔王を殲せん滅めつする運命の主ぬし』だという。勇者は地上に降こう臨りんした軍神として民に崇すう拝はいされるだけでなく、大将軍の地位に祭り上げられていた。

　この勇者がなかなか厄やつ介かいな、しかし、戦い甲が斐いのある敵だった。

『十の命を持つ神殺し』をおびやかすほどの武勇を持つだけでなく、倒しても倒してもそのたびに甦よみがえり、ふたたび勝負を挑んでくる。

　ほとんど不死身に近い『十個の命』がなければ、彼が敗死した戦いもあっただろう。

　ともあれ戦況は一進一退、しかし、総じて魔王側優勢という趨すう勢せいのなか、勇者を支持する人間の神官たちがある儀式を行ったのである。

　それは魔王殲滅の勇者に仕つかえる『大地の女神』を招しよう聘へいする儀式であった。

「おまえに恨うらみはないが、あやつに仕える者と聞いては捨て置くこともできぬ。後腐れのないよう、斬きり捨てておくとしよう」

　女神招来のうわさを聞きつけ、魔王は儀式の祭場へ乗りこんだのだが。

　全てが終わったあとだった。麗うるわしき女神はみごと降臨し、儀式を執とりおこなった教団の神官どもは大いに歓喜していた。

　彼はまず魔王の本領を発揮して、神官どもを皆殺しにした。

　そして、勇者を補佐するべく地上に顕けん現げんした女神にも剣を向けたのであるが。

「羅ら刹せつの君よ。そうおっしゃるのであれば、是ぜ非ひもありません。わたくしの命、どうかお好きになさいませ」

　女神はあっさりと答えた。

「なに？」

「このとおり、手向かいはいたしませぬ」

　彼女は亜あ麻ま色いろの長い髪と玻璃色の瞳ひとみを持つ美少女の姿で顕現していたが、しゃがみこみ、頭こうべを垂れて、そのほっそりとした頸くびを差し出した。

　予期せぬ従順さに鼻白む彼へ、玻璃の瞳の女神はひっそりと言った。

「実を申しますと、わたくしはあの御方――太たい子しさまに命を捧ささげるため、呼ばれたのです。あなたさまが手を下さずとも、誰かがわたくしを殺あやめましょう」

　太子さま。魔王殲滅の勇者のことだ。

　あの男に仕える従者どもがその呼称を何度か使っていた。

「わからん話だな。わざわざ呼び出した女神、家臣として召し使えばいいものを。おまえを殺す利がどこにあるのか、俺にはさっぱりわからん」

「太子さまの神力を高めるのは大地の精……すなわち、地の女神の命のみ」

　かすかな微笑がうつむく女神の貌かおを美しくいろどる。

　悲哀を隠し、押し殺すためにあえて笑う。そういう類たぐいの笑みだった。

「それゆえにあの御方は女神の——女の敵。『大地を征する者』という剣神の性さがを誰よりも強く体現し、大英雄たりうるのです」

「ふうむ」

　彼は考えこんだ。この話の真しん贋がん、もちろん吟ぎん味みする必要はある。

　しかし真実であるなら、勇者の手助けを自ら進んで行うことになる。それは避けたい。そして何より——嘘うそだとしても、今までいちばん面白い命いのち乞ごいの言葉だった。

「よし。ならば俺についてこい。おまえを我が虜りよ囚しゆうとし、身み柄がらをあずかる。必要があれば、あやつらの刃やいばより守ってやってもよい」

「まあ」

　玻璃の瞳の女神はおかしそうに吹き出した。

「何がおかしい？」

「いえ。十の命を持つ羅刹の君が大地の女神を虜とりこにし、太子さまと対決なさる……まるで神話の世を繰りかえすようだと思いまして」

　そして、数年が流れて——。

　十個の命を持つ魔王の居城へ、勇者が軍をひきいて攻め込んできた。

　勇者軍と魔王軍が激しくぶつかり合い、乱戦を繰りひろげるな

か、ついに大将同士の一騎打ちもはじまった。

　神殺しの魔王と、魔王殲滅の勇者がそれぞれの剣を手に対決する。

　勇者は救きゆう世せいの神刀とかいう武具の力で、万ばん雷らいを操る。大敵との一騎打ちにあたり、強大な魔王も全身全霊をかたむけなければいけなかった。

　だから、防ぐ余裕がなかった。魔王たる彼の居城に向けて、一本の矢が撃ち放たれるのを。

　乱戦のさなか、勇者に仕える弟とやらがおもむろに射いたのだ。姿形は勇者と瓜うり二ふたつだが、肌は褐かつ色しよくという従属神である。

　この矢を受けて、魔王の居城は火山の噴火さながらに爆ばく裂れつした。

　城内の兵も家臣も、その一角に住まわせていた玻璃の瞳の女神も爆炎のなかで等しく燃え尽き、虚むなしく死んでいった。

「なに!?」

　むしろ魔王よりも勇者の方が大きく驚いていた。

　おそらく弟の独断専行だったのだろう。そして必ず女神を葬ほうむるために、とっておきの矢を使ったのだろう。みごと目的は成じよう就じゆされた。

　玻璃の瞳を持つ女神は城ごと消し飛ばされ、次の刹せつ那な、電光がはじけた。

　間近で死んだ大だい地ち母ぼ神しんの精気。これを勇者の肉体は勝手に吸引してしまい、『この世の最後に顕れる王』としての力を臨りん界かいまで高めてしまったのである。

　そこに魔王が剣を打ち込む。

　臨界状態の『最後の王』はかわせなかった。したたかに斬きられた。

だが、その傷口から流れ出したのは血ではなく、極大威力の電光であった。

救世の雷いかずち。のちに草くさ薙なぎ護堂を何度となく苦しめる白金プラチナ色の輝きは直径十数キロのエリアを呑のみこむ爆発となって、このときも全てを薙なぎ払ってみせた——。

「嗚あ呼あ」

悔かい恨こんの念をその一言に込めて、『最後の王』は短くうめいた。

彼は自らの権能で全てを消滅させたのだ。魔王の城も魔王軍も、己おのれが勇者としてひきいてきた軍勢も。

この凶行を望んで為なしたわけではないのだろう。

しかし、まぎれもなく彼という勇者の存在が引き起こした惨事であった。

極大の電光が炸さく裂れつした結果、魔王城のまわりでは命という命が消え失せ、雑草一本すら生えていない荒野と化した。

そのなかで勇者は——『最後の王』は呆ぼう然ぜんと立ち尽くしている。

彼は自らの罪ゆえに苦悩し、疲ひ弊へいし、己にそのような所しよ行ぎようを強しいた運命に倦うみ、端正な美貌に錆さびのような陰をためこんでいったにちがいない。

「くだらないことだな、まったく」

ただひとり生きのびた魔王は傲ごう然ぜんと声をかけた。

勇者はハッと振り返り、驚きよう愕がくし、心の底から納得したとばかりにうなずいた。

「さすがだ……。僕が知る神殺しのなかで、最も不死に近い豪ごう傑けつだけのことはある。盟めい約やくの大だい法ほうにより最大限に高まった僕の稲妻を浴びても、尚なお、生きのびるのか」

「まあ、だいぶ難儀はしたがな」

　十個の命を持つ神殺しのしぶとさゆえに、魔王は命を拾ったのである。

　その姿を見て、勇者は短く笑う。かわいた笑いだった。目の前にいる人間のデタラメさにあきれつつも感服せざるを得ないという類の笑しよう声せいだ。

「かの女神――かつての我が妻も君の庇ひ護ご下かにあるならば、かえって安全かと思っていたのだが……。あれには気の毒なことをした」

「死なれたら困る者のそばでいくさを仕掛けるな。おかげで俺が難儀したぞ」

　慨がい嘆たんする勇者へ、魔王はにべもなく言う。

「おまけに少々胸くそが悪い。ひとりの男としての貴様を特に憎んでもいないが、貴様のような存在を生み出した〝運命〟とやらには言いたいことが小山ほどはあるぞ。『女の命を食い物にする英雄などクソ食らえだ！』とかな」

「……気持ちはわかる、と言っておこうか」

「貴様も貴様だ。邪魔な運命なら、とっとと放り出して身軽になればいいものを。いつまでも律りち儀ぎに背負い続けるな。鬱うつ陶とうしくてかなわん」

「やはり、さすがだな」

　手前勝手に吐き捨てる魔王の言いぐさに、『最後の王』は感服した体ていで微笑した。

「運命、宿命、血縁、神々の加護、義務、信仰、人間の身の限界、非力さ、本来であれば抗あらがうことも許されないほどの力の差……ありとあらゆる障害を軽やかにすり抜けて、君たち神殺しはいつも僕の前に立ちはだかり、僕を幾度も打ち倒す」

　魔王への賛さん辞じゆえに微ほほ笑えんだあと、『最後の王』は救世の神刀を手に取った。

　上段の構えを取り、十個の命を持つ神殺しと向き合う。

「だからだろうな。僕は君たちと戦うたびにいつも敬意を抱いてしまう」

「敵に尊敬されてもくすぐったいだけだ。そろそろはじめるぞ」

　無造作に言い捨てて、魔王は——変へん化げした。

　十個の命を持つことだけが彼の権能ではない。翼を持つ巨大な邪じや竜りゆうに変化することも、そのひとつだった。

　対して『最後の王』は救世の神刀のなかより、乗騎を呼び出した。

　天あま翔かける二頭の駿しゆん馬めにひかせた、空飛ぶ戦車チヤリオツトである。これに乗って、邪竜と化した魔王と空中での決戦をはじめる。

　大地母神の命を吸いこみ、臨界状態となった『最後の王』——。

　戦闘能力と呪じゆ力りよく、神力、武器の量だけを単純に比べるならば、実は魔王を圧倒的に凌りよう駕がしていた。本当なら勝負にならないほどのスペック差であった。

　にもかかわらず、両者の戦いは激しい死闘となった。

　どれほど強大な敵が相手でも、必ず勝ち方を見つけて死力を尽くす。

　全てのカンピオーネに共通する能力——否いな、生き汚さがこのときも最大限に発揮されたからだ。また、ある要素が期せずして魔王の側に優位をもたらしたからでもあった。

　魔王と勇者は空で戦い、海で戦い、ふたたび陸地にもどって戦った。

　それでも決着はつかないため、またも空に飛び出して戦い、しまいには大気圏を越えて宇宙へ到達しても、さらに戦い続けて。

「うおおおおおおっ！」

「おおおおおおおおおおおおおっ！」

　結局、ふたりそろって地上へ墜つい落らくしていった。

　共に深傷ふかでを負い、飛行不能になってしまったのである。

　落ちた先は南洋の小島だった。ジャングルが生おいしげり、白い砂浜が美しい。ここで十個の命を持つ魔王もついに力尽き、絶命した。

　邪竜と化したまま全ての命を使いはたして、魔王は浜辺に横たわる。

　その巨体はあっという間に白骨化し、物言わぬ骸むくろとなった。

　一方、『最後の王』も同様に絶命していた。彼は死を得ると神刀の姿にもどる。白金プラチナ色の刀身はほとんど全て刃こぼれし、しかも『く』の字に折れ曲がっていた。

　無惨なありさまで、神刀も浜辺に転がっていた。

　打ち寄せてきた波に呑まれて、そのまま海へと流されてしまう。

　しかし二年後、救世の神刀はふたたび『最後の王』として復活を遂とげる。『十個の命を持つ魔王』以外にもその時代には神殺しがおり、彼らを全滅させることは蒼き髪の英雄に託たくされた使命だったのである。

6

　過去に起きたという魔王対勇者の大戦闘。

　その成り行きを夢でも見るように護ご堂どうは幻視しつづけた。そして両者の相打ちで決着が付いたとき、ハッと目覚めたのだが。

「ここはたしか……」

　まわりの景色を見まわして、護堂は驚いた。

幻視がはじまる前は月下の荒野にいた。しかし、今は南洋に位置するとおぼしき小島の砂浜にいる。すこし歩けば、鬱うつ蒼そうと生おいしげるジャングルに入っていける。

古代のカンピオーネと『最後の王』が相打ちになった場所だ。

また、目の前には玻は璃りの瞳ひとみの媛ひめがたたずんでいた。さらに現世うつしよから同行してくれた媛ひめ巫み女こたち——祐ゆ理りと恵え那なのふたりが心配そうに護堂を見つめている。

仲間の少女たちにうなずきかけてから、玻璃の媛とあらためて向き合う。

「あなたは……あのとき殺された女神の生まれ変わりとして、神しん祖そになった。それでいいんですよね？」

「はい。わたくしの命は太たい子しさまの糧かてとなるために奪われました」

亜あ麻ま色いろの髪と玻璃の瞳を持つ美び姫きはひっそりと言った。

「神祖として新生したあと、わたくしは流る浪ろうの果てに日本国へたどり着きました。その巫女たちの先祖となる血を遺のこしたりもいたしましたが……最後には現世での暮らしに倦うみ、幽世かくりよでの隠いん棲せいを選んだのです」

玻璃の瞳の媛こそが、媛巫女たちの遠えん祖そであったのだ。

すでに予想していたことなので、護堂は軽くうなずくだけで聞きながした。実際、先祖返りだという祐理の髪はときどき亜麻色に変わっていた。

「本来、神祖は女神であった頃の記憶を持たぬもの。ですが、幽世に来たことで閉ざされた過去への扉が開かれ、わたくしは前世で何が起きたのかを思い出せたのです」

「なるほどなあ」

パラス・アテナもアテナとしての記憶を取りもどした。

　同じ現象が玻璃の瞳の媛にも起きたのだ。うなずく護堂へ、媛は問う。

「それで草くさ薙なぎさま。先ほどの約束、いかがでしょうか？」

「『最後の王』を滅ぼしてくれってやつですよね。そんな約束――もちろんできません」

　護堂はあっさりと言った。

「あいつは俺よりメチャクチャ強いですし。そんなのが相手なのに、絶対勝つとか約束できませんよ。それに、俺はこれでも平和主義者なんです」

「…………」

「そりゃあ神様たちは強いから、戦いがどんどん激しくなって、物騒な結果になるかもしれませんけど。それでも最初から『殺す』とか『滅ぼす』なんてのは御免ですよ」

「では、太子さまの真ま名なを知る必要はないとおっしゃる？」

「それなんですけどね。あなたは俺の答えがどんなものでも、協力してくれるつもりなんでしょう？　でないと、ここまでいろいろ教えてくれるわけがない」

　護堂はあえて断定口調で告げた。

　なんとなく――試されているような気がしたのだ。はたして、玻璃の瞳の媛は形のよい唇くちびるにしっとりとした微笑を浮かべ、うなずいた。

「太子さまの力と、あの御方と戦う苦しみを目まの当たりにしても、己おのれの流儀を微み塵じんも揺るがせるつもりはない……。たいへん結構でございます。実を申しますと」

　ここで媛はいたずらっぽく笑った。

　彼女がときどき見せる、生身の女性らしい表情と仕草である。

「わたくし、同どう朋ほうであるスサノオの御老公や僧そう正じょうさまに幾度も訴えてきたのです。草薙さまはかつて最も太子さま

を苦しめた神殺し――十の命を持つ魔王殿に似ていると。だから、万一の時は草薙さまに命運を託たくすべきだと」

「えっ？　あいつと俺、全然似てないと思いますけど？」

　彼の生涯を幻視したばかりなので、即座に反論したのだが。

「いいえ。女性に甘く、敵である女神にも情けをかけて、それゆえに無用の苦労を背負い込むところがよく似ております」

「はあ」

　やんわりと断定されてしまった。媛はさらに言う。

「でも、その甘さゆえに得られるものも多いはずです。わたくしが草薙さまこそ太子さまを苦しめうる器うつわと見こむのは、それゆえでございます。……どうぞ『最後の王』の真名、存分にお確かめくださいませ」

　突然の薦すすめ。護堂は「!?」と媛の美貌をあらためて注視した。

「この領域はプルタルコスの館やかたの主あるじ殿どのによって封印された、『最後の王』にまつわる記録の保管場所。こちらであれば、あの御方の真名と来歴を視みることもかなうはずです」

　遥はるかな昔、魔王と勇者が共に絶命した砂浜。

　あそこそっくり同じに造られた幽世の一領域。この地にこそ神祖グィネヴィア、アレクサンドル・ガスコインらの探し求めた謎の答えが眠っている――。

　自分たちはいつのまにか宝島へと導かれていたのだ。

　驚く護堂、そして祐理と恵那へ頭を下げてから、玻璃の媛は十じゅう二に単ひとえをまとう華美な姿をさっとかき消し、去っていった。

「全ての霊れい視しの源みなもとである虚空アカシアの記憶を保管するプルタルコスの館……たしかに、あの聖域と同じ感じがしま

す」

　神前に罷まかり出た巫女の敬けい虔けんさで、祐理がささやいた。

　巫女装しよう束ぞくの上から形のよい胸に手を当てて、両目をつぶる。精神集中。すると、護堂たちが立つ白い砂浜——そのあちこちから石板が生えてきた。

　一辺の長さは四、五〇センチほどの長方形ないし正方形。

　表面には古いアルファベットでびっしりと長文が綴つづられている。

　砂のなかから草木の新芽のようにせり出てきた石板はおびただしい数で、おそらく五〇〇枚以上はありそうだった。

「これ、全部に『最後の王』のことが書いてあるのか……」

「はい。ここから知識を得れば、剣の言こと霊だまを必ず造り出せるはずです……」

　謎に満ちた英雄を斬きり裂くための武具。

　それを得るチャンスがついに草薙護堂のもとへやってきたのだ。しかし、未知の言語で書かれた文書を全て読み解き、記憶することなどできるはずがない。

　万ま里り谷や祐理の霊視力と術によって、教授される必要があった——。

　もじもじと気恥ずかしそうにする祐理のそばへ、護堂が歩みよろうとしたときだった。

「は、はじめるの、王様？」

　恵那から問いかけられた。

「あのね。こういう風にお願いするの、すごくはしたない気がするんだけど、でも……」

「どうしたんだよ、清せい秋しゆう院いん？」

　いつも自由闊かつ達たつな自然児らしくない躊ちゆう躇ちよを見せ、口ごもる恵那。

　そんな彼女を不思議に思い、護堂は訊たずねたのだが。

「恵那も……いっしょにさせてほしいな。王様にいろいろ教える儀式——」

「!?」

「え、恵那さん、なんてことを!?」

　つまり三人で——という申し出に護堂だけでなく、もちろん祐理も愕がく然ぜんとした。しかし、太た刀ちの媛巫女はもじもじとためらいつつも訴えを続ける。

「ご、ゴメン。このままだと恵那だけ除のけ者で、離れて見てることになるのかなって……そう考えたら悲しくなってきて……」

　たしかに虚空アカシアの記憶を引き出す技は、卓越した霊視力者だけのもの。

　当然、ここは祐理の独どく壇だん場じようとなるべき場面であった。しかし、たしかにそれでは恵那ひとりを蚊か帳やの外にしてしまう。

　命を共にする仲間とはできるかぎり平等に接したい——。

　と、護堂は心から思っている。だからだろうか。いろいろ考慮すると問題だらけの訴えを常識論で否定する前に、若じやつ干かんだが心を動かされてしまった。

（そうか、清秋院も——）

　自然ともうひとりの媛巫女をちらりと見る。

　祐理は幼なじみからの申し出に思い切り狼ろう狽ばいし、返答に困っていた。

「い、いくらなんでもああいうことを三人で、また大勢でだなんて、破は廉れん恥ちすぎますっ。私たち、もっと節度を持つべきで——」

　顔を真っ赤にしての抗弁。しかし、祐理は途中でやめてしまった。

　前々から〝そういう行為〟を何度もみんなで繰りかえしてきた記憶が甦よみがえったのだろう。恵那もまた羞しゅう恥ちで顔を赤くしながら、〝そのこと〟を口にする。

「う、うん。祐理はそう言うと思ってた。で、でもほら、日につ光こうとかガリアとかでさ。何度かはそういう感じでやったわけだから、今度も——みたいに……」

「これはそ、そういう風に割り切る問題じゃないはずですっ」



「だよね……。本当にゴメンね、わがまま言って。祐理を困らせるつもりはなかったんだけど、どうしても頼んでみたくなって……」

　常に明朗快活なはずの恵那が悄しよう然ぜんとうなだれている。

　無茶を承知で言ってみたのだろう。草薙護堂への想いと嫉しつ妬と心しんに後押しされて、こういう事柄にはひっこみ思案になる性分をほんのすこしだけ克服して。

「え、恵那さん」

　あっさりと引いてくれた巫女仲間の名を、祐理が悲しげにささやく。

　揺らいでいるのだ。羞恥心と常識を尊重すべきか、親友の気持ちを優先すべきかで。そして、もし自分が逆の立場なら……と考えてしまったのかもしれない。

　護堂は手をのばし、悩む大和やまと撫子なでしこの体をひきよせた。

「万里谷。俺からも——頼む」

「護堂さん!?」

　とまどう祐理を抱きすくめながら、さらに言う。

「いつもいつも大変なことを押しつけて、すまないと思ってる。でも悪い。俺はどうもこんなバカばっかりをやりつづけるダメな人間みたいだ」

「……本当にそうです。護堂さんも恵那さんもおかしなことばかりをおっしゃって」

　祐理が体をこわばらせていたのは最初だけだった。

　すぐに護堂の腕のなかで力を抜き、こちらへ体重をあずけてくれた。今のつたない言葉で説得されたのではない。おそらく彼女は折れる口実を探していたのだ。

　護堂は一八〇センチあるので、身長差がある。

　腰をかがめて、祐理の唇くちびるへと顔を近づけ、そして言った。

「いやなら、すぐに俺を振り払ってくれ」

「そんなこと……いたしません。護堂さんは本当に仕方のない人だと思いますけど、そういうあなたに添そい遂とげると約束したのは私自身ですし……。でも」

　ささやき合うだけで、おたがいの吐息を感じる。

　心と唇を許しあった者同士だからこその距離感であり、近さであった。

「次は必ず、私のわがままを聞いてくださいね？」

「当たり前だ」

　珍しい祐理からの〝おねだり〟を愛いとおしく想いながら、接せつ吻ぷんをかわす。

　護堂の唇を祐理はうっとりと受け入れてくれた。それから唇を放し、傍かたわらで不安そうに成り行きを見守っていた幼なじみへ声をかけた。

「恵那さんも……こちらへ」

「もちろん！」

　誘いの言葉が短いのは羞恥ゆえだろう。しかし、恵那は飛びつくような勢いで護堂たちのもとへ駆けよってきた。

「今から『最後の王』の知識を呼び集めます」

　祐理が宣言すると、いきなり変化が生じた。砂浜に刺さっていた数百枚もの石板たちが次々と宙へ浮かびあがり、空中をふわふわとたゆたうようになったのである。

　それに呼こ応おうして、祐理の瞳に玻璃色の輝きが宿る。

「この世の最後に顕あらわれる王……悪あしき魔王を滅すため地上に遣つかわされた御み子こ、人界にひそむ眠れる虎、流る浪ろうの

さだめを背負う弓の英雄——その御み名な、たしかに頂ちよう戴だいいたしました」

　ひそやかに断言して、媛巫女は盟友に手を差しのべる。

「恵那さんも私の得た叡えい智ちを受け取ってください」

「うん！」

　ふたりの手と手が合わさる。同時に恵那の瞳も玻璃色に輝いた。

　祐理が精神感応の霊力を使い、『最後の王』についての知識を分けあたえたのだろう。

　そして、ついに教授の儀式がはじまった。

「護堂さん。女神キルケーは最さい期ごにおっしゃいました。『最後の王』はギリシア神話でいうアルゴー号の系譜に連なる者だと」

「この船にはね、ヘラクレスをはじめとする英雄たちが何十人も乗っていたんだけど」

　祐理のあとにすぐ、恵那がささやきかけてきた。

　彼女たちを迎え入れるため、護堂は白い砂浜にすわりこむ。すると媛巫女たちもそれにならい、護堂の右と左に腰をおろした。しかも、体を密着させながら。

　千ち早はやと巫女装束越しに、ふたりの肢し体たいの熱さとやわらかさが伝わってくる。

　ちゅっ。護堂の左に侍はべった恵那が軽くキスしてくれた。

「乗組員の誰かが『最後の王』——そういうわけじゃなくてね。ここで大切なのは、アルゴー号がどういう船だったかってこと……」

　はじめは軽く唇を触れあわせるだけ。

　しかし、恵那は二度目のキスでぎゅっと唇を押しつけてきた。そのままおずおずと舌をのばしてきたので、護堂も自分の舌で迎え入れた。

　ふたりが合わせた唇のなかで舌と舌が絡からみ合い、睦むつみ合

う。

　交わりをしばらく愉たのしんだあとで恵那から口を放すと、今度は祐理がキスしてくれた。

「ギリシアの港を船出したアルゴー号は地ち中ちゆう海かいから黒こつ海かいへと進み、海沿いに位置するコルキス王国へ到着しました。英雄たちが求めるのは国宝である金きん羊ようの毛皮……彼らは武勇だけでなく策略も駆使して、毛皮を盗み出します……」

「そのあとはアルゴー号に乗って、英雄たちはコルキス王国から逃げ出していくの」

「つまり航海の果てに他国を襲撃し、宝物を奪って母国へ凱がい旋せん——アルゴー号の冒険譚たんは海を越えての海賊行為や侵略行為を神話化したエピソードなのです」

「ここで大切なのは『海を越える征服者』っていう要素」

「お気づきですか？　実は日本に伝わる桃太郎も同じ構造を持つ昔話です」

「桃太郎はむかしむかし船で鬼ヶ島に行って、住んでいた鬼を退治して、宝物を奪って故郷へ帰ってくるでしょう？　これって結局、海賊が侵略をする物語だから……」

　言霊を紡つむぎながら、祐理はいつものように細やかな舌使いを見せてくれた。

　大胆さよりも繊細さと情愛を込めて、唇と舌と口内をしっとり丁てい寧ねいに舐なめあげる。去年の六月に口づけを交わして以来、いつのまにか祐理が身につけ、護堂のためにだけ捧ささげてくれる真心の表れだった。

　そんな幼なじみに触発されたのか、急に恵那から硬さが取れた。

　祐理が唇を放すと、代わりに恵那が護堂の唇をふさいで、のびやかな舌使いでディープキスを繰りかえしてくれる。とろんとした目つきで熱く見つめてくれる。

　三人の心と行為は順調に高まりつつあり、いよいよ儀式の本番——。

　それがいつもの流れであった。しかし、今回もそうなると思った矢先、唐突にハァハァと祐理の呼吸が荒くなっていった。

「万里谷？」

「す、すいません。急に息がしづらくなって……」

　祐理だけではなかった。隣で恵那も息づかいを荒くしている。

　しかも、ふたりは左右から護堂へしなだれかかり、ぐったりと体重をあずけてきた。あわてて媛巫女たちを支えて、驚いた。

　ふたりも全身がひどく熱い。体温計ではかれば四〇度以上を示すのではないか。

「二〇〇〇年以上も封印されてきた『最後の王』の秘密……今まで授かってきた霊視のなかで、いちばん重く——つらく感じます」

「か、神様たちの手で禁きん忌きに指定された知識だからだよ、祐理」

　苦しげにささやく幼なじみへ、恵那が声をかける。

「恵那たちは修行を積んだ巫女だけど、結局は定じよう命みようの人間だもの……。注意してあつかわないと、心も体も保もたなくなっちゃう——」

　この見識、さすが神々との交わりに慣れている媛巫女筆ひつ頭とうというべきか。

　また、つぶやきながら恵那は瞑めい目もくする。すると、今まで両目に宿っていた玻璃色の輝きが彼女の全身を淡く取りまくようになった。

　恵那はそのまま護堂の胸元に顔をうずめ、ささやいた。

「お、王様。もう大丈夫だから、儀式を続けよう？　そ、それとね、今までみたいに唇でもいいんだけど……ほかのところにもキス、してほしいな」

「なんだって？」

「いつもみたいに恵那たちの頭のなかだけに知識をとどめておくと、すごく脳に負担がかかっちゃうから……体の方にも逃がしてみたの」

「そんなことができたのか⁉」

「ここが幽世だからだよ。肉体と物質よりも念と精神が優先される領域だから、こういうこともできるんだよね」

「で、でも、ほかのところにもキスってことは――」

「う……うん。恵那の体、どこでもいいからキスしてくれれば、いつもみたいにいろいろ教えてあげられるよ。そうやって儀式を早く終わらせないと、恵那も祐理もたぶん最後まで保たないと思う。知識を伝え終わる前に倒れちゃうかも……」

　玻璃色の淡い光につつまれながら、恵那がこんなことをささやく。

　護堂の胸に顔をうずめて、しかも悩ましいほどによく発育したプロポーションを密着させるおまけ付きだった。さすがにもう踏みとどまることはできなかった。

　護堂はすぐに恵那の首筋へ吸いつき、さらに舌を這わせた。

　その瞬間、脳裏にあざやかなイメージが思い浮かぶ。それは謙けん虚きよにひざまずきながら頭こうべを垂れて、王冠をかぶせてもらう『最後の王』だった。

　彼に冠を授けるのは粗末な衣ころもに身をつつむ老人だ。僧侶か神官だろうか？

「あ――っ。王様、ち、ちゃんと伝わった？」

「ああ。問題ない。このやりかたで大丈夫だと思う」

「じ、じゃあ、おねがい。恵那にもっとキスして――んんっ！」

　うなじから肩にかけて唇と舌をすべらせると、恵那はびくっと体を震わせた。全身の感覚がひどく鋭敏になっているようだ。

　また、媛巫女仲間のやり方を見て、要領を呑みこんだのだろう。

祐理も全身に淡い玻璃色の輝きをまとい、護堂へ訴える。

「わ、私の方も大丈夫です。きっとお役に立ってみせますから——んんっ！」

今度キスしたのは、祐理の耳たぶだった。

以前、義あ姉ね・羅ら翠すい蓮れんとの対決前に教授を受けるとき、勢いにまかせて同じ不作法をしてしまった。実はあのときから何度か、祐理のここへキスした覚えがある。

たおやかな媛巫女はいつものように——否いな、さらに過敏な反応を見せてくれた。

ここからは全てが怒ど濤とうの勢いで進んでいった。

激情にせき立てられて、護堂は一瞬も休むことなく媛巫女ふたりを相手に濃厚すぎるキスを繰りかえした。

かわいらしい耳たぶに口づけし、白いうなじや細い腕、指先も愛おしむ。

首筋から胸の谷間近くへもキスを繰りかえし、舌で彼女たちの柔やわ肌はだをたしかめる。

ふたりが巫女装束の上に羽織っていた千早はいつしか脱ぎ捨てられ、上衣もはだけてしまっていた。しかし、三人の誰も気にしなかった。

また、祐理と恵那はキスを受け止めるだけではなかった。

護堂の唇が空あいていると気づけば、すぐに彼女たちの方から不作法な男へ顔を寄せ、くちゅくちゅとキスを繰りかえしてくれた。

「護堂さん。東方で最も権威ある大英雄を切り裂くための剣……」

「今こそ手に入れるときだよ。そのためなら、祐理とふたりで何だってするから……」

　祐理と恵那は交互にキスをするときもあれば、ふたりで同時に護堂の唇をふさぎ、情愛深く接吻を捧げてくれるときもあった。

　おかげで、護堂の熱情がゆきすぎてしまうときもしばしばあった。

　彼女たちの背中から腰のあたりへと舌を這わせ、白い太ももなどにも口づけしたのはさすがにやりすぎだったと言えるだろう。だが、加熱しすぎた儀式の甲か斐いあって、護堂のなかに膨ぼう大だいな量の知識がすさまじい勢いでたくわえられていった。

　そして、ついに護堂は確信を得た。

　今の自分なら、剣の言霊で〝あの男〟を切り裂くことができる――。

　彼はもう護堂のなかで『最後の王』ではなかった。その真名を知り、来歴を知り、いかなる英雄かをつぶさに知ることができた。

　甘あま粕かす冬とう馬まが教えてくれた名と、やはり同一であった英雄の名。

　舌の上で転がすようにつぶやく。

　そんな護堂を陶とう然ぜんと見つめる祐理と恵那。ふたりの媛巫女が全身をほんのり紅こう潮ちようさせているのは、この名を解き明かすための儀式の余よ韻いんであった……。

第５章　汝、永劫のさだめを背負う者よ

１

「天に属する体あり、地に属する体あり」

「日の栄光あり、月の栄光あり、星の栄光あり。死人の甦よみがえりもまた斯かくのごとし」

　エリカ・ブランデッリとリリアナ・クラニチャール、ふたりの大騎士は共同作業の真っ最中であった。共に言こと霊だまを唱えて、〝ある魔術〟の成じよう就じゆにつとめている。

　場所はリリアナが住まいとする文ぶん京きよう区くの一軒家、そのガレージ。

　大型の乗用車を二台も入れておける広さだが、リリアナ自身もメイドとして同居するカレン・ヤンクロフスキも運転をしないため、今はただの空あきスペースであった。

「朽くつる者より不ふ朽きゆうの者へと甦り、卑いやしき者より栄光ある者へと甦りぬ。弱き者より強き者へと甦りぬ。肉の体より霊の体へと甦りぬ」

　エリカは言霊を唱えて、金属を操るために魔力を操った。

　ガレージの中央に置いてあった物体が『ぎぃん！』『ぎぃん！』という金属質の騒音と熱い火花をまき散らしながら、ゆっくりと変

形をはじめる。

　さすがに家のなかで行うのはためらわれる作業だった。

　これは錬れん鉄てつ術じゆつ——鋼鉄をあつかう魔術である。エリカの得意分野であった。

「はじめのアダムは生ける者となれり。而しかして最後のアダムは命をあたうる霊となれり。終末のラッパ鳴らん時、死人は朽ちぬ者に甦りぬ」

　一方、リリアナは魔女術を駆使する。

　かつて大だい地ち母ぼ神しんの巫み女こであった者たちは時代が下くだるにつれて『魔女』と呼ばれるようになっていった。ゆえに魔女術の使い手は大地の精を操る技に長たけている。

　尚なお、大地を傷つける代表的な存在は『鉄』である。

　土を掘りおこすならば鉄製の鍬くわが効率よく、木を切り倒すならば鉄てつ斧ぷがよい。

　鉄剣の化け身しんである鋼はがねの英雄たちはその武勇で国くに盗とりし、土地を奪う。地じ母ぼ神しんの使いである竜りゆう蛇じやを倒して、大地の女神を妻・恋人としてしまう。

　——そのため、エリカの錬鉄術とリリアナの魔女術はきわめて相性が悪い。

　にもかかわらず、ふたりは水と油にも似た二系統の術をひとつに融合させて、〝あるもの〟を共同製作しているところだった。

　ほんのすこしでも手順をまちがえれば、この術は失敗する。

　また、わずかでも呼吸が乱れ、呪じゆ力りよくが揺らげば、やはり術は失敗する。

　きわめて難度の高い作業である。それでもつつがなく工程を終わらせるあたり、やはりエリカとリリアナの技ぎ倆りようは天才的であった。

「どうにか形になったな。ちゃんと役立つといいんだが」

「そこはもう護ご堂どうの管かん轄かつだわ。今、わたしたちにできることはここまで」

　大騎士ふたりはガレージ中央を見つめながら言った。

　そこには短めの剣が置かれている。刃渡り五〇センチ程度。鈍にぶい鉛なまり色いろの刀身には『今いまし、昔いまし、やがて来きたるべき者』と刻んである。

　彼女たちがたった今、いくつかの魔術的素材から造り出した魔剣であった。

　用いられた素材は『かつては鉄剣であった錆さびまみれの鉄てつ屑くず』『古代リビアの遺跡より出土した陶片』『塩』『水銀』『凝ぎよう固こした青い溶岩のかけら』などだ。

　あくまで即製なので、一、二度しか使えないだろう。だが、十分なはずだった。

　ふたりは昨夜、草くさ薙なぎ護堂が媛ひめ巫み女こふたりと共に旅立って以来、休憩と仮眠をはさみながらもこの作業をずっと続けていたのである。

　幸い土曜日なので、学校を欠席する必要はなかった。

「本当なら、わたしもアストラル界へ付いていきたかったんだが……」

「仕方ないわよ。誰かがやっておいた方がいいことで、いちばん上う手まくこなせるのがわたしとリリィだったのだもの」

「今回はやけに物わかりがいいな。あなたらしくもない」

「あら。わたしはいつだって護堂のために尽くしてあげる女よ？　それを言うなら、リリィこそ今回はやけに物わかりがいいんじゃなくて？」

　エリカが鉛色の剣を革の鞘さやに収め、ガレージ隅のテーブルに置けば、リリアナは鍛たん造ぞう魔術に使った素材の残りを片づけていく。

　ふたりは手と体を動かしながら、ついでに肚はらの探り合いもす

る。

「リリィったら最近、すっかり女として躊ちゆう躇ちよしなくなっているものね」

　いつものように、貴婦人の優美さでエリカは言った。

「何かの拍ひよう子しに護堂とふたりきりになるたび抜け駆けとかして、ひんぱんにスリルと満足感を味わっているから心に余裕がある……結構、的まとを射いているんじゃないかしら？」

「あなたの方こそ、本性はあくまで狡こう猾かつな雌め狐ぎつねだからな」

　リリアナもまた生き真ま面じ目めな女騎士の表情を崩さない。

「チャンスを絶対に見逃すわけがない。この間、草薙護堂とふたりだけでサルデーニャ島へ行ったときは千せん載ざい一いち遇ぐうの好機だったはずだ。あのとき相応の戦果を得ていたからこそ、心に余裕がある――そうじゃないか？」

　以前は共にミラノを本拠地とする魔術結社の神童同士として、旧友兼ライバルだった。

　今は陣営を同じとしながらも、最愛の人物をはさんで牽けん制せいし合う間柄。ふたりはおたがいの澄まし顔を眺めて、しばらく反応をうかがっていたのだが。

　結局、同時にため息を吐き出して、おもむろに肩の力を抜いた。

「この問題は、草薙護堂がいるところでじっくり追及すべきだな。いろいろ有意義な新情報が出てきそうだ」

「そうね。叩たたけば出る埃ほこりを隠し通せる人じゃないし」

　うなずいてから、エリカは付け加える。

「女性関係で疑惑のあるときは、たいてい何かをやらかしたあとだものね」

「こちらの悪い予想を絶対に裏切らない……どころか、ななめ上を行く人だからな。たぶん今回もアストラル界で教授の儀式を済ませ

てくるのだろう」

　草薙護堂について批判的意見を口にすることは、ふたり共通の特技である。

　さらに言うと、比較的おだやかな性格の祐ゆ理りと恵え那なもしっかり得意としている。彼女たちの王様は善良で木ぼく訥とつな性格のくせに、素行に問題がありすぎるのだ。

「実はエリカ。今回、ふつうに考えたらお相手は万ま里り谷や祐理になると思うんだが……たぶん、それだけではおさまらない気がする」

「奇遇ね。実はわたしも同じ意見だわ」

「最近、彼のなかで箍たががゆるむどころか、壊れつつある感じだからな」

「まあ、それについてはわたしたちも共犯みたいなものだけど……」

「ある意味、彼をあそこまでの怪物フエノメノとして覚醒させたのは、ずっといっしょにいた四人——わたしたちだからな……」

「ああいう成長を遂とげるだなんて、本当に予想外だったわ。さすが神様を殺した人よね」

　なんだかんだで親密ではある、古なじみの女子ふたり。

　気やすさにまかせて、きわどい話題に興じていたときだった。隅のテーブルに載のせていたリリアナの携帯電話へ電話の着信が入った。

　かけてきたのは沙さ耶やの宮みや馨かおる。おそらく緊急召集を呼びかけるものだろう。

　ふたりの大騎士はうなずき合った。

　鍛造魔術の成功から数時間を経へた、午後二時頃。

エリカとリリアナはふたたび房ぼう総そう半島の山中にいた。ただし南房総ではなく、千葉県市いち原はら市しである。内うち房ぼうの山やま間あいを走る館たて山やま自動車道・市原サービスエリアの近くだ。

正せい史し編へん纂さん委い員いん会かいより届いた、『最後の王』発見の報。

委員会の車で現地入りした大騎士ふたりを迎えたのは、陸りく鷹よう化かだった。

師より授かった使命を果たすべく、正史編纂委員たちと捜索活動に従事していたのだ。

「まあ、あいつを見つけるのはたいしてむずかしくなかったんだ」

憮ぶ然ぜんとした口調で言ってから、陸鷹化は眉まゆをひそめた。

狷けん介かいな美少年が険けわしいまなざしを向けているのは、立ち枯れした木々だった。

「見てのとおり、あちこちに怪あやしい痕跡を残しまくっていくからさ」

「『最後の王』が通ったあとには草一本も残らない……そういうことなのか」

リリアナが悩ましげにつぶやく。

あたたかい房総半島では、冬であっても山々の緑はそれなりに濃い。

二月はもう早めの春だとさえ言える。だというのに、館山自動車道の近くにある山のひとつは緑の彩いろどりを無惨に失っていた。

木々の葉はすっかり枯れてしまい、幹も枝も水分を失ったように干ひ涸からびている。

そうした緑の彩りも潤うるおいもない樹木ばかりが文字通りに林立していた。下生えの草は枯れるどころか、粉々に砕け散って消滅。

　土も乾き切っている。今日も風が強いので、もうもうと砂煙が立つ。

　幸いにも、山の全てがこうではない。ふもとから三合目あたりまでがこのように緑を失った状態なのである。

「あいつは南房総からここまで歩いてきたらしい。そのルート上は全部こんな感じだよ。草も木もきれいに枯れて、そのあとが車のタイヤの跡みたいな一本道になってるのさ」

「たしかにそうだった……」

　陸鷹化の報告に、リリアナもうなずいた。ここへ来る前、近隣の状況をたしかめるために彼女も『魔女の目』を使ったのだ。

　高みより見おろす房総の風景に刻まれた、白茶けた一本道。

　死神の馬車が通ったあとに残された轍わだちにも似て、不気味な景観だった。

「でも、この辺にはゴルフ場も多いし、それなりに人家もあるわよね？　『最後の王』は人間とまったく接触しなかったのかしら？」

「それについては……見てもらう方が早いな」

　エリカが首をかしげたので、陸鷹化はあごをしゃくった。

　そちらの方向から、躍動するエンジンの爆音が次々と聞こえてくる。

　一般道・高速道路を走る車両とは明らかに異なる、独特の甲かん高だかい駆動音だった。今いる山の裏手にはサーキット場があるのだ。

　サーキットといっても、Ｆ１などの舞台となる華々しい場所とはすこし趣おもむきがちがう。もっぱらレーシングカートの練習・走行会・公式レースなどに用いられる。

　とはいえ、コース一周で約一〇〇〇メートル。

　メインストレートは一六〇メートルと、なかなかの広さを持つ施設だった。

　今日はいくつかのチームが練習走行を行っているらしい。疾走する数台のカート。それを観客席から眺めている人間たちがいる。ピットエリアで作業をしている者もいる。

　ざっと見たかぎり、三、四〇名ほどがいるようだった。

　驚くべきことに『最後の王』がそのなかに交じっていた。観客席の最前列にすわり、なんとレーシングカートの激走ぶりを観賞している。

　轟ごう音おんと共に爆走する車両をじっくりと見つめる、聖なる貴公子の顔。

　それはまさしく〝非常に珍しい献上品を前にして、好奇心を刺激された王族〟と呼ぶべき優美さと高貴さだった。

　しかも、彼は隣にすわっていた人間へ何事か話しかける。

　答えを聞いて、納得の面おも持もちでうなずく。そんな『最後の王』のまわりに観客席の人間たちがどんどん集まってくる。そして、魔王殲せん滅めつの勇者を相手にあれこれと講釈したり、お菓子や飲み物を分けあたえたり、彼の美貌にうっとりと見入ったりするのだ。

　ちなみに、『最後の王』は前に見たときと同じ格好だった。

　青い貫かん頭とう衣いに白のマント。神刀を収めた鞘は背から降ろし、脇わきに立てかけている。

　白はく皙せきの美貌は明らかに日本人の顔立ちではない。こんな外見にもかかわらず、周りの人間たちはまったく気にしていなかった。

「あの英雄さま、人間相手には基本的にああみたいだ」

　とは、陸鷹化の弁だった。

　エリカ・リリアナと共に観客席の端っこから『最後の王』を眺めている。

「この二日間で七、八人くらいと接触しているようなんだけどさ。委員会の連中が聞き込みしたところじゃ、みんな『すごく素敵な外国人と会って、いろいろ親切にした』って答えるそうだ。で、あいつにまた会いたいなんて夢見るような顔で言うわけさ」

「ふつうの人間にもまともに接する英雄、か」

　リリアナが感かん慨がい深げに言った。

「この点でも『まつろわぬ神』としては規格外の存在だな」

「あと、たぶんアイーシャ夫人と同じよ。魅み了りようの権けん能のうを持っているのだと思うわ」

　今、人々は心からの好意や憧しよう憬けいを『最後の王』に向けている。

　同じ光景を古代ガリアで幾度となく見たことがある。エリカは指摘した。

「考えてみたら『菩ぼ薩さつの化け身しん』と言われるほど、徳の高い王様ですものね。むしろ、こちらの方が本家本元というべきかしら。彼がこのまま人間の多い都市部に来たら——」

「それこそ古代ガリアでの夫人のように、大混乱の原因になりかねないな」

「まったくだわ。狂信的な信しん奉ぽう者しやを集めて軍勢に変えることもできるでしょうし。性格はおだやかでも、何を引き起こすか本当に読めない神様ね……」

「それで姐ねえさんたち、例の件だけど」

　大騎士ふたりの話に、陸鷹化が割り込んだ。

「本当にやるのか？　このまま隠れて監視続行って手もアリじゃないか？」

「たしかにそうね。でも、魅了の権能を抜きにしても『最後の王』は都市部に入れるべきじゃないと思うわ。彼に今までの調子で暴れられたら、どれだけの被害になるか……」

「それに陸鷹化。あなたの師し父ふのご命令でもある」

「そう言われると、僕としちゃ何も口答えできないなあ」

　三人はうなずき合い、覚悟を決めて、移動をはじめた。

　観客席の端から『最後の王』を中心とする人間たちの輪へ向かって。魅了された人々を押しのけて、救世の英雄へ近づいていく。

　この三人だけが蒼き髪の貴公子を冷静に見つめていた。だからだろうか。

　彼はこちらの素性を見抜いたらしい。おだやかな声で周囲へ呼びかける。

「みんな、すまないが今日のところはもう引きあげてくれまいか。この地をすみやかに離れて、僕をひとりにさせてほしい。頼む」

　効果はてきめんだった。彼の近くにいた人間たちはてきぱきと荷物をまとめ、席を立ち、出口へと消えていく。

　また、コースとピットの方もざわついていた。

　順調に走行していたカートたちが次々とピットインして停車。ドライバーも窮きゅう屈くつな運転席から降りてしまう。パドックにひかえていた連中も撤収する準備をはじめていた。

　ただし観客席とちがい、こちらは不満や当惑が顔に表れている。

　正せい史し編へん纂さん委い員いん会かいがサーキットの管理側へ要請（おそらく呪術も込みで）し、今日の使用は急きゅう遽きょ終了とさせたのだ。

　去っていく人間たちを尻しり目めに、『最後の王』も腰を上げた。

　凜り々りしい美貌をエリカ・リリアナ・陸鷹化に向け、ゆっくりと近づいてくる。

「当代の神殺し——草薙護堂、もしくは羅ら濠ごう殿の縁者と見たが、いかに？」

2

　数時間前、正史編纂委員会と陸りく鷹よう化かが『最後の王』を発見した。

　房ぼう総そう半島のどこかにいるらしい彼の居場所をついに突きとめた。その報告を受けて、エリカとリリアナはひとまず沙さ耶やの宮みや家け別邸で沙耶宮馨かおると落ち合ったのだが。

　委員会の責任者である馨は悩ましげに言ったものだ。

「いろいろ不安だけど、ひとまず護ご堂どうさんの帰還を待ちながら監視していようか」

　無難かつ妥だ当とうな方針だが、問題もあった。

　房総半島を北上して、『最後の王』は千葉県の市いち原はら市内へ到達していた。

　今はまだ山間部を移動中らしい。だが、市原サービスエリアや県道一三号を越えられると、そこはもう東京湾を臨のぞむ市原市の市街部であり、すこし北は千葉市となる。京けい葉よう工業地域の中心地帯であった。

　また、西へ向かうと習なら志し野の、船ふな橋ばし、市いち川かわを経へて東京二三区内となる。

　もし『最後の王』がその進路を取れば、人口と建物が日本で最も密集している首都圏へ侵入する形となる——。

「羅ら濠ごう教きよう主しゆも本調子じゃないどころか、コンディション的には最悪だからね。下へ手たな手出しは避けた方が吉だと思う。ここは安全策でいこうか」

　石橋を叩たたいて渡る方針は、やはり粋すい人じんの馨らしくない。

　本人も自覚しているのだろう。珍しく憂ゆう鬱うつそうな表情を

見せていた。

　また、べつの懸け念ねんもあった。あれだけ破壊的な権けん能のうを操る『最後の王』が首都圏で戦闘行為をはじめたら――とてつもない規模の被害が発生してしまう。

　結局、この安全策もリスクをともなう選択なのだ。

　が、ほかに打てる手がない。エリカとリリアナも悩ましい想いをかかえながら、東京スカイツリーを訪ねた。羅濠教主へ現状を報告するためだ。

　現在の最高権力者である教主は――姿を隠していた。

　天望デッキの一角に御み簾すをかけさせて、そのなかにこもっていたのである。

「すこし複雑な内ない功こうを修練しております。要いらぬ邪魔を排除するための措置です。おまえたちもよく気をつけて、わたくしのそばに近づかぬように」

　と御簾越しに命じられては、もう何も言えない。

　羅濠教主の麗うるわしい姿を直視できないまま、エリカは一部始終を報告した。

　教主と直じき々じきの問答、正せい史し編へん纂さん委い員いん会かいの誰かや陸鷹化の舎しゃ弟ていあたりには少々荷が重い。そこでわざわざエリカが来たのだが。

「ふむ……わかりませんね」

　報告を聞き終えて、羅濠教主は不思議そうにつぶやいた。

　内功の修練とやらの影響か、いつもより声のトーンがすこし高い。

「なぜ、おまえたちはこの羅濠に向かってひざまずき、嘆たん願がんしないのです？　世に害悪をもたらす英雄に制裁の鉄拳を振りおろし給たまえと」

「「…………」」

　予想外の言葉に、エリカもリリアナも唖あ然ぜんとした。

「無論、かりそめの豊かさに堕だ落らくした東とう京けいの都に救う価値などないでしょう。が、仮にも我が義弟おとうとが本拠とする地。義気のひとつも示さねば、義あ姉ねの面めん目ぼくが立ちません」

「……草くさ薙なぎ護ご堂どうに代わって、この国の民たみを守護してくださると？」

「ふふふふ。まあ、やはり立ち合いの本番はあの子が帰き参さんしてから。しばし時を稼かせぐ程度のつもりで、遊んでみることにいたしましょうか」

　エリカの確認に、御簾の奥で魔教教主はふくみ笑いをした。

　神――それも最強の剣神に対しても、上から目線は一向に変わらない。だが、体内の気を使いはたした状態でそもそも『最後の王』に太た刀ち打うちできるのか？

　その件についてエリカは確認しなかった。

　質問したら最後、羅濠教主は必ず侮ぶ辱じよくと感じて激怒するだろう。

　陸鷹化でなくとも、その未来はたやすく推測できた。あえて虎の尾を踏みにいけば、直じき弟で子しへの鉄拳制裁など生ぬるく思えるほどの厳罰が降くだされるはずだ。

　エリカの思いも知らず、羅ら翠すい蓮れんは言う。

「まずは先ぶれとして、おまえたちが『最後の王』と接触しなさい。あの英雄殿にわたくしの出陣を報しらせ、警戒をうながすのです」

　この命令にも服従する以外になかった。

　かくして、山やま間あいのサーキット場で『最後の王』と向き合う形になったのである。

「当代の神殺し——草薙護堂、もしくは羅濠殿の縁者と見たが、いかに？」

「そのとおりでございます。やはり、御おん身みはわれらが主あるじをお探しなのですか？」

　魔王殲せん滅めつの勇者へ最初に直じき答とうしたのは、やはりエリカであった。

　常に陣営を代表するスポークスマンであり、智ち慧え者しゃ。その才覚を神々や魔王に対しても臆おくせず見せる。草薙護堂の騎士となって以来、自然と磨きがかかった資質である。

「ああ。こちらに歩いてくれば、なんとなく彼らと会える気がした。使いの者が来たということは当たりだったようだな」

　おそらく魔王殲滅の使命ゆえに得た超感覚なのだろう。

　エリカたちになんと微笑まで見せながら、『最後の王』はさらに告げる。

「本当なら、僕から使いを出すのが筋なのだろうな。だが『風の王』——僕の陣営でその役を担になうべき者が今は人目を避けている。そこで、僕が自ら神殺しの諸君を探すことにした」

「なぜ……と、おうかがいしてもよろしいでしょうか？」

「無論、決闘を申し入れるために」

　口調も物腰もおだやかであるくせに、凜りん然ぜんたる宣言だった。

「よければ本日、このまま彼らの城か居館を訪ねて、雌し雄ゆうを決したいと思う。わざわざ使いをよこすほどだ。君たちの主も同じ考えなのではないか？」

「…………」

　エリカは即答せず、すばやく考えを巡らした。

　やはり、そういう目的で東京へ近づきつつあったのか。房総半島の南部から千葉市方面へ北上中。『最後の王』の進行方向を聞いたときから、予感していたことだ。

　北にあと五、六キロも進めば、市原市の市街となる。

　西に進んでも、やはり木き更さら津づ市しの市街地だ。

　このサーキット場の周辺部はまだぎりぎり山間部で、しかもゴルフ場がやたらと多い。おかげで人口も密集していない。避難も容易だ。できれば、このあたりで『最後の王』を食い止めておきたいところだった。あとは羅濠教主次第——。

　ふぅ。エリカは小さく息を吐き出す。

　もう開き直るしかない。それに草薙護堂の義姉はできないことを『できる』と言い張る見み栄えっ張りの性分とは縁がないはず。彼女はそのプライドに見合うだけの実力・見識の持ち主である、はずなのだ。

「ならば、われらの役目はここまで。主の方から直じかに返答がございましょう」

「直に？」

　エリカがちらりと空を見やると、『最後の王』もそれに倣ならう。

　今日は冬晴れで、あいかわらず風が強い。この空を猛もう禽きん類るい——オオタカが王者の威厳と共に滑空していた。都市部に近い関東地方の森にも生息している種だ。

　しかし、その翼と瞳ひとみににみなぎる力と鋭気は鳥類のものではない。

　はたしてオオタカは『最後の王』のそばへ降下しながら、姿を変化させた。

「今ここでできることを先延ばしにする。それは怠たい惰だと申すべきでしょう。この羅濠、あなたの挑戦を受ける準備は十分にとと

のっております」

「ほう」

　オオタカと化して空より舞い降り、軽けい功こう卓たく越えつの身ごなしであざやかに着地する。

　方術と武芸のどちらもきわめた魔教教主ならではの登場に、『最後の王』は感服した体ていでうなずいた。しかし、それはみごとな着地の技へ向けたものではない。

　彼は羅濠教主の姿そのものに心を動かされたのである。

　光り輝くがごとき羞しゆう花か閉へい月げつの美貌はあいかわらず仙女そのもの。俗世の至宝と呼ぶに足る麗れい質しつであった。そして幼い。

　前よりも背が縮み、顔立ちも体つきもはっきり幼くなっている。

　年齢は一二、三歳というところ。もともと齢よわい二〇〇を超しながら、一〇代後半の乙女の容姿であったというのに。衣装もいつもの漢かん服ぷくではなく、ノースリーブのチャイナドレスである。スカートには深いスリットが入っている。

　魔教教主・羅翠蓮はこのような姿で天より舞い降りてきたのである。

「その御姿……やはり、僕との戦いで負った傷を癒いやすために？」

「ふふふふ。使いすぎた気を取りもどす必要があったのです。百年ぶりに《天てん山ざん童どう姥ぼ》の内功を行いました。まあ、ひきかえに手足が少々縮んでしまいましたが、あなたとの立ち合いに不都合はありません」

うそぶく羅翠蓮の声はいつもより高音で、幼い少女のものだった。

一方、予想外の姿を目まの当たりにして、エリカはリリアナと共に大いに驚き、魔教教主の直弟子は『やれやれ』とばかりに頭を振った。

「たしか気をとんでもない早さで速成するための練れん功こう法ほうだよ。ここ何日か取り組んでいたのは、この内功だったんだな……」

そもそも気＝呪力とは内功の修行を連日行い、その積み重ねですこしずつ養うもの。

だが——陸鷹化は語る。教主が今回用いた《天てん山ざん童どう姥ぼ功こう》ならば、二か月分の修行に匹敵するだけの気をわずかな期間で速成できるらしい。しかし、代償として一時的に体格が幼くなってしまう……。

「ま、無理のかかる内功みたいだから、あくまで非常手段だな」

たしかに、羅濠教主がその身に宿す気はそれなりに回復していた。

だが、総量は通常時よりも明らかにすくない。加えて童女の体では体力・筋力も当然おとろえる。武術の技もいつもどおりの感覚では使えないはずだった。

とはいえ、圧倒的不利を軽やかにくつがえす、さすがの絶技でもあった。

ついに山間のサーキット場で再会した勇者と魔王。

幸いにも正史編纂委員会の尽じん力りょくおよび『最後の王』自身の権けん能のうのおかげで、一般人は場内から退去済みだ。

　エリカたちもいる観客席から、両者はひらりとコースへと飛び出ていく。

「義弟・草薙護堂は子し細さいあって遅れております。が……無論、あなたが配下を呼ぶのは自由です。この羅濠、まとめて相手をして差しあげましょう」

「そうと聞いては、なかなかに呼びづらい」

　魔教教主からの挑発に苦笑いしつつ、英雄は救きゆう世せいの神刀を引き抜く。

「彼が到着するまで、僕もこの剣のみを伴はん侶りよとして戦うことにしよう」

「ふふふふ。ならば、わたくしは掌しようの武芸を——いかなる宝剣もおよばぬ武器を封じて、あなたと立ち合います」

　たとえ相手が神であっても、羅翠蓮の傲ごう岸がん不ふ遜そんは変わらない。

　だが、これもまた魔王カンピオーネにふさわしい〝我が流儀をどこまでも貫つらぬく姿勢〟なのかもしれない。魔教教主は童女の体で拳こぶしを握り、『最後の王』へ突き出した。

　一方、勇者の頭上には《神刀の曼まん荼だ羅ら》が燦さん然ぜんと顕現する。

　いよいよ第二ラウンドのはじまりであった。



３

　ついに草くさ薙なぎ護ご堂どうが『最後の王』の来歴を知ったあと。

　幽世かくりよの砂浜でふたりの媛ひめ巫み女こは激しい儀式の余よ韻いんにハァハァと息をはずませ、とろんとした目つきでしばらく放心していたのだが。

　ふと我に返って、すっかりはだけていた巫女装しよう束ぞくの乱れをそそくさと直した。

「もちろん、前からそうだったけどさ」

　居ずまいを正してから、恵え那ながうっとりとした口調で言った。

「恵那たち、もう王様のお嫁さんにしてもらうしかないよね……？」

「そ、そういうことを大きな声でおっしゃらないでください。私たち、護堂さんに知識を伝えるために儀式を行っただけなんですよ……一応、形の上では——」

　やんわりと反論した祐ゆ理りだが、巫女仲間と同じく幸福そうに満ち足りた表情だった。

　一方の護堂は「…………」とコメントできないでいた。

　もうあともどりできないなという自覚と、このまま行くところまで駆け抜けてしまうべきだろうかという自問が心のなかをぐるぐると駆け巡っている。とりあえず、こういうろくでなしをやさしく受け入れてくれる祐理と恵那には死ぬまで不義理はできないだろう。

　ともあれ、三人がようやく落ち着きを取りもどした頃だった。

「つつがなく目的を果たされたようで、何よりでございます」

　十じゆう二に単ひとえをまとう玻は璃りの瞳ひとみの媛が忽こつ然ぜんともどってきた。

　祝福するように護堂たちへ微ほほ笑えみかけてから、しかし、表情を引き締める。

「問題はたとえ真ま名なを知ったとしても、それだけで太たい子しさまにかなうかどうか……」

「たしかに。救きゆう世せいの神刀とか弓矢だけでも厄やつ介かいなのに、あいつには盟めい約やくの大だい法ほうって切り札までありますからね」

　護堂も認めると、媛は思案顔でささやいた。

「そのとき地上に君くん臨りんする羅ら刹せつ王おうの人数が多いほど、盟約の大法は太子さまのお力を高めてしまいます。せめて今こん世せいの魔王方——七人の全員が力を合わせれば、あるいは……」

「そりゃあ絶対に無理です」

　我がの強いカンピオーネの足並みがそろうわけない。護堂は即答した。

　自分と義あ姉ねのような関係は例外中の例外なのだ。あと当てにできるのは北米のジョン・プルートー・スミスくらいだろう。しかし、それでも七分の三だ。

「あれ、待てよ？」

　このとき護堂の頭にひらめいたのは、悪魔的とも言える打開案だった。

　盟約の大法にも対抗できるかもしれない一手。だが内容を吟ぎん味みして、護堂は自己嫌悪に陥おちいった。いくらなんでもこれはない。

　すると、玻璃の瞳の媛が微笑んだ。

「何か秘策がおありのようですね。さすがは草薙さま」

「あ、いえ。これはちょっと問題がありすぎるというか……。それに実じつ践せんする時間はないでしょうし。あいつとの戦いにはもう間に合わないですよ、絶対」

「そう――でしょうか」

　媛はすこし考えこんだ。それから、おもむろに右手を差し出す。その手のひらに忽然と顕あらわれたのは、紫色の袱ふく紗さにつつまれた細長い何かだった。

「その策を用いる時間ができたときのために、お渡ししておきましょう」

「俺に、ですか？」

　護堂は驚きつつも受け取り、包みの中身をたしかめた。見覚えがある。これはまさか――顔を上げると、玻璃の瞳の媛はこくりとうなずいた。

「ご想像通りの品です。よろしければ、お使いください」

　みごとな千せん里り眼がん。おそらく神しん祖その霊感がはたらいたのだろう。

　ひとまず受け取ることにして、護堂はズボンのポケットに包みを押し込んだ。

「俺たち、そろそろ地上に帰ります。いろいろお世話になりました」

　幽世の恩人へ頭を下げてから、媛巫女ふたりに呼びかける。

「向こうのみんなも心配しているはずだし、早くもどって安心させてやろう。万ま里り谷や、帰りも道案内を頼めるか？」

「もちろんです。ただ……護堂さん、ひとつよろしいですか？」

　表情を凛りんと引き締めて、祐理は言った。

「私はこちらに――幽世に残ろうと思います」

「えっ？」

驚く護堂。一方、恵那は理由を察したようだった。

「そうか。体のことだね、祐理？」

「はい。今、日本にもどっても私はまたあの御方の影響を受けて、体調を崩してしまうと思います。それよりは幽世に残り、霊感を研ぎすましたまま地上の様子をうかがう方が護堂さんのお役に立てるかと……」

いまや媛巫女たちも『最後の王』の真名を知っている。

にもかかわらず、それを祐理は口にしない。やはり、最強の鋼はがねとも言われる英雄を名指しすることは巫女として畏おそれ多いのだろう。

しかし幽世に残ったまま、どうやって手助けするというのか？

「今の私には幸い、この力もありますから……」

祐理は波打ち際ぎわの方を見やった。

神殺しと勇者の決戦場となった砂浜を再現した場所である。

砂は白く、海はあざやかなマリンブルー。その美しい海面に映像が映し出された。地上のどこかにあるサーキット場らしかった。

その上空に《神刀の曼まん荼だ羅ら》が出現し、稲妻の雨を降らせている。

危険きわまりない地上で羅ら翠すい蓮れんの面おも影かげを持つ一二、三歳の少女がチャイナドレス姿で軽やかに疾しつ駆くし、人間には回避できないはずの雷をみごとにすり抜けながら、蒼あおき髪の貴公子にすばやく接近してしまう。

貴公子は上段にかまえていた救世の神刀を少女めがけて振りおろす。

　これをかわして、少女は相手のふところにもぐりこむ。拳こぶしをまっすぐに突き出し、貴公子の腹筋を抉えぐろうとする。だが、とっさに貴公子は左手の掌てのひらを神刀から放し、代わりに少女の拳を包みこむようにして受け止める——。

「あれ、もしかして姐ねえさんか!?」

「はい。精神感応の触手を幽世から地上へのばし、私の感覚が捉とらえたものを映しています。教主はあの姿となる代わりに、御力をご回復されたのでしょう」

「さすが教主さま。体調不良も強引になんとかしちゃうんだねえ」

　神刀を振るう貴公子と童女と化した魔教教主の接近戦。

　マリンブルーの海面をスクリーンとする動画は決して画質のよいものではないが、戦いの詳細を見守ることは十分にできる。

　神かみ業わざを披ひ露ろうしつづける魔教教主の姿に、恵那が感かん嘆たんしきっていた。

　護堂も思わず目を凝こらす。が、すぐに画面が変わった。神刀の勇者と幼くなった羅翠蓮の戦い——今までは観客席から見守るようなアングルだったのだが、いきなり上空から俯ふ瞰かんで見おろす形になったのだ。

　しかも、どんどん視点が高くなる。

　闘技場代わりのサーキット全体、さらにはその周辺の土地が映し出された。

「ど、どういうことだ？」

　護堂は愕がく然ぜんとした。サーキットは山やま間あいに造られたものだった。だが、そこを中心として、山々の草木がどんどん枯れていくのである。

葉や花はカラカラに干ひ涸からびて、砕け散る。

樹木の幹、枝なども表面がかさかさになり、水気を失い、瘦やせ細る。

サーキットから半径二、三キロ以内の草花や木はあっという間に枯れてしまい、不毛の地となった。しかも、この『死の円』はさらに広がっていく。

「救世の神刀を振るうだけでもあの御方がお体に宿す熱は高まっていきます。それを浴びて大地は傷つき、すこしずつ世界にも影響が広がっていくのです……」

祐理の託たく宣せんだった。護堂はため息をついた。

「わかったよ万里谷。どうやら俺も急ぐ必要があるみたいだな」

「御武運をお祈りいたします。私もできるかぎりのことをしてみますから」

気丈にも祐理は不安など見せようともせず、しっとりと微笑んでくれた。

ならば行くしかない。護堂は麗うるわしい媛巫女にうなずきかけ、恵那にも目配せした。いよいよ『最後の王』——あの男と真正面から向き合うべき時が来たのだ。

祐理が胸元で両手を組み、瞑めい想そうする。

すると、足下の地面が青い光を放ちはじめた。

直後だった。護堂および恵那の体は一瞬にして天高く浮上してしまう。遥はるか眼下に白い砂浜と緑のジャングルを持つ南国の島が見えたと思ったら、視界はさらに暗転——。

幽世から現世うつしよへの帰還がはじまった。

幾百幾千もの雷を降らせる《神刀の曼荼羅》。

無差別爆撃にも似た無節操さで地上を蹂じゅう躙りんし、下界に

いる者どもを抹まつ殺さつしていく。武具というより戦術兵器めいた存在である。

頭上より際限なく降ってくる稲妻をやりすごすため、羅翠蓮は方ほう術じゅつを駆使した。

といっても、護身・防御の術を使ったのではない。救世の電光——その正体は『最後の王』に捧ささげられた神界の武具だという。最上級の方術で護身したとしても、あっさり打ち破られてしまうだろう。

そもそも、そのような凡ぼん庸ような手は羅翠蓮にふさわしくない。

そこで方術によって己おのれの肉体をほんのすこし——数メートルから数十メートルほど瞬間移動させて、電光をやりすごすのである。

道教方術の世界では、この手の術は『縮しゅく地ち法ほう』と呼ばれる。

とはいえ、短距離であっても地を縮める術はなかなかに難度が高い。しかも、心眼の法ほう訣けつによって飛来する稲妻を警戒しつつ、危険と悟るや舌を『疾チツ』と鳴らすだけの仕草で瞬時に縮地法を行使。しかも、二〇回でも三〇回でも当たり前に成功させる——。

武と方術の双方をきわめた羅翠蓮ならではの芸当だった。

また弱っているとはいえ、並の人間を凌りよう駕がするカンピオーネの呪力があればこその離れ業わざでもあった。ふつうは呪力切れを起こしてしまう。

そうやって稲妻をかいくぐりつつ、羅翠蓮は接近戦を仕掛ける。

宣言したとおり掌しよう法ほうは使わない。軽けい功こう卓たく越えつの歩ほ法ほうで『最後の王』との距離を詰め、蹴りを放ち、拳を繰り出して攻め立てるのである。

魔教教主の拳法相手に『最後の王』は神刀を振るい——剣術で迎え撃つ。

「やはり」

羅翠蓮は会心の笑みを浮かべた。

読みが当たったからだ。『最後の王』と刀とう槍そうで切り結ぶ

間合いに入った途端、救世の雷いかずちに襲われなくなった。《神刀の曼荼羅》が主人に刃やいばを向けまいとして、彼のまわりに稲妻を落とさないよう配慮しているのだ。

　これで拳法に専念できる。羅翠蓮の技にさらなる切れが加わった。

「前言をひるがえしてはいかがですか？　あの奇態な風神なり斉せい天てん大たい聖せいを呼ぶなりして、わたくしを突き放してもよいのですよ！」

　羅翠蓮は敵のふところへ飛び込み、接近短打の拳を『ちょん』と打ち込む。

　軽い拳撃。だが、大だい力りき金こん剛ごう神しん功こうの勁けい力りきをあますところなく乗せている。ふところへ飛び込んだ際に地を蹴ったときの力まで加えている。

　かするだけでも敵手の五体全てを断裂させる魔拳であった。

　だが、『最後の王』は羅翠蓮の拳を左手であっさり受けてしまう。貴公子の掌は大力金剛神功ではじけ飛び――は

しなかった。

　彼の左腕は電光を放ち、逆に羅翠蓮の幼い体を灼やき尽くす！

　前回の戦闘でも見せた彼の不死性のひとつだった。痛つう打だを浴びた瞬間に電撃で敵を押し返し、無傷でしのいでしまうのだ。

「羅濠殿こそ、そのようなお体で無理を重ねてはいけない。せめて全ての武芸を解禁すべきだと思うのだが……」

「ふふふふ。心配無用です。わたくしはこのとおり寸すん毫ごうの傷すらも負っておりません」

　至近距離から電撃を浴びたはずの羅翠蓮。

　しかし、宣言どおりに無事だった。幼く可か憐れんな容姿には火傷やけどひとつない。一瞬だけ守護霊よろしく金剛力士の顕けん身しんを我が身に重ねるように具現化させて、護身したのである。

　フッ――勇者と魔王はそろって不敵な笑みを浮かべる。

　共に武芸と権能を駆使して、窮きゅう地ちをやりすごした。その手て際ぎわをおたがいに認め、賞賛した瞬間であった。そして戦いが再開する。

　幼い体を躍動させる拳法の秘技。聖なる神刀と聖なる電撃による秘技。

それぞれがぶつかり合うさまには決闘というより、剣の舞いに似た華麗さがあった。

「さすが師し父ふ……。なんだかんだで上う手まく膠こう着ちやく状態に持ちこんだよ」

一方、戦いの成り行きを見て、陸りく鷹よう化かがつぶやいた。

降りしきる救世の雷いかずち——その電熱と衝撃はサーキット場のあちこちを無惨に灼き払い、打ち砕き、コースの路面や観客席は原形をとどめていないほどに破壊されている。

危険きわまりない決闘場を離れて、裏手の山へ逃げこんでいた。

エリカとリリアナもいっしょだ。三人で高みより戦闘の推すい移いを見守りつつ、いつでも教主のフォローに入れるよう待機中なのだ。

「たしかにおっしゃっていたな。しばし時を稼ぐ程度のつもりで遊んでみると」

リリアナがつぶやいた。

勇者と魔王の頂上決戦がどこか剣舞に似ている理由。それは両者があえて全力を振りしぼらず、己の力に制限を加えているためだった。おたがいに余裕があるのだ。

そして、この流れを生み出したのは羅濠教主の方だった。

エリカも感かん慨がい深ぶかげにささやく

「こう言うと非礼かもしれないけど、意外だわ。どんな敵も真正面から撃破することを正道と信じて、そのとおりに実じつ践せんされる……それが羅濠教主だと思っていたから」

「そりゃあ『表と裏』でいう表側の方だよ。忘れないでくれよ。神様たちはカンピオーネの魔王方より、戦力だけ見れば強いときが多

いんだぜ。にもかかわらず、羅翠蓮は今まで勝利を積みかさねてきた……」

　このときの彼は、師の偉大さを喧けん伝でんする弟子の表情ではなかった。

　むしろ、育ての親ともいうべき人物の異常性を『やれやれ』とあきれながら指摘する、苦々しげな身内の顔であった。

「『兵は詭き道どうなり』とか言うだろ。師父はそっちの方も結構いけるんだ。敵の方が強いというか〝兵力で勝る〟と踏んだら、軍略の限りを尽くして勝ちにいく人だからさ。頭を武芸の試合から戦争モードに切りかえるんだな」

「……なるほど」

　リリアナはうなずいた。詭道すなわち『あざむき、惑まどわせ、だまし討ちする』ための機略の数々。武術試合であれば卑ひ怯きようとそしられるかもしれないが、兵をひきいての〝いくさ〟であれば、むしろ王将の智ち慧えというべき美徳にもなる。

「その辺は師父といっしょに麻雀マージヤンやってみれば、すぐにわかるよ」

「「麻雀!?」」

「意外だろうけど、ちゃんと遊び方を知ってるんだ。結局、武術家とか道士みたいなヤクザ者の世界でずっと生きてきた人だから、世間知らずのくせに変なことを覚える機会がいろいろあったんだな。ただ、師父の遊び方は本当にえげつなくて……」

　今まで以上に驚きよう嘆たんする騎士たちの前で、陸鷹化はため息をついた。

「異様にギャンブル運があるうえに勘かんも度胸もいいって人だか

ら、ふつうにやるだけでも強いんだけどさ。そのうえ手先の器用さにまかせて牌はいをバンバンすりかえるし、ときには方術まで使って、イカサマし放題」

「ちょっと待って頂ちよう戴だい。羅濠教主がイカサマをされるというの？」

「さすがにそれは信じがたい話だな……」

「いやね。師父がはじめて雀ジヤン卓たくをかこんだとき、ほかの連中はみんなグルでイカサマやり放題のヤクザどもだったらしいんだ。ふつうならカモにされるところを、師父は逆にそいつらの技を見破って、真ま似ねして、あっさり大勝ちしちまった」

「「…………」」

「そして師父は思ったわけだ。『成る程、麻雀とは卓上にある四人分の手牌から好きな牌をすばやく集めて、短時間で役を作る遊びなのですね』と。あの人、最低でも四スー暗アン刻コウ、隙すきあらば九チヨウ蓮レン宝ポウ燈トウをバカみたいな早さで完成させちまうんだぜ……」

「い、イカサマをふつうの技術と勘ちがいして、そのまま今にいたるわけか」

「言われてみると、今の戦いぶりに通じるところがあるわね……」

　あきれるリリアナの隣で、エリカは眼下の戦いをあらためて見つめた。

　魔王殲滅の勇者が繰り出す攻撃の数々。これらを羅濠教主は巧たくみにしのぎ、防ぎ、みごとにやりすごしている。玄妙きわまりない武技と共に方術まで駆使して。

　人界では彼女以外の何者にも不可能な離れ業である。

　誰にも真似できない。同等の境地に達する者がいずれ現れるとも思えない。

　しかし、これがたとえば武芸の力量のみを厳密にはかるテストであれば、〝イカサマ〟と評することもできるのではないか。なにしろ方術と、時にはカンピオーネの権能まで併用する戦闘法なの

だ……。

　ともあれ、この剣舞めいた戦闘がはじまって、すでに一時間以上。

　羅翠蓮の幼い顔にすこしずつ疲れの色が出つつあった。玉の汗が額を流れ、どこか楽しげだった唇がきゅっと鋭く引き締まってきたのである。

　そして、ここで不意に『最後の王』が剣を引いた。

　救世の神刀を背中の鞘にもどし、完かん爾じと笑う。本調子ではない羅翠蓮の疲労に手心を加えるつもり——なのではない。

　電光によって無惨に破壊されたサーキット場の観客席へ、視線を向ける。

「来たか、草薙護堂」

　彼が見つめる先には最も若き七人目のカンピオーネがいた。

　介かい添ぞえ人にんである清せい秋しゅう院いん恵那もうしろに

ひきつれている。義姉・羅翠蓮が時間を稼いでいる間に、ついに現世へ帰還を遂とげたのだ。

4

幽世かくりよからの帰還はいつも唐突だ。ついにあの名を知り得た幽世の浜辺から、無惨に破壊されたサーキット場の跡地への転移はほんの数十秒で終わった。

もともと観客席だった辺りから、コース上のホームストレートを眺める。

幼くなった義あ姉ね・羅ら翠すい蓮れんと、救きゅう世せいの神刀を手に笑う『最後の王』がいた。共にこちらを見つめ、戦いを中断している。

傍かたわらにひかえていた巫み女こ装しよう束ぞくの恵え那なへ、護ご堂どうは耳打ちした。

「清秋院、すこし離れていてくれ。たぶん、みんなも近くにいるはずだ」

「うん、わかってる。探してみるよ」

エリカ、リリアナと共に待機し、護堂を適てき宜ぎフォローす

る。

　いつもの役目をまかされて、恵那は請うけ合った。だが、今回はいつも以上に強大かつ厄やつ介かいな相手である。彼女には特に大きな負担がかかるかもしれない。

　なにしろ太た刀ちの媛ひめ巫み女こは仲間のなかで最も戦闘力が高い、天叢雲劍あまのむらくものつるぎの担にない手なのだ。

　本人も承知しているのだろう。力強い仕草でうなずいてから、きびきびとした足取りで護堂のそばを離れていく。

　いよいよ『最後の王』――あの男との対決。

　観客席からコース上にジャンプで降りて、ホームストレートへ歩いていった。

「ずいぶん小さくなったな、姐ねえさん」

「おまえの帰りが遅いからです。義あ姉ねにこのような手間をかけさせた分は、義弟おとうととして孝こう悌ていを尽くすことでつぐないなさい」

「まかせてくれ。あの王子様の相手は俺がやるつもりで帰ってきた」

　そばに来た護堂の宣言に、羅翠蓮は幼い美貌でフッと微ほほ笑えむ。

　その不ふ遜そんさはまったく子供らしくない。背と手足が縮んでも、武ぶ林りんの至尊である事実は微み塵じんも揺るいでいないのだ。

　護堂があえて『最後の王』と言わなかった理由、聡そう明めいな義姉はすぐに察してくれた。

「いいでしょう。姉に先だって弟が戦う。その心を汲くんで、わたくしは最大の雄ゆう敵てきをおまえに譲ることにしてあげます」

　義姉の浮かべていた笑いの質が変わった。

　今までの不遜な微笑から、あどけないほどに可か憐れんな心からの笑顔に。

　護堂の功績と、『最後の王』へ対抗しうる切り札の到着をよろこんだからだろう。

　いつも冴さえ冴ざえと冷たい美貌ばかりを見せる羅翠蓮。彼女は戦場に在あるときだけ、そして強大な敵と激闘するときだけ、どんな花をも色いろ褪あせさせる笑顔を示してくれるのだ。

　そして、『最後の王』が護堂を見つめている。

「待っていたぞ、草くさ薙なぎ護堂。羅ら濠ごう殿だけではなく、僕は君とも会いたかった」

　神殺しを討つ運命の持ち主はおだやかに笑っていた。

　まるで護堂がひさしぶりに再会する年来の友人であるかのように、さわやかに。永遠にも等しい流る浪ろうと闘争を重ねる彼にとっては、もしかしたらカンピオーネたちこそが最も近しい他者なのかもしれない。

　どうしても彼への敵てき愾がい心しんを持ちえないまま、護堂は言った。

「俺の方は会いたくなかったよ。会って戦いになれば、あんたがいちばん嫌がることをやらなきゃいけないからな」

「ほう」

「悪いけど、そうでもしないと勝ち目がない。だから最初にあやまっておく」

　魔王殲せん滅めつの勇者が不思議そうに首をかしげたときだった。

　風が轟ごう々ごうとうなった。『最後の王』覚醒以来、ずっと続いていた関東地方の強風は今日も変わらない。しかし今、荒々しく吹きつける風がサーキットのコース上で渦うずを巻き、小さな竜巻となったのだ。

　直後、竜巻は『風の王』へと姿を変えた。

　仮面と全身に巻きつけた布で正体を隠した、鉄てつ風ぷうの軍神である。

　護堂はうなずいた。『最後の王』にとって最も近しい家臣は血を分けた弟だろう。だが、最も強力な配下はまちがいなく風神の方だった。

　今回も主君の危機を察して、いちばんに駆けつけてみせた。

『風の王』の手に、忽こつ然ぜんとメダルが顕あらわれる。黄金と鉄より成る合金製のメダリオン——《鏃やじりの円盤》である。あの三英雄を呼びよせるつもりなのだ。

　護堂はとっさに『最後の王』を見据えて、ささやいた。

「——あんたは常に配下をしたがえる英雄だった。高貴な王族であり、将軍であり、兵をひきいて異国の魔王と戦う者だった」

　言葉は言こと霊だまであり、力となり、刃やいばとなる。

　護堂のささやき声は黄金に輝く光の玉——剣の言霊となって、『風の王』が持つメダリオンの方へと飛んでいく。それも十数個まとめてだ。

　この『剣』たちは《鏃の円盤》にぴったりと貼りついた。

　すぐさま円盤が灰色になる。黄金まじりの合金は金メッキに似た黄色だったのだが、いきなり変色したのだ。

剣の言霊がすこしの間、英雄招しよう来らい——『最後の王』の権けん能のうを封じたのである。

「!?」

蒼あおき髪の貴公子が驚きよう愕がくし、『風の王』は身がまえる。

だが、護堂はかまわなかった。いつものように光の玉が次々と出現をはじめ、周囲を黄金の輝きで満たしていく。

「あんたは言うまでもなく、魔王を退治する英雄だ」

宙にあふれ出る言霊の剣はどんどん数を増していった。

「それ以外にも『鋼はがねの軍神』『弓を使う流浪の貴公子』という性質を持っている。あんたの物語は仏教説話に取り入れられることもあったし、アジア各地の民話にも大きな影響をあたえていった」

護堂が一言ささやくたびに、拳こぶし大だいの光が数十個ずつ生まれる。

あっという間に数百、千を超す個数に到達してしまい、黄金の光球はいまやサーキット中を埋め尽くすほどになっていた。

この光のひとつひとつが『最後の王』を切り裂くための刃やいばなのだ。

上空から見れば、地上にうずまく星せい雲うんが誕生したかのような情景だろう。しかも、この星々の集まりは順調に拡大中だ。だが、これではまだ足りない。護堂はさらに魔王殲滅の勇者をつまびらかにすべく、言霊を紡つむいだ。

「あんたほど異国の神話や民話に影響をあたえた英雄は、ほかにいないかもしれない。この日本であんたの影響を最も強く受けたのは——桃太郎だ。『むかしむかし、あるところに』ではじまる昔話の大定番、日本人なら誰もが知っている。俺だってそうだ」

「叡えい智ちの言霊。僕を斬きり裂くための武器か！」

ひらりと『最後の王』が踏み込んできた。護堂めがけて。

同時に救世の神刀を雷いかずちのごとく上段から振りおろす。一刀両断の太た刀ち筋すじ、カンピオーネの超反応と護堂の動体視力でも見切ることはむずかしい。

しかし今、護堂はさっと右手を振るだけで『最後の王』をはじき飛ばした。

その手振りに応じて、近くに浮いていた剣の言霊が一〇〇個ほど神刀の勇者めがけて飛び、拳の連打のごとく突き飛ばしたのである。

「く——っ！」

言霊の光は機関砲の連射さながらに『最後の王』へ押しよせる。

神刀の勇者はとっさに救世の神刀を中段にかまえた。切っ先を護堂の顔へ向けるようにして、はじめて——上段以外の構えを見せた。

上段では剣を振りおろすことしかできない。攻撃のみの構えである。

中段に置いた剣は楯たて代がわりに振りまわすことができる。つまり防御もふくめた構え。それに応じて《神刀の曼まん荼だ羅ら》がふたたび稲妻を撃ちはじめた。

空中より幾千・幾万の電撃が豪雨のように降りそそぐ。

しかし、このサーキット場にはいまや剣の言霊が充満しきっている。銀河を織おりなす星々のごとく、黄金の光球で満たされている。

光の玉を律りち儀ぎに数えあげれば、その総数は数十万にも達するだろう。

この膨ぼう大だいな数の光球は雷電の雨を苦もなく吸収してしまう。威力を吸い取りきれないほど強い雷については、はじき飛ばし、軌き道どうを変える。

地上の草薙護堂と羅濠教主には、ひとつも稲妻は届かない。

が、ここで『風の王』が駆け出した。

獣けもののごとく身を低くして、ときどき両手を地について四つ足になりながらの疾しつ駆く。一瞬にして鉄風の戦士は神しん速そくへと達する。

狙ねらいはもちろん護堂だった。しかし、それでも言霊の詠えい唱しようはやめない。

「桃から生まれた桃太郎は海を越えて、鬼ヶ島へ向かう。あんたと同じ〝旅する英雄〟だ。魔王殲滅の使命は〝鬼ヶ島での鬼退治〟に置き換わる」

護堂の前にさっと出てくれたのは、やはり義姉だった。

チャイナドレスの裾すそをひるがえしながら、目の前の虚こ空くうに向けて右手を打ち込む。神速ゆえに肉眼では捕捉できない風神を攻撃したのだ。

「そして、桃太郎が連れた犬・サル・キジのお供は――まさにあんたの〝常に配下をしたがえる〟という特徴に由ゆ来らいしている！」

正体不明の軍神が襲来したと悟って、護堂はとっさに叫んだ。

一方、童女と化した羅翠蓮は心眼によって神速の動きを見切ったのだろう。

次々と掌しよう法ほうの攻撃を繰り出していく。そう、拳けん打だではない。細い指先をのばし、掌を開いている。最も得意とする飛ひ鳳ほう十じゆう二に神しん掌しようの封印をついに解いたのだ。

槍やりの穂先よりも鋭い五ご指し。

いかなる鉄てつ槌ついよりも重い掌打。

天下の名刀さえも凌りよう駕がする切れ味の手刀。

　それらを密なること雨のごとく打ちつづけ、ほんの一息吐く間に十四、五発の掌しよう撃げきを虚空にたたき込んでみせた。

　神速の風と化した『風の王』を吹っ飛ばしたのは、そのなかの手刀だった。

　ギィィン！　幼女化した羅翠蓮がいつもより短い左手で水平の斬ざん撃げきを繰り出した瞬間、甲かん高だかい金属音がひびいて、『風の王』は地面に叩きつけられていた。

　全身に布を巻き、仮面をかぶった例の格好である。

　鋼鉄の肉体を持つ風神は手刀で押された結果、倒れただけなのだろう。ダメージはないようだった。だが、その胸を隠していた布が切り裂かれて、中身が露ろ出しゆつしている。

　それを一いち瞥べつして、護堂はうなずいた。

「桃太郎があんたの遠い同族であるように、犬・サル・キジの三匹はあんたの配下——『風の王』の影響を受けている。身軽さ、空を飛ぶ翼、鬼を退治する力強さ、それと何より〝姿形が人間ではない〟という点だ」

　仮面の風神がかたくなに隠しつづけていた素肌——否いな、白い毛皮。

　ついにあらわになっていた。ハッとして、『風の王』は後方へ大きく跳躍する。神刀を地面に突き刺し、鋼鉄の弓を手にする主君の背後へ。

「僕たち主従の来歴を語るか、草薙護堂」

　つぶやく『最後の王』の表情に怒りはない。悲しみもない。

　これから何が起ころうと全てを受け容いれるという諦てい念ねんゆえに、彼の美貌は怜れい悧りに冴え渡っていた。その表情を見

て、護堂はそうかと気づいた。

　こいつはあらゆる意味で、自分たちカンピオーネと対極を成す存在なのだと。

「ならば、我が真ま名なを唱えるといい。この矢を以もつて、僕は応こたえよう。もし君が真実にたどり着いているのなら——」

「ああ。俺の『剣』は必ず、あんたの矢を防ぐはずだ」

　英雄の右手に、白い矢が忽こつ然ぜんと顕れた。

　敵を知ることがウルスラグナ最後の化け身しん『戦士』の能力。だから護堂にはわかる。あれは太陽の力を宿した一いつ矢し。こちらの『白はく馬ば』に匹敵する威力のはずだ。

　太陽の矢が鋼鉄の弓につがえられた瞬間、護堂は言った。

「あんたの名前は長い間、大きな謎だった。東洋・西洋どちらの神話にも影響をあたえた英雄だけど、ルーツはアジア圏にある。その物語は仏教説話にまでなっている。そして、謎を解くヒントは仏典——つまり仏教にあった」

　十分に鍛きたえ抜いた肉体だが、『最後の王』は細身である。

　にもかかわらず鋼鉄造りの強ごう弓きゅうをやすやすと引き、悠ゆう々ゆうと太陽の矢を撃ち放つ。弓ゆ弦づるの鳴る音が『ぎいいいいぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃんんん』と響きわたる。

　そして、護堂と羅翠蓮のもとへ迫るものは矢ではない。

　巨大な火柱。放たれた矢は一瞬にして姿を変え、太陽の表面より噴きあがるフレアに似た焔ほのおのうねりとなったのだ。

　しかし、淡々と護堂はつぶやいた。

「あんたの故郷は仏教と同じ、古代のインドだ」

　フレアと化した太陽の矢は溶岩流にも似た勢いで押しよせてくる。

　だが、心はすこしも揺らいでいない。冷静だった。仲間たちと玻は璃りの瞳の媛ひめが力を合わせて、真実を教えてくれたおかげだ。

　護堂は己おのれのまわりに剣の言霊を結集させた。

　黄金に輝く言霊はかつてないほどにおびただしい数となっており、すでに大宇宙の星雲さながらの様相だった。それらの光を圧縮させて、金色の光で天蓋ドームを造る。

　今まで以上に強い守護力で、自分と義姉を覆おおいかくすためだ。

　そして、うずまく太陽の焔はこの天蓋をわずかに焦こがすこともできなかった。

「昔、神々ですら殺すことができない羅ら刹せつ族ぞくの魔王ラーヴァナを討ち滅ぼすため、地上に遣つかわされた聖なる御み子こ。コーサラ国の王子。シヴァ、ブラフマーとならぶ最高神ヴィシュヌの転生体アバターのひとつ」

「嗚あ呼あ——」

　蒼き髪の貴公子が短く嘆たん息そくした。おそらく覚悟していたのだろう。

　今こそ、隠しつづけてきた名がついに暴かれるのだと。

「彼の伝説を記した叙じよ事じ詩しは『ラーマーヤナ』、すなわち〝ラーマ王の物語〟と呼ばれる。最後の王——その真の名はラーマであり、またの名をラーマチャンドラ」

　護堂たちを襲っていた太陽の焔が燃え尽きた。

　周囲の景色にはもうサーキット場の面おも影かげはまったくない。全て焔に蹂じゆう躙りんされたあとの焼け野原であった。

　そして、向かい合うカンピオーネふたりと主従の神々。

　護堂は凛り々りしき貴公子の背後に立つ『風の王』に向けて、言霊をささやいた。

「ラーマ王に仕つかえる飛ひ翔しよう自在の眷けん属ぞくはハヌマーン。斉せい天てん大たい聖せい・孫そん悟ご空くうの同族ともいえる、天あま翔かける猿だ。風神の息子であり、不死身の肉体と怪力の持ち主でもある」

　鉄風の軍神に巻きついていた布がほどけ、仮面も砕けた。

　あらわになったのは身の丈たけ一八〇センチほど、二本足で立つ怪かい猿えんの姿だった。斉天大聖とたしかに似ている。だが全身の毛は白く、身にまとうのは赤い腰布だ。

　また、顔つきが妙に分別くさい。知的と言いたくなるほど賢明そうでもあった。

第６章　伝説の船の上で

1

　古代インドで誕生した叙じよ事じ詩し『ラーマーヤナ』。

　希き代たいの英雄ラーマ王子と羅ら刹せつ族ぞくの魔王ラーヴァナの決戦を描いた大長編である。その成立は紀元前にまで遡さかのぼる。

　現代において、ラーマは最高神ヴィシュヌの化け身しんのひとつとされる。

　これは時代が下くだるにつれて後付けされた要素だ。ヴィシュヌ神との縁ができる前からラーマはラーマだった。非常に古い貴き種しゆ流りゆう離り譚たんの主人公であり、魔王を討つ運命の担にない手であり、徳に満ちた王者であり、偉大な英雄だった。

　その絶大な人気ゆえに、民衆はいつしか彼を最高神と深く結びつけたのだ。

「ラーマ王子の宿敵、羅刹王ラーヴァナはとても特別な存在でした」

　幽世かくりよの砂浜で護ご堂どうと睦むつみ合いながら、祐ゆ理りと恵え那なは口々に語ってくれた。

「ラーヴァナはね。長い苦く行ぎようの末に『神にも羅刹にも殺されない特権』を得た羅刹で、たくさんの神様たちを苦しめる魔王だったんだ。しかも十じゆう面めん二に十じつ臂ぴ——一〇個の頭

と二〇本の腕を持つ恐ろしい姿で」

　護堂が媛ひめ巫み女こふたりの柔やわ肌はだに唇くちびるると舌を這はわせるたび、彼女たちはなかば恍こう惚こつとした声でささやいてくれたものだ。そして、護堂の唇を求めて身もだえし、舌をからませるキスの間に睦むつ言ごとのように神話を語って——。

「あるとき、神々は合議の末に決定します。神でも羅刹でもない者——人間の手でラーヴァナを討とう伐ばつさせようと。そのために神々はヴィシュヌ神へ要請するのです。人として地上へ降こう臨りんし、魔王抹まつ殺さつの使命を成じよう就じゆさせ給たまえと」

「そうして、ヴィシュヌ神の生まれ変わりとしてラーマ王子が誕生したんだよ」

　コーサラ国の第一王子ラーマは『全てに恵まれた者』だった。

　美貌であり、智ち慧えにすぐれ、徳と温厚さから人々に慕したわれ、最強の武人でもある。

　しかし、ラーマの異母弟を王に据すえようとする陰謀によって、彼は一四年間も国から追放されることになった。

　悲運の王子として旅立つラーマの供は、妻シーターと弟のラクシュマナ王子のみ。

　その後、ダンダカの森に隠いん棲せいしたラーマを待っていたのは、悪行を重ねる羅刹たちとの戦いの日々だった。

　もちろん、ラーマの武勇は羅刹たちを次々と退治していく。

　だが、ついに最強の羅刹王ラーヴァナが登場する。神にも羅刹にも殺されない特権を持つ魔王はラーマの妻シーターの美貌に目を付け、誘ゆう拐かいに成功してしまう。

　かくして、ラーマは羅刹王の城をめざして、ふたたび旅立つのである。

　悪あしき十頭の魔王ラーヴァナを倒して、奪われた妻を取りもどすために——。

「あんたの妻シーターは大地の精だった」

　救きゆう世せいの雷いかずちがひっきりなしに降るサーキットのコース上。

　しかし、この空間には今、黄金の光球が十万個以上も充みち満みちている。その全てがラーマという神格を斬きり裂くための刃やいばだった。

「シーターはジャナカ王の娘だけど、実の子供じゃない。王が祭壇を造るために大地を掘りおこしたとき、土から出てきた女の子……それがシーターだった」

　上空からの雷撃は全て黄金の光球が吸収するか、跳ね返している。

　そのたびに光球の数はすこしずつ減っていくが——いつもの戦いとちがい、当分なくなりそうもない。秘ひ匿とくされつづけていたラーマの名を明かしたことによって、ウルスラグナの剣は通常時を遥はるかにしのぐ威力を発揮しているのだ。

　また——徐々に放たれる雷撃の数自体が減っていった。

「ジャナカ王はこの尋じん常じようじゃない娘を勇者へ嫁とつがせると決めていた。王家に伝わるシヴァ神の弓を引けた者だけが彼女を娶めとれると。誰ひとり引ける者のいない強ごう弓きゆうを、あんたは——ラーマ王子は引くどころか、まっぷたつに折って、力を示した」

　上空に浮かぶ《神刀の曼まん荼だ羅ら》は、いつしか稲妻の放射をやめていた。

　そして、地上のラーマもさっきのように矢を撃とうとはせず、護堂の紡つむいでいく言こと霊だまにただ黙然と耳をかたむけている。

　言葉の鞭むちを甘んじて受けることで、自らへの制裁とする——。

　ラーマの姿がそのように見えて仕方ない。彼をまっすぐ見つめつつ、護堂は言う。

「そうして娶った妻をラーヴァナにさらわれたんだ。魔王征せい伐ばつのため旅立ったラーマ王子は長い旅と戦いの果てに宿敵を倒し、シーターを取りもどす。その後、彼は母国に帰り、今度こそ第一王子として王位を継ぐ。めでたしめでたしだ」

「…………」

「でも、国民はずっとラーヴァナに囚とらわれていた王妃シーターの貞てい節せつを疑った。ラーマは王として、彼女に潔白を証明せよと命じた。それもまた王の責務だったんだ。だけど、その命令を果たすためにシーターは――」

　大地の娘にして、ラーマ王の妻。玻は璃りの瞳ひとみの媛ひめが女神であった頃の名前。

　それがシーターだった。『畝うねの溝みぞ』という意味がある。大地を清める際に得た娘であるため、この名がつけられたという。

「大地の女神に『我が身が純潔であれば、我を受けいれ給たまえ』と祈り、地底の世界……つまり冥めい界かいへ旅立っていった。あんたは王の責任を果たすため、妻を捨てたんだ」

「そのとおりだ、草くさ薙なぎ護堂」

　ほろ苦い表情でラーマはうなずいた。

　無論、神話のなかのエピソードである。これは男と女の愛憎ではなく、むしろ神話学の見地から読み解くべき逸いつ話わだった。

　シーターとは結局、〝生いけ贄にえになることで大地に豊ほう穣じょうをもたらす女神〟なのだ。

　この系統の神話はさかのぼっていくと、『殺害された神の体を大地に埋めると農作物がたっぷりと実り、人々は食糧を得る』というエピソードに行きつく。

　生け贄となる神が焔ほのおで灼やき殺されることもある。これは焼き畑農法の暗あん喩ゆだ。

　ちなみに、シーターは地底に旅立つ前に一度、生きながら火に灼かれることで純潔を証明しようともした。

　以上を踏まえて、ラーマの振る舞いは神話学的に考察すべきだろう。

　男としてどうかと糾きゅう弾だんすることはフェアではない。だというのに、この貴公子は全ての罪を認める男の殊しゅ勝しようさでたたずみ、護堂とまっすぐ向き合っている。

　純粋に人間性だけを見た場合、彼はすこし誠実すぎる男なのだ。

　護堂は軽くため息をついた。剣の言霊にこんな反応が返ってきたことは初めてだ。その一方で、眼光鋭く向かい合う者たちもそばにいた。

　風の白びやく猿えん神しんハヌマーンと、いまだ幼女の姿である羅ら濠ごう教きよう主しゆである。

「我が主あるじの行状を語り、その偉業に聞き入るのであれば」

　護堂たちの前で、初めてハヌマーンが口を開いた。

「あなたがた人間が抱くべきは憧しよう憬けいと賛さん嘆たんの念であるべきでしょう。だというのに賢さかしげな言霊を武器として、殿に不敬を働く。まったく不心得もよいところですな」

「あなたの方こそ分ぶんをわきまえなさい、ハヌマーン」

　知的ですらある白猿神の物言いに、羅ら翠すい蓮れんが幼い声で異を唱える。

「家臣に過ぎない身で王と王の対話に割って入るとは、僭せん越えつの極きわみ。ふふふふ。今までどおり仮面で口を封じて、従者の分を守ってはいかがですか？」

「さすがに二千年近くもだんまりを決めこむと、いささかくたびれ申した」

　微笑交じりに挑発する魔教教主へ、毛むくじゃらの猿がとぼけ顔で応じる。

　和なごやかに見えて、両者の間で殺気と闘志が渦うず巻まいている。いつでもラーマと護堂、それぞれのパートナーを巻きこんで、戦いをはじめるつもりなのだ。

　一触即発というとき、護堂は声をかけた。

「すこし話すか」

「話？　僕と君とでか？」

「ああ」

　この誘いにラーマはすこしだけ考えこみ、それから忠臣に目配せした。

　白きハヌマーンはすぐさま分別くさい顔つきでうなずき、さっと後方へ跳びのいて、それ以上の発言はひかえてしまった。

「姐ねえさん。悪いけど、俺はこいつにちょっと興味がある。すこし待っててくれ」

「かまいません。たまには干かん戈かをおろして神々と交わることも、よい経験となるでしょう。ですが、何を語らおうともわれらの迎える結末はおそらく変わらないはず。そのことは忘れないようになさい」

　さすがというべきか。無神経に見えて、これで義あ姉ねはなかなか鋭い。

　弟分の迷いを見抜いているのだろう。神殺しとして先を行く者らしい忠告のあと、羅翠蓮もうしろへさがってくれる。

その配慮にうなずきと苦笑で応こたえてから、護堂は貴公子と向き合う。

「あんたはそろそろカンピオーネ——俺たちとの戦いを終わりにしてもいいと思うけどな」

「それがなかなかむずかしい。今回、魔王殲せん滅めつの使命を怠なまけてみようと千年ほど粘ねばってみたが、結局はこうして地上へ降こう臨りんする羽目になった」

共に必殺の武器を抜きながら、不思議なほど雰囲気は和なごやかだ。

これはあらゆる人を魅み了りようするラーマ王子の人間的魅力ゆえか、あるいは神殺しでありながら平和主義を標ひよう榜ぼうする草薙護堂の性格ゆえか。

「しかも、聖せい杯はいの精気のおかげで僕の力はいきなり臨りん界かいまで高まった。その結果、何が起きるか——君も今、感じているのではないか？」

「ああ。ずいぶんと熱いな」

ほろ苦く微笑するラーマへ、護堂は答えた。

幽世から帰還した直後、実はすぐに思ったのだ。まるで真夏のような気温だと。その原因は目の前で涼しげにたたずむ貴公子だった。

今、彼の全身から焔のような高熱が放散されていた。

ただ向き合うだけで、火事場にまぎれこんだ気分になれる。長時間このままでいたら脱水症状を起こしそうだ。体力のない者はすぐに体調を崩してしまうかもしれない。

ふと、ラーマがすこし離れた場所の地面を見た。

すこし前までサーキットにいた人間たちのものか、書類が五、六〇枚ほど落ちていた。ラーマはこれに歩みより、しゃがみこむ。その瞬間だった。

たくさんの書類が全てボロボロに崩れ去った。

紙にふくまれる水分が乾き切り、わずか一瞬で経けい年ねん劣れつ化かを起こしたのか。

奇跡を起こした熱波の主ぬしはため息と共に立ちあがり、護堂の方へ向きなおる。

「見てのとおりだ。このまま僕が地上にとどまれば、数多くの物と命が似たような最さい期ごを迎えることになる。風は荒れ、海と大地の熱はとめどなく高まり、山々は火を噴いて、天地は激しく鳴動するだろう」

「そうらしいな」

房ぼう総そう半島の大地と自然が受けた被害を、護堂もすでに見ている。

火山帯への影響もすでに警告されている。だが、ラーマ王子は『まつろわぬ神』としては破格の温厚さを持つ。もしかしたら、彼ならば自身の破滅的な影響力をコントロールできるのではないか。その期待があったのだが。

「僕の体内でここまで熱が高まれば、もう駄目だ。この熱はいずれ地上の隅々にまで届き、世界の在ありようを大きく変えてしまうだろう。人間たちはそれを『この世の最後』と言うかもしれない。止める方法はふたつある」

ラーマは——この世の最後に顕あらわれる王は淡々と言った。

「ひとつめは現在、地上に君くん臨りんする神殺しを全て僕が殲滅すること。使命を成じよう就じゆさせれば、僕はふたたび神刀の姿で休眠できる」

「もうひとつは？」

「君たちの誰かが逆に勝利すれば、やはり僕は神刀の姿にもどる。その場合、休眠は数か月、あるいは数年という一時的なものになるだろうが、それでも猶ゆう予よはできる」

「って、すごい無茶な要求だな」

とてつもない難易度の高さに、もはや護堂は笑ってしまった。

　今まで『最後の王』は無敗だったわけではない。逆だ。いにしえの神殺しとの戦いで、幾度も敗れている。古代ガリアでは護堂自身が勝利している。

　しかし、今のラーマ王子は盟めい約やくの大だい法ほうで完全覚醒した状態だ。ここまでになった彼を倒した神殺しは――一応ひとりいる。それを護堂は知っている。

　玻璃の瞳の媛が見せてくれた、あの男だ。

　だが、あの途方もないジャイアントキリング、はたして再現できるだろうか。

「しかも、最高に強くなったあんたを倒せたとしても、そのうち復活されるわけか」

「すまないな。理り不ふ尽じんにも程があると、自分でも思うのだが」

　護堂のぼやきへの、ひどく律りち儀ぎな謝罪だった。

　そして、ラーマはふと思い出したらしく、いきなりこんなことを言った。

「そういえば、あの女神はどうなった？　竜りゅう蛇だの気配をまったく感じないが？」

「まあ、なるようになった……そんなところだ」

「そうか。彼女にも不ふ憫びんなことをした」

　パラス・アテナの話題で、ラーマは一瞬だけ目を伏せた。

　あえて曖あい昧まいに答えた護堂の方は、心のなかでひそかにうなずいていた。こいつ、やはり神しん祖そや地じ母ぼ神しんの気配を感じ取れるのかと。

　今はべつの話をすべきであろう。護堂は話題を変えた。

「ほかの神様たちと比べて、あんたはすこし変わってるよな」

　この数日間で感じた、最大の疑問だった。

「神様――『まつろわぬ神』ってやつは地上をうろつく間に、すこしずつ神話の内容とちがったところが出てくるんだろう？　でも、あんたは割と神話のとおりだ。性格もまともだし、人間たちにもすごく慕したわれそうな感じで」

　数々の激闘、特に顕けん聖せい二じ郎ろう真しん君くんとの一件で学んだ知識だった。

　草薙護堂の天敵だった〝真なる神〟。彼は正義の守護者であることを最後まで貫つらぬき、民衆を苦しめる行為には決して手を染めなかった。

　また、『最後の王』ラーマは軍神ウルスラグナとすこし似ている。

　護堂と出会った当初、あの少年は『まつろわぬ神』としての記憶を失い、輝ける英雄そのままの気質で地上をさまよっていた。

　今となってはずいぶんとなつかしい、サルデーニャ島での一幕だった。

「ほかの神々とちがい、僕の場合は『地上に人間として誕生する』ことも神話のなかで語られている。だからだろうな。おかげで、もとの気質はあまり変わっていないはずだ」

「そうだったのか！」

「だが、地上を流る浪ろうする間に歪ゆがみと狂気が表れる……あの呪のろいを完全に逃れることはさすがにできない。僕にだって、おかしなところは当然あるさ」

　直後、護堂は気づいた。

　いつのまにかラーマの背後に矢や筒づつがあった。今まで置かれていなかったものだ。

　誰かが――ハヌマーンあたりが運んできたのか。しかし、風の白

猿神はすこし離れたところで羅翠蓮と視線を交わし、牽けん制せいし合っている。彼の仕し業わざではないようだ。

　矢筒には数十本の矢が入っている。

　これは雷神インドラより最勝の強弓と共に贈られたものだ。

　決して矢の尽きることがない神秘の矢筒。ここにはラーマ王子が武芸の師である聖仙や神々より授かった矢の数々が収められている……。

　この矢筒のすぐそばで、不定形の影がうごめいていた。

　影には人間の腕とよく似た部位があった。この腕を矢筒へのばし、金色の矢をつかむ。鏃やじりも矢羽根も黄金製だ。ラーマの知識を得た護堂にはわかる。この矢を東京に撃ちこめば、文ぶん京きよう区くのひとつくらいは一瞬にして消し飛び、灰かい燼じんと化すだろう……。

　護堂の視線で、ラーマが背後の動きに気づいた。

「——よせ！」

　貴公子の短い一いつ喝かつ。たちどころに影は矢筒から消え失せた。

2

「何だったんだ、今のは？」

　護ご堂どうが訊たずねると、ラーマはさっきと同様にほろ苦く微笑した。

「僕の代わりに全ての歪ゆがみを引き受けている者……そう言っておこうか。すこし長話がすぎたようだな。皆、今か今かと痺しびれを切らしている」

たしかに、ハヌマーンと羅ら翠すい蓮れんは集中を切らすことなく待機していた。

肩の力を抜き、おおげさに警戒することもない。が、敵が不意に何かを仕掛けてきても即応できるよう目配りもし、静かに闘気をためている——。

護堂は肩をすくめた。

そろそろ言葉ではなく、言こと霊だまの剣を振るうべき時間のようだ。

すでにサーキット場の原形をとどめていない焼け野原。この空間でたゆたう数万の光球たちへ、強く念じる。集まれ。俺のもとに集まれと。

いつもどおり金色に輝く光球の群れを操るのもいいが——

今の自分なら、より強力な『剣』を生み出せる。そして、大英雄ラーマとの決戦にそれは不可欠なものだった。

「我は最強にして、全ての障しよう碍がいを打ち破る者なり。義なる者たちを救済する刃やいばよ、輝く太陽のかけらたちよ。勝利の化け身しんに今こそ仕つかえよ！」

護堂の唇くちびるが言霊を紡つむいだ瞬間だった。

数十万に達する剣の言霊たち——銀河の輝きにも似た光の大集団は動きはじめた。

光球同士でぶつかり合い、結合し、形と質量をそなえるようになり、やがて武器化したのである。『輝く黄金の刃を持つ長剣』へ

と。

　剣は破格に長く、一八〇センチある護堂の身長とほぼ同じサイズだった。

　刃も幅広だ。サーフボードさながらに横幅がある。しかも鋼板のように分厚かった。

　この長大なる黄金剣は八本も誕生していた。

　剣の言霊を凝ぎよう縮しゆくさせた、ウルスラグナの八聖剣——。ラーマとの対決のために草くさ薙なぎ護堂が用意した、最高の武具であった。

　八聖剣は全て切っ先を下にして、宙に浮いている。



　しかも、護堂の周囲を三六〇度ぐるりと取りかこんでいる。いかなる攻撃からも主あるじを守り抜くために八聖剣は防御の陣形を組んだのだ。

　一方、魔王殲せん滅めつの勇者は高らかに叫ぶ。

「神殺しの魔王ふたりに挑む決戦——このままでは、いささか場所が狭すぎる。より広い闘技場を用意するとしよう！」

　直後、やにわに大地が白い光を放った。

　今まで護堂たちが踏みしめていたのは、アスファルトの路面だった。

　サーキットのコースを形作っていたものだ。しかし、この地面がやにわに白い光こう沢たくを放つ石いし畳だたみに変わってしまった。

　まわりをあわてて見まわすと、景色が一変していた。

　護堂たちはいつのまにか都市のなかにいた。白い石畳が見わたすかぎり、視界の果てまで続いている。完全に舗ほ装そうされた地面の上であった。

　おそらく土地の半分ほどは空き地だ。建物はそれほど多いわけではない。

　が、ところどころに石造りの一軒家や塔が建っている。使われているのは黒や白、灰色の石材ばかりであった。

「俺たち、いつのまにか街中へ連れてこられたのか……!?」

「いいえ！　ラーマ王子は都を——呼び出したのです！」

　驚く護堂へ、羅翠蓮が言ってくれた。

　カンピオーネには呪じゆ術じゆつ・神力への強い耐性がある。そのうえウルスラグナの聖剣に庇ひ護ごされているのだから、ラーマといえども強制的に瞬間移動させることはむずかしいはず。

　つまり、彼は護堂たちの足下に『街を召しよう喚かん』したのだ。

　無惨に破壊されたサーキット場の真上に、そのままかぶせるようにして！

「これは僕の持ち物ゆえ、好きなように破壊してくれてかまわない。君たちの権けん能のう、存分に振るってくれ。僕も——全力でいく」

　そう告げるラーマの背後に、今度は戦車チヤリオツトが顕あらわれた。

　戦車といっても現代人が造る鋼鉄の兵器ではない。馬車の一種で、弓・槍やりなどで武装した数名の兵が乗りこむ。古代ローマの闘技場では、戦車レースは特に人気のある競技のひとつだった。

　ラーマは鮮やかな身のこなしで、ひらりと御ぎよ者しや台だいに飛び乗った。

　ただし、この戦車を引く馬は一頭もいない。だというのに、氷上をスケートですべるようにして動き出し、そのまま空へ飛び立ってしまった！

「天の戦車ヴイマーナか！」

　叙事詩『ラーマーヤナ』に何度か登場する乗り物だと、護堂は気づいた。

　走るというよりもすべるようにして天の戦車ヴイマーナは軽やかに飛ひ翔しようし、ラーマは見る間に高度を上げてしまった。護堂たちよりも七、八〇メートルは上空にいる。

　そして、魔王殲滅の勇者は高らかに叫んだ。

「救きゆう世せいの神刀よ。我が師ヴィシュヴァーミトラ仙と偉大なる神々より授かった、天界の武具の数々よ。今こそ真の威力を示す時ぞ！」

号令の効果は絶大だった。

空で燦さん然ぜんと輝く《神刀の曼まん荼だ羅ら》がいきなり四つに増えた。

今まで、ひとつだけでも絶大な破壊力を発揮してきた雷撃の紋様である。その数が四倍となった。そして、四つとも護堂たちの頭上にやってくる。

四つの曼荼羅はそれぞれ東・西・南・北の空に陣取り、護堂と義あ姉ねを包囲した。

そうやって、雷の放射を無差別爆撃さながらに再開する。

今までの四倍の電撃が四方向から襲ってくる。すさまじい威力であり、圧力だった。なんともシンプルな物量の増加に護堂はあきれた。

「全力って、こういうことかよ！」

土ど砂しゃ降ぶりの雨のごとく、一瞬も途切れることなく雷が降ってくる。

だが護堂と、すぐそばにいる義姉はまったく動じない。自分たちのまわりを囲むウルスラグナの八聖剣が不可視の障しよう壁へきを作り出し、雷撃の威力を全て遮しゃ断だんしているからだ。

雷電の熱も衝撃も、カンピオーネふたりには届いていなかった。

八聖剣は英雄ラーマの神力を切り裂き、封じ込むための『剣』を極限まで研ぎ澄ませたもの。そうかんたんに破れるはずはない。

しかし、この物量押しは無意味ではなかった。

剣の言霊は使うほどに消しよう耗もうしていく。こうして際限なく攻撃を繰りかえしていけば、すぐには無理でも、いずれ八聖剣は力を失うのだ。そして、盟めい約やくの大だい法ほうで完全覚醒したラーマには、このバカげた攻撃を最後まで完かん遂すいできるだけの莫ばく大だいな呪力がある！

また、天の戦車ヴイマーナに乗るラーマは上空から矢を射いかけてきた。

　全てに恵まれた英雄が鋼鉄の弓で放つ矢は、例によって只ただの飛び道具ではない。

　次々と連射する矢のいずれにも雷神インドラ、火神アグニ、太陽神スーリヤなどの神力が宿っていた。それらを惜しげもなく撃ちまくる。

　八聖剣の張りめぐらした障壁に矢が当たるたび、大威力が炸さく裂れつする。

　いちばん威力の低い矢でも、そこらの市町村がきれいにひとつ吹き飛ぶほどの爆発と衝撃波を巻きおこす。そのうえ、破滅的なおまけがあった。

　矢が落ちた地点の周囲一帯を、焔ほのおや稲妻が大いに灼やき尽くすのである。

　だというのに、〝その倍の威力を持つ矢〟〝三倍の威力の矢〟〝十倍の矢〟などがラーマの矢や筒づつから次々と出てくる。

「まるで、強さのインフレってやつみたいだな……」

　もはや感覚が麻ま痺ひしてしまい、苦笑する護堂だった。

　今のところ、ウルスラグナ八聖剣の障壁は矢の威力を完璧にさえぎっている。だが、いつもより格段に強化されているとはいえ、剣の言霊がいつまで保もってくれるか。

　苦笑はできても余裕はない。冷や汗が額ひたいを伝う。

　一方、幼女の姿となった義姉は納得の面おも持もちでつぶやいた。

「そういえば、いにしえの印いん度ど国こくではこれが英雄たちの流儀でしたね」

　言われて、護堂もそうかとうなずいた。

　ラーマ王子についての知識があるおかげで、すぐに了解できた。

『ラーマーヤナ』とならぶインド二大叙じょ事じ詩しのひとつ『マハーバーラタ』。どちらに登場する英雄たちも弓矢や投げ槍やりな

どをよく用いる。それらの飛び道具はたいてい魔法の武器だ。火か焔えんや雷をまき散らすなどの魔力で、大きな破壊をもたらすのだ。

　おまけに、英雄たちは戦車に乗って天あま翔かける。

　それらの記述を深読みして、『古代インドでは現代よりも科学技術の発達した超文明が栄えていた』『これは飛行船（もしくはＵＦＯ）同士でミサイルを撃ち合い、核戦争を行ったという証拠だ』などの珍説まで唱えられることもあった。

「護堂。われら姉弟きょうだいもそろそろ反撃に出る頃合いでしょう」

「たしかに。このままじゃジリ貧になるだけだからな。……ふつうの相手なら、このまま剣を使うだけで勝てそうなところだけど」

　英雄ラーマの名を明かしたことで、護堂はウルスラグナの八聖剣を得た。

　その一振りだけでも、数万もの剣の言霊に匹敵する威力だろう。だが、盟約の大法がラーマにあたえた絶大な呪力は――おそらく八聖剣のポテンシャルを凌りよう駕がする。

　しかし、羅翠蓮はあでやかに微ほほ笑えみながら言う。

「先ほどの立ち合い、おたがい本気でないと承知の上での遊びではありましたが……まさか、ここまで力を隠していたとは」

　この義姉の表情、前に護堂も目まの当たりにした業ごう深ぶかさゆえか。敵がすばらしい強者であるほど、歓喜の心を素直に表すという。

　が、彼女はやにわにからかうような目つきで護堂を眺めた。

「ラーマ公子が空へ昇った以上、地上に貼りついたままでは――」

「勝つ見込みはすくないだろうな。まあ、そっちは当てがあるから、まかせてくれ。今まで姐ねえさんにがんばってもらった分、ここからは俺がしっかり働くよ」

「ふふふふ。わたくしを相手に、そのような大口を叩たたきますか」

　見なれない幼女姿で義姉が余裕の笑みを見せる。だが、護堂は肩をすくめた。

「最大の敵はまかせるって言ったの、そもそも姐さんだろ。それにわかってるぞ。無理矢理どうにか体調をととのえたんだろうけど、本調子には程遠いって」

　どんな奥おう義ぎを駆使したのか、護堂にはわからない。

　しかし、子供になってしまうほど無茶な方法なのだ。呪力を回復させたといっても、本来の量と比べれば半分程度に過ぎないだろう。

　そのうえ子供の体格なので、いつもとはリーチも体力もちがう。

　矢や面おもてに立つべきは、やはり自分――その思いから、はっきり護堂は言った。

「半病人に出しゃばられても逆に困る。姐さんは俺を陰から助けてくれ。頼むよ」

「まったく！　おまえはあいかわらず至尊である義姉への言葉遣づかいがなっておりませんね。ですが、よいでしょう。その大言、義弟が成長した証あかしと思うことにいたします」

「悪いな。でも、どうせ姐さんの出番は必ずあるよ」

　敵はかつてないほど強大なのだ。絶対に総力戦となるはずだった。

　尚なお、この会話の間も四つの曼荼羅は雷をひっきりなしに落としつづけ、ラーマも大火力の宿る神秘の矢を地上の護堂たちに射続けている。

　それらは全て英雄ラーマの神力なので、ウルスラグナの八聖剣には通じない。

　防御障壁の外は衝撃と爆発が荒れ狂う地獄の様相だが、内側はあいかわらず静かなものだった。だが。

　護堂と羅翠蓮を囲む黄金の八聖剣――その一振りが鋼はがね色いろに変わっていた。

　ラーマの神力を切り裂き、封じる霊れい験げんが早くも尽きたのだ。

　敵の圧倒的すぎる攻撃力にさらされ続けたのだから、仕方ないと言うべきだろう。鋼色となった聖剣はそのまま消滅してしまう。

　今度はこちらが攻勢に転じなくては。護堂は右腕で眠る相棒へ命じた。

「天叢雲あまのむらくも！　俺にも空飛ぶ車を調達してくれ！」

『応おう！』

　いつかウルディンとの戦いでも使った手だ。敵が空を飛ぶなら、その権能を天叢雲劍あまのむらくものつるぎにコピーさせて、こちらも使う。

　今回は天の戦車ヴイマーナをコントロールする能力の模も倣ほうだった。

　実のところ天叢雲劍あまのむらくものつるぎのコピー能力はそれほど強いものではない。大がかりな奇跡を起こす権能は真ま似ねしきれないため、このあたりで妥だ協きようすべきでもあった。

　護堂の目の前に、ラーマ王子と同じ型の戦車が顕あらわれる。

「頼む。俺たちを乗せて、飛んでくれ！」

義姉と共に飛び乗るなり、護堂は命じた。

すぐに戦車は空へ急発進する。念じるだけで意のままに動く乗り物なのだ。しかも、乗員は暑くも寒くもなく、風にも気圧にも苦しめられない。極上の乗り心地を味わえる。

もちろん、ウルスラグナの七聖剣もいっしょに飛ぶ。

戦車の右に四振り、左に三振りずつ横一列にならび、まるで両翼のようだった。

車体と乗員を防御障壁で守ることも忘れていなかった。おかげで、電光や矢に撃たれても小揺るぎもしない。今のところは。

「ビリビリうるさい方から始末するぞ。やれ！」

ちょうど護堂たちの頭上に、《神刀の曼荼羅》は四つとも浮いていた。

それらが放つ救きゆう世せいの雷いかずちにも屈せずに戦車は高速で飛び、まずひとつめの曼荼羅へとまっすぐ突っ込んでいく。

いっしょに飛ぶ七聖剣が曼荼羅の紋様をずたずたに切り裂いてしまう。

そして——《神刀の曼荼羅》ひとつめはそのまま消滅していった。これを三度繰りかえし、護堂と羅翠蓮を乗せる戦車はみごと雷の発生源を排除したのだが。

戦車の右にならぶ聖剣は三振り、左は二振りのみとなった。

今の反撃で二振りが力を使いはたしたのだ。代わりの武器が欲しいところだった。

「天叢雲あまのむらくも。ついでに黒い剣の方を準備できるか？」

　護堂は《黒の剱つるぎ》について訊たずねた。

「この間やった、地下で剣の準備をする方法……アテナ抜きじゃむずかしいだろうけど、もし可能なら、あれがいちばんいいな」

『あの地じ母ぼ神しんがいようといまいと、今は無理だ。気づいておらぬのか？』

「どういうことだよ？」

『より高みを飛んでみるといい。すぐにわかる』

　右腕の神刀に告げられて、護堂は急上昇の指示を念じた。

　戦車はすべるようになめらかな飛行で、たちまち高度を上げる。

　上空三、四〇〇メートルとおぼしき空域まで、すぐに到達。しかし、乗り心地はあいかわらず抜群だった。飛行機などでよくある足下からの浮遊感さえもない。

　そして、羅翠蓮が嘆たん声せいを発した。

「なんと……このような仕掛けを施されていたとは」

　敵ながら天晴あつぱれと言いたげな声音だった。

　護堂たちは今、ラーマが呼び出した『街』の全景を初めて見おろしていた。

　完全な円形の街である。直径は一五、六キロほどだろうか。あちこちに石造りの塔や一軒家、果樹園らしき林が点在しているが、基本的には空き地が目立つ。

　円形の中心には黄金の柱が屹きつ立りつしていた。これが街で最も高い建造物だった。

　そして、この巨大な街は——空を飛んでいた。

　その下方は海原だった。おそらく東京湾だ。遠くを見やればアクアラインとおぼしき海にかかる道路があり、千葉市・木き更さら津づ市しとおぼしき都市の遠景が視認できる。

　護堂たちの足下に、いきなり出現した『街』。

　この街はおそらく房総半島の山中から音もなく飛び立ち、西へ向かい、東京湾上空までやってきたのだろう。街中で戦っていた護堂と羅翠蓮に一切の気配を感じさせないまま、極上の乗り心地を保ちながら。

　地下で《黒の剣》を準備できないのは当然だ。そもそも大地の上ではないのだから。

　ラーマ王子についての知識から、護堂は街の正体を悟った。

「街のように巨大な、空を飛ぶ船……プシュパカ・ヴィマーナか！」

3

　ラーマが魔王ラーヴァナを討とう伐ばつしたあと。

　富と財宝の神クベーラはその功績を讃たたえて、ある乗り物を贈った。

　それがプシュパカ・ヴィマーナ。所有者の念じたとおりに飛ひ翔しようする天界の巨船、英雄ラーマの御座船である。

　天の戦車ヴイマーナと同種の乗り物だが、遥はるかに豪壮で巨大

だった。

　にもかかわらず、乗り心地のよさは小型種と変わらない。そのあたりからも、最上級の品であることが察せられる。

「僕たちの戦いに地上の王国を巻きこむのも、いささか心苦しい」

　不意に声をかけられた。ラーマが戦車を飛ばして、追ってきたのだ。

「だが、このプシュパカは僕の船。どうあつかおうと僕の自由だ。また、君たちとの決戦を迎える場所として、申し分ない格式もある」

「あんたも思う存分、暴れられるってわけか……」

　眼下の巨船プシュパカを見おろして、護ご堂どうはつぶやいた。

　さっきまで自分たちがいたとおぼしき、円の外周に近い一角。このあたりの建物は救きゅう世せいの雷いかずちできれいに薙なぎ払われ、更さら地ちと化していた。

　これを都市部で行えば、とてつもない被害となる。

　山奥であっても、無惨な自然破壊の爪つめ痕あとが大地に刻まれる。

　温厚なラーマとしては、どちらも避けたい展開だろう。なにしろ盟めい約やくの大だい法ほうで完全覚醒したあとも、威力が低めの矢を選んでいたほどだ。

　強力すぎる武装を持つがゆえに、ラーマはこの船を戦場に望んだのだ。

「これでおたがい、勝っても負けても言い訳できないってわけだ」

　護堂は唇くちびるの端を曲げて、獰どう猛もうに笑った。

　戦場が地上ではないという展開、こちらにとっても好都合だった。さらに打倒すべき男との距離は今、二〇メートル程度しか離れていない。

あとは全力で挑むのみ。護堂は攻撃の意思を発した。

「行け！」

護堂が操る戦車チャリオットの左右には、ウルスラグナの五聖剣が待機している。右に三振り、左に二振りと左右の両翼さながらであった。

その右翼の一振りがラーマの戦車めがけて、投げ槍やりのごとく飛ぶ。

すると救世の貴公子は弓を使わず、矢や筒づつから抜いた矢を即座に投げた。

「シヴァ神の矢よ！」

ラーマの投げ矢とウルスラグナの聖剣が空中で激突した。

聖剣は英雄ラーマを彼の神力ごと切り裂く武器。たとえ東京都全域を焦しよう土どに変える矢であったとしても、それがラーマの放ったものなら必ず打ち破れるはずだった。

だが、しかし。

「大いなる暗黒の化け身しん、破壊の神シヴァよ。御おん身みの徳をたたえる者、コーサラ王ダシャラタの息子ラーマを守護し給たまえ！」

貴公子の唇が祈き願がんの言こと霊だまを紡つむぐ。

直後、シヴァ神より贈られたのであろう一いつ矢しにラーマ以外の神力が宿った。

ブラフマー、ヴィシュヌとならぶヒンズー教の最高神。三つの目を持つ破壊神シヴァ。大だい黒こく天てん、摩ま醯けい首しゅ羅らなどは彼が仏教に取り入れられたときの名前だ。

ウルスラグナの聖剣はラーマの神力なら斬きり裂ける。

だが、シヴァ神の力には通じない。剣の言霊を封じるため、アテナをはじめとする神々が今までも幾度か見せた応おう手しゅだった。

　ラーマの迅じん速そくな聖剣封じ。しかし、それでも護堂は叫ぶ。

「我は最強にして、全ての勝利を掴つかむ者なり。人と悪魔——全ての敵と敵意を挫くじく者なり！」

　すでに三本を失ったが、剣の言霊を超えるために八聖剣を造り出したのだ。

　この程度の小細工で破られることを——許すわけにはいかない！　だからシヴァの投げ矢と激突した聖剣に呪力とウルスラグナの言霊を注ぎこみ、一心に障しよう碍がいの打破を念じる。

　そして、この念は成じよう就じゆした。

　ウルスラグナの聖剣はみごとシヴァの矢を打ち壊して、ラーマめがけて飛ぶ！

「む——！」

　天あま翔かける戦車の上で、ラーマが眉まゆをひそめた。

　彼の胸に聖剣が突き刺さる寸前、『ガキン！』という金属音。

　白びやく猿えん神しんハヌマーンが疾風はやての速さで割って入り、鋼鉄の拳こぶしでウルスラグナの聖剣を粉々に打ち砕いていた。

　ハヌマーンは風神ヴァーユの息子。風に乗って、軽やかに飛んできたのだ。

「おまえか！」

「無論。殿をお守り参らすことがわたしの務めゆえ」

　悔くやしがる護堂へ、猿のくせに分別くさい顔でハヌマーンがうそぶいた。

「やっぱり、かんたんには切り込ませてくれないな……」

　戦車の御ぎよ者しや台だいで、護堂はささやいた。

　ラーマ主従との間に横たわる距離は二〇メートルほど。

ハヌマーンは主あるじのそばを離れず、鋭い視線をこちらへ向けている。護堂がいまや四聖剣となったウルスラグナの刃やいばを飛ばしても、即座に打ち砕いてしまうだろう。

剽ひよう悍かん無む比ひの白猿神、はたして出し抜けるかどうか……。

ふぅぅぅ。深く息を吸い、すばやく考えをまとめ、隣を見る。

護堂と共に戦車の御者台に立つ羅翠蓮は少女の姿に不似合いな尊大さで腕組みし、魔王殲滅の主従を睥へい睨げいしていた。

「姐ねえさん。例のやつ、今ここでまかせていいか？」

「ふふふっ。おまえのことです。そう言うと思っておりました！」

義ぎ姉弟きようだいゆえの、阿あ吽うんの呼吸というべきか。

護堂が攻撃準備の念を発した瞬間——まず、戦車の左翼で聖剣のひとつが『チャッ！』と刀身を揺らした。鋭敏なハヌマーンはわずかに眼球を動かし、そちらへ注意をほんのすこしかたむける。それと同時に義あ姉ねが飛び出した。

「北ほく風ふう、地を捲まき万里を翔かけよ！」

言霊を唱え、飛翔の方ほう術じゆつを使う。

羅翠蓮の幼い肢し体たいは黄色い光につつまれ

て、一直線に飛ぶ。ハヌマーンの白い毛むくじゃらの体めがけて。

「なんと!?」

　驚きよう愕がくする白猿神を抱きかかえて、義姉はそのまま天空の彼方かなたへ飛び去っていった。

　少女の体でも金こん剛ごう大だい力りき神しん功こうで天下無双の剛ごう力りきを発揮できる。ハヌマーンは振りほどくこともかなわず、むなしく主の御前から去る形となった。

　護堂は近衛このえ兵へいを失った英雄王へ、聖剣を放とうと身がまえた。

　だが、敵もさる者——。

「ハヌマーンを出し抜くか。君たち姉弟の手て際ぎわは実にみごと」

　誉ほめそやすラーマの右手は《鏃やじりの円盤》を突き出していた。

　忠臣の手より、いつのまにか受け取っていたらしい。護堂は息を呑のんだ。

「かくなるうえは、僕もみんなの力を借りるしかない。——斉せい天てん大たい聖せい殿。ペルセウス殿。そしてランスロット・デュ・ラック。貴公らの助すけ太だ刀ち、今こそ借り受けたい」

　天翔ける戦車を駆る英雄、麗うるわしきラーマ。

　その前に三名の英雄が姿を忽こつ然ぜんと顕あらわす。ショートヘアの女騎士。気き障ざな雰囲気を悠ゆう然ぜんとただよわせる白びやく衣えのハンサム。革製の甲かつ冑ちゆうを着こんだ猿人——。

　皆、空を飛ぶための乗騎に搭乗済みだ。

　斉天大聖は黄金の雲、ペルセウスは白いペガサス、ランスロットは天翔ける白馬。

　さっき力を封じた《鏃の円盤》、すでに回復していたとは。落胆

する護堂の前で、ラーマは鋼はがねの三英雄へ呼びかける。

「よく召集に応じてくれた。諸しよ兄けいには『風の王』——わが股こ肱こうハヌマーンに代わって、僕の近衛をまかせたいと思うのだが、よろしいだろうか？」

「いやいや。それは決して良策ではないのう」

　凜り々りしき貴公子の要請に、斉天大聖がかぶりを振った。

「われらは皆、生ける刀剣として顕けん現げんした英雄たち。剣は楯たてにあらず。その本領は攻めにこそある。ここは救世主殿に代わり、われらが草薙の小僧めを討ち取って進ぜよう」

「——などと言って、いちばんの見せ場を横取りする肚はらか」

　主張する猴こう王おうの隣で、ペルセウスが皮肉っぽくつぶやいた。

　それから、この英雄連合の盟めい主しゆともいえるラーマをちらりと見やる。

「しかし、華々しく攻めてこそのいくさ人とは、たしかに言えるかもしれん。決して猿殿に迎げい合ごうするわけではないが、私も是ぜ非ひ、攻め手にまわしてもらいたいものだな」

　さすが斉天大聖とペルセウス。護堂は思わずあきれた。

　それぞれ自前の神話では絶対的な主人公を演じる者——極度の目立ちたがりだ。ハヌマーンのように召し使い役をこなす意欲と適性はゼロなのだ。

　二英雄の言いぐさに、ラーマは品良く苦笑した。

「承知した。ならば、僕はすでに先陣を切ったことでもある。お三方には真打ちとして、雄ゆう敵てき・草薙護堂を是非打ち倒していただきたい。ただし——おひとりだけ、僕の護衛役として残ってもらう。これでいかがか？」

　身勝手な要求を鷹おう揚ように受け容いれてから、手た綱づなを締める。

　徳と温厚さだけでなく、たしかな指導力を持つ王者の片へん鱗りんをラーマは見せた。斉天大聖とペルセウスは即座にうなずき、おたがいを横目でにらむ。

「おぬしにはさる高僧殿の護衛を長く務めあげた実績があると、仄そく聞ぶんしている。その経験をふたたび活いかしてみてはどうかね？」

「なんのなんの。麗しの乙女を救う勇者殿にこそふさわしい役目と思うがどうじゃ？」

「貴公たち、まるで駄々をこねる幼児のようだな」

　あきれたとばかりに、ランスロットがぼそりと口をはさんだ。

「天下の英雄が聞いてあきれる。致いたし方かたあるまい。このランスロット・デュ・ラック、救世の王とはいささかの縁がある。余が守護騎士の役を引き受けよう」

「「ほう」」

「余は貴公らと異なり、謙けん譲じようの美徳と引き際ぎわを心得た騎士なのだ」

「ええい、ここぞとばかりにえばりおって」

「だが、いちばんつまらぬ役を受けてくれた恩義に免じて、不問としよう。この大いくさ、ありがたく愉たのしませてもらうぞ！」

　斉天大聖がぼやいたあとで、ペルセウスは颯さつ爽そうと言い放つ。

　このあたりの役割分担、やはり貴婦人の護衛役を命がけで務める騎士の神ゆえか。いずれにせよランスロットが一歩引いたことで、あっさり敵の布陣はととのった。



　戦車に乗る護堂めがけて、二英雄が動き出す。

「どうれ、いつぞやの借りをお返しさせてもらおうか！」

「こんな形で君との再戦がかなうとは思わなかったぞ、草薙護堂！」

「くそっ。とりあえず逃げろ、全速力だ！」

　だが、一体どこへ逃げればいいのか。

　迷いながらも、護堂は飛行再開を念じた。天の戦車ヴイマーナは東西南北のいずれとも定かでない方向へ、全速力で飛翔をはじめる。

　さすがラーマの乗騎だけあって、一瞬でトップスピードに到達した。

　その恩恵で、追ってくる二英雄の雲とペガサスをひとまず大きく引き離した。

　しかし、向こうの乗騎も徐々にスピードを上げてきた。最高速度に大差はなさそうだ。そのうえ弓の名手であるペルセウスが馬上から矢を撃ってくる。

　もちろん一本だけではない。連射である。

　古代ローマの英雄は機械じみた速さと正確さで次々と矢をつがえ、弦つるを引きしぼり、護堂の背中めがけて撃ち放ってくる。

　しかもラーマと同じく、決して矢の尽きない矢筒を持っているようだった。

「かわせ！」

　護堂の意思に応こたえて、戦車はジグザグな軌き道どうを描き出す。

　おかげで、後方から追いかけてくる大量の矢を今のところ全て回避し続けていた。だが、無駄な動きが入ったせいで、徐々に追跡者との距離が詰まりはじめる。

　このままではいつか追いつかれる。そのときだった。

（護堂さん……）

　よく知る少女のささやき声を耳元で聞いた。

　その内容に、護堂はハッとした。反撃のチャンス到来。しかし、手て際ぎわよく事を進ませないといけない。復活した三英雄は結局のところ前座に過ぎないのだ。

　なるべく消しよう耗もうを避けて勝つには、どうすべきか。

　護堂は右腕――黒き霊れい劍けんが宿る腕をちらりと眺めた。

　成功するかはわからないが、やってみる以外に活路はない。うなずいて、新たな行き先を思い描く。

「大急ぎで飛んでくれ。あそこでケリをつける！」

　天の戦車ヴイマーナは即座に応えてくれた。

　トップスピードに乗ったまま、おそろしいほどのなめらかさで急激に方向転換。『Ｕ』の字を描くようにして、一気に針路を変える。

　このときも、乗り手の護堂にまったくＧを感じさせない。

　とんでもない乗り心地のよさを見せつけてから、戦車は高度を落としていった。

　ただし、お目当ての場所は地上でも海の上でもない。護堂がめざす目的地はさっき飛び出してきた巨大船、プシュパカ・ヴィマーナであった。

第７章　魔王殲滅の円環

1

　風の白びやく猿えん神しんハヌマーンを抱きかかえて、飛ひ翔しようした羅ら翠すい蓮れん。

　彼女は金こん剛ごう力りきの使い手である。『ラーマーヤナ』のなかで剛力を讃たたえられる猿神を抑おさえつけるべく、童女の右手で猿の白い顔面をつかんだ。

　すかさず五ご指しに『大だい力りき金こん剛ごう神しん功こう』の勁けい力りきを送り込む。ハヌマーンはうめいた。

「ぐうううぅぅぅぅぅぅぅっ！」

　プロレスでいうアイアンクロウに酷こく似じした技。しかし、内実はまったくちがう。

　五つの指先は金剛力でハヌマーンの頭部を圧迫し、さらには頭ず蓋がいの経けい穴けつ（ツボ）まで押さえて、標的の身動きを封じていた。

　だが、やけに分別くさい白猿神は見かけ以上におそるべき能力を持つ。

　いつまでも拘束しておけるはずはなかった。

　腰を据えて戦える場所へ、一刻も早く到着する必要がある。羅翠蓮は千せん里り眼がんの道どう姑こ。数十里先に陸地があると即座に見抜き、そちらへ向けて飛行速度を一気に加速させた。

　このあたり、やはり東京湾はせまい。

　プシュパカ・ヴィマーナ自体が海上を西に進んでいたことも影響している。

　また羅翠蓮の飛翔はリリアナなどよりも遥はるかに高速であるという、単純な理由もあった。

　ともあれ、東京湾洋上での飛行開始から着陸まで、わずか二、三分。しかも、羅翠蓮はこの非常識な速さと勢いを攻撃にも利用した。

　着地のためにスピードを落としたりは一切しない。

　非常識な飛行速度を保ったまま地上へ急降下し、そのままハヌマーンの体をコンクリートの地面に激突させたのである。

　鋼はがねの肉体を持つ白猿神が隕いん石せきさながらに墜落。

　結果、ハヌマーンを激突させた地点に直径二〇メートル近い大穴が穿うがたれた。

　大小さまざまなコンクリートの破片が宙を乱れ飛ぶ。小は石ころ程度から、大は乗用車に匹敵しそうなほどのサイズまであった。

　だが、これでわずかでもダメージを負うほど、鉄てつ風ぷうの軍神に可か愛わいげはない。

　墜落直後、ハヌマーンは羅翠蓮の右みぎ掌てのひらと五指で頭をわしづかみにされながらも、ようやく言こと霊だまを紡つむぎ出した。

「ち……父なる風神ヴァーユよ！」

　白き猿神の体はすぐさま一陣の風となった。

　いかに羅翠蓮といえども、気体を摑つかむことはできない。

　ハヌマーンはみごと脱出を遂とげて、疾しっ風ぷうと化したまま底からクレーターの外縁へと駆けあがり、無事だったコンクリート

の地面にみごと着地を遂げた。

　猿の肉体にも、その白く美しい毛皮にも、一切の瑕きずはない。

「ふふふふ。さすが勇者ハヌマーンと言っておきましょう。己おのれの死すべき時を自らの裁さい量りようで決めてよいとまで言われた不死身ぶり、うわさにたがわぬようです」

　尚なお、ほくそ笑む羅翠蓮もまた無傷であった。

　いくらハヌマーンの肉体を楯たてにしたといっても、あの速さと勢いで大地に墜落して、ふつうなら無事でいられるはずはない。相応の衝撃とダメージで全身を打ちのめされ、即死を遂げているはずだった。

　だが、そのような不都合が羅翠蓮を襲うわけもない。

　彼女は軽やかに跳躍した。クレーターの底からハヌマーンの眼前へ、只ただ一度のジャンプで悠ゆう々ゆうと到達する。身が軽いを通り越して、体重などという無ぶ粋すいな足かせを持たない天てん女によのごとき優美さであった。

今度は地上で、羅翠蓮とハヌマーンは対たい峙じする。

だが、風神の息子はすぐに自前の飛翔力で宙へ浮きあがった。

「麗うるわしき神殺し殿は、わたしの来歴をご存じらしい」

空中の一点でぴたりと静止して——

ハヌマーンはすわりこんだ。さすが風の申し子、無む色しよく無む形けいの大気が彼にとっては椅子代わりになるのだ。

座ざ禅ぜんでも組むように結けつ跏か趺ふ坐ざした白猿神の背後に、曼まん荼だ羅らが顕あらわれる。

身の丈たけ一八〇センチの彼より十倍ほど大きく、円形である。主あるじの使う《神刀の曼荼羅》には無数の武具が書きこまれていたが、ハヌマーンのそれには大勢の——一千匹もの猿たちが描かれている。

猿たちは皆、甲かつ冑ちゆうを身につけ、刀や槍やりで武装していた。

「ならば、ご存じであろうか。わたしは太たい子し殿の協力者である前に、猿の種族の王スグリーヴァに仕つかえる者。そして、猿の兵団をひきいる将でもあると」

直後だった。曼荼羅に描かれていた一千匹の猿が——動き出した。肉体と生命を得て、ハヌマーンに仕える猿軍の兵士と化したのだ！

体格はハヌマーンとちがい、ごく標準的な猿のそれである。

しかし、毛皮の色は主人と同じ白。そのうえ風の申し子であるところも同じなのか、武装した猿軍団一千匹は疾風に乗って、空へと飛び出す。

　空中から羅翠蓮の頭上に殺到し、それぞれの武器で襲いかかるために！

「無論、存じてはおりますが」

　対して、武ぶ林りんの至尊はいかにも彼女らしく傲ごう岸がんに肩をすくめた。

「この程度の雑ぞう兵ひよう――たとえ一〇〇万そろえようとも、わたくしに寸すん毫ごうの傷すらもあたえられるはずがありません！」

　美しき唇くちびるから放たれた一いつ喝かつは獅し子し吼くのごとき激しさだった。

　そして、可か憐れんなる美声は鉄をも粉砕する衝撃の魔風に変じる。第二の権けん能のう『竜りゆう吟ぎん虎こ嘯しよう大だい法ほう』を行使したのだ。

「将軍は馬上に死に、兵は地君の営に滅ぶ。血は流れて荒野に遍あまねく、白骨は辺へん庭ていにあり。去りし馬は残跡に遊び、空むなしく留とどむ紙し上じようの名――」

　吟じるは、いくさ場の無情を嘆なげく謡うたい。

　不吉な詩し句くは破滅を呼ぶ風となって駆け抜け、一千匹の猿軍団を一ひと撫なでした。結果、ハヌマーンの兵たちは――さらさらと崩れ去った。

　猿としての形を失い、細かな粉ふん塵じんとなり、大気中に散っていったのである。

　だが、次の刹せつ那なだった。

　間かん髪はつ容いれずに今度はハヌマーン自身が空から襲来してきた。

風の速さで羅翠蓮の頭上に急降下するなり、その勢いを乗せて回し蹴り。しかも、足を上から下へ断頭台の刃のごとく縦たて回転させる離れ業わざだ。

この猿族ならではの軽けい捷しような蹴りで、魔教教主の肩——細い鎖さ骨こつを狙ねらってきた。

とはいえ、白はく打だ（格闘戦）は羅翠蓮が最も得意とするところ。

わずかに後方へさがるだけで、ハヌマーンの蹴りをかわしてみせた。が、ほんのかすかに見切りをあやまったのか。

身につけていたチャイナドレスの胸元がすこし縦に裂けていた。

眉まゆをひそめる羅翠蓮へ、ハヌマーンはふたたび地面に降り立ちながら言う。

「ああも無体に打ち倒されるのでは、わざわざ兵を呼んだ甲か斐いがない。今も昔も羅ら刹せつ王おうという輩やからには乱暴な手合いが多いようで……」

詠えい嘆たんしながらも、白猿神は動きを止めない。

右腕をぐんとのばして、羅翠蓮の顔面めがけて拳法の直じき突づきを放ってきた。

しかも単発ではなく、一呼吸のうちに同じ右拳を五連打する早業だった。疾しつ風ぷう迅じん雷らいの絶ぜつ技ぎである。が、武林の至尊にとっては驚くほどの新奇さはない。

五連打をことごとく左手の甲と掌で払いのけ——ようとした。

だが、最後のひとつを払いきれず、逆に拳の勢いに押されて左掌がはじかれた。そのまま顔面へ飛んでくるハヌマーンの拳をとっさにかわす。これは上う手まくいった。

だというのに。

わずかに拳がかすっていたらしい。

羅翠蓮の頬ほおに小さな切り傷がうっすらと浮かんでいた。血がしたたり落ちる。

「先ほどの太子殿との立ち合いで疲れておられるのですな。それに、いつもより短い手足のせいで、若じやつ干かんですが武芸に狂いが出ている御様子」

慇いん懃ぎんな口調でハヌマーンが告げる。

「こう申してはあれですが、そのありさまでわたしの相手はおつら

いでしょう？」

「……なるほど」

　一方、羅翠蓮は納得の面おも持もちであった。

「あなたが最も得意とする武器は——その体というわけですか」

　かつて古代ガリアの地で、サルバトーレ・ドニは喝かつ破ぱした。

　刀剣は『風の王』が得え手てとする武具にあらずと。その一幕をもちろん羅翠蓮は知らない。しかし、正体を明らかにしたハヌマーンとの立ち合いで、イタリアのカンピオーネ以上の真実をすでに悟ってみせた。

　拳と蹴り。そして五体の全てを駆使する拳法の技。

　それこそが白きハヌマーンの切り札、最も得意とする武器なのだ。

　飛ひ鳳ほう十じゆう二に神しん掌しようを最大の絶技とする羅翠

蓮にとっては、相性がよい相手だとも言える。格闘の間合いであらゆる技を尽くして戦うことができるからだ。

　だが、肉体の不調が羅翠蓮の見切りと経験をわずかずつ狂わせていく。

　しかも、敵は不死身の——鋼の肉体を持つ。我慢比べになれば、明らかにハヌマーンの方が有利なはずだった。

　このまま戦いつづければ、今の均きん衡こうはおそらく数分程度で崩れるのではないか。

　かといって速攻で倒しにかかっても、敵は百ひやく戦せん錬れん磨まの軍神。その策はすでに読んでいるだろう。さて、この窮きゆう地ちを脱する妙手はありやなしや——。

　羅翠蓮は幼い美貌を引きしめて、分別くさいハヌマーンの猿さる面づらをにらみつけた。

　巨大な街かと見まごうラーマ王子の御座船、プシュパカ・ヴィマーナ。

　実際、船上のあちこちには石造りの塔や家屋が立ちならんでいる。大勢の人間が住みついて、本当に街として機能させることも可能だろう。

　天の戦車ヴイマーナに命じて、護ご堂どうはこの街のなかに飛び込んできた。

　そして、そのあとを追いかけてくるペルセウス・斉せい天てん大たい聖せいの英雄ふたり――。

「このようなところに逃げこんでも、私の矢からは逃れられんぞ！」

　ペルセウスが痛快そうに叫んだ。

　おそらく、ふたたび神殺しと戦えることがうれしいのだろう。

　ペガサスの上から、次々と矢を撃ってくる。しかも、一射で放つ矢は一本だけではない。五つの指の間に四本の矢をはさみ、これらを全て弓の弦つるにつがえ、同時に射いるのである。

　そのうえ、これを文字通りの意味で矢や継つぎ早ばやに繰りかえす。

　ひとりしか射しや手しゆはいないというのに、弾幕さながらの連射が護堂を追いかけてくる。

　天の戦車ヴイマーナの飛行性能がなければ、いずれかの矢ですぐに射ぬかれていた。しかも、ペルセウスの隣には雲に乗った斉天大聖までひかえている。

「くくくく。そろそろ真打ちの乱入というところかのう？」

　にやにや笑いながら、逃げ惑まどう護堂の背中をじっと見つめていた。

　まちがいない。神しん速そくで突入するタイミングを図っている

のだ。珍しく慎重なのは、護堂も同じ能力の使い手だと承知しているからだろう。不用意に飛び込んでも、同じ神速で逃げられたのでは意味がないと。

　このあたりの判断、さすが天性のいくさ上手と言うべき美び猴こう王おうであった。

「……やっぱり、逃げるだけじゃ限界があるな」

　護堂はつぶやいた。逃走開始時に稼かせいだ数百メートルほどの距離は、すでに半分以上も縮められている。反撃しなくては活路も開けない。

　そして、ここへ来た理由はまさに反そ撃れのためなのだ。

「頼む。俺の言うことを聞いてくれ……！」

　天叢雲劍あまのむらくものつるぎがコピーしたラーマ王子の能力に賭けて、護堂は叫んだ。

　ヴィマーナを操る力だ。しかし、頼む相手は今も乗っている天の戦車ヴイマーナではない。もっと巨大で、強力な、最上最高の乗り物――プシュパカ・ヴィマーナだった。

　そして、護堂は感じ取った。

　全てではないが、街かと見まごう巨船の一部を自由にできるという感覚を！

「やれ！　あいつらをぶちのめしてくれ！」

　とっさに叫ぶ。ラーマ王子の知識から、承知していたのだ。

　全てのヴィマーナには何らかの武装があることを。それを主人が使わないのは、単に手持ちの武具の方が遥はるかに強力だから、なのだろう。

　ともあれ、攻撃の指示に――プシュパカ・ヴィマーナの一部は応こたえた。

　この巨船は完全なる円形で、直径一五、六キロ。今、護堂が飛んでいた一角――北東のブロックが草くさ薙なぎ護堂の支配下に入っ

てくれた。

　面積にして、全体の八分の一というくらいだろうか。

　北東ブロックの中心には、この一帯で最も高い塔が建っていた。

　白はく亜あの塔である。高さは四、五〇メートル程度。この塔の建物全体がやにわに青白く発光をはじめた。バチバチと火花まで散らす。

「「なに!?」」

　ペルセウスと斉天大聖がそろって驚いた瞬間だった。

　白亜の塔最上部から青白い電光が放たれて、護堂を追跡中だった二英雄へ降りかかった。これが直撃して、彼らはそれぞれの乗騎——ペガサスと雲から投げ出される。

「ええい、汚い手を使いおって！」

「あいかわらず、見み栄ばえのよさにこだわらない男だな！」

　斉天大聖が毒づき、ペルセウスはどこかうれしそうに叫んでいる。

　さすが鋼はがねの英雄たち、稲妻で撃たれてもほどほどに元気そうだった。だが、連中の姿を確認したりはしない。そんな暇ひまがあれば、一秒でも多く逃避行のために使うべきだ。

　その後も、白亜の塔は稲妻を撃ちつづけた。

　もちろん二英雄を牽けん制せいし、草薙護堂の追跡を妨ぼう害がいするためだった。

　プシュパカ・ヴィマーナの援護を受けて、護堂はふたたび英雄たちをひきはなす。そして、ダイヤモンド型の広場を見つけた。

　日本人の感覚でいえば、野球のグラウンドと似たような形と広さである。

　広場のなかにひとつだけ、寺院を思わせる建物があった。そのすぐ前に護堂は天の戦車ヴィマーナを着陸させて、石いし畳だたみの

上に降りる。

「ここでどうにかしてみるか……」

　ずっと戦車といっしょに飛んできた四聖剣もそばに来て、地面へ突き刺さる。だが、これで終わりではない。護堂は右手に天叢雲剣あまのむらくものつるぎを呼んだ。

「天叢雲——例のやつ、はじめてくれ」

『うむ。いよいよ背はい水すいの陣じんというわけだな』

　勇ましい返事のあと、護堂の頭上に暗黒の球体がいきなり顕けん現げんする。

　直径十数メートル。空に浮いている。天叢雲剣はついに《黒の剱つるぎ》を発動させたのだ。が、もちろん威力を臨りん界かいに高めるまで、すくなからぬ時間を要する。

　一分、二分、三分、四分——護堂は無言で待ち続けた。

　全ぜん呪じゅ力りょくを天叢雲剣に注ぎこみ、一秒でも早く《黒の剱》の威力を完全なものに高めようと専念する。その間、遠くから幾度も稲妻の落ちる音が聞こえてきた。

　白亜の塔がペルセウスと斉天大聖を攻撃し続けているのだ。

　そして、英雄たちはしぶとくしのぎ続けているのだろう。あの程度で倒れる彼らではないはずだから……。そう思った瞬間、やにわに轟ごう音おんがとどろく。

　見れば、白亜の塔最上部が爆発していた。

　ついに二英雄がめざわりな塔を撃破したようだ。

　護堂は舌打ちした。《黒の剱》はいまだ臨界に至ってない。せいぜい最大威力の半分程度というところだろう。

「せっかくの小細工も無駄に終わったようじゃのう」

「私としては、君がさらなる悪あがきを見せてくれるものと期待しているのだがね」

さらに、二英雄の声が追い討ちをかける。

斉天大聖とペルセウスの両名がついにダイヤ型の広場へやってきた。もう乗騎を伴っていない。彼らはそれぞれの足でここまで来たのだ。

護堂は頭上の暗黒星をわずかに見あげた。

ぎゅぅん。ぎゅぅん。ぎゅぅん。巨大な球体は独特の音を立てながら、それなりの速さで回転していた。だが、臨界時にはもっと高速回転している。

今、重力嵐を起こしても、英雄たちにはとても通じない。

護堂はやや大げさにため息をついて——直後、すばやく攻撃の意思を発した。

「全ての敵は我を恐れよ。我は義なる者の守護者なり！」

言こと霊だまを唱えた瞬間、黄金の刃やいばが飛んだ。

護堂の傍かたわらで石畳に突き刺さっていたウルスラグナの四聖剣——そのうちの二振りがやにわに宙を飛んで、それぞれ斉天大聖とペルセウスへ襲いかかったのである。

だが、この奇襲に対しても。

「ぬおっ!?」

「むう！」

斉天大聖はとっさに如によ意い金きん箍こ棒ぼうで聖剣をはじき返した。

ペルセウスは弓を投げ捨て、代わりに呼んだ反そり身の彎わん刀とうを右手で鋭く振りおろし、やはり聖剣を払いのけてみせた。

かきん、かきんと金属音が二度もひびいて、黄金の二聖剣はどこかへ飛んでいった。

護堂は眉まゆをひそめた。まだ二振り、ウルスラグナの剣は残っている。しかし、相手がラーマ王子なら必殺の刃となる武器も、こ

の二英雄には通じない。今も単なる刃物として飛ばしてみたが、あっさりと防がれた。

「こうなるともう、残りの武器はひとつしかない、か……」

　ぎゅぃん。ぎゅぃん。ぎゅぃん。ぎゅぃん。ぎゅぃん。

　頭上で回る暗黒星——その回転がわずかに速くなった。護堂や天叢雲剣あまのむらくものつるぎが注ぎこむ呪力を受けて、いつもより若じやつ干かん、威力の強化が早く進んでいる。

　護堂は決然と顔を上げ、天叢雲剣の切っ先を英雄たちに向ける。

　無謀かつ挑戦的な行動を受けて、ペルセウスと斉天大聖がそろって身を乗り出した——まさにその瞬間だった。

「ヨシュアは告げたり。主しゅはこのジェリコを汝なんじらに賜たまわれりと。兵どもは生者の悉ことごとくを刃やいばにかけ、牛うし羊ひつじ驢ろ馬ばに至るまで殺あやめけり！」

「彼かの者らミデアンの邑むらを攻め撃ち、男子も王も悉く剣にかけて殺めけり。其そは主のモーセに命じ給たまえるがごとくなり！」

　聖せい絶ぜつの言霊がやにわに響きわたった。

　そして、紅あかと青の聖なる光をまとう大騎士ふたりがそれぞれ長大な剣を一振りずつ手に全力疾走し——すれちがいざまに切り裂いたのである。

　エリカは斉天大聖・孫そん悟ご空くうの脇わき腹ばらを。

　リリアナはまたの名をミトラスという英雄ペルセウスの胸板を。

　彼女たちが持つ剣は、いずれも護堂の背せ丈たけと同じほど長大な利り剣けんだった。黄金に輝く刃を持つ、ウルスラグナの聖剣である。

　戦場となった広場にひとつだけある、寺院を思わせる建物——。

　その物陰に隠れていた騎士ふたり。彼女たちは二英雄の意識が完全に護堂へ向けられた瞬間に走り出て、聖剣を拾いあげ、得え物も

のとしたのだ。そう。直前に英雄たちがそれぞれの武器で払いのけ、地面にたたき落とした二聖剣を。



「なん、じゃと？」

「そのような太た刀ちが私たちに通じるとでも……？」

　切られた英雄たちの方は、むしろ怪け訝げんそうであった。

　聖なる虐ぎやく殺さつの言霊を修得した聖騎士たちの斬ざん撃げきであっても、鋼の英雄の堅けん牢ろうさがあれば一太刀や二太刀で死ぬわけではない。使われた武器もウルスラグナの聖剣ではあるが、ラーマという英雄を倒すために特化したもの。脅きよう威いはない——はずだった。

　しかし二英雄はにわかに顔色をハッと変えた。

　斬撃を繰り出したエリカとリリアナではなく、護堂の方を見据える。

　気づいたのだ。自分たちを切り裂いた剣の正体と、これを最も効率よく使うために草薙護堂が仕掛けていた猿芝居の中身について。

「悪いな」

　護堂はぼそりとつぶやいた。

「前にウルスラグナも使った技だ。剣の言霊で切り裂く相手を——途中で変えたんだ。斉天大聖・孫悟空とペルセウスを切るための剣に、さっき変えさせてもらった」

「く——っ。やはり、そういうカラクリであったか！」

「猿殿！　われら両名、このままでは滅びるのみだ。いったん鏃やじりの円盤まで退ひくぞ！」

　聖剣の殺傷力はいつもの言霊よりも遥はるかに強い。

　そのうえ、彼らは《鏃の円盤》の神力で復活した身。三み柱はしら同時に顕けん現げんしている今は、その能力もかつてほど充実していないはずだった。もちろん生命力もふくめて。

　この刀傷は致ち命めい傷しようとなりうる。

　事実、彼らの傷からは膨ぼう大だいな量の神力が流出しはじめて

いた。

　命の危機に気づき、斉天大聖とペルセウスは忽こつ然ぜんと姿を消した。ラーマが持つメダリオンの内部へ帰還して、その傷を癒いやすために——。

「助かったよ。万ま里り谷やがいなかったら、こんな短時間であいつらを撃退するなんて、絶対に無理だった。本当に命拾いした」

（いえ。このために私はこちらへ残ったわけですし……）

　ささやき声が護堂の耳元で聞こえる。

　ひとり幽世かくりよに残った媛ひめ巫み女こ・万里谷祐ゆ理りの声だった。ペルセウスと斉天大聖を退しりぞけた今の一幕、全て彼女の差配によるものだ。

　祐理は精神感応の霊力を使って、現世うつしよの模様をずっと見守っていた。

　そして、《鏃の円盤》による三英雄顕けん現げんを見て、とっさにペルセウス・斉天大聖・ランスロットの知識を呼びこんだのだ。

　幽世にいるかぎり、彼女は自在に霊視力を操れる。その恩恵だった。

　あとはふたたび精神感応で護堂の心とつながり、霊れい視しで得た知識を伝える……。

　種明かしをすれば、ごく単純なカラクリだ。唯ゆい一いつの懸け念ねんは、ウルスラグナの剣があったとしても二対一。やはり形勢は不利である。しかし、リリアナの飛ひ翔しよう術じゆつで仲間たちがプシュパカ・ヴィマーナに乗りこんでいることも祐理は教えてくれた。

　ならばと護堂はだまし討ちの手を考えて、祐理に頼んで仲間へ伝えてもらったのである。

「あれ、待てよ」

　ふと護堂は首をかしげた。

「俺たちカンピオーネに魔法をかけるのって、結構めんどうだろ？　でも、今回は万里谷からの声をあっさり受け取れているよな？」

　人間の魔術師がカンピオーネに術をかける場合、経けい口こう摂せつ取しゅが必ひつ須す——。

　例のルールを護堂は思い出した。祐理たちがウルスラグナの化身『少年』の加護を得て、一時的にパワーアップしたときなど例外はある。だが、今回はそうではない。

　不思議に思う護堂へ、祐理のささやき声が答える。

（あ……あのですね。すこし前に私たち、幽世でその——儀式をいたしましたよね？）

　儀式というよりも睦むつみ合いとでも呼ぶべき一幕。

　護堂は思わず「あ、ああ」と赤面した。精神のつながりのおかげで、幽世にいる祐理も羞しゅう恥ちのあまり身をすくませていると確信できる。

（あのとき……護堂さんとたくさんふれあったといいますか、あ、愛していただいたといいますか、とにかく、ああいう儀式でしたから、その途中で私と護堂さんの間につながりを作っておくこともかんたんだったのですっ）

「な、なるほど！」

　祐理はあのときから幽世に残るべきだと考えていたらしい。もしかしたら、媛巫女の霊視力でそうすべきだと〝なんとなく〟感じ取っていたのかもしれない。

（ご、護堂さん。エリカさんとリリアナさんにはないしょでお願いしますねっ）

「そりゃもちろん！」

　ちょうど仲間たちが近づいてくるところだった。

　殊しゅ勲くんをあげたエリカ・ブランデッリとリリアナ・クラニチャール。そして動きやすさを重視してか、巫み女こ装しよう束ぞ

くから例の制服に着替えた清せい秋しゆう院いん恵え那なの三名だ。

「みんな、助かったよ。あいかわらず苦労をかけるな」

「仕方ないわ。好きでしている苦労だもの」

「これもわたしたちの役目、お気になさらないでください」

　大功を成し遂とげたくせに澄まし顔で応じるところがいかにもエリカらしく、一方のリリアナは生き真ま面じ目めな騎士の本分を守って、あくまで冷静だ。

　さすが双璧のごとく護堂の左と右で並び立つ、紅と青の聖騎士たち。頼もしい。

「清秋院には地味な役をまかせて悪いな」

「仕方ないよ。恵那にしかできないことだもんね」

　護堂からの謝罪に、太刀の媛巫女は快活に言ってくれた。

　ふたりで上空を見あげる。護堂たちの頭上に顕あらわれた暗黒星――秘術《黒の剱》は臨界点へ向かって、順調にパワーを高めている。現時点で出力六五％というところか。

　威力上昇のペースがいつもより明らかに速い。

　秘術を司つかさどる天叢雲劍あまのむらくものつるぎにパートナーである恵那が呪力を送り、サポートしているからだ。

（そ、それにさ）

　目立たぬ形で貢こう献けん中ちゆうの媛巫女は不意に声を低くした。

（幽世では王様とたくさん……素敵なことをしてきたから、手て柄がらくらいはエリカさんたちに譲らないと罰が当たっちゃうかな、なんて――）

　恵那は一瞬だけ恥ずかしそうにして、ささやいてくれた。

　騎士ふたりに気づかれないための配慮だろう。男女の事柄につい

てはあいかわらず不慣れな彼女も、すこしずつ前に進みつつあるのだ。

　そんな恵那が可か愛わいく思えて、護堂はどきどきした。気づかれる前に話題を変えなくては。

「そ、そういえば、姐ねえさんの方はどうなっただろうな？」

　義あ姉ね・羅ら翠すい蓮れんの相手は雄ゆう敵てきハヌマーン。二英雄よりもさらに厄やっ介かいな軍神なのだが——。

3

　幼くなった体で掌しよう法ほうを駆使する羅ら翠すい蓮れん。

　中華武ぶ林りんの至宝とされる絶ぜつ技ぎ・飛ひ鳳ほう十じゆう二に神しん掌しようは鳳ほう雛すう登とう門もん、鳳ほう眼がん穿せん簾れん、鳳ほう爪そう掏とう心しん、飛ひ鳳ほう墜つい落らく、丹たん鳳ほう朝ちよう陽よう、金きん鳳ほう亮りよう翅し、群ぐん鳳ほう連れん環かん、雄ゆう鳳ほう千せん斤きん、鳳ほう翼よく天てん象しよう、鳳ほう龍りゆう陰いん陽よう、鳳ほう凰おう双そう飛ひ、大たい鳳ほう無む天てんの十二手で構成される。

これはもともと、飛ひ鳳ほう五ご仙せん掌しようとして伝えられていた技法だ。

羅翠蓮がそこに自ら編み出した七なな掌しようを加えて、ついに十二神掌を完成させた。

だが、これらの掌法をなかなか繰り出せないでいた。

ハヌマーンの使う、古代インド由ゆ来らいの拳法。

これがなんとも奇抜な武術だったからだ。風神の申し子は猿の身軽さを活いかして軽快に跳びまわり、空中から跳び蹴りを繰り出してくる。あるいはいきなり羅翠蓮の背後へ跳躍して、死角にまわり込んだうえで技を仕掛ける。

そして、とにかく速い。

拳こぶしの四連打、五連打をいきなり放ったかと思えば、数じゆ珠ず玉だまをつなぐように切れ目なく連続技をたたき込んでくる。まず前蹴りで牽けん制せい、倒すというよりも動きを止めさせるための中段蹴りにつなげて、側頭部への回し蹴りでとどめを狙ねらう。

さらにまっすぐ拳を突き込んできて、かわされても横よこ殴なぐりに腕を振って追撃する。

これも通じないのであれば、いきなりの跳び膝ひざ蹴げりであごから上を狙う、という具合に。

なんとも猿らしい、奇き矯きようさと迅じん速そくさにあふれる拳法だった。

そのほとんどを羅翠蓮は防ぎ続けていた。

得意の見切りを活かして、最小限の動きでかわす。あるいは玄妙な歩ほ法ほうでステップを踏み、一瞬にしてハヌマーンの手足が届かない距離に離れてしまう。

そうやって避けきれないときは右みぎ掌てのひら・左掌を駆使して受け、止め、払いのける。

だが——。

なかには防ぎ切れない拳や蹴りもあった。

最初は羅翠蓮の美しい肌にかする程度。しかし、手足をふくめたハヌマーンの全身は鋼はがねの硬さであるため、刃物がかすったように切り刻まれた。

そして、予期していたように羅翠蓮の動きはすこしずつ鈍にぶくなっていく。

肌をかするだけだった拳や蹴り——次第に浅くではあるが、当たりはじめた。

童女となった羅翠蓮の手足や体のあちこちに痣あざができていく。むき出しの部分では二の腕、太もも、ふくらはぎなど。チャイナドレスに隠された部分では脇わき腹ばらなど。

それでも、決定的な急所である顔はかろうじて守り切ってきた。

はじめに喰くらった頬ほおのかすり傷だけで綺麗なまま。幼い美貌は損そこなわれていない。しかし疲労の色は隠せず、ハァハァと呼吸は乱れ、じっとり汗がにじみ出て——麗うるわしき魔教教主、仙境で遊ぶ佳か人じんにあるまじき表情だった。

彼女を崇すう拝はいする信徒たちが目撃すれば、激しいショックを味わうだろう。

だというのに。

ハヌマーンは仏ぶつ頂ちよう面づらであった。

猿であるにもかかわらず、はっきり不機嫌とわかる表情で羅翠蓮を見据える。

「なるほど……そういう狙いでしたか」

「ふふふふ。ついに見破られたようですね。さすがの慧けい眼がんです」

一方、羅翠蓮は幼い美貌でくすくすと微ほほ笑えむ。

「かなうことなら、もうすこし分けてもらいたいところでしたが……贅ぜい沢たくな願いであったようです。多くは望みますまい」

「おかしいとは思っていたのですよ」

ため息と共にハヌマーンは嘆なげいた。

「生き汚い神殺しの輩やからにしては、珍しく起死回生の一打を狙ってないと。やけに淡々とわたしの相手をしている、などと。つまり、仕込みはすでに終わっていたのですな」

「ええ。あなたの得え手てが拳術と知って、わたくしはひそかによろこんでおりました」

羅翠蓮の呼吸がいきなりととのった。

いつもどおり悠ゆう然ぜんたる息づかいにもどり、背筋を正して、猿えん神しんと向き合う。

「実はラーマ王との立ち合いでも狙っていたのです。しかし、あの者が振るう刀をかいくぐることはむずかしく、そのうえ救きゆう世せいの雷いかずちが邪魔をする……。わたくしの掌てもなかなか届かず、苦心しておりました」

風の白びやく猿えん神しんに向けて、右手をすっと前に突き出

す。

　そして、羅翠蓮は臍せい下か丹たん田でんにためこんでいた気――ハヌマーンの肉体から掌を介して吸い取っていた呪じゅ力りよくをやにわに爆発させた。

　臍下丹田こそが、人体に気＝呪力をためこむための貯蔵庫である。

　ここから全身に気を運ぶための筋道が経けい脈みやくだ。気と経脈は『血液と血管』に相当する。

　今、数日ぶりに、カンピオーネの称号にふさわしい量の気が羅翠蓮の体を満たしていた。結果、全身の痣はきれいに治ち癒ゆしてしまった。

　さらに手足と胴がのびていく。顔立ちも成長していく。

　容姿だけ見れば、この数日の羅翠蓮は一二歳前後の童女であった。

　しかし今、以前と同じ一八、九歳とおぼしき乙女のたおやかさを

取りもどし、『草くさ薙なぎ護ご堂どうの義姉』を名乗っても誰もが認める姿に返り咲いたのである！

　可か憐れんな童女ではなく絶世の佳人として、羅翠蓮はほくそ笑んだ。

「ふふふふふ。『吸きゆう星せい奪だつ魂こん掌しよう』は掌でふれた相手より気を抜き出す……邪じや派はの武芸です。このような機会でもなければ、ふたたび使うこともなかったでしょう」

　人体には正せい経けいと呼ばれる一二経脈と、それを補佐する奇き経けいあり。

　この奇経八脈に流れる気をあえて空からとすることで、我が身の外に存在する気——すなわち他者の気を吸いこみ、奪い取る法であった。

　気＝呪力は日々の修行ですこしずつ培つちかっていくもの。

　その貴重な力を吸い取り、我がものとする。それが技の要よう訣けつである。今回、ハヌマーンから奪ったのと同じ量を人間の武芸者・魔術師から吸い取れば、百名以上が気の枯こ渇かつによって死んでいたはずだ。それほどの量だった。

　逆に相手が神だからこそ、すぐには気づかれなかったのだ。

「邪拳の心得がござったとは……人は見かけによらぬものですな」

「わたくしは仮にも武林の至尊と呼ばれる者。武の世界には正派が伝える陽の絶技もあれば、邪派が伝える影の技、禁じ手の数々もあるのです。そして」

　ゆたかな胸をそびやかして、羅翠蓮は言った。

「武学の陰と陽、その双方を心得ずして、どうして武の至し極ごくを名乗れるでしょう。この羅ら濛ごう、声望のみならず実力をもって今の地位を得たと心得なさい！」

　起き伏ふくに欠ける童女の体はすでに過去のもの。

　今まで着ていたチャイナドレスはあちこち破れ、はち切れそうになっていた。

　のびやかな乙女の肢し体たいを取りもどした結果である。だが、破れたドレスは一瞬にして、格調高い漢かん服ぷくへあらたまる。方ほう術じゅつで着替えを呼びよせたのだ。

　武林の至尊にふさわしい気け高だかさをもまとい、羅濛教主が復活を遂とげた瞬間だった。

（教主については——ご安心ください）

　祐ゆ理りのささやき声に確約されて、護堂は首をかしげたのだが。

　すぐに納得した。幽世かくりよにいる媛ひめ巫み女こは羅翠蓮についての霊れい視しを呼びこんで、無事を確認してくれたのだ。そのことが精神感応のつながりを介して、伝わってくる。

「無事でいるどころか、敵から力まで吸い取ったのか」

　さすが羅翠蓮というべき無茶苦茶さであった。

　護堂は安あん堵どしつつもあきれてしまった。それにしても、幽世にとどまった祐理はまさに千せん里り眼がんというべき存在だ。逆にこちらの方が気にかかった。

「万ま里り谷やの力もここまですごいと、ちょっと心配だな。そのうち反動が出てきそうだ」

（そう……ですね。私もそう思います。やはり、幽世は人の住むべき領域ではありませんから——こちらになじみすぎると、人としての肉体を失いかねません）

　静かな確信のこもった、祐理のささやきだった。

　おそらく霊視の力で危険を感じたのだろう。やはり一刻も早く事件を解決して、祐理を呼びもどす必要がある。

　護堂が決意したとき、リリアナが東の空を指さした。

「——草薙護堂。あれを」

　視力と霊視力にすぐれる銀髪の騎士は、誰よりも早く敵の到来に気づいたのだ。

　数十秒後、護堂にも見えてきた。

　東方の空から、小さな黒い点がこちらに近づいてくる。この点は徐々に大きくなり、白馬にまたがった女騎士であることがわかるようになった。

　槍やりの軍神にしてアマゾネスの女王、ランスロット・デュ・ラックの到来である。

　護堂は仲間たちに目配せした。

　エリカ、恵え那な、リリアナ。三人とも心得たもので、即座に散っていく。ランスロットの突撃は隕石墜落メテオストライクに匹敵する威力なのだ。

　護堂をフォローするにしても、間近にいては危険すぎる。

　かくして、ふたたび草薙護堂はひとりになった。

　一方、ランスロットも単騎で護堂のそばに降りてくる。考えてみれば、復活後の彼女は今までずっと残りの二英雄といっしょだった。

　サルデーニャ島での再会以来、一対一で向き合うのは初めてのはずだ。

「よう」

「ひさしいな、草薙護堂よ」

　かつては呉ご越えつ同どう舟しゆうした仲でもある。自然と挨あい拶さつを交わした。

　そして違和感を覚える。こいつ——らしくないような。いぶかしむ護堂を前にして、ランスロットは軽やかに白馬から降りた。ここで違和感がさらに強くなる。

「どうした？　ちょっと変だぞ？」

「余が？　おかしなことを言う。死して甦よみがえったとはいえ、余の魂たましいにいささかの変化もなし。かつて卿けいと死闘を演じたランスロット・デュ・ラックそのままだぞ」

　蜂蜜色の髪を揺らして、女騎士はおだやかに笑う。

「ふふふふ。ペルセウス殿と斉せい天てん殿に先を譲って、逆に幸いしたというところか。こうして卿と一対一で向き合えるだけでなく、《鏃やじりの円盤》の恩恵を独り占めできるのだから」

　三英雄はひとりで顕けん現げんしたときの方が能力的に強い。

護堂は義あ姉ねの教えを思い出した。そして、三対一の優位よりも己おのれひとりの武勇を誇る方がいかにも好戦的な軍神たちらしい。

しかし、そうであるならば、どうして——？

違和感の正体に護堂は気づいた。闘争心、そして常じよう在ざい戦せん場じようの気構えだ。

護堂もランスロットと挨拶を交わしたが、頭上では臨りん界かいに近づきつつある《黒の剱つるぎ》が回転している。ウルスラグナの聖剣もまだ残っている。

いつでもそれらを使えるよう、緊張は解いていない。

だが今、湖の騎士は戦場のパートナーである白馬から降り、いつか海辺のカフェで談笑したときのような顔で笑みすら見せている。

そもそも一いち途ずな突撃こそが信条であるくせに、先せん鋒ぽうを譲るのもおかしい話だ。

それらの想いを込めて、護堂はふたたび繰りかえした。

「おまえ、やっぱりちょっと変だな」

「ふふ。そう——かもしれぬな」

女騎士の口元に微笑が浮かぶ。今度は曖あい昧まいに認めた。

「実は迷っていたのだ」

「何を？」

「いや……先鋒の二英雄があわてて帰き参さんしたので、今度は余が——と出陣したのはいいが、いまだにわからぬ。こうして戦うことが、はたして『最後の王』の望みにかなうのかと」

すでに東方の大英雄、ラーマの名が明らかになったあと。

しかし、ランスロットにとって主君の名は『最後の王』のままなのだろう。そして、彼女を迷わせるものの正体が護堂にもわかった。

「たしかにな。あいつ、妙に常識があるというか、戦いを避けたがるしな」

「草薙護堂。それを承知している卿は、何な故ぜあの方と戦う？」

「あのなあ。世界を滅ぼしかねない神様がいたら、矢や面おもてに立つくらいのボランティア精神は俺にだってあるんだぞ。それに」

　己おのれの公共心をアピールしてから、護堂はまっすぐ女騎士を見つめた。

「勝負することでわかるかもしれないだろ？　あいつに魔王殲せん滅めつの戦いを何度も繰りかえさせている——運命とかいうやつを、上う手まく叩たたきこわす方法が」

　運命といい、宿命という。

　運命に導かれるなどといい、宿命によって定められたなどともいう。

　そういう御大層な謳うたい文句を好む人間がたまにいる。しかし、護堂は思う。そんな代しろ物ものに縛しばられていることがはたして——格好いいものだろうかと。

　逆だろう。運命だの宿命だのを打ち壊し、無視する方が遥はるかにいい。

　その手の語句にまったく魅力を感じない護堂だったが、このところ魔王殲滅の運命に悩まされている男を見るうちに、さらに強く、そう考えるようになっていた。

　だから、護堂は訥とつ々とつと思うところを語った。

「神様たちはどうか知らないけど、俺なんかは心の底から運命なんてクソ喰くらえだって思うけどな。あんたはどうだ？」

「ははははは！」

　いきなりランスロットに大笑された。嘲ちよう笑しようではない。ひどく痛快そうな、心からの笑い声だった。しかし、何が笑いのつぼを刺激したのか？

　きょとんとする護堂へ、槍の軍神は笑いを嚙かみ殺しながら言う。

「いや、失敬。実はな、余を迷わせていた理由はもうひとつある」

「何だよ？」

「卿だ。なにしろ、決闘の勝者である卿に借りを作ったままだからな。武人の面めん目ぼくが立たぬ気がして、なかなかきまりが悪かった」

「俺、あんたに貸しなんてあったか？」

　心当たりがまったくない。不思議がる護堂へ、女騎士は言う。

「ある。卿は軍神ランスロットとの立ち合いに正々堂々と勝利した男。当然得るべき戦果があったというのに、今も受け取らぬままだ」

「戦果……？」

「うむ。余の死に際して、かつての愛いとし子グィネヴィアが《鏃の円盤》を行使し、我が魂たましいを吸いあげたために起きたことだ」

　不意にランスロットが護堂の間近へ近づいてきた。

　しかし、武器は出さない。殺気も闘志も見せず、ゆっくりとした足取りだ。そして、彼女はなんと草薙護堂の前で——

　突然ひざまずき、うやうやしく頭こうべを垂れた。

　たまにエリカも気取ってやってみせる。騎士の礼だった。

「何の真ま似ねだよ、それは？」

「草薙護堂よ。余は思うのだ。古き主君への忠義を真の意味で貫つらぬきながら、同時に敬すべき敵へ借りを返すことは——可能であると。そのために余は、ランスロット・デュ・ラックの槍を卿にあずけるべきだと考える」

「!?」

「余の願い、聞き入れてくれるか？」

4

　ランスロット・デュ・ラックが消えたあと。

　護ご堂どうは集中を切らさぬようにして、《黒の剣つるぎ》の威力を高めることに専念した。

　無論、この空のどこかに戦車を駆るラーマがいるはず。今、彼を守護すべき鋼はがねの三英雄は誰もいない。ハヌマーンも復活した義あ姉ねとの死闘に追われている。

　ラーマを攻撃する好機、であるはずだった。

　現在、手元には黄金の聖剣が四振り残っている。だが、そのうちの二振りは斉せい天てん大たい聖せいとペルセウスを切り裂く刃やいばに造りかえていた。

　一度、標的の神を変えた剣。残念ながら再度の変更はできなかった。

　ラーマを切り裂くための聖剣はあと二振り。彼の居場所を祐ゆ理りに霊れい視ししてもらい、そこへ二聖剣を送りこむことはもちろんできた。しかし。

（護堂さん……）

　思いついた瞬間、不安そうな祐理の声が聞こえた。

　護堂のアイデアが上う手まくいかない予感を——彼女は霊視したらしい。

「あの連中に時間をかけすぎたか……」

　ペルセウス、斉天大聖、ランスロット。彼らの相手にかまけている間に、東方の大英雄はウルスラグナの聖剣に対抗する何かを用意したのかもしれない。

——ならば仕方ない。三英雄を迎え撃った広場で、護堂は戦力充実に専念した。

そのまま一、二分が過ぎただろうか。

「遅かったな」

「すまない。ある物を用意するのに手間取った」

ダイヤモンド型の広場上空に、ついに天の戦車ヴィマーナが飛来した。

護堂が声をかけると、ラーマ王子は御ぎよ者しや台だいから涼やかに答える。広場の形といい、おだやかな言葉の応酬といい、いっしょに野球でもする約束をしていたかのようだ。

そのことに気づいて、護堂は軽く笑った。

しかし、ラーマは鋼はがねの長ちよう弓きゆうを手にしている。そのうえ戦車の後方にひきつれているのは正方形の巨大魔ま方ほう陣じんは《神刀の曼まん荼だ羅ら》にまちがいない。

敵を深く理解できる『戦士』の力が教えてくれる。

さっき切り裂いた四つの曼荼羅——その力の残ざん滓しを集めて、ラーマは五つめの曼荼羅をどうにか創り出したのだと。この作業にも時間がかかったのだろう。

尚なお、護堂の方もすぐそばの石いし畳だたみにラーマ殺しの聖剣二振りを突き立てていた。

また、上空には《黒の剣つるぎ》——重力嵐を呼ぶ暗黒球も浮かんでいる

直径二四、五メートルほど。パワーはようやく最大まで高まった。ぎゅうん、ぎゅうん、ぎゅうんと独特の音を立てて、高速の横回転を行っている。

強い風が暗黒球に向かって吹きはじめたところだ。

この広場だけではない。巨船プシュパカ・ヴィマーナの上と、この空域一帯を駆け抜ける風だった。暗黒球が呼ぶ重力嵐の前兆で

あった。

　両者とも、戦う準備を済ませてある。あとは口火を切るだけだ。

　ラーマの戦車が着陸した。ひらりと主あるじは飛びおりて、護堂の方を見据える。ここが野球場なら、ホームベースと二塁の間くらいの距離だ。

　空では《黒の剣》と《神刀の曼荼羅》が同じだけの距離をはさんで対たい峙じ中ちゆうだ。

　ふたりのいる広場から、五、六〇メートル上空に浮いている。

　決戦の時は近い。ふと護堂はつぶやいた。

「一応、あんたの弱点……というか、どうやって攻略すべきかはわかってるんだ」

「本当か？　よければ、聞かせてほしいところだが」

　好奇心を刺激されたらしい。ラーマが身を乗り出してきた。

　完全覚醒した状態で『弱点』などと言われる。初めての経験なのだろう。貴公子の反応に護堂は苦笑した。たいした内容ではないのだ。

「いや、さ。あんたはすごい武器を使い切れないほど持っているし、呪じゆ力りよくってやつもとんでもない。たぶん、攻撃しているときのあんたは俺の一千倍は強いと思う」

　ほう、とラーマはうなずいた。

「だから、なんとしてもあんたを防御する側に追い込みたいんだ。防御に回ったときのあんたは——まあ、俺の五〇〇倍の強さってところだからな。付け込む隙すきがどっちにあるかは、かんたんにわかるってもんだ」

義あ姉ね・羅ら翠すい蓮れんに最強の掌しよう打だを打ち込まれたとき。

ラーマは覚醒後であったが、その直撃をたしかに一度は許したのだ。

攻撃よりも防御の方にわずかながらでも隙があるのは事実だろう。問題はどういう状況であれ、護堂よりも遥はるかに強大なところだった。

そして、この冗談めかした無駄口に刺激されたのか。

ラーマは「なるほど」と微笑した。珍しく錆さびのような影がうすくなっていた。

「わかった、草薙護堂。ならば全力で僕に攻め込んでくるといい。僕も全力で君を迎え撃ち、守勢に回ることなく君に打ち勝てるよう、最大限の努力をする」

「何もしなくても強いやつには、努力なんてしてほしくないけどな……」

ラーマの凜り々りしい宣言と、ため息まじりの護堂のぼやき。

それらがきっかけとなった。

空中で対峙していた《黒の釼》と《神刀の曼荼羅》。

ついに前者は万物を吸引する重力操作の力で大嵐を呼び、後者は幾千幾万の雷撃を発する空中の砲台と化した。

曼荼羅が発する万を超す雷撃。

そのことごとくを吸いこんでいく暗黒球。

まさに一進一退、互角の攻防。だが、南みなみ房ぼう総そうでの

前ぜん哨しよう戦せんですでにわかっている。

　剱の重力嵐で《神刀の曼荼羅》に対抗できるのは、せいぜい二分。

　その間にさらなる攻撃をたたみかけ、ラーマを圧倒しなければ、もはや勝機はなくなってしまう。このわずかな数分を短すぎる制限時間とはあえて考えず、護堂は〝最大の好機〟とばかりに《黒の剱》を全開にした。

　それと並行して、ウルスラグナの二聖剣にも攻撃を命じる。

　護堂のそばの石畳に突き刺さっていた黄金の二振り。そのうちのひとつが浮きあがり、ラーマめがけて『ひゅん！』と飛んでいく。

　しかし、ラーマの左手に矢が一本、忽こつ然ぜんと顕あらわれる。

　鏃やじりは黄金製。この矢を短剣のように振るって、魔王殲せん滅めつの勇者はウルスラグナの聖剣をはたき落としてしまう。いや、それどころか。

　黄金の鏃に打たれたことで、ウルスラグナの聖剣はあっさり砕け散った！

「ペルセウス殿から聞いている……。軍神ウルスラグナは波斯国ペルシアの神王ミスラの家臣だと」

　ラーマの言葉が終わるのを待たず、護堂はふたたび聖剣を飛ばした。

　これが最後となる、ラーマ殺しの刃やいばである。しかし、己おのれめがけて飛来する聖剣へ、古代インドの英雄王は左手の矢を投げた。

　黄金の聖剣と、黄金の鏃を持つ矢の激突——。

　聖剣の方が砕け散った。矢はそのまま勢いを止めずに飛び、護堂の肩に突き刺さる。ちょうど左腕の付け根だった。

「あああああああああっ！」

　傷口が燃えるように熱い。護堂はすぐに左手で矢を抜き、投げ捨てた。

　しかし、熱さは肩から左腕、胸へと急速に広がろうとしている。

　このままでは全身が熱で冒おかされるかもしれない。とっさに護堂は呪力を高める。己に害をなす呪術・神力を打ち払うためだ。これが上手くいった。

　熱は鎮しずまり、安あん堵どの吐息を洩もらす。だが、左腕は動かなくなっていた。

　毒の類たぐいではないように思える。おそらく焔ほのおもしくは光の力——。そう確信した護堂へ、ラーマが言った。

「今の武具は我が旧知の神インドラに直じき訴そし、ペルシアの神域より調達してもらった太陽王ミスラの力を宿した矢だ」

　以前、ペルセウスが使ったミトラス＝ミスラの力による軍神ウルスラグナ封じ。

　あれと同じ——いや、強化版というべきか。

　そういえば、前にエリカが言っていた。古代ペルシアの神話は、地理的に近い古代インドのアーリア系印いん欧おう語族がルーツであると。特に軍神ウルスラグナは雷神インドラと密接な関係を持っている。それはどちらの神も『障しよう碍がいを打ち破る者』という称号を持つところなどに現れている——だったか。

　それにしても、わずかな猶ゆう予よの間にこんな武器を用意できるとは。

「さすが、いろんな神様の応援を受けている勇者さまだな……。いきなり武器をプレゼントされるのもあいつの力ってことか！」

　宿敵ラーヴァナを討つ際もそうだった。

　羅ら刹せつ王おうを相手にラーマが苦戦していると、唐突に味方から教えてもらえるのだ。以前、授かった矢の一本が『不死身のラーヴァナをも殺せる梵ぼん天てんの矢』である事実を。

　まさに、世界と神々を味方に付けた勇者というべきか。

　ならばと護堂は新たな化け身しんを使う。

「我がもとに来きたれ、勝利のために。不死の太陽よ、輝ける駿しゅん馬めを遣つかわし給たまえ！」

　輝ける太陽の力を行使するための化身『白はく馬ば』。

　護堂の言霊に応こたえて、東方の空に〝第二の太陽〟が昇ってきた。今、本来の太陽は西へ西へと傾きつつあるところだ。

　そして、第二の太陽から射出されたフレアが駿馬の形をした白い猛火となり、このプシュパカ・ヴィマーナとラーマ王子めがけて飛来する。

　今回、多くの騒そう擾じようを巻きおこした英雄は『民衆を苦しめる大罪人』と認められたのだ！

　しかし、新たな矢がラーマの左手に現れる。

「九つの太陽を射い落おとした英雄の矢よ。その奇跡を僕にも分けあたえよ！」

　黒い矢だった。鏃も、矢羽根も漆しつ黒こくである。

　この間、ラーマが南房総で使ったものに似ている。しかし、さらに深みのある黒だ。あのときはたしか『贋がん作さく』と言っていた。

　おそらくはこれが本物――。慄りつ然ぜんとする護堂の前で、ラーマが弓を構える。

　鉄てつ弓きゆうに黒い矢はつがえられ、ぎりぎりと弦つるが引きしぼられて、ついに放たれる。

　東方の空へと矢は飛んだ。プシュパカ・ヴィマーナめざして飛来する『白馬』のフレアに突き刺さり、一瞬にして消滅させてしまう。

　太陽の焔さえも返り討ちにする――。途方もない射しや手しゆだった。

　そして《黒の剣》の限界が近い。暗黒球のもたらす嵐のような吸

引力が徐々に弱まりつつある。今はどうにか均きん衡こうを保っているが、あと十数秒で《神刀の曼荼羅》が放つ万ばん雷らいを抑え切れなくなるのではないか。

　やはり、最強の射手には最強の騎士をぶつける必要があった。

「頼む、ランスロット——。おまえの出番だ！」

「なに？」

　護堂の要請を聞いて、ラーマが驚きよう愕がくの表情を浮かべた。

　プシュパカ・ヴィマーナよりもさらに遥はるかな上空。

　雲うん海かいのまっただなかである。その空中の一点で、天あま翔かける白馬は静止していた。その背には颯さつ爽そうたる女騎士がまたがっている。

　湖の騎士、ランスロット・デュ・ラック。

　かつて『最後の王』の盟めい友ゆうだった軍神は、新たな主君の声をたしかに聞いた。

「いよいよ出陣の時か」

　すでに一騎駆けの準備はととのっている。

　彼女が最も得意とする秘技。高高度から稲妻そのものの速さで駆けくだり、隕石落としメテオストライクのごとく地上を襲う。

　この一騎駆けで、幾度となく地上に巨大なクレーターを穿うがってきた。

　神殺しである主あるじより送られてきた呪力を使い、渾こん身しんの一撃を繰り出すのだ。かつての主君を打ちのめすために。今、彼は《神刀の曼荼羅》を操りつつ、強力な矢を二本も立てつづけに射た直後だ。いつもに比べれば付けいる隙がある。

「槍やりよ。ランスロット・デュ・ラックの魂たましいを全て汝な

んじに託たくす。いくぞ！」

　右手に逆さか棘とげ状じようの騎ラ兵ン槍ス、左手には楕だ円えん形けいの楯たてを持つ。

　身にまとうのは鎖くさり帷子かたびらの鎧よろい。体をあずけるのは白き駿馬。鞍くらから垂らした鐙あぶみに両足を乗せて、武装は万全だった。

　彼女を乗せて、愛馬は地を駆けるように飛ひ翔しようする。

　乗り手と共に電光を放ちながら、遥か下方のプシュパカ・ヴィマーナへと急降下。

　かくして、軍神ランスロットは〝白き稲妻〟となった。ほぼ一瞬にして、貫つらぬくべき勇者の頭上に到達する。まさに電でん光こう石せっ火かだ。

　そのまま急降下の勢いと速度を乗せて――槍の穂先をぶつける！

　狙うは英雄ラーマの心臓のみ。当の標的はとっさに鋼鉄の弓を頭上にかざした。

「健在だったのか、ランスロット・デュ・ラック！」

　槍ランスの穂先を弓で押し返しながら、ラーマは叫ぶ。

「円盤とのつながりが消えたので戦死したものと思っていたが……草薙護堂の陣営に走っていたとは。それが君の選択か⁉」

　英雄の声と表情に追及の響きはない。むしろ納得の色があった。

　もしかしたら――復活以来、ランスロットがひそかにかかえていた迷いに気づいていたのかもしれない。

　旧主を弓ごと吹き飛ばそうとしながら、槍の軍神は晴れやかな気分で告げた。

「ああ！　あの男への借りと、貴方あなたへの忠義――どちらも捨てぬためにはこれしかないと思い定めて、裏切りの道を選ばせてもらった！」

　ラーマは答えなかった。ただ、切れ長の瞳ひとみに錆のような疲れを湛たたえつつも、かすかに微笑みかけてくれた。全て許すとでも言うように。

　そして、炸さく裂れつ——。

　鉄弓を押しのけることはできなかったが、ランスロットの槍は雷電のエネルギーと熱、衝撃を穂先から一気に放出させた。この炸さく裂れつがラーマと、戦場となった広場、さらには巨船であるプシュパカ・ヴィマーナまでも呑のみこんでいく。

　空で激しく争っていた暗黒球と神刀の魔方陣もふきとんでいった。

　もちろん、新たな主である草薙護堂も巻きこまれている。

　だが仕方ない。本人の指示だったのだ。俺を巻きこむくらいのつもりで仕掛けないと、ラーマの隙は突けないだろうという……。



　プシュパカ・ヴィマーナは完全な円形で、都市かと見まごう巨大さである。

　ランスロットを突撃させた結果、その北東エリアに直径四、五キロ以上はあろうクレーターが誕生した。まるで隕いん石せきが落ちたあとだ。また、張本人である白き騎士はさらに奥深くへと切り込んでいき、巨船の中枢部に深刻な損害をあたえたらしい。

　護堂の足下が小刻みに、ひっきりなしに揺れている。

『ゴゴゴゴゴ』という震動も足裏に伝わってくる。突撃のダメージによって巨船全体が地震さながらに揺れ、鳴動しているのだ。

　尚なお、当のランスロットはいない。今の一騎駆けで力を使いはたして、姿を消した。

　そして、クレーターの底で仁王立ちする、英雄ラーマ王子――。

　あの突撃を受けても、無傷のままであった。

　しかし、彼の全身は青い火花を散らしていた。ときどきビリビリと小さく放電している。さらに体から放たれる熱――。今までより、明らかに高温だった。

　間近にいると、火事場どころか溶鉱炉の前に来たかのような熱さだ。

「そういえば、姐ねえさんの攻撃を受けたあともそうなっていたよな」

　護堂は声をかけた。

　一騎駆けが炸裂した瞬間に『鳳おおとり』を使い、神しん速そくで全力疾走。クレーターを穿った爆発から可能なかぎり逃げた。結局は逃げ切れず、ほどほどに爆風と衝撃で叩きのめされたが。

　それでも爆心地に残るよりはマシだ。

　そして、もどってきてみれば、残った方の男は壮健そうだった。

「覚醒後の僕が命の危機に抗あらがおうとすると、自然とこうなってしまう」

　軽いため息と共に、ラーマはつぶやいた。

　同時に右肩から電光がほとばしる。ビリビリというほど可愛いものではなく、そばにいる者を容よう赦しやなく吹き飛ばす威力だった。

　護堂は神速をオフからオンに切りかえて、これをかわした。

「迷惑をかけるな。体の熱が高まりすぎて、上手く制御できないのだ。君たち神殺しや神々であれば、さほど問題もないだろうが……」

　錆めいた影がやや濃くなり、ラーマの美貌をわずかに曇くもらせた。

「罪もない人間たち、それに地上の山河や草木には抗う術すべがない。僕の熱や雷らい霆ていに打たれて、次々と倒れていく」

「それでこの前、俺と姐さんを追いかけてこなかったのか！」

「ああ。しばらく休めば体の熱も――ある程度は下がるからな」

　南房総での対決時。護堂と羅翠蓮が遁とん走そうしたあと、ラーマは追ってこなかった。地上の街や人間たちにあたえる影響を憂ゆう慮りよしたのだ。

「まだ戦うことはできるのか？」

「そちらはどうにか。あまり細やかな芸はできなくなるが」

　ラーマの手に刃渡り一〇〇センチの剛刀が顕れた。

　救世の神刀だ。上段に構えて、二一世紀のカンピオーネと向き合

う。おそらく、これが最終局面になるだろう——護堂は覚悟した。

　実のところ、ミスラの矢と一騎駆けのダメージで護堂の限界も近そうなのだ。

「じゃあ、続けるか」

「承知した。いざ尋じん常じように勝負を願う」

　剣術においても神かみ業わざの使い手であるラーマ。古代ガリアでは上段からの斬ざん撃げきを主おもに駆使して、実力のほどを見せつけてくれた。

　日本の剣道では、上段を『火の構え』と言うらしい。

　自ら攻めに出る気き概がいと気勢がなくては、使いこなせない構え。その激しさを『火』に喩たとえているのだという。やはり、この軍神の本質は攻撃にこそあるのだろう。

　今回もラーマは上段に構えた。

　対する護堂は『鳳』に加えて、『駱らく駝だ』も使う。

　脚力と耐久力が上がる格闘の化身である。ミスラの矢による左肩の痛みがじんわりとうすれてきた。左腕は動かないままだったが。

　とはいえ、化身の二重使用。負担で頭がずきずきと痛みはじめる。

　しかし、そのくらいのリスクをかける必要はあるはずだった。

「いくぞ！」

　ラーマが次々と繰り出す上段からの斬撃。

　あいかわらずの鋭さと流麗さであったが、これを護堂は『駱駝』の格闘センスにまかせて、立てつづけにかわしてみせた。

　そして、反撃のキックを繰り出そうとして、舌打ち。

　ラーマの体がいきなり電撃を放ったのだ。さっきと同じ無意識の暴発だった。『鳳』の神速を一瞬だけオンにして跳びのき、どうにか避ける。

　おかげで蹴りは出せずに終わった。しかも、そこにラーマが切り込んでくる。

　護堂の額ひたいめがけて、やはり上段から神刀を縦たてに振りおろす。

「剣の相手だけでも面倒なのに、厄やつ介かいなやつだな！」

　ラーマの剣をかいくぐって、跳び膝ひざ蹴げりでもたたき込まなければ——

『駱駝』の格闘センスに導かれるまま、護堂が動き出そうとした瞬間だった。

　ふたたび電撃が放たれた。しかもラーマの周囲——前後左右にあるものを全てまとめて薙なぎ払う激しさだ。すこし跳びのく程度では避けきれない。

　結局、護堂は神速で一〇メートル以上も後退して、なんとか難を逃れた。

「力の制御が甘くなって、荒っぽくなったわけか……」

　今までのラーマは過か剰じようすぎるパワーを前面に押し出しながら、あちこちに繊細さをみせていた。しかし、今はちがう。

　剣を振るいつつ無差別に電撃をまき散らす——なんとも大味な戦士に変貌していた。

　だが、それは決してマイナスではない。突撃のみを信条とするランスロットの例もある。戦場において『雑』『単純』という要素がかえって効果的になるケースは多い。

　しかも、ラーマの体が電撃の連射をはじめた。

　特に標的も定めぬままに放たれる。前方だけでなく後方や左右、とにかく周囲三六〇度の全方位へランダムに飛んでいく。しかも近くを灼くだけではない。

　雷の射程距離がどんどんのびていく。数十、数百メートル先まで駆け抜けていく。

電撃体と化した今のラーマがうろつくだけで、都市のひとつやふたつ、かんたんに壊滅してしまうだろう。とんでもない男だった。

護堂は最後の覚悟を決めた。やはり、あの手しかないと。

「結局、賭けに出るしかないってことだな」

神速をオンにして、魔王殲滅の勇者めざして走り出す。

無差別に放たれる稲妻の連射を一瞬にしてかいくぐり、ラーマの前にたどり着いた。そのまま『駱駝』の蹴りを放つ——寸前。

（草薙護堂！　残念ながら、それでは間に合わないぞ！）

神速発動中なので、ラーマの声はくぐもって聞こえた。

彼は救世の神刀を上段から斜め下へ突き出して、護堂の心臓を狙ってきた。心眼の法を使って、神速を見切ったのだ。

これを護堂はかわせない。ぐさりと胸を貫つらぬかれた。

刃渡り一〇〇センチの剛刀はなかばほどまで護堂の肉体に埋まる。切っ先は背中から突き出ているはずだった。

それでも即死はしない。カンピオーネの生命力と『駱駝』の耐久力のおかげだ。

「清せい秋しゆう院いん！　例のやつを使え！」

「なに？」

驚くラーマに人影が飛びかかる。清秋院恵え那なだった。

手に持つ三尺三寸五分の剛刀は言うまでもなく天叢雲劍あまのむらくものつるぎだ。これを太た刀ちの媛ひめ巫み女こは片手上段の構えから鋭く振りおろす。当然、秘術・神がかりも行使している。

最も戦闘力の高い護堂の仲間。

彼女はすこし離れたところで待機しつつ、虎こ視し眈たん々たんと機をうかがっていたのだ。

「天叢雲あまのむらくもの御み劒つるぎよ、我に武士もののふの誉

ほまれを取らせ給たまえ！」

　相棒・天叢雲剣あまのむらくものつるぎの神気を我が身に呼びこんで、渾こん身しんの一太刀。

　しかも、漆しつ黒こくの劍には《黒の劒》の神力がほどほどに宿っていた。暗黒球が消滅したのはランスロットの突撃で吹き飛ばされたからで、力を使い切ったからではないのだ。

　この劍をラーマの体内に打ち込んだあとで、重力嵐を解き放てば——。

　大英雄の肉体はそのまま天叢雲劍に吸収され、消えていたかもしれない。だが、さすがにラーマは鋭敏かつ迅じん速そくだった。

　とっさに救世の神刀を手放し、天叢雲劍を防いでみせた。

　真剣白羽取り——。頭上に振りおろされた漆黒の劍へ両手をのばし、左右から挟み込んで受け止めたのである。

　護堂自身は救世の神刀で串くし刺ざしにされている。もうすぐ死ぬはずだった。

　だが、それでも獰どう猛もうに笑う。敵が罠わなにはまったと確信したからだ。

「ようやく防御に回ってくれたな……」

「!?」

　天叢雲劍を真剣白羽取りしながら、ラーマが愕がく然ぜんとする。

　その瞬間だった。恵那が——二本目の剣を抜いた。彼女は今、珍しく腰のベルトに革の鞘さやを吊り下げていた。そこにおさまっていた刀身五〇センチ程度の短い剣を左手で引き抜きざま、ラーマの腹部に斬きりつける。

　十分な手て応ごたえが恵那の左手に伝わってきただろう。

　だが出血はない。ラーマは傷ついていなかった。羅ら濠ごう教きよう主しゆの掌しよう打だ、ランスロットの突撃に耐える男なのだ

から、それもむべなるかな。

　しかし、恵那が使った剣の刀身にはこう刻んであった。

『今いまし、昔いまし、やがて来きたるべき者』と。そして、鮮血の代わりに——ラーマの全身から黄金色の呪力が洩もれ出ていく。

　呪力は気体のように天へと昇り、黄金の天幕が空に広がっていった。

「これはまさか——」

『うむ。これは妾からあなたに送る呪のろいだ』

　唖あ然ぜんとするラーマに声をかけるのは、恵那が手にした第二の剣だった。

　護堂たちが幽世かくりよへ行っている間、エリカとリリアナが鍛たん造ぞうしてくれたものだ。もはや身じろぎすることもむずかしいアテナに、復ふく讐しゆうの剣を打ち込ませるため——。

　エリカが案じた一計だった。魔術をかけて、姿を変えてみようと。

　幸いにも、蛇へびと化したアテナは魔術で造り出した合成生物と似たような組成であった。そのおかげもあって、魔女であるリリアナと鉄のあつかいに長たけたエリカの共同作業はどうにか上手くいったのだ。

　女神アテナの冷厳たる声で、剣は告げる。

『ラーマ王よ。今、あなたの体に宿る呪力は聖せい杯はい——アテナたる妾わらわから吸収したもの。もともとの持ち主として、いくらかの返却を望む。女神の命とひきかえにかける呪じゆ詛そ……あなたといえども、拒こばむことはできまい』

　昔、ラーマと『十の命を持つ神殺し』が最後に対決したとき。

　覚醒した大英雄がぎりぎりまで追い詰められた理由。それは我が身に取り込んだ妻——女神シーターの精気が彼の体内で協力を拒んだからだった。

かつての夫と、今世の恩人である神殺し。どちらにも味方すまい。

その遣い志しが祈りとなってラーマの肉体を縛り、彼の呪力をいくらか減らした。

そこに神殺しは容赦なくつけ込んで、相打ちにまで持ち込んだのである。そして今、女神の意思による介入は繰りかえされる——。

「なるほど……。姿まで変えていたとは、道理で蛇の気配を感じなかったはずだ」

納得の面おも持もちのラーマ。黄金の呪力はいまだ放出を続けている。

すでにかなりの量が流出したはず——。護堂がそう思った瞬間、ラーマは「う……っ」と苦く悶もんの表情を浮かべる。

アテナの呪いによって呪力の総量が減り、覚醒状態が解けたのだ。

さっき恵那に斬られた腹部が大きく裂けて、大量の血がほとばしり出る。今なら古代ガリアのときと同じ——護堂は無理矢理、我が身に鞭むち打うった。

「だあああああああああああっ！」

心臓を貫かれた体に無理をさせるのは、気合いと『駱駝』の耐久力。

過酷な砂漠での旅を黙々と耐えるラクダは、忍耐と獰猛さのシンボルなのだ。その力にまかせて護堂は回し蹴りを——最後の攻撃を繰り出した。

「く——！」

こめかみを狙ったがとっさに左腕でガードされた。

が、その腕ごとラーマを渾身の力で蹴る。蹴り足から爆ばく裂れつの呪力も送りこむ。

そして、魔王殲滅の勇者は大きく吹っ飛び、ごろごろと地面を転

がりまわり、ついに静止した。それでもどうにかラーマが上体を起こしたとき。

　護堂と目が合った。

『また会おう、草薙護堂』

　無言でこう言っているように思えた。

　直後、勇者の肉体はカッと紅あかく輝き、そのまま爆発する。

　護堂の心臓に突き刺さっていた救世の神刀もいっしょに消え失せた。三み度たび、草薙護堂が勝利した瞬間だった。にもかかわらず——。

　うすれゆく意識のなか、『雄お羊ひつじ』の化身を使いながら護堂は思う。

　今回、さまざまな人の助力と幸運が重なって、薄はく氷ひようの勝利をぎりぎり得られた。

　しかし、次はもう……無理ではないか。

　盟めい約やくの大だい法ほうに必要な大地の精もどうせハヌマーンあたりが集めてくる。アテナも直じきに死ぬ。こちらの手のうちはほとんどバレた。やはり、あれをやるしかないのか——。

　幽世で別れる前、玻は璃りの瞳ひとみの媛ひめに見抜かれたアイデア。

　あの打開案のことを、護堂は思い出した……。

終章

　戦場となった巨船プシュパカ・ヴィマーナは海中に沈んでいった。

　ランスロットの突撃によって、船の中枢と飛行機能が破壊されたためである。

　ちなみに草くさ薙なぎ護ご堂どうは意識不明の重体だったが、無事に脱出していた。彼に仕つかえる少女たちが飛ひ翔しよう術じゅつを使い、力を尽くしたおかげだ。

　そして、東方のカンピオーネ、草薙護堂が『最後の王』と相打ち──。

　その報しらせは戦闘終了後、わずか三時間程度で残りのカンピオーネ全員が知るところになったという。

　最初に報されたのは、やはり東京にいた羅ら濠ごう教きよう主しゅであった。

『教主、東京都方面に飛び去る』の情報を聞いて、彼女を探しにやってきた直じき弟で子し・陸りく鷹よう化かが報告したのだ。

　ラーマの消滅とほぼ同時刻に、ハヌマーンも教主の前から忽こつ然ぜんと消え失せていた。

　神秘の絆きずなで主君がどうなったのかを悟ったのだろう。おかげで、羽田空港の埠ふ頭とうまではるばる駆けつけた弟子の口より、ゆっくりと報告を聞くことができた。

義弟おとうとの大功を知り、まず羅ら翠すい蓮れんは大きくうなずいた。

それから「ふむ——」とつぶやいて、ラーマの消えた東京湾を眺めながら、沈ちん思し黙もつ考こうをはじめたという。

同じ頃、正せい史し編へん纂さん委い員いん会かいの前議長が、あるカンピオーネに電話をかけていた。

相手はロサンゼルスの守護者、ジョン・プルートー・スミス。ロンドンの高級住宅街から北米西海岸への遠距離電話であった。

事件のあらましをひととおり聞いて、仮面の魔王は言った。

『なるほど』

「……それだけなのですか？」

『結局、問題の根っこは何もかたづいていない。今の段階で一いつ喜き一いち憂ゆうしても、意味はないと私は思うのだが』

プリンセス・アリスの言葉に、スミスはそっけなく返事をした。

尚なお、姫君の高熱はいまだに下がっていない。寝室のベッドに横たわりながら、やわらかなクッションを背もたれにしての会話だった。

『それに断言してもいいが——ラーマ王子とやらが甦よみがえる前に、私の同族の誰かがろくでもないことをはじめるだろうな。絶対に』

不気味な宣言を残して、スミスは電話を切ってしまった。

しかも『ろくでもないこと』の内容を具体的に想像している口ぶ

りでもあった。あの秘密主義の怪人物はこういう真ま似ねをよくやるのだ。

　思わせぶりなことを言うだけ言って、こちらの好奇心を刺激して放置という……。

「もう。スミスさまったら、あいかわらずなんだから」

　頰ほおをふくらませて、アリスは文句を言う。

　しかし今、ちょうど彼女のもとにおしゃべりな客が来ていた。無愛想に見えて、すこし水を向けると頼んでもいないことまで親切に解説してくれる。

「アレクサンドル。手みやげもなしにレディの寝室を訪ねてきた罪は不問にしますから、あなたの意見を聞かせてください」

「意見だと？」

「たとえば、ラーマ王子を封じ込む対策案とか」

「ふん」

　ベッドの横で肩をすくめたのは、アレクサンドル・ガスコインだ。

　スミスへ電話をかける直前、ちょうど情報収集のためにふらりとやってきた。

　電光石火ブラック・ライトニングの神しん速そく使いである黒王子アレク。彼にとっては公こう爵しやく家け令嬢の私邸であっても、大英博物館と同程度の気安さで踏み込める場所なのだ。

　同じ話を二度するのも面倒だと、アリスはそばで電話を聞くよう要請したのである。

「いきなり不機嫌になっていませんか？　……ああ」

　やや不機嫌なアレクを見て、ピンときた。

　高熱の気だるさも忘れて、アリスはくすっと微ほほ笑えむ。

「何がおかしい？」

「いえ、特には。ただ心中をお察ししただけです。『最後の王』の真ま名なを長年探し求めてきたのに、日本の正史編纂委員会に先を越されて、さぞ——なんて」

「何のことだ？　俺はそんなことを気になどしていないぞ」

　本当にどうでもいいときより、明らかな早口であった。

　図星なのだ。アリスの生あたたかな視線を避けるようにそっぽを向いて、アレクはつまらなそうに言う。

「大体、ラーマ王子を封じ込む対策と言うが——あらたまって考える必要はない。実にかんたんな対処法がひとつある」

「えっ？」

　予想外の言葉に、アリスは目をみはった。

「つまりさ。僕らが七人いるから、その分『最後の王』は強くなるんだろ？」

　タイの首都、バンコクの夜市ナイトマーケツトであった。

　金髪の白人青年が能天気におしゃべりしている。

　サルバトーレ・ドニだった。屋台のすぐそばにある簡素なテーブルとタイ式焼きそばパッタイ二皿をはさんで、執しつ事じのアンドレア・リベラと向き合っている。

　イタリアから姿を消したあと、なんだかんだで東アジアに来ていたのだ。

「その辺をどうにかする妙案があるんだ。聞いてくれよアンドレア♪」

「聞いてもいいが、その前に酒を呑のませろ。どうせ絶対にろくでもない、悪魔のようなアイデアに決まっているからな。呑まずに絶対聞けるものか！」

　日本の情報は魔術結社《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》お

よび《青せい銅どう黒くろ十じゆう字じ》から届いている。

　その詳細を主あるじと共に吟ぎん味みしつつ、リベラはやけくそ気味に缶ビールのプルトップをぷしゅりと開けるところだった。

「実にかんたんな話ではないか」

　オーストリアの雪山深く、瀟しよう洒しやな山荘で老魔王はつぶやく。

　デヤンスタール・ヴォバンを信しん奉ぽうする魔術界の人々によって、『最後の王』ラーマにまつわる情報は逐ちくーいち届けられる仕組みになっていた。

「七人の神殺しと戦うために、魔王殲せん滅めつの勇者が力を得るのなら——私以外の六人を葬り去ればいいだけのこと。『最後の王』と戦うのは、このヴォバンだけでいい」

　暖炉の火で十分にあたためられ、居心地のいい広間である。

　安楽椅子に腰掛けるヴォバン侯こう爵しやくの向かい側で、この部屋の空気と同じほど〝ほんわか〟とした美少女が微笑んでいた。

「ふふっ、お兄さまったら。そんなことを言って、わたくしにはお甘いくせに」

「…………」

　春しゆん風ぷう駘たい蕩とうとしたアイーシャ夫人を前にして、侯爵は忌いまゝいましげに眉まゆをひそめた。

　そして、東京都文ぶん京きよう区く。エリカ・ブランデッリのマンション。

　あの激闘から数時間が経たち、もう夜だった。

　寝室のベッドでは女主人ではなく、草薙護堂が死んだように眠っている。正確には一度死んで、復活の化け身しん『雄お羊ひつじ』

で回復中なのだ。

　ベッドのそばでは、三人の少女たちが見守っている。

　もちろんエリカとリリアナ・クラニチャール、清せい秋しゅう院いん恵え那なである。万ま里り谷や祐ゆ理りは幽世かくりよに残ったままだが、精神感応の霊力で護堂の安あん否ぴを気にかけているはずだ。

　ふと、恵那が枕元に目を向けた。

「あれ？　何なんだろう、これ？」

「護堂が持っていたのよね。ポケットのなかに入っていたの」

　エリカが語る。ふたりの少女が見つめる品物は鏃やじりだった。

　鉄製である。見た目は何の変哲もない。しかし、どこか禍まが々まがしい気を発しているような——得え体たいの知れない不気味さがあった。

　尚、鏃の下には紫色の袱ふく紗さが敷かれている。これにつつまれていたのだ。

「どこかで見たような気もするな。それも割と最近に……」

　リリアナも首をかしげている。

　彼女たちはまだ知らない。この鏃は玻は璃りの瞳ひとみの媛ひめより託たくされた品であることを。そして、同じ鏃を使った矢で、かつて草薙護堂が撃たれている事実を。

　古代ガリアで初めて『最後の王』と戦ったとき。

　護堂は救きゅう世せいの雷いかずちに打ちのめされた。あのときは昏こん睡すい状態からの回復も遅く、その後もなかなか本調子にならなかった。

　ラーマ王子に贈られた武具が電光に姿を変えたもの。それが救世の雷。

　護堂を苦しめた雷撃の正体は、魔王カンピオーネをも悶もん死し

させる毒矢であった。そして、あの矢と同じ鏃が――今、護堂の枕元にあった。

　幽世で草薙護堂が思いついたアイデア。

『カンピオーネがひとりきりになれば、ラーマは盟めい約やくの大だい法ほうを使えないよな』

　実行するには、ほかのカンピオーネを全て倒す必要がある。

　玻璃の瞳の媛はそのアイデアを霊れい視しの力で悟り、護堂にこれを贈ったのである。魔王殺しの矢と同じ鏃を。

　しかし、この策を考えたカンピオーネは草薙護堂だけではない。

　実のところ、七人全員が真っ先に思いついたアイデアだったのだ。

「嗚あ呼あ……兄上！　我が最愛の肉親にして、この世で最も尊き御方よ！」

　夜の東京湾をのぞむ、木き更さら津づの砂浜。

　ここにたたずむ青年がいた。悲ひ嘆たんの想いを叫びに託し、海と向き合っている。

　数時間前に消滅したラーマ王子と瓜うり二ふたつである。しかし、白はく皙せきだった大英雄とちがい、彼の肌は褐かつ色しよくだった。

　魔王殲滅の勇者ラーマの実弟であり、影として兄を守護する従属神。

　その名はラクシュマナ。栄光ある兄に代わって、全ての歪ゆがみを引き受ける者。そして、彼の背後には風の白びやく猿えん神しんがひかえている。

　ハヌマーン。英雄としての偉大さは、主君ラーマにも見劣りしない。

彼ら主従はインドだけでなく、東南アジアの諸国で『ラーマとハヌマーン』として語られる一いつ対ついなのだ。

ついにはじまった、七人の魔王と選ばれし勇者の決戦。

かくして第一戦は幕引きとなり、今は第二戦の開幕を静かに待つべき時であった。

あとがき

　みなさま、おひさしぶりです。丈たけ月づき城じようです。

　さんざんひっぱってきた『最強の敵』が本格参戦の17巻。

　まさか、ここまで本当に書くことになるとは思わなかった（苦笑）。彼の登場前に物語はうやむやな感じで終わるんじゃないかなーなんて、以前は漠ばく然ぜんと思っていたのですが。

　先のことはわからないものだなあと、柄にもなく思う今日この頃です。

　実際、遊演体という小さなゲーム会社で文章仕事をはじめた学生時代、将来こんな仕事をしているとはまったく考えていませんでした。

　同じ会社出身の新しん城じようカズマさん、賀が東とう招しよう二じさんらはすでに作家として活躍されていたのですが、まあ、当時の僕は下したっ端ぱ戦闘員のようなものでして。その後、紆う余よ曲きよく折せつしながら数年を経へて、小説書きとなったのです。

　今もこうして仕事を続けていられるのも、全て皆様のご愛あい顧こがあればこそ。

　この場を借りて、厚く御礼を申し上げます。

　さて。実を言うと、当シリーズの『神様を倒して、その能力を奪う神殺したち』というアイデアがひらめいたとき、いちばん最初に考えついた敵キャラが〝彼〟でした。

　で、採用はなしにしました。

　彼は敵役としての貫かん禄ろくは十分なのですが、いかんせん要素が多すぎるのです。

　今までの巻で伏線としてあれこれ書いてきた『東洋における最大級の神話ヒーロー』『典型的貴き種しゆ流りゆう離り譚たんの持ち主』『某有名日本昔話の主人公との共通点』『西洋英雄のオデュッセウスとも共通項あり』などなど……。

　この謎かけを一冊で終わらせるのは、だいぶ面倒――いえ（笑）、もったいない話です。

　そして日本では知名度が低い低い。アジア的には有名人なのに。

（前に古式ムエタイについてネットで検索したら、開祖の名前が〝彼〟になっていて、うひゃあとのけぞったことがあります）

　あえて最初の敵に据える必要はまったくないなというわけで、敵役は〝みんなが知ってるアテナ〟となり、そのまま順調すぎるほどに巻数を重ね、まさかまさかのアニメまで作っていただいて、現在に至るのです。

（そろそろネタバレ話をはじめようと思います。本編よりもあとがきを先に読む主義者で、さらに『最後の王』の本当の名前が気になるという方は速すみやかにあとがきから撤退して、本編をお読みください）

　シリーズ通しての謎だった『最後の王の本名は何だ？』問題。

　正解された方はいらっしゃるでしょうか？

　いちばん決定的なヒントを出したのは12巻――五冊も前でした。この17巻で明らかにしましたが、思わせぶりにあれこれ書いた13巻よりもこっそり12巻で書いた謎ポエムの方が実は〝彼の正体〟に直結するヒントだったのです。

　我ながら……意地が悪いですね（苦笑）。

そして、16巻の中編では『むかしむかしあるところに』のヒントが出ました。

ここまでそろえば、推測は十分に可能だったと思うのですが。

挑戦した皆様、いかがでしたか？

また、金かね関せき丈たけ夫お先生の『百ゆ合り若わか大だい臣じん』に関する一連の論考、そして南みな方かた熊くま楠ぐす翁おうによる『古き和漢書に見えたるラーマ王物語』などをお読みであった方々には、

「どう見たってラーマ王子に決まってるだろ、常識的に考えて！」

と、即答できるレベルの設問だったかもしれません。

ちなみに、当シリーズは台湾および韓国でも翻訳版が出版されております。

こちらの方面でラーマ王子とハヌマーンの物語がどのように受容されているのか、恥ずかしながら勉強不足もありまして、十分に把握できていないのですが……。

台湾版・韓国版の読者の皆様には、この問題の難易度、いかほどだったでしょうか？

いずれ機会がありましたら、うかがってみたくも思います。

また台湾といえば。

二年前、台タイ北ペイ市で開催の漫画博覧会にゲストとして呼んでいただいただけでなく、この二〇一四年の夏も再度お招きいただき、誠にありがとうございます。

……まあ、前回はカンピオーネ関係のサイン会、今年は某社リヴァイアサン関係のサイン会だったのですが（苦笑）。一回目と二回目、両方いらした方が多くて驚きました。本当にありがとうございます。

で、サイン会のあと、会場をふらついているときに遭遇したみなさん。

よく僕の顔に気づきましたねえ。びっくりしました（笑）。

そして前回、会場に来る途中で結構な怪け我がをしたのにいらしていただいたあなた。まさか再会できるとは思っておりませんでした。これからもよろしくお願いいたします。

さてさて。最強の勇者さまとの決戦を前にして、魔王のみなさまは一致団結どころか内ゲバをはじめる気満々となっております。

が、仮タイトル『魔王内戦』のエピソードの前に。

今まであちこちに発表してきた原稿＋書き下ろしで一冊、刊行される予定です。

現在、書き下ろし分の内容を検討中ですが、『若き日の侯爵・お姉さま・永遠の美少女さんが一堂に会する事件』などが候補にあがっております。

また、すでに発表となりました新レーベル、ダッシュエックス文庫にて新作『クロニクル・レギオン』の刊行が決まっております。特設サイトだとロボット物みたいな雰囲気にも見えますが、実は全然ちがいます（苦笑）。

「ファンタジー戦記もので何か一本！」というオーダーに対して、「その発注は二年遅いですよ。今はあちこちのレーベルからファンタジー戦記ものが出ているんだから、本が出る頃には旬が過ぎてる可能性大ですよ！」という論法でごまかし——いえプレゼンして、いつもどおり好き勝手にやらせていただいております。

ジャンルとしては、ファンタジー〝っぽい〟戦記ものでしょうか。

時は二〇世紀末。『なぜか現代に復活した古代ローマの英雄カエサルが新帝国を打ち立てている』『人造霊液を動力とする巨人レギオン』『レギオンの軍勢を召喚・指揮できる軍団長たちの国くに盗とり合がつ戦せん』『皇国のプリンセス』『いにしえの世より甦りし武人たち』『なぜだかファンタジーな生き物や霊などが存在する地球』等の素材を、僕が例によって趣味と好みにまかせて調理いたしました。

　ビビッときた方には、こちらの作品もお読みいただければと思います。

　ではでは。


あとがき
ロリ教主さま
17巻をお買い上げ
ありがとう
ございます!!
しころ

著者紹介

丈月　城（たけづき　じょう）

埼玉県出身。

２００８年スーパーダッシュ文庫「カンピオーネ！」にてデビュー。

同作は好評を博し、シリーズ化され代表作となっている。

Ｃｏｃｏｈａｎａ連載の『Ｂｒｅａｄ＆Ｂｕｔｔｅｒ』が面白いです。

柚季先生、34歳（！）にしてなんという可愛らしさ！

シコルスキー

神奈川県在住のイラストレーター。AB型。

ライトノベルやソーシャルゲームのお仕事を中心に活動させてもらっています。

好きなものは猫と映画。

集英社ｅスーパーダッシュ文庫

カンピオーネ！

XVII 英雄の名

著者　丈月　城

２０１４年11月30日発行

この電子書籍は、集英社スーパーダッシュ文庫「カンピオーネ！

XVII 英雄の名」

２０１４年９月30日発行の第１刷を底本としています。

発行者　鈴木晴彦

発行所　株式会社　集英社

東京都千代田区一ツ橋２丁目５番10号
〒１０１-８０５０
［電話］
０３-３２３０-６０８０（読者係）
制作所　トッパングラフィックコミュニケーションズ